

福岡市

ARI TA KO TA BE

有田・小田部

第16集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第308集

1992

福岡市教育委員会

ARI

TA

KO

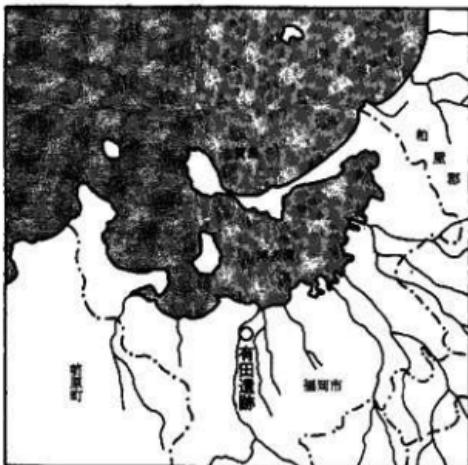
TA

BE

有田・小田部

〈福岡市早良区有田・小田部地区における遺跡群の発掘調査報告〉

第16集



1992

福岡市教育委員会

序

福岡市は玄界灘をはさんで、大陸とは一衣帶水の位置関係にあり、古来から大陸文化受け入れの窓口として栄えてきました。

特に本市の西南部に位置する早良平野は、文化財が数多く包藏され、早良王墓で有名な吉武高木遺跡や、弥生後期の環濠集落として国指定史跡となっている野方遺跡など、重要な遺跡があります。

早良平野の北部に位置する有田遺跡群は、旧石器時代から近世にかけての複合遺跡で、昭和41年～43年にかけての区画整理事業に伴う調査以来、現在まで160次を越える調査が行なわれており、弥生時代初頭の環濠集落や古墳時代の集落、奈良時代の官衙規模の建物群、戦国時代の小田部城に関連する濠跡などの重要な遺構が発見され、学界の注目を集めています。

今回の報告は有田遺跡群内で、昭和61年度から平成2年度にかけて調査したもので、特に第116次調査では、繩文時代中期から後期にかけての貯蔵穴群が発見され、早良平野における繩文時代集落を考える上での、貴重な資料を得ることができました。

本書が、市民の皆さんの文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究においても活用していただければ幸いです。

調査に際しましては、地権者の皆様を始め、関係各位に多大なご協力をいただきました。心から感謝の意を表します。

平成4年1月13日

福岡市教育委員会

教育長 井口雄哉

例　　言

- (1). 本書は、福岡市早良区有田・小田部・南庄地区における開発に伴い、福岡市教育委員会が、平成3年度の国庫補助を得て実施した、緊急発掘調査の報告書である。
- (2). 本書には、昭和61年度の第110次・112次・114次・116次調査、63年度の第138次調査、平成2年度の第158次・164次調査を収録する。
- (3). 本書では、有田・小田部台地上の遺跡を一連のものと見なし、広義の有田遺跡群とする。
- (4). 本書に収録した調査は、第110次・112次・114次・116次調査を山崎龍雄・米倉秀紀(現福岡市博物館)が、第138次を山崎が第151次・158次を加藤良彦が、第164次を山崎が担当した。
- (5). 本書に掲載した遺構の実測は、担当者の他、清原エリ子、金子由利子、宮原邦江、吉岡田鶴子、黒田和生、英豪之、溝口武司が行い、写真は担当者が行った。
遺物の実測とトレース、遺構のトレースについては、各担当者の他、平川敬治、井上加代子、岡根なおみ(現松山市教育委員会)、蜂須賀博子が行い、遺物の写真撮影は担当者と平川が行った。
- (6). 遺構番号については、第110次・112次・114次・116次・138次調査迄は、遺構の種類毎に通し番号を付し、第151次調査以降はピットは独自の番号を付し、それ以外は通番とし、頭に遺構の性格を示す記号を付した。
- (7). 遺構記号は、福岡市の遺構記号基準によっている。
SA……槽、SB……掘立柱建物、SC……堅穴住居址、SD……溝状遺構、SE……井戸
SK……土坑、SR……土塙墓・木棺墓、ST……甕棺墓、SP……ピット、SX……その他
- (8). 本書に使用した方位は磁北であり、その他については図中に記した。
- (9). 本書報告の遺物・図面・写真類は、すべて本市の埋蔵文化財センターに収蔵保管する予定である。
- (10). 本書の執筆は以下のとおりである。

第1章　はじめ　　　　　　　　　…山崎

第2章　遺跡の立地と調査の成果　…山崎

第3章　調査の記録　…山崎・米倉・加藤

- (II). 本書の編集は、米倉・加藤と協議のうえ、山崎が行ない、編集にあたっては平川、井上両氏に多人な協力を受けた。

本文目次

	頁
第1章 はじめに.....	1
1. 調査に至る経過.....	1
2. 調査の組織.....	2
第2章 遺跡の立地と調査の成果.....	3
1. 遺跡の立地と調査の成果.....	3
2. 平成3年度調査の成果.....	5
第3章 調査の記録.....	7
〈小田部地区の調査〉	7
1. 第114次調査	9
1) 調査区の地形と概要.....	9
2) 遺構と遺物.....	9
3) 小結.....	30
2. 第116次調査	33
1) 調査区の地形と概要.....	33
2) 遺構と遺物.....	33
3) 小結.....	70
3. 第138次調査	75
1) 調査区の地形と概要.....	75
2) 遺構と遺物.....	75
3) 小結.....	88
4. 第151次調査	89
5. 第164次調査	91
1) 調査区の地形と概要.....	91
2) 遺構と遺物.....	91
3) 小結	104
〈有田地区的調査〉	105
6. 第110次調査.....	107
1) 調査区の地形と概要	107
2) 遺構と遺物	107
3) 小結	108

7. 第112次調査	109
1) 調査区の地形と概要	109
2) 遺構と遺物	109
3) 小結	120
8. 第158次調査	121
1) 調査区の地形と概要	121
2) 遺構と遺物	121
3) 小結	

図版目次

PL. 1	有田遺跡群周辺航空写真（1964年撮影）
PL. 2	同（1969年撮影）
PL. 3	(1) 調査区全景（北から） (2) 調査区全景（東南から）
PL. 4	(1)SC01（南東から） (2)同遺物出土状況 (3)SC02（西から） (4)同カマド検出状況（南から）
PL. 5	(1)SC03（西南から） (2)SC04（西から） (3)SC05（北から） (4)SC06（東から）
PL. 6	(1)SB01・02（南東から） (2)SB03（南から） (3)SB04（南から） (4)SB05（北東から）
PL. 7	(1)SB06（北西から） (2)SB08（北東から） (3)SP160遺物出土状況 (4)SP236遺物出土状況
PL. 8	(1)SK01（北西から） (2)SK03（西から） (3)SK05（南東から） (4)SK06（南東から）
PL. 9	(1)SD01（南西から） (2)SD11（東から） (3)SD02（北から） (4)SP314（北東から）
PL. 10	出土遺物 I
PL. 11	出土遺物 II
PL. 12	(1)第116次調査区全景（南東から） (2)調査区北側縄文時代土坑群（南東から） (3)調査区南側縄文時代土坑群（東から）
PL. 13	(1)SC01（南から） (2)同遺物出土状況 (3)同カマド掘り下げ中 (4)同完掘後
PL. 14	(1)SC02（南東から） (2)同焼失木材出土状況 (3)SK03土層断面 (4)SK04（南から）
PL. 15	(1)SK05（東から） (2)SK08（東から） (3)SK06（南から） (4)同土層断面
PL. 16	(1)SK09（西から） (2)同土層断面 (3)SK10（北から） (4)同土層断面
PL. 17	(1)SK11（西から） (2)同土層断面 (3)SK12（西から） (4)同土層断面
PL. 18	(1)SK13（西から） (2)SK16上層断面 (3)SK17（西から） (4)同土層断面
PL. 19	(1)SK18土層断面 (2)SK19（西から） (3)SK20・21（西から） (4)SK22（西から）
PL. 20	(1)SK24（東から） (2)同土層断面 (3)SK25土層断面 (4)SK26（北西から）
PL. 21	(1)SK28（北から） (2)同土層断面 (3)SK29（東から） (4)同土層断面
PL. 22	(1)SK30（北西から） (2)同土層断面と遺物出土状況 (3)SK31（南から） (4)同土層断面
PL. 23	(1)SK32土層断面 (2)SK34（北東から） (3)SK35（東から） (4)SX01（北西から）
PL. 24	SC01・02, SX01, ピット, 球形出土遺物
PL. 25	土坑出土遺物
PL. 26	土坑出土遺物

- PL. 27 土坑、ピット出土遺物
- PL. 28 (1)第138次調査区全景(西から) (2)調査区南東隅(北から) (3)SC01(南東から)
- PL. 29 (1)SC01中央上坑とピット (2)同層内土坑(東から) (3)SC02(南から) (4)SC03(北から)
- PL. 30 (1)SB01(南から) (2)SB02(南から) (3)SB03(北東から) (4)SB04(北から)
- PL. 31 (1)SB05(東から) (2)SB05-5 遺物出土状況 (3)SB06(南東から) (4)SK01(北から)
- PL. 32 (1)SK02(南から) (2)同遺物出土状況 (3)SK03(西から) (4)SK04(北から)
- PL. 33 (1)SK05(東から) (2)出土遺物 I
- PL. 34 (1)出土遺物 II (2)第151次調査1区全景(北から) (3)同2区全景(北から) (4)同3区全景(南から) (5)1区土層断面(南から)
- PL. 35 (1)第164次調査区1区全景(北から) (2)同1区東側全景(北から)
- PL. 36 (1)II区全景(西から) (2)SB03(北から) (3)SB06(北から) (4)SK02(北から)
- PL. 37 (1)SD01全景(東から) (2)SD01(西から) (3)SD01中央ベルト(東から) (4)SD01東壁(西から)
- PL. 38 SK02・SD01出土遺物 I
- PL. 39 SD01出土遺物 II
- PL. 40 (1)第110次調査区全景(北西から) (2)出土遺物
- PL. 41 (1)第112次調査区全景(東から) (2)同調査区東側全景(東から)
- PL. 42 (1)SB01(東から) (2)SB02(東から) (3)SB02-4 種石(北から) (4)SB03(北から)
- PL. 43 (1)SK01・07(南西から) (2)SK02(南から) (3)SK03(東から) (4)SK04(西から)
- PL. 44 (1)SK05(南から) (2)SK06(北から) (3)SK08(北東から) (4)SK09(東から)
- PL. 45 (1)SK08(西から) (2)SK11(東から) (3)SK12(北から) (4)SK14(北から)
- PL. 46 (1)SK15(南から) (2)SK17(南から) (3)SK15・18(北から) (4)SP58出土中国鏡
- PL. 47 各遺構出土遺物
- PL. 48 (1)第158次調査区北半部全景(南から) (2)同南半部全景(南から) (3)調査区遠景(南から)
- PL. 49 (1)SB01-02(南東から) (2)SB03(東から) (3)SB04(南から) (4)SB05-06(東から) (5)SB07(東から) (6)SK01(北東から) (7)SA01(南東から) (8)SA02(南西から)
- PL. 50 (1)SA01(南東から) (2)SA02(南東から) (3)SA01-SP10-11-12(南東から) (4)SA01-SP13(南東から) (5)SP11-12上層断面(南東から) (6)SP13上層断面(南東から) (7)SP11-12完掘状況(南東から) (8)SP13完掘状況(南東から)
- PL. 51 出土遺物

挿 図 目 次

本文頁

Fig. 1	有田・小田部の周辺遺跡 (1/25,000)	4
Fig. 2	有田・小田部台地と発掘調査地点 (1/5,000)	折り込み
Fig. 3	有田・小田部台地の旧地形図 (1/5,000)	折り込み
Fig. 4	小田部地区調査地点位置図 (1/5,000)	7
Fig. 5	第114次地点遺構配置図 (1/200)	折り込み
Fig. 6	SC01 (1/60)	11
Fig. 7	SC01・02出土遺物 (1/4)	12

Fig. 8	SC02 (1/60)	13
Fig. 9	SC03 (1/60)	14
Fig. 10	SC03出土遺物 (1/4)	15
Fig. 11	SC03 (1/1)	15
Fig. 12	SC04 (1/60)	16
Fig. 13	SC01・02出土遺物 (1/2・1/3)	16
Fig. 14	SC05 (1/60)	17
Fig. 15	掘立柱建物出土遺物 (1/4)	19
Fig. 16	SB01~04 (1/100)	20
Fig. 17	SB05~07 (1/100)	21
Fig. 18	SB08・09・11 (1/100)	22
Fig. 19	SB10・12 (1/100)	23
Fig. 20	SK01出土遺物	24
Fig. 21	SK01・03・05・06 (1/40)	25
Fig. 22	溝及びピット出土遺物 I (1/4)	27
Fig. 23	溝及びピット出土遺物 II (1/3・1/4)	28
Fig. 24	遺構面・その他の遺構の遺物 (1/3・1/4)	30
Fig. 25	カマド付住居分布図	31
Fig. 26	カマド付住居変遷図 (1/120)	32
Fig. 27	第116次調査区位置図 (1/25,000)	33
Fig. 28	第5次・第116次・下水道調査区遺構配置図 (1/600)	34
Fig. 29	第116次調査遺構配置図 (1/200)	35
Fig. 30	SC01 (1/60)	36
Fig. 31	SC01カマド (1/30)	37
Fig. 32	SC01出土遺物 (1/3・2/3・1/1)	38
Fig. 33	SC02 (1/60)	39
Fig. 34	SC02出土遺物 (1/3・1/2・1/1)	40
Fig. 35	SK02~05 (1/30)	44
Fig. 36	SK02~05出土遺物 (1/3・1/2・2/3)	45
Fig. 37	SK06~09 (1/30)	46
Fig. 38	SK06~09出土遺物 (1/3)	47
Fig. 39	SK09出土石皿 (1/6)	48
Fig. 40	SK10~13 (1/30)	49
Fig. 41	SK14~17 (1/30)	50
Fig. 42	SK11・13・16・17出土遺物 (1/3・1/2・1/1)	51
Fig. 43	SK18~22 (1/30)	54
Fig. 44	SK18~20・22出土遺物 (1/3・1/1)	55
Fig. 45	SK23~26 (1/30)	56
Fig. 46	SK23~25出土遺物 (1/3・1/1)	57

Fig. 47	SK27~30 (1/30)	60
Fig. 48	SK28~30出土石器 (1/3)	61
Fig. 49	SK27~30出土石器 (1/2・1/1)	62
Fig. 50	SK29出土石器 (1/6)	63
Fig. 51	SK31~34 (1/30)	66
Fig. 52	SK35・36 (1/30)	67
Fig. 53	SK31・35・36出土遺物 (1/3・1/1・1/2)	68
Fig. 54	SX01 (1/60)	69
Fig. 55	SX01・ピット・壊乱出土遺物 (1/3・1/1)	69
Fig. 56	绳文時代貯藏穴配置図 (1/300)	73
Fig. 57	SC01 (1/60)	76
Fig. 58	第138次・151次調査区遺構配置図 (1/200)	折り込み
Fig. 59	SC01出土遺物 (1/3・1/4)	77
Fig. 60	SC02 (1/60)	78
Fig. 61	SC02出土遺物 (1/3・1/4)	79
Fig. 62	SC03 (1/60)	80
Fig. 63	SC03出土遺物 (1/2・1/4)	81
Fig. 64	SB01~04 (1/100)	82
Fig. 65	SB05・06 (1/100)	83
Fig. 66	掘立柱建物出土遺物 (1/3・1/4)	83
Fig. 67	SK01~05 (1/40)	84
Fig. 68	土坑出土遺物 (1/2・1/4)	85
Fig. 69	ピット出土遺物 (1/3・1/4)	86
Fig. 70	遺構面出土遺物 (1/4)	87
Fig. 71	第151次調査区遺構配置図・土層断面図 (1/200・1/40)	89
Fig. 72	第164次調査区遺構配置図 (1/200)	92
Fig. 73	SB03・04・06 (1/100)	93
Fig. 74	SK02と出土遺物 (1/40・1/4)	94
Fig. 75	SD0土層及びI区西壁・II区北壁土層 (1/60)	96
Fig. 76	SD01土層上半出土遺物 (1/4)	97
Fig. 77	SD01上層下半出土遺物 (1/4)	98
Fig. 78	SD01中層出土遺物 (1/4)	99
Fig. 79	SD01下層・最下層出土遺物 (1/4)	100
Fig. 80	SD01その他の遺物 I (1/3・1/4)	101
Fig. 81	SD01その他の遺物 II (1/3・1/4)	102
Fig. 82	第164次SD01・第124次SD02断面図 (1/240)	104
Fig. 83	有田地区調査地点位置図	105
Fig. 84	第110次地点遺構配置図 (1/200)	107
Fig. 85	SX01~03 (1/30)	108

Fig. 86	第112次地点遺構配置図 (1/150)	110
Fig. 87	SB01~03 (1/100)	111
Fig. 88	掘立柱建物出土遺物 (1/4・1/6)	112
Fig. 89	SK01~03 (1/40)	113
Fig. 90	SK04~07 (1/40)	114
Fig. 91	SK08~11 (1/40)	115
Fig. 92	土坑出土遺物 (1/4)	116
Fig. 93	SK12~17 (1/40)	117
Fig. 94	ピット出土遺物 (1/4・2/3)	119
Fig. 95	第118次調査区遺構配置図 (1/200)	122
Fig. 96	SB01~04 (1/100)	123
Fig. 97	SB05 (1/100)	124
Fig. 98	SB06 (1/100)	124
Fig. 99	SB07 (1/100)	125
Fig. 100	SK01 (1/40)	125
Fig. 101	SA01・02 (1/100)	126
Fig. 102	出土遺物 (1/3)	127
Fig. 103	周辺調査区遺構配置図 (1/2,000)	128

表 目 次

	本文頁
Tab. 1	本報告調査地一覧表
Tab. 2	平成3年度調査地点一覧表
Tab. 3	掘立柱建物一覧表
Tab. 4	土坑一覧表
Tab. 5	貯蔵穴の各属性相関グラフ
Tab. 6	掘立柱建物一覧表
Tab. 7	掘立柱建物一覧表

付 図 目 次

- 付図 1 有田遺跡群遺構配置図 I (1/1,000)
- 付図 2 有田遺跡群遺構配置図 II (1/1,000)
- 付図 3 有田遺跡群遺構配置図 III (1/1,000)
- 付図 4 有田遺跡群遺構配置図 IV (1/1,000)

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

福岡市近郊の純農村地帯であった有田・小田部の台地上には、有田・小田部・南庄の3つの集落が存在している。近年国道202号線バイパスと市営地下鉄1号線の開通は、福岡市西部地区的都市開発を大きく促進し、当地区一帯も市街地化への変貌は著しく、過日の面影はない。

有田遺跡群の発掘調査は、昭和41年の九大による調査以降、昭和50年度から、国庫補助事業として出発したが、昭和52年度からは1000m²以下の小規模開発についても対応を行っている。

昭和60年度迄の開発傾向は、都心に近い手近な住宅地として個人専用住宅の建設が多かったが、ここ数年は史上空前の好景気や、地価高騰の影響を受け、民間資本により、202号線バイパスの北側地区を中心に、店舗・高層の共同住宅・分譲住宅などの開発が増加していた。平成3年度までの調査件数は168件である。この中には学校建設・下水道建設・市営住宅建設などの公共事業も含まれている。

本書では、昭和61年度から平成2年度にかけて調査を行なった、小田部地区の第114次・116次・138次・151次・164次調査、有田地区の第110次・112次・158次調査の成果を報告する。各調査の要項は下表のとおりである。

Tab. I 本報告調査地区一覧表

調査次数	調査番号	地区名	調査地地番	申請面積	調査面積	申告者	調査期間	報告書名	備考
第110次	8623	M	早良区有田3丁目8-2	482.64	117	坂口 博美	1986年5月28日～6月3日	61-2-38	
112	8644	K	* 有田2丁目9番2	264	160	江元 次治	* 10月21日～11月21日	61-2-105	
114	8651	E	* 小田部5丁目52-1外	1,028	888	伊佐 清太郎	* 11月25日～ 87年1月26日	61-2-48	
116	8656	J	* 小田部3丁目189	1,000	728	寺田 順幸	1985年11月25日～12月5日 1987年2月9日～3月25日	61-2-233	
138	8811	D	* 小田部1丁目264	826.32	801	真鍋 実	1988年5月23日～6月28日	63-2-34	
151	8919	D	* 小田部5丁目203-207	630.38	75	黒柴 雄毅	1988年6月2日～6月9日	63-2-26	
158	9029	J	* 有田1丁目34-3	232	214	井上 敏之	1990年7月9日～7月27日	61-2-394	
164	9041	G	* 小田部2丁目106	814	416	佐藤 稔義	* 10月11日～11月30日	63-2-129	

2. 発掘調査の組織

1) 昭和61年度～平成3年度の調査組織

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 昭和61～平成2年度 埋蔵文化財課長 柳田純孝

平成3年度 埋蔵文化財課長 折尾学

事務担当 昭和61～平成元年度 埋蔵文化財課 飛高憲雄、(庶務) 岸田隆

平成元～2年度 埋蔵文化財第2係長 柳沢一男、(庶務) 阿部徹、中山昭則

平成3年度 埋蔵文化財第1係長 飛高憲雄、同課第2係長塩屋勝利、(庶務) 第1係 中山昭則

発掘担当 昭和61・62年度埋蔵文化財課第2係 山崎龍雄、米倉秀紀(現福岡市博物館)、小林義彦

昭和63・平成元年度 同課第2係 山崎・小林・加藤良彦

平成2・3年度 同課第1係 山崎、加藤、第2係 荒牧宏行

調査・整理補助 昭和62～平成3年度 平川敬治(九州大学)、梶村嘉長、溝口武司、黒田和生、英豪之、井上加代子、田中克子

なお、発掘調査・資料整理にあたっては、申請者及び施工業者の皆様をはじめ、地元の多くの方々のご援助、ご協力を得た。特に地元の寺田勝行氏には、事務所用地を心よくお貸しいただいた。また調査にあたっては、調査指導の諸先生及び、埋蔵文化財課の試掘担当の諸氏に、多大なご助言・ご指導を受けた。記して謝意を表したい。

第2章 遺跡の立地と調査の成果

1. 遺跡の立地と調査の成果

有田遺跡群は、福岡市の西南部に広がる早良平野の、北側中央部に所在する最高所で標高15m前後を測る独立中位段丘上に立地する。行政的には、福岡市早良区有田・小田部・南庄の3地区にまたがる。この台地は、南北約1.7km、東西0.8km、面積約70万m²の広がりを持つ。またこの台地は北方向から幾筋かの浅い谷が入り、北へ八手状に広がる平面形態を示す。台地の西には室見川、東側には金屑川が北流している。特に室見川は過去度々洪水によって流路を変えたらしく、航空写真などで幾筋もの旧河道が読みとれる。台地縁辺はこれらの河川の度重なる洪水によって侵蝕を受け、小段崖を形成している。

有川遺跡群の所在する有田・小田部地区は、古代では早良六郷の一つ、田部郷の一部にあたり、明治22年の町村制実施によって原村の一部として組み込まれ、昭和4年の原村と福岡市の合併によって、福岡市に編入された。昭和40年代初めの区画整理以前は、「小田部大根」の産地として、純農村地帯であったが、国道202号線バイパスや地下鉄1号線開通以降は、都心に近い近郊住宅地として、急激に開発が進み、景観の変化には著しいものがある。

有田遺跡群は台地上に分布する旧石器時代から近世迄の各時代の遺跡を一連のものと見做して付した名称で、各時代の遺跡は大体重複している。現在迄の調査次数は昭和41年の区画整理に伴う調査以来、160ヶ所を越える。

旧石器時代については、遺物は有田地区の最高所部の第6次・77次・107次調査区、小田部地区の第131次・152次調査区など10ヶ所で発見されている。大半が後世の遺構内出土で、包含層を発見したのは第6次調査。131次調査のみである。第6次地点ではナイフ・ポイント、第131次地点では台形様石器などが検出されている。

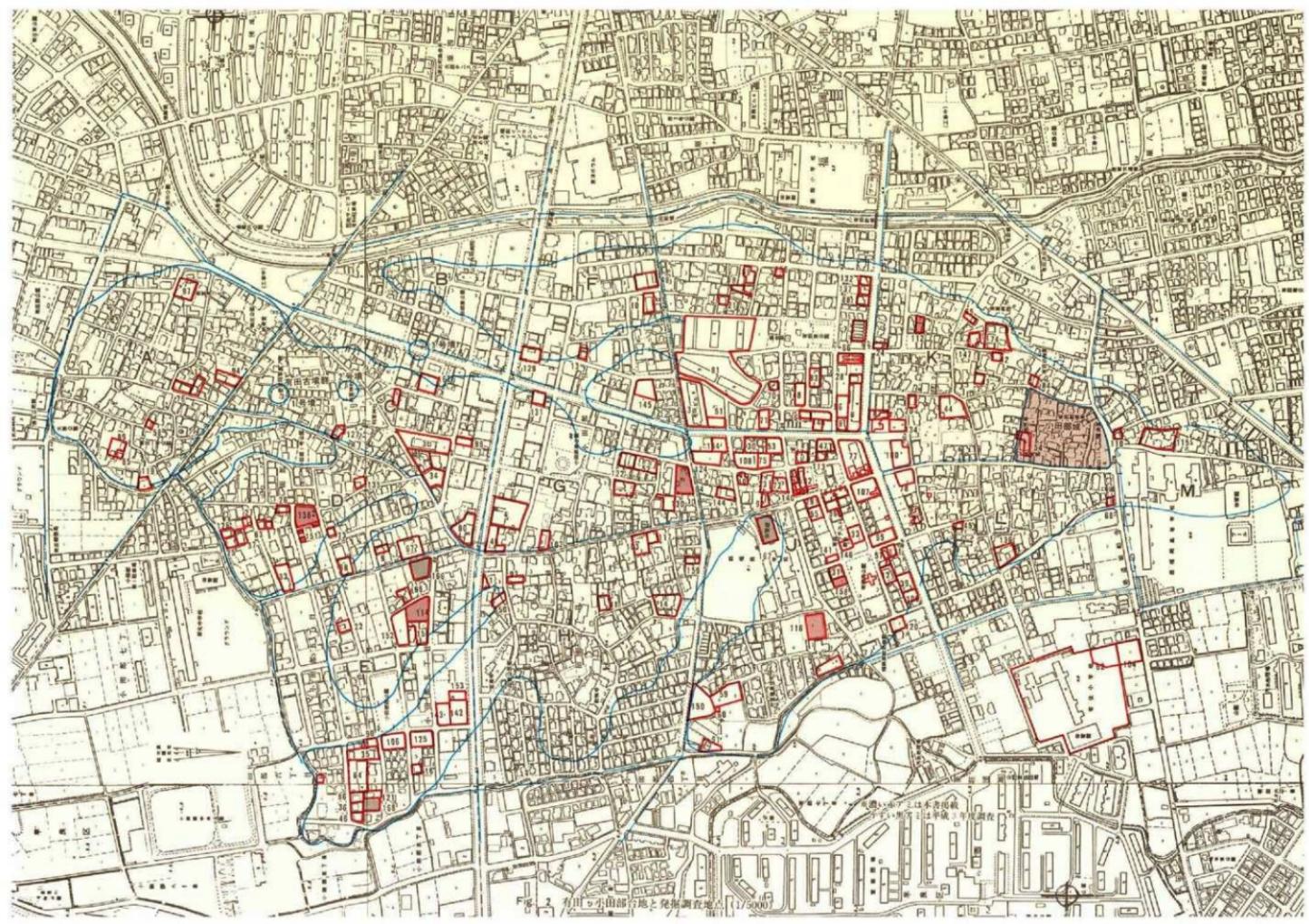
縄文時代の遺構は、中期から後期にかけての貯蔵穴群が、有田地区の第5・116次調査区で発見され、馬蹄形状にめぐる状況を示している。

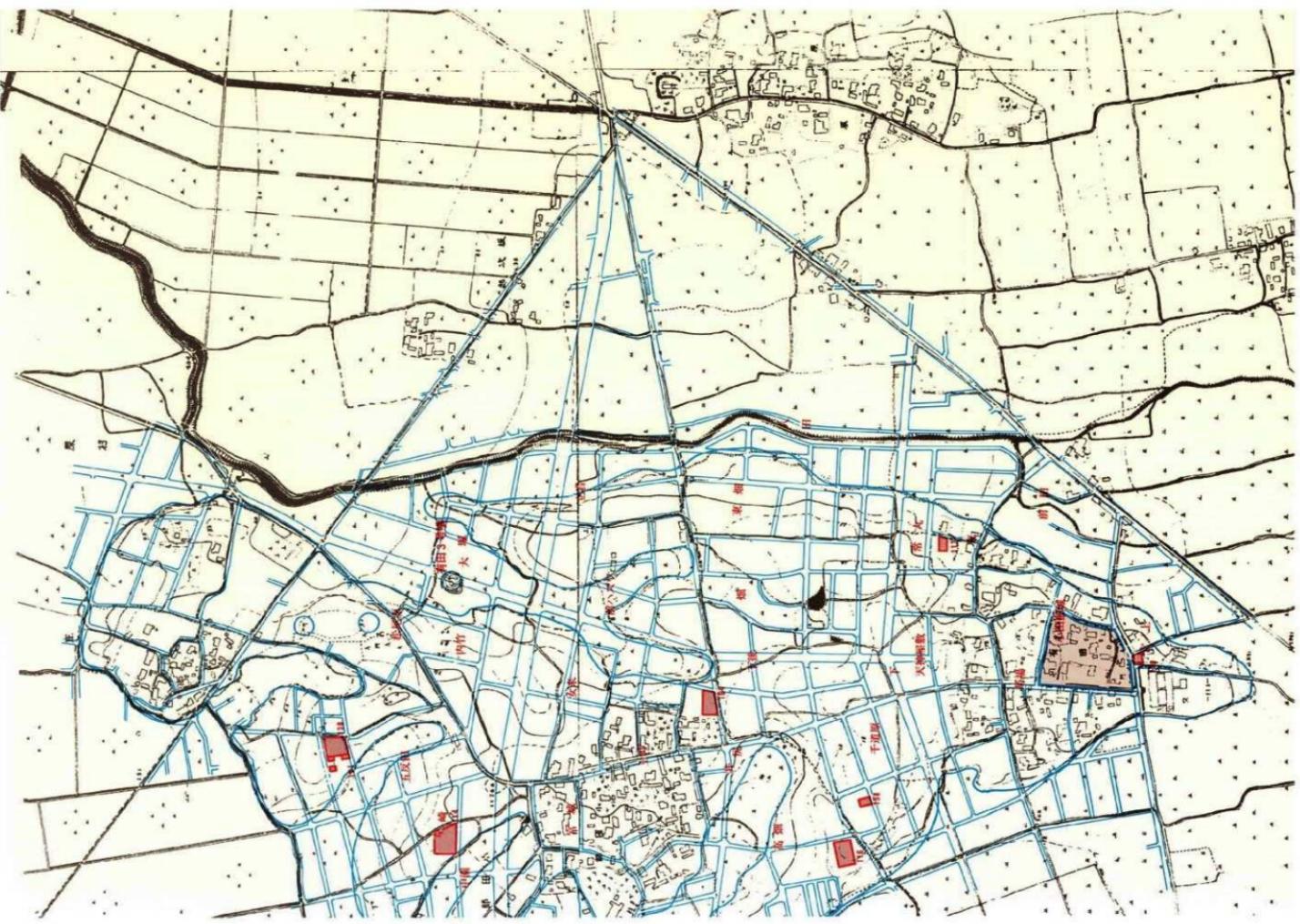
弥生時代では縄文時代晩期末の突蒂文土器から弥生時代前期初頭のV字濠が、第2次調査を始めとして、第45次・54次・77次・95次・133次調査区で確認されている。それらの地点のものをつなぎあわせると、有田地区台地高所部を椭円形状に巡る環濠となり、その規模は長径300m、短径200mを測る。また、その出入口部の陸橋部は第133次調査区南側の下水道調査区で確認されている。この時期の水田遺構はまだ見つかっていないが、本来存在した可能性があり、今後谷部・低地部の調査が進めば、発見される可能性がある。前期後半になると集落は環濠の範囲を越えて、台地北側の小田部地区迄拡がる。この時期の墳墓は有田・小田部地区で5ヶ所知られている。遺跡南端の西福岡高校地内で出土した金海式斐棺墓より、細形銅戈が発見され、ま

遺跡の立地と調査の成果



Fig. 1 有田・小田部の周辺遺跡 (1/25,000)





た小田部地区では細形銅矛と細形銅戈の出土も伝わる。中期は前期より更に集落が拡大し、分布の濃淡はあるにせよ、台地全域に拡がる。当遺跡地内では青銅利器が鋳造されたらしく、浮范が第3次・82次・108次調査区で出土しており、早良平野の提点集落の一つとして考えられている。しかし後期になると変して、集落は縮小する傾向をしめすようになる。

占領時代の集落は全期間を通して台地上に広く確認されている。この時期、小田部地区には筑紫殿塚・松浦殿塚などの大型の円墳が出現し、有力な首長層の存在が予想出来る。遺跡の北側にある原北小学校内には、南庄地区から出土した石棺墓が移築保存されている。

律令時代は和名抄にある早良郡の田部郷に比定されている。有田地区の第56次・57次・77次・78次・82次・101次・107次調査区では大型の掘立柱建物群が検出されている。これらの建物群は古代西海道に付設された額田駅が、西方約2km離れた野方あたりに比定されていることから、それに間連する官衙的規模の建物群と考えてよく、円面鏡や帶金具、越州窯・長沙窯系磁器や綠釉陶器などの出土からもそれを裏付けている。また3本柱の櫛で囲まれた倉庫群が有田・小田部地区に6ヶ所確認されており、それらは那ノ津官家の一部ではないかという考え方もある。

中世には在地領主の成長とともに名田や名主屋敷が開発され、遺跡内に中國屋敷や淀姫屋敷などの地名が残っている。當時有田・小田部地区は小田部郷と呼ばれており、文永8年(1271)の飯盛官社領坪付に記載が見られる。中世後半には大内氏の筑前進出と共に、早良郡代大村興景が小田部の下中國に地行地を持ったとされるが、当地区にはその地名が字名として残り、調査でも該期の方形に巡る溝などが検出されている。16世紀後半の戦国時代末期になると大友氏の被官であった小田部氏の里城である小田部城が有田の地に築かれるが、有田地区には幅5~10mを測る空濠が200m四方の範囲に掘削されているのが確認されている。築造時期は出土時期から16世紀代であり、小田部城の可能性がある。

2. 平成3年度の有田遺跡群の調査

平成3年度は公共事業・民間事業合わせて計3ヶ所の調査を行った。調査の概要は以下のとおりである。

Tab. 2 平成3年度調査地点一覧表

調査次数	調査番号	地区名	調査地地番	調査面積	調査期間	遺構	文献
第166次	9106	E	早良区小田部5丁目5-40	409	1991年4月23日~5月28日	掘立柱建物7棟	
167	9117	J	* 小田部3丁目32-1	520	* 7月10日~7月26日	* 1棟	①
168	9132	E	* 小田部5丁目154-1	455	* 10月22日~12月11日	古墳時代住居4棟、弥生時代肝藏穴4基、掘立柱建物1棟、漢	

①公私平素に作る調査

有田遺跡群関係文献一覧表

- 『有田古代遺跡発掘調査概報』市報第1集, 1967
『有田遺跡—福岡市有田古代集落遺跡第二次調査報告—』市報第2集, 1968(2次)
『有田周辺遺跡調査概報』市報第43集, 1977
「有田・小田部」現地説明会資料(孔版), 1977
『有田遺跡』(孔版), 1979
『有田・小田部第1集』市報第58集, 1980
『有田・小田部第2集』市報第81集, 1982
『有田・小田部第3集』市報第84集, 1982
『有田七田前遺跡』市報第95集, 1983
『有田・小田部第4集』市報第96集, 1983
『有田・小田部第5集』市報第110集, 1984
『有田・小田部第6集』市報第113集, 1985
『有田遺跡群—第81次調査—』市報第129次調査, 1986
『有田・小田部第7集』市報第139集, 1986
『有田・小田部第8集』市報第155集, 1987
『有田七田前遺跡の調査』九州文化史研究紀要32号, 1987
『有田・小田部第9集』市報第173集, 1988
『有田・小田部第10集』市報第212集, 1989
『有田・小田部第11集』市報第234集, 1990
『有田・小田部第12集』市報第264集, 1991
『有田・小田部第13集』市報第265集, 1991
『有田・小田部第14集』市報第266集, 1991
吉良国光『小田部氏関係資料』福岡市博物館研究紀要創刊号, 1991
『有田・小田部第15集』市報第306集, 1992

第3章 調査の記録

—小田部地区の調査—

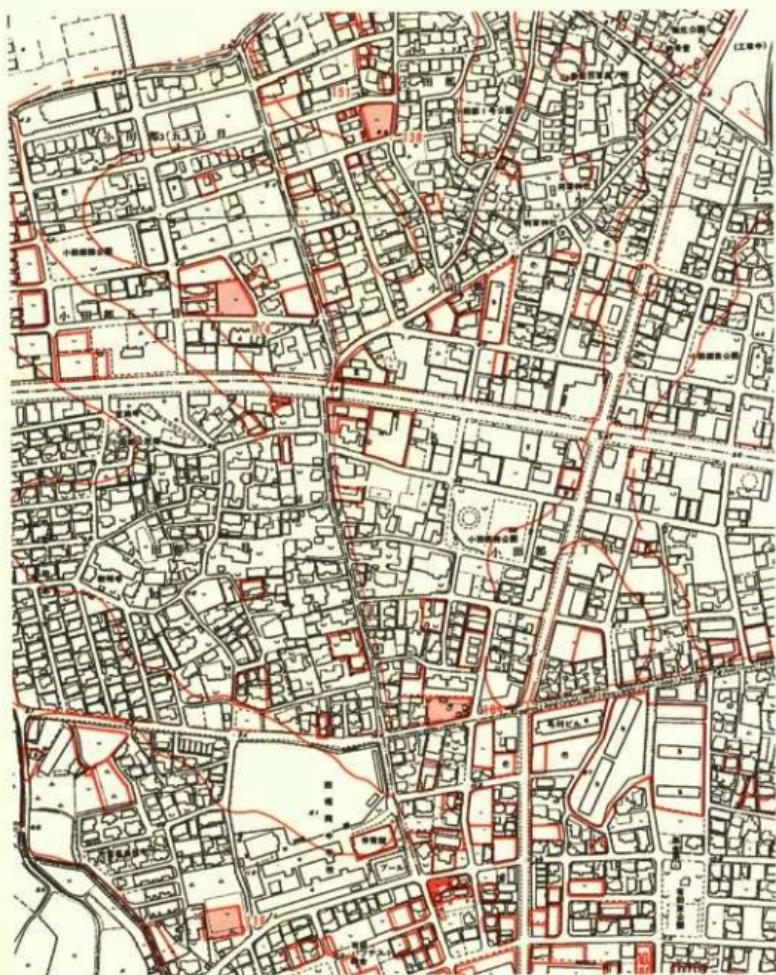


Fig. 4 小田部地区調査地点位置図 (1/5,000)

1. 第114次調査(調査番号8651)

1) 調査区の地形と概要

調査区は早良区小田部5丁目52-1外に所在する。北へ八手状に分岐して抜がる有田・小田部台地の西から2番目の台地上、西側には北から入り込んだ谷を臨む斜面上にある。現況は畠地であった。

昭和61年度に事前調査願いが提出され、これを受けて発掘調査を実施した。調査は昭和61年11月25日～62年1月26日迄実施、調査面積は申請面積1,028m²中888m²である。

調査区周辺の調査は西側に第15次、東に98次、北に152次地点が隣接している。特に西に隣接する第15次地点とは南西隅の部分が重複しており、調査済であり、堆積土も埋め戻された土であった。

今回の調査では、遺構は表土(耕作土)20～60cmの下の黄褐色砂質ロームもしくは褐色ローム上面で検出した。地形は東から南西側に緩やかに傾斜し、標高は遺構面で、8.1～7mを測る。主な検出遺構は、弥生時代円形住居址1棟、古墳時代の住居址6棟、掘立柱建物12棟、土坑4基などで、弥生時代から近世・近代迄の遺構がある。出土遺物は弥生時代から近代迄の様々な遺物があり、総量はコンテナで11箱である。

2) 遺構と遺物

竪穴住居址(SC)

全部で7棟検出した。内6号・7号住居は第15次調査で、調査済みである。

SC01 (Fig. 6, PL 4)

調査区西側境界地、第15地点にまたがる平面形が長方形の住居である。長軸方位をN-42°30'～Eに取り、規模は長辺5.80m、短辺4.40mを測る。残りは悪く残存壁高は、最大で20cmを測る。壁のまわりには、幅1m前後、高さ15cm前後のベッド状遺構がC状に巡る。周壁溝は四壁とベッド遺構の部分に巡る。南東壁中央のベッド状遺構が途切れる部分には、長さ88cm、幅60cm、深さ24cmの隅丸長方形の土坑(SK02)がある。その土坑の底面中央には長さ28cm、幅16cm、深さ6cmの長方形形状のピットがある。この土坑部分が人口部と考える。主柱は2本柱で、その間隔は2.55mを測る。炉は今回の調査では確認されていないが、第15次地点側にあったと思われる。床面の南東側には部分的に炭化材が遺存していた。ベッド状遺構は地山粘土を貼付けしており、それを撤去した後、部分的に浅い落ち込みがあった。

出土遺物(Fig. 7, PL 10)

出土遺物はそれ程多くない。弥生土器・土師器などが出土している。

1は土師器の小形丸底壺である。偏球な胴部に比して、口縁部が内湾気味に大きく開く器形

である。口径11.4cm、器高8.1cm、最大胴部径8.4cmを測る。全体にナテ調整で、つくりは良い。色調は淡橙色である。21は磨石である。ベッド状遺構部の周溝上で出土した。扁平な橢円形を呈す形態で、全面に使用による磨滅痕がある。一部剥離面が残る。長径13.2cm、短径11.2cm、最大厚3.5cm、重量860gを測る。石質は玄武岩である。

SC02(Fig. 8, PL 4)

調査区南西境界地で検出した、カマドを有する住居址。大半が道路にかかっている。主軸を南西から北東に取る方形の住居址で、確認規模は東西3.8m、南北2.9m以上、最大壁高30cmを測る。カマドは北壁中央部に長さ80cm、幅40cm程度の長方形の突出部を作り、その内側に灰白色粘土を用いてコ字状のカマドを作っている。カマドは後世のビットに切られ、残りは余り良くないが、規模は幅95cm、長さ72cm、高さ20cmを測る。焚口部には、とび口状を呈す支脚石が2個備えつけられていた。煙道は突出部から北側に傾斜を持って作られている。このカマド周辺特に右側には多量の炭化物・焼土が散布していた。主柱は1個確認したが、4本柱と考えられる。平面形は円形で、直径50cm、深さ60cmを測る。周溝は壁下に巡る。床面は地山ローム粘土で貼床しているが、貼床を取ると、壁周辺は一段下がる。

出土遺物(Fig. 7, PL 10) 古墳時代の土師器・須恵器が大半である。遺物はカマド周辺に集中する。

2~6は土師器である。2は高杯の脚部1/10で、復元底径19.0cmを測る。脚端部は丸く、全体にボッティとした作りである。胎土は石英粒を多く含む。3・4は甕で、同一個体と思われる。3は口縁部片である。復元口径18.8cmを測る。直立氣味に立ち上がる頸部から外湾氣味に開く口縁部で、口端部は断面三角形を呈し、全体に薄手である。4は胴部片である。器厚は不均一で、底部はやや尖り氣味である。外面は格子目叩き、内面は平行叩きを加える。胎土は石英粒を多く含む。5・6も甕で、同一個体と思われる。5は口縁部で復元口径18.0cmを測る。厚手の作りで、端部は丸っこい。6は体部下半で、内外面とも叩きを加える。外面には木目直交の横位叩き、内面は平行叩きを加える。底部には煤が付着する。胎土はいずれも石英粒を多く含む。18~20は鉄器の刀子片である。長さは18が3.5cm、19は4.1cm、20は4.0cmを測る。同一個体なのかもしれないが、接合しない。全体に錆がひどい。2~6、18がカマド内及びその周辺の炭化物層からの出土である。

SC03(Fig. 9, PL 5)

調査区南西隅で検出した方形の住居址である。主軸方位は北西から南東方向に取る。規模は東西・南北共4.9m、深さは東北側で最大30cmを測る。他遺構との切り合いが激しく、残りは全体に良くない。南西隅は第15次調査で調査が行なわれている。北西壁中央にはカマドがあったと見られ、灰白色粘土が、長さ1.9m、幅1.2mの範囲に灰白色粘土や焼土・炭化物が散布していた。主柱は4本柱である。抜き跡痕がある。深さは75~80cmとかなり深い。床面は壁周辺が



Fig. 5 第114次地点道標配置図 (1/200)

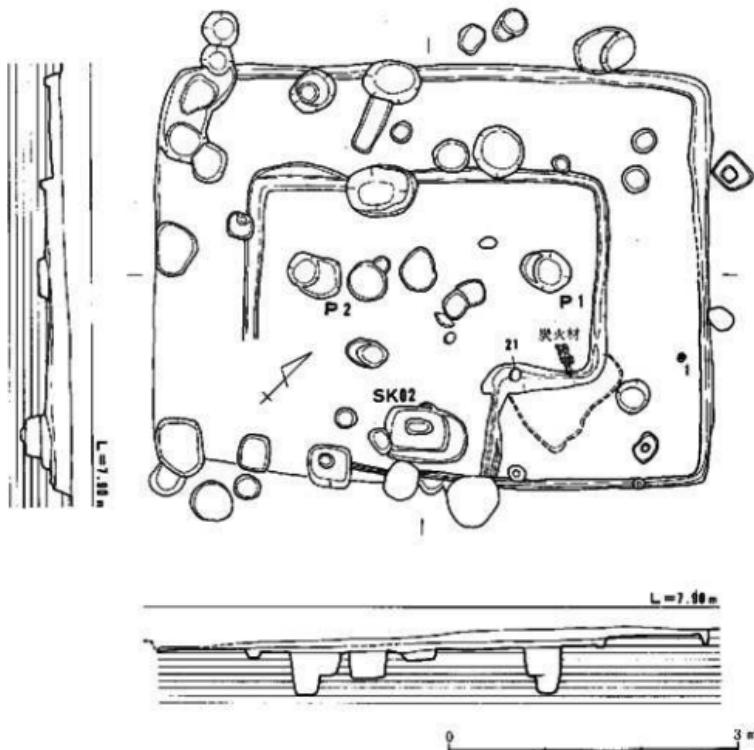


Fig. 8 SC01 (1/60)

地山が一段深くなり、その部分には地山粘土を充填して、貼床面としている。カマド粘土の散布や、抜き跡痕などからして、カマドを壊して、意図的に廃棄されたものかもしれない。

出土遺物(Fig.10・11, PL10) 弥生土器から古墳時代の土師器・須恵器が埋土中から出土している。量はそれ程多くない。原位置を保つ遺物はない。

7～13は須恵器。7～10は杯蓋である。7～9はほぼ同様の器形で、口縁内面に段又は稜線を持つ。7は口縁から天井部1/4片で、復元口径13.6cmを測る。天井部は回転ヘラ削りで、その他はナデ調整である。8・9は口縁部の小片である。9は細片である為、口径にはやや疑問が残る。

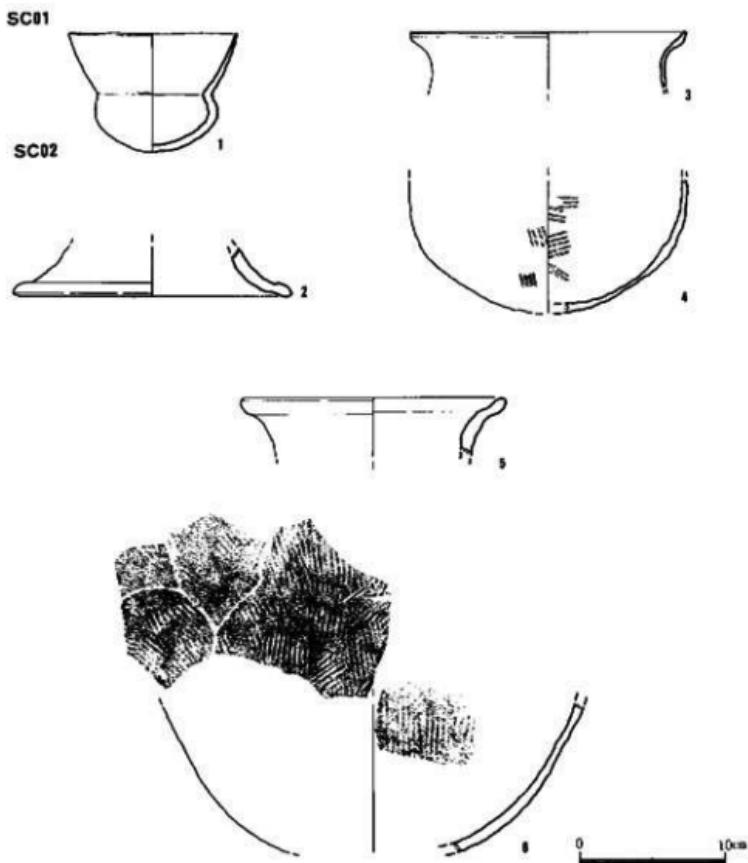


Fig. 7 SC01・02出土遺物 (1/4)

10は口縁内面にかえりを持つ器形である。小片の為、復元口径はやや疑問が残る。内外面ヨコナデ。11・12は杯身で、いずれも立上りの内傾具合は強い。11は1/8片で、復元口径11.4cm、復元受部径14.0cmを測る。底部1/2強は回転ヘラ削り、それ以外はナデ調整、12は1/6片で、復元口径11.8cm、受部径14.0cmを測る。13は甕の口縁部小片で、復元口径15.4cmを測る。器壁はやや厚目である。焼成は悪く、生焼けである。14も甕の体部片である。外面は木目直交叩き、

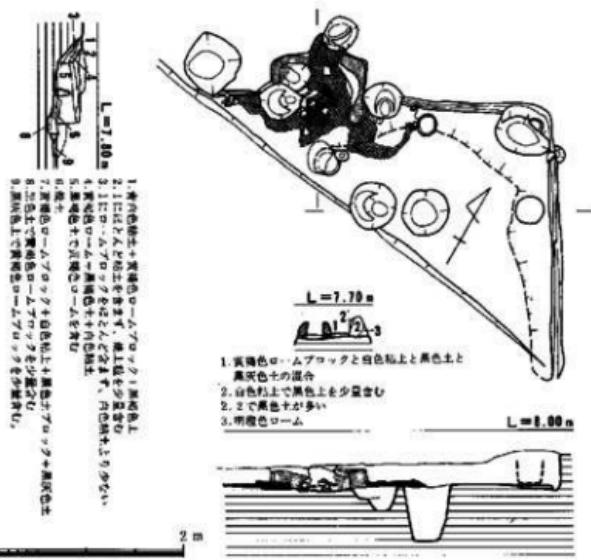


Fig. 8 SC02 (1/60)

内面は同心円状のあて具痕が残る。色調は灰桃色、胎土は1~2mmの石英粒を多く含む。焼きは悪く、赤焼きである。

15・16は土師器。15は壺の口縁部片で、復元口径18.0cmを測る。16は高杯脚部1/6片で、復元脚端径12.4cmを測る。脚部の屈折部に凹形の透孔が入る。15・16共、器壁は磨滅が著しく、調整は不明。胎土は15が石英微粒を多く含む。

17は管玉の先端部片と思われる。直徑3mm、孔径2mmを測る。石質は滑石か碧玉である。出土層は16がカマド周辺、17が埋土上層、他は下層出土である。

SC04(Fig.12, PL 5)

調査区南西側、SC03の南側で検出した。SC02・03に切られ、全容はわからない。東壁が10cm程残るだけで、残りは非常に悪い。東壁下には周溝が巡る。直径30cm程度の焼土面が東壁寄りに認められた。床面には後世のピットを含め、多数のピットを検出したが、主柱は確認しえなかった。この住居に伴う遺物はない。

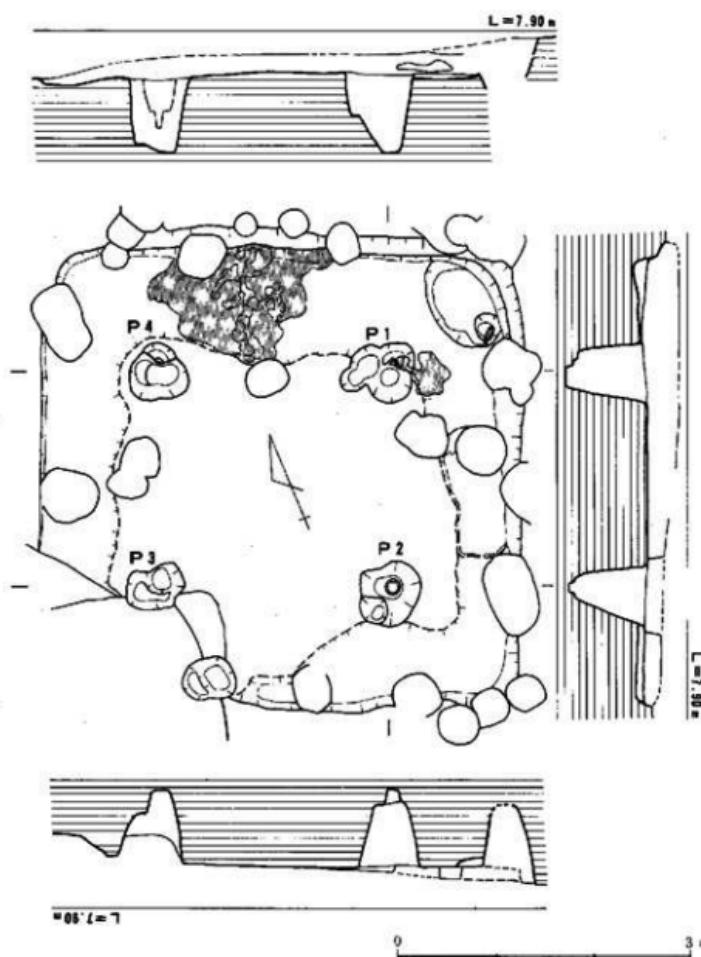


Fig. 8 SC03 (1/60)

SC05 (Fig.14, PL 5)

調査区北側で検出した住居址である。SK01を切り、SB06に切られる。残りは悪く、柱穴しかない。中央には長さ80cm、幅58cm、深さ20cmの略長方形の南側に幅の狭いテラスを持つ土坑と、

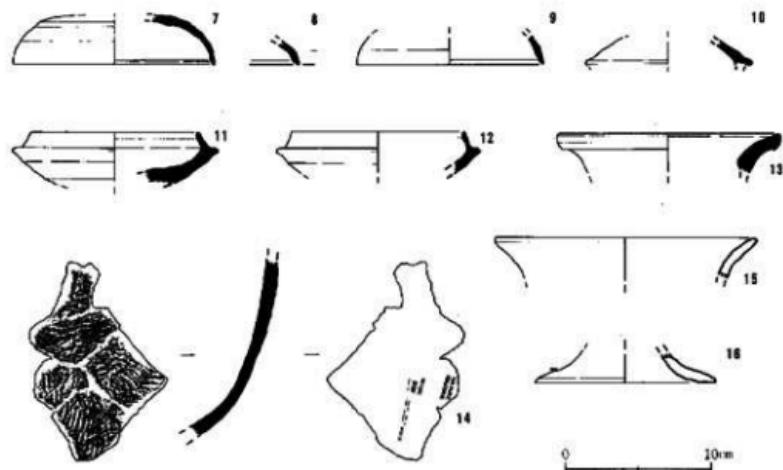


Fig. 10 SC03出土遺物 (1/4)

それに対応する1対の直径18~23cm、深さ7~23cm程の小ピットがある。この住居址はいわゆる松菊單型といわれる円形住居であろう。住居址の規模は推定で直径5.5~6m位と考える。主柱は5~7本で、最低2回以上建て替えられている。柱間距離は1.29~2.14m位である。柱穴掘方は深さ60~80cmと深く、柱径は痕跡から10~20cm位である。掘方埋土は黒色から黒褐色土で、黄褐色地山ロームブロックを混入する。また中央土坑の埋土は暗褐色粘質土である。

出土遺物 柱穴からわずかに弥生土器の細片が出上している。図示出来るものはない。

SC06(PL.5)

南西隅で検出した方形の住居址である。SC03と重複する。第15次調査で調査済の住居址である。規模は東西3.8m、南北4.1m程度である。主柱はわからない。

SC07

調査区南西隅の境界地で検出した方形の住居址である。規模は一辺が約3.8mを測る。四壁に小溝が巡る。主柱はわからない。これも第15次調査で調査された住居址である。



Fig. 11 SC03出土瓦 (1/1)

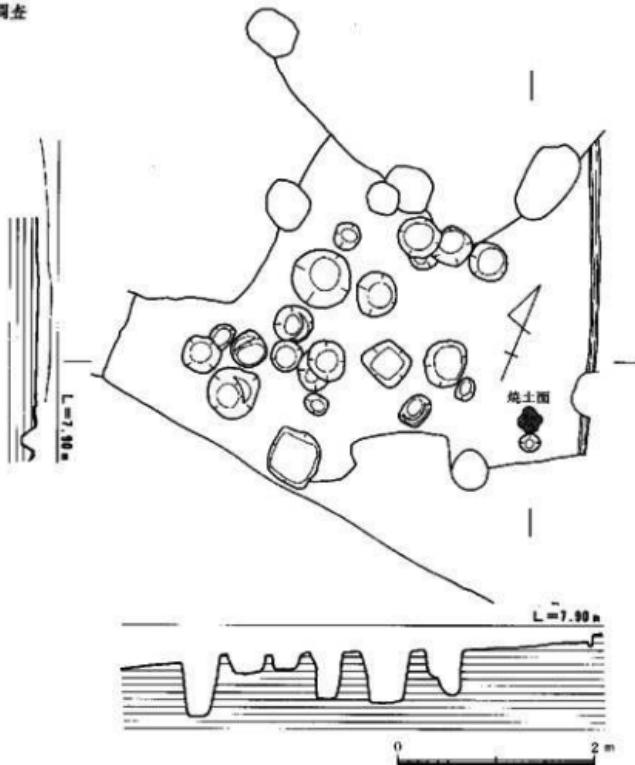


Fig. 12 SC04 (1/60)

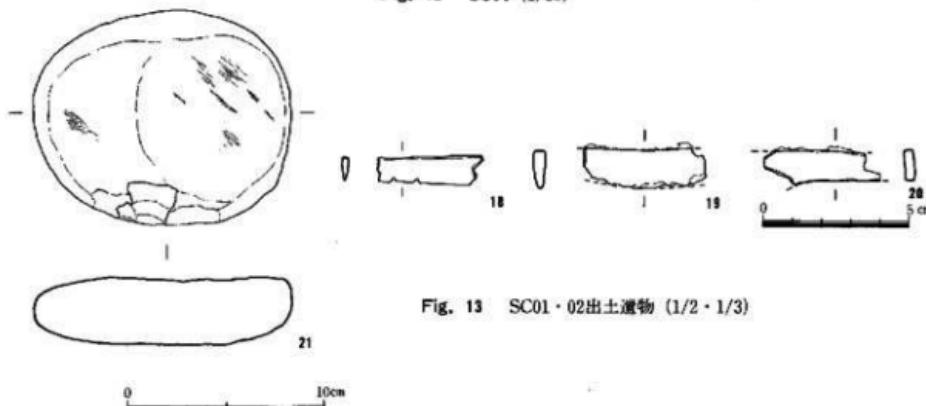
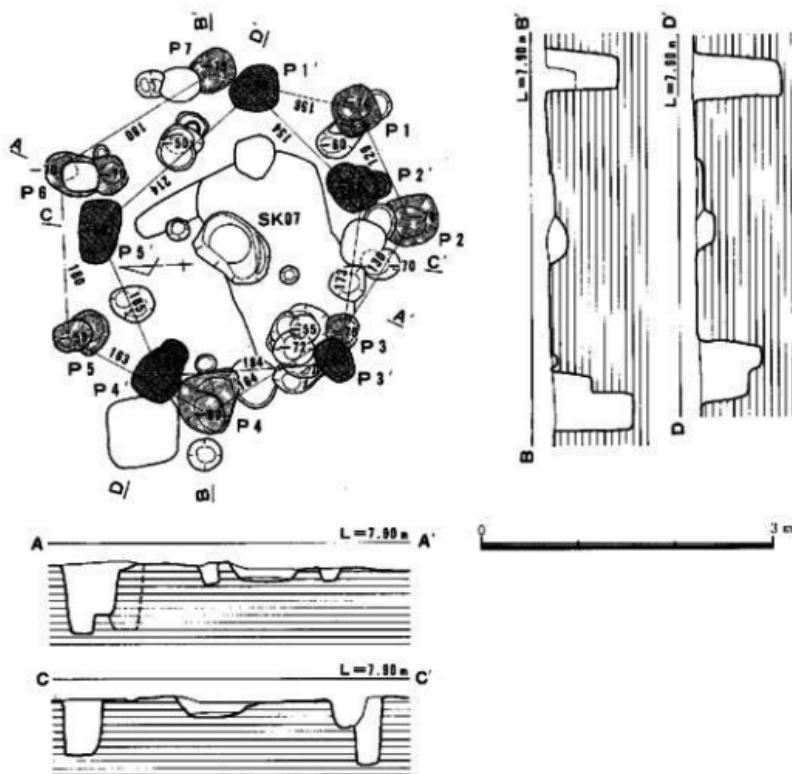


Fig. 13 SC01・02出土遺物 (1/2 · 1/3)



を主体とする。

出土遺物 須恵器・土師器の細片が、各柱穴から1~2点ずつ出土している。

SB02(Fig.16, PL 6)

SB01を切るが、主軸方位を01とほぼ同方向に取る1×2間の側柱建物である。梁間全長2.55m、桁行全長4.50mを測る。柱穴掘方は円形又は楕円形で、直径は45~55cm、深さ8~35cmを測る。全体に残りは余り良くない。柱筋はP2がやや外へはずれる。柱径は痕跡から10~15cmを測る。埋土は黒褐色粘質土を主体とする。

出土遺物 時期不明の土器片が1点出土している。

SB03(Fig.16, PL 6)

調査区中央で検出した主軸方位をN-82°30'-Eに取る2×3間の東西方向の側柱建物である。梁間全長3.75m、桁行全長6.45mを測る。柱穴掘方は円形又は方形で、直径は35~50cm、深さ15~30cmを測り、残りは余り良くない。柱径は痕跡から15cm前後と推測出来る。埋土は黒褐色土を主体とする。

出土遺物(Fig.15, PL 9) 各柱穴から土師器の細片が少量ずつ出土している。

22は白磁碗底部1/2片である。復元高台径6.0cmを測る。高台部は蛇の目状を呈す。全体に作りは良い。肩・定窓系であろう。

SB04(Fig.16, PL 6)

調査区中央で検出した主軸方位をN-85°30'-Eを取る2×3間の東西方向の側柱建物である。SB03と柱筋はほぼ同一方向である。梁間全長3.75m、桁行全長5.4mを測る。柱穴掘方は略

Tab. 3 指立柱建物一覧表

建物番号(SB)	棟構 数(間)	主軸 方向	梁間全長(cm)	桁行全長(cm)	床面積 (m ²)	主軸方位	
						南北	東西
01	2×4	北東	345	500~510	17.1	N-42'-E	SB01は 柱穴れん
02	1×2	"	255	450	11.5	N-35'-E	SB01七 切ら
03	2×3	東西	375	645	24.2	N-82°30'-E	
04	2×3	"	375	540	20.3	N-85°30'-E	
05	3×4	北西	435	720	31.3	N-48'-W	SB05は 壊れらる
06	3×4	北東	365~(480)	540			
07	3×3?	北西	360	405	14.6	N-26'-E	
08	5×8?	北東	420	610	23.6	N-35°30'-E	
09	3×4	"	500	705	35.3	N-42'-E	
10	3?×6?	"	485	745	36.1	N-54'-E	
11	3×3以上	"	330	345以上		N-27'-E	
12	2×3	"	420~425	470~500	20.5	N-54°30'-E	柱穴

*主軸方位は南北からの偏差

円形で、直径は35~55cm、深さは10~35cmを測る。柱径は痕跡から15cm前後を測る。埋土は黒褐色から黒色土を主体とする。

出土遺物 弥生土器や土師器・須恵器の細片が、各柱穴から1・2点出土している。

SB05(Fig.17, PL 6)

調査区西側で検出した主軸方位をN-48°-Wに取る3×4間の側柱建物である。SB06とはほぼ同方向である。SB08に切られる。梁間全長4.35m、桁行全長7.20mを測る。柱穴掘方は円形又は橢円形で、直径40~80cm、深さ15~30cmを測り、余り造りは良くない。柱径は痕跡から10~15cmと考える。梁間の柱間は北西側が3間、南東側が2間であり、北西側が山入口になるのかもしれない。柱穴埋土は黒褐色又は黒色土が主体である。

出土遺物(Fig.15) 各柱穴から古墳時代の土師器・須恵器片が少しづつ出土している。須恵器はⅣ期位のものを含む。

23は須恵器の杯身受部1/10片である。口端部を欠失する。受部径11.4cmを測る。立ち上がりの内傾度は強い。

SB06(Fig.17, PL 7)

調査区北側で検出された主軸方位をN-45°-Wに取る身舎2×4間の建物である。北西桁側には扉が付く、梁間全長3.55m(扉を入れると4.80m)、桁行全長5.40mを測り、扉部は1.2m張り出す。柱穴掘方は大体円形で、直径は20~50cm、深さは8~40cmを測り、余り残りは良くない。柱径は痕跡から10~15cmと推定出来る。柱筋は西側妻側がわずかに開く。埋土は黒灰色から黒色土が主体である。

出土遺物 各柱穴から古墳時代の土師器・須恵器の細片が少量ずつ出土している。

SB07(Fig.17)

調査区南側で検出した主軸方位をN-26°-Eに取る3×3間?の略方形の側柱建物である。SB02と重複する。梁間全長3.60m、桁行全長4.05mを測る。柱間は全体に1.05~1.65mと少し狭く、柱筋は揃っていない。柱穴掘方は円形又は橢円形で、直径22~50cm、深さは18~32cmを測る。隅柱は他に比べて深い。柱穴埋土は黒色又は黒褐色土を主体とする。

出土遺物 各柱穴から古墳時代の土師器・須恵器の細片が少しづつ出土している。須恵器はⅢ期からⅣ期位の杯蓋の細片を含む。

SB08(Fig.18, PL 7)

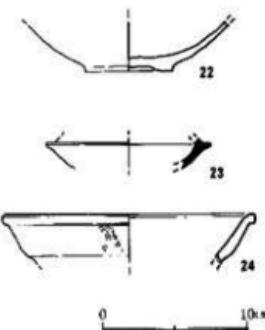


Fig. 15 掘立柱建物出土遺物 (1/4)

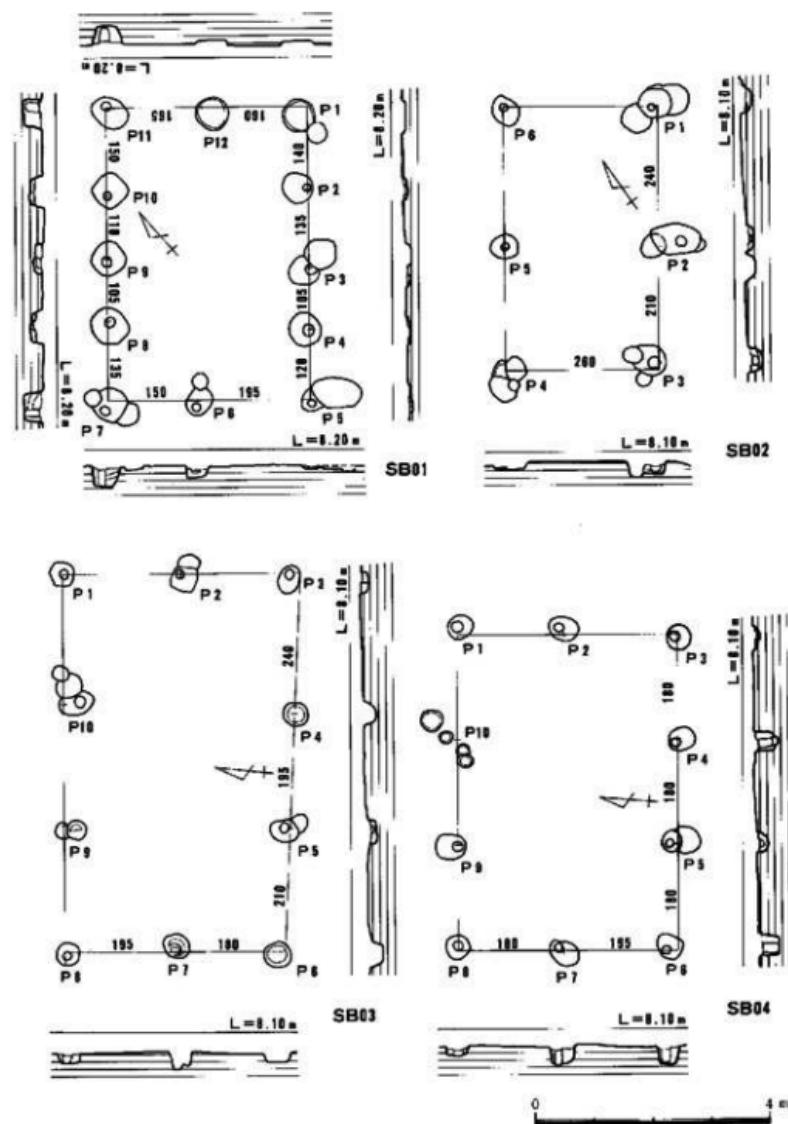


Fig. 16 SB01~04 (1/100)

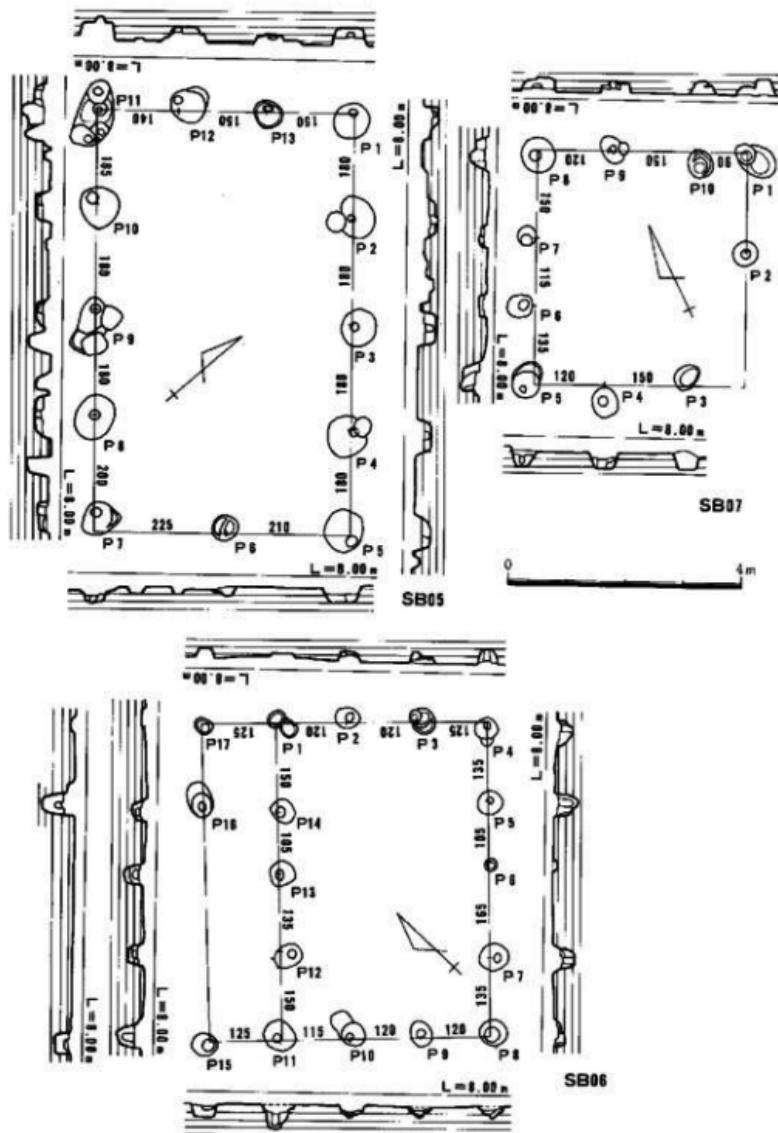


Fig. 17 SB05~07 (1/100)

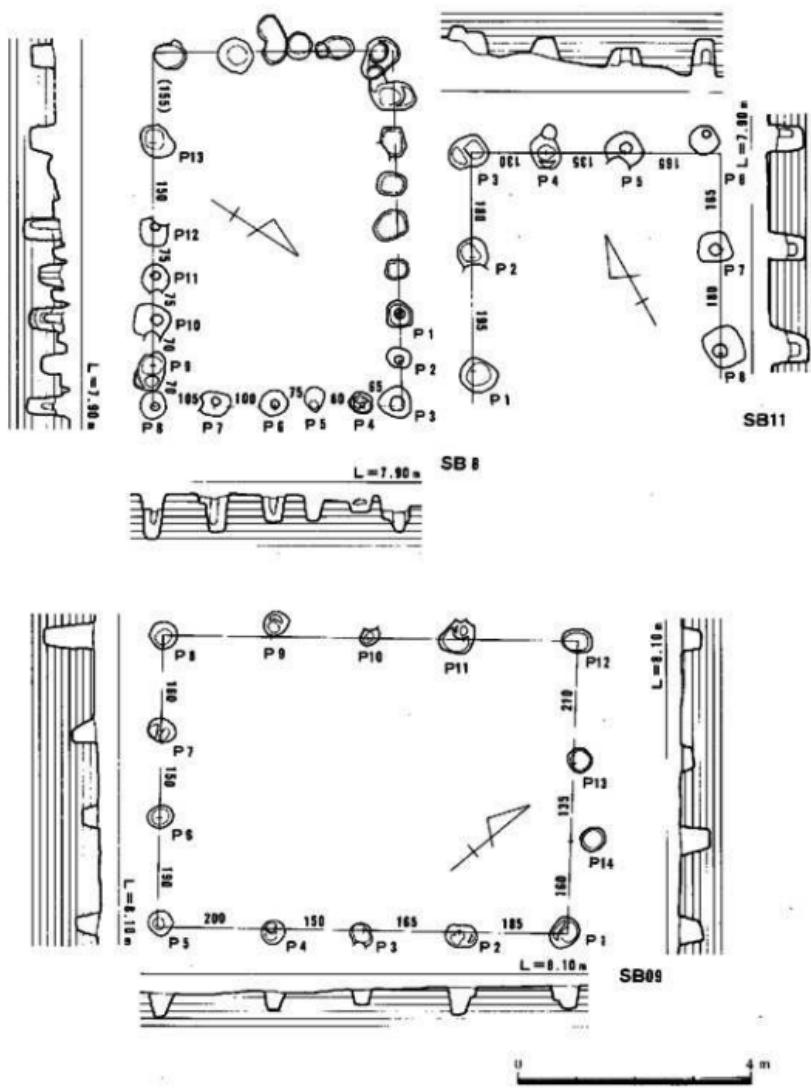


Fig. 16 SB08 · 09 · 11 (1/100)

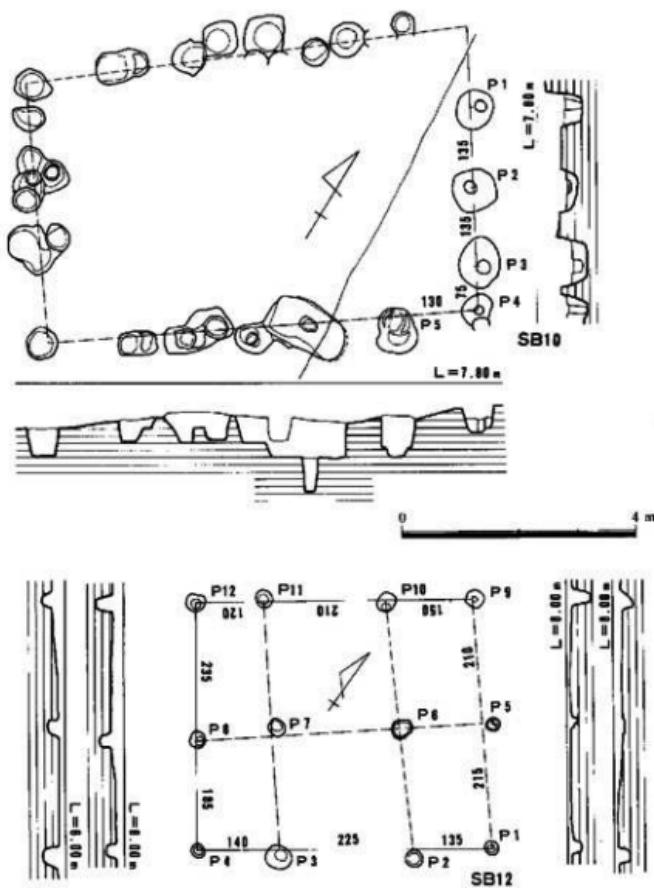


Fig. 19 SB10・12 (1/100)

調査区西側の第15次地点にかかる主軸方位をN-55°30'-Eに取る5×8間の個柱建物である。規模は第15次地点を合わせて、梁間全長4.20m、桁行全長6.10mを測る。柱間は0.65~1.50mと不揃いで一般に狭い。柱穴掘方は円形又は方形で、直径は35~65cm、深さ20~75cmと全体に深く、残りは良い。柱径は痕跡から10~20cmと推測出来る。柱穴埋土は黒色又は黒褐色土

を主体とする。

出土遺物 各柱穴から古墳時代の土師器・須恵器の細片が少しずつ出土している。

SB09(Fig.18)

調査区中央で検出した主軸方位をN-42°-Eに取る3×4間の側柱建物である。梁間全長5.0m、桁行全長7.05mを測る。柱穴掘方は円形又は椭円形で、直径は35~50cm、深さは20~85cmを測る。又柱径は痕跡から10~15cmと推定出来る。四隅の柱は比較的深くしっかりしている。埋土は黒褐色土を主体とする。

出土遺物 各柱穴から古墳時代の土師器・須恵器の細片が出土している。

SB10(Fig.19)

調査区南西境界、第15次地点にまたがって検出した主軸方位をN-54°-Eに取る3×5間の側柱建物である。SB08と重複する。規模は第15次地点分を合わせて、梁間全長4.85m、桁行全長7.45mを測る。柱間隔は全体に狭く、不揃いである。柱穴掘方は円形から長方形で、直径は45~90cm、深さは35~60cmと全体に深く、しっかりしている。柱径は痕跡から20cm前後である。埋土は黒色土を主体とする。

出土遺物 各柱穴から古墳時代の土師器・須恵器の細片が少量出土している。

24は土師器の甕口縁部小片で、復元で17.4cmの口径を測る。外面刷毛のちナデ。

SB11(Fig.18)

調査区南西隅で検出した主軸方位をN-27°-Eに取る3×3間以上の側柱建物である。南半分が調査区外で全容は不明。西側桁側は第15次調査で調査済みである。確認長は梁間方行で3.30m、桁行全長は3.45m以上を測る。柱穴掘方は円形から方形で、直径は40~55cm、深さは15~50cmを測る。柱径は痕跡から、10~15cmと考えられる。埋土は黒色土を主体とする。

出土遺物 各柱穴から古墳時代の土師器・須恵器の細片が少量ずつ出土している。

SB12(Fig.19)

調査区中央で検出した主軸方位をN-54°30'-Eに取る2×3間の總柱建物である。SB03と重複し、全体にいびつである。梁間全長は4.20~4.25m、桁行全長は4.7~5.0mを測る。柱穴掘方は円形で、直径は23~43cm、深さは10~35cmを測る。柱穴は全体に小さい。埋土は暗褐色土を主体とする。

出土遺物 各柱穴から古墳時代の土師器・須恵器の細片が数点ずつ出土している。

土坑

全部で6基検出した。その内のSK02はSC01層内上坑。04はSC05の土坑である。

SK01(Fig.21, PL 8)



Fig. 20 SK01出土遺物

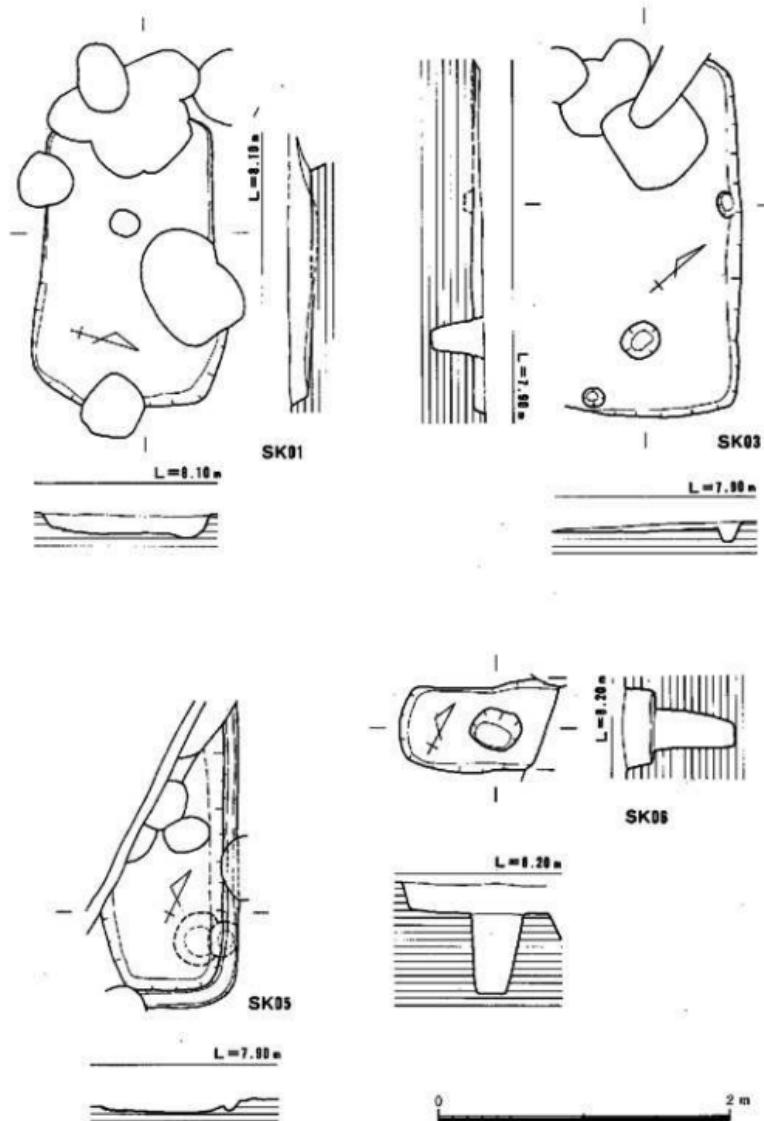


Fig. 21 SK01・03・05・06 (1/40)

SC05・SB06に切られる主軸を東西方向に取る土坑である。平面形は隅丸長方形を呈す。規模は長さ1.80m、幅1.32m、深さ0.18mを測る。床面は西側がわずかに低くなり、壁の立上がりは緩やかである。埋土は黒色粘質土で、黄褐色地山ローム土を多く含む。弥生前期頃の長方形土坑であろう。

出土遺物(Fig.20, PL10) 山土量は極めて少ない。土師器と須恵器の細片が各1点と、石鏃が1点出土した。しかし弥生時代住居址SC05に切られているので、土師器・須恵器は後世の人と考える。

25は石鏃で、黒曜石製である。基部の抉りが深い。大形の三棱形の石鏃で、尖端部と基部は一部欠失している。鏃身2.7cm、厚さ6mmを測る。

SK03(Fig.21, PL 8)

調査区南西側で検出した主軸を北西から南東に取る長方形状の土坑。遺存は悪く、南西壁は消滅している。規模は長さ2.25m、幅1.1m以上、深さは最大で8cm程である。床面はほぼ水平。北西壁と南東壁沿いに小ピットが各1個検出した。埋土は黒褐色土を主体とする。弥生時代前期頃に見られる長方形土坑であろうか。

出土遺物 時期不明の土器細片が4点出土した。

SK05(Fig.21, PL 8)

調査区西側境界地で検出した隅丸長方形状の土坑。境界にかかり全容は不明。確認長2.1m、幅0.95m以上、深さ10cmを測る。遺存は余り良くない。北西から南東壁にかけて、壁下に幅10cm、深さ5cm程の小溝が巡る。底面はほぼ水平。埋土は暗黄褐色地山ロームと黒褐色土の混合土である。竪穴住居址の残存痕か。

出土遺物 時期不明の土器片が6点出土している。

SK06(Fig.21, PL 8)

調査区東側境界で検出した長方形状の土坑。東側は崖に切られ、全容は不明。確認規模は長さ1.10m、幅0.14m、深さ0.20mを測る。底面はほぼ水平。底面中央に長径35cm、深さ56cmの橢円形状のピットがある。埋土は黒色灰混粘質土を主体とし、ピット部分は黒褐色粘質土に地山ローム粒子を混入している。

出土遺物はなかった。

溝状遺構(PL 9)

全部で13条検出した。いずれも近世以降のものである。SD01・11は南東から北西に走る幅0.9~1.3m、深さ25~45cm前後の並走する溝。SD03は同じく11と並走するか01に切られる。SD02は南北溝でSD01に切られる。SD03に合流するのかもしれない。SD04~10・12はSD01・03・11に直交する幅30~90cm、深さ10cm前後の小溝である。以上の溝の埋土は褐色から灰褐色土と新しい様相を示し、畑の区割り及び畝状の遺構と考える。SD13は幅40cm、深さ12cm前後、長さ1.

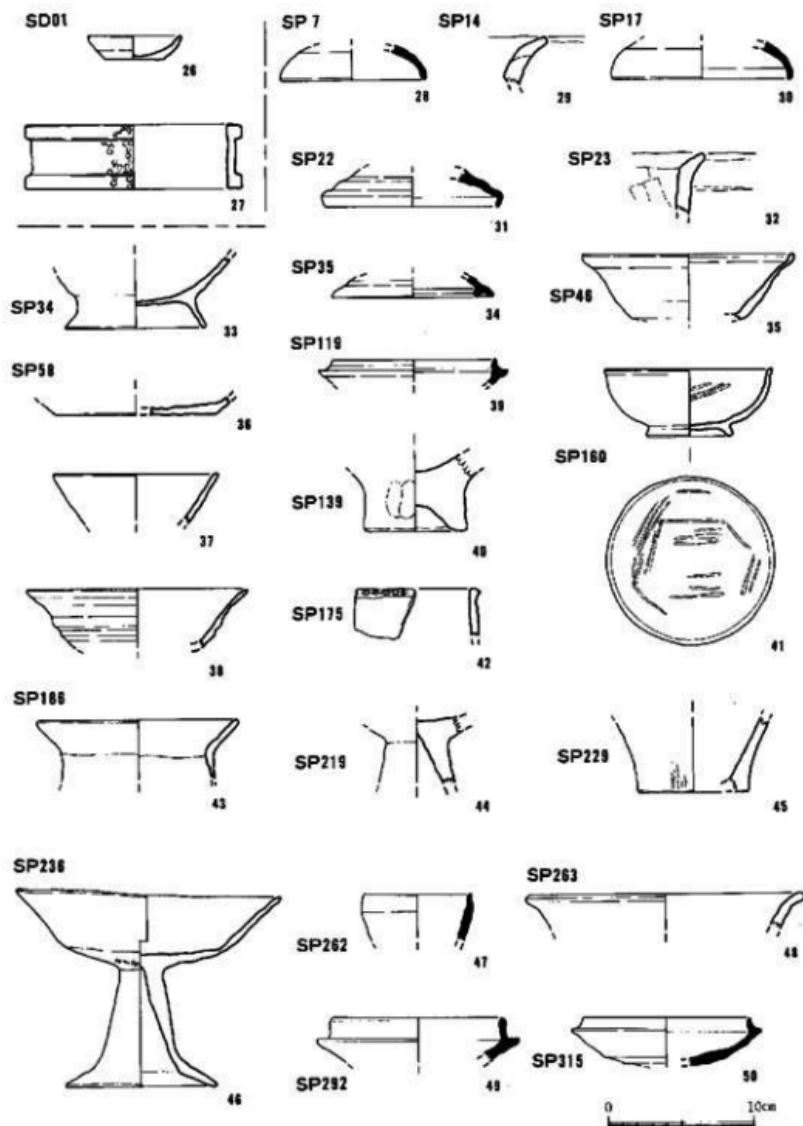


Fig. 22 溝及びピット出土遺物 I (1/4)

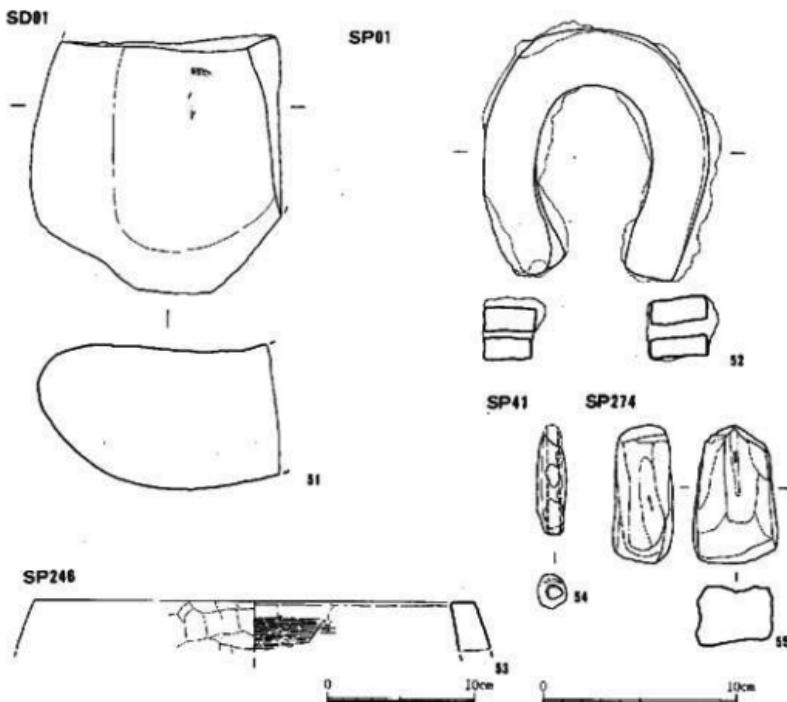


Fig. 23 溝及びピット出土遺物II (1/3・1/4)

9mの弧状に巡る小溝である。埋土は黒褐色土で褐色地山ロームブロックを混入する。

出土遺物(Fig.22・23, PL10) 弥生時代から近世・近代迄の各時代の遺物が出土している。26は灰釉の小皿で、口径6.4cmを測る。内面に淡緑色の釉がかかる。27は緑色釉がかかる土製品である。復元底径14.8cmを測る。外面に釉がかかっているが、円形状の気泡もしくは凹みに入る。胎土は暗灰色で精良である。窯道具か。51は大形の砥石片である。残存長17.7cm、最大幅17.0cm、最大厚9.5cmを測る。上面は使用で凹んでいる。石質は玄武岩か。52は鍛鉄である。2個が重なっている。鋤の状態はひどい。最大長13.0cm、最大幅11.5cmを測る。以上はSD01出土である。

ピット出土遺物(Fig.22・23, PL 8・9・11)

弥生時代から中世にかけての様々な遺物が出土しており、各時代のピットが存在する。

28はSP 7出土。須恵器の杯蓋小片で、復元口径10.0cmを測る。IV期位であろうか。29はSP14

出土。土師器の甕口縁部片である。口縁の形態から奈良時代位であろうか。30はSP17出土。須恵器杯蓋口縁部小片で、復元口径12.0cmを測る。IIIb期位であろうか。31はSP22出土。須恵器の蓋1/6片である。復元口径12.0cmを測る。口縁部はキャリバス状に屈曲する。32はSP23出土。土師器の甕又は鉢の口縁部小片である。33はSP34出土。土師器の高台椀で、高台部径9.5cmを測る。34はSP35出土。須恵器の蓋1/6片である。復元口径12.2cmを測る。V~VI期位か。35はSP46出土。杯の1/4片で、大きく開く体部から、口縁端が内側に屈折する器形。平安後期の防長系の杯に近い。36~38はSP58出土。いずれも土師器。36は皿又は杯部片で、底径10.6cmを測る。外底部の調整は不明。37は高台椀の口縁部小片である。復元口径13.2cmを測る。内外面の調整はヨコナデ。38も椀の口縁部1/6片で、復元口径15.0cmを測る。大きく開く器形で、水引き痕跡が明瞭に残る。胎土に金雲母・石英を少し含む。39はSP119出土。須恵器の杯身1/6片で、復元受部径13.0cmを測る。IIIb期位であろうか。40はSP139出土。弥生上器の甕底部片である。底部は上げ底で、中期初頃のものであろう。41はSP160出土。黒色土器の椀完形品である。口径13.6cm、器高4.6cmを測る。内面にはヘラ研摩痕が残る。胎土には白雲母・石英微粒を多く含む。42はSP175出土。突帯文土器の甕口縁部細片である。43はSP186出土。土師器の甕口縁部1/4片である。復元口径13.8cmを測る。口縁部がく字状に外折する器形で、奈良時代頃のものか。44はSP219出土。上師器の高杯脚部片である。器形から5世紀前半代のものか。45はSP229出土。弥生土器の甕底部1/4片である。中期頃のものか。46はSP236出土。上師器の高杯で完成品である。口径18.0cm、器高13.5cmを測り、やや傾く。器壁は磨減がひどく、調整は不明。胎土は石英粒を多く含む。5世紀前半代のもの。47はSP262出土。須恵器の平瓶と思われる口縁部1/6片である。復元口径7.0cmを測る。48はSP283出土。土師器の甕口縁部小片である。49はSP292出土。須恵器の杯身受部小片。復元受部径13.8cmを測る。受部の立上りは直立する。50はSP315出土。須恵器の杯身又は有蓋高杯の1/4片で、復元口径11.4cmを測る。立上りはやや内傾する。53はSP246出土。滑石製石鍋口縁部片で、復元口径30.0cmを測る。外面は工具による削り、内面には擦痕と工具痕が残る。54はSP41出土。管状の十鍾である。端部を欠失するが、残存部長5.1cm、直径1.5cm、重さ10gを測る。55はSP274出土。小形の手持砥石で砂岩製。全長7.1cm、最大幅4.3cmを測る。上面と右側面を砥面として利用している。

その他の遺構と遺物

東側中心に近世から近代にかけての土坑が6基出土している。SX01~03は東側境界地にかかる大形の不定形土坑。同様のものは北側第152次調査区で検出している。規模は長さ6.5~11m、深さ1.3~1.8mで、埋土は褐色地山ロームブロックに暗褐色土を混えたしまりのない土である。埋土は人為的に埋めた状況を示す。SX05~06は長さ1.14、1.1m、幅1.0、0.95m、深さ55、46cmの方形又は長方形の土坑。底及び四壁はセメント又は石灰を混ぜた土で固められていた。埋土は明褐色又は黄褐色ロームブロックである。

出土遺物 古墳時代の上師器・須恵器から近世末迄の陶磁器片を少しづつ含む。

表土・遺構面出土遺物 (Fig.30, PL11)

56は弥生土器の甕底部1/2片である。底部は上げ底である。胎土は石英粒を多く含む。57~59は須恵器。57は杯蓋1/3片で、口径11.6cmを測る。IIIb期位であろうか。58は蓋の1/6片で、復元口径12.0cmを測る。口縁内面にはかえりが付く。59は甕の口縁部片で、復元口径14.4cmを測る。60・61は青磁碗。60は口縁部小片で、明代のもの。61は同安窯系の底部片である。高台部はケズリを加え、露胎である。62は平瓦の小片。外面は斜格子の叩きを加え、内面には日の細い布目痕が残る。63は弥生時代の石鎌の未製品である。粘板岩製で、現存長13.5cm、最大幅5.2cmを測る。56は遺構面。57~62は表土、58・59は南西隅の埋め戻し土。63はSC03上面の包含層出土である。

3) 小結

当地点で検出した遺構は、主な時期を弥生・古墳・古代・近世の4時期に区分出来る。

弥生時代についてはSC05とSK01を当てる事が出来る。SC05は削平がひどく柱穴のみで、時期を決めうる遺物もないが、円形住居址であるという事から、中期後半以前の時期である。

古墳時代は、SC01~03が相当する。SC01は出土の小形丸底甕と住居の形態から前期の布留式土器併行期である。SC02・03は後期で、いずれもカマドを有している。SC03は須恵器の形態が

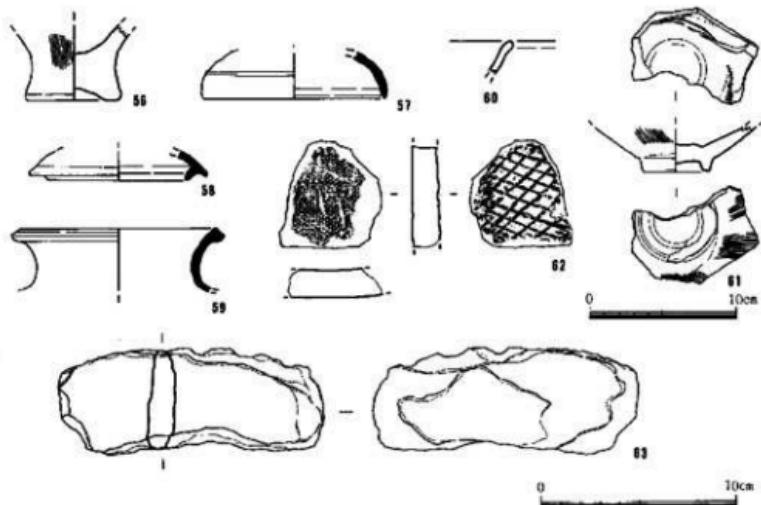


Fig. 24 遺構面・その他の遺構の遺物 (1/3・1/4)

IIIb期のものである。SC02は叩き調整された土師器が出土している。これと類似するものは広石遺跡群C地点^(註1)でも出土しており、IIIb期に位置づけられている。また図示していないが、IIIb～IV期の特徴を持つ杯身の口縁部細片も出土しており、概ねその時期であろう。

古代は掘立柱建物を中心とする。掘立柱建物は西側の15次地点・東側の152次地点^(註2)を合せて、19棟検出している。方向から1類(尾根筋に並走するもの)、2類(斜面に直交するもの)、3類(斜面に直交し、かつI類と直交する)、4類(斜面に斜交する)の4類に分類出来る。1類はSB05、2類はSB08・10・12、3類はSB01・02・06・09、4類はSB03・04がある。出土遺物で見ると、4類のSB03からは9世紀代の刑・定窯系の白磁皿が1点出土している。1類のSB05からはIVa期位の須恵器が出土している。2類の柱穴掘立方からはIIIb～IV期位の須恵器の杯身片がわずかに出土している。切り合ひ関係と考え合わせて、それぞれの相対時期を考えれば、2類→1類→3類→4類となる。1類がIVa期位、2類がIIIb～IV期、4類が9世紀以降となる。

近世は大半の溝と大形の土坑である。畠の歓や農道、小形の土坑は肥溜めなどである。

当地で検出されたSC02は、北壁中央をコ字状に掘り込み、その内側に粘土を貼り付けカマドとした。当遺跡群では珍しい、突出形カマドの住居址である。カマド付住居址は古墳時代中期から奈良時代にかけての通用な住居址である。Fig. 25で分布状況を示したが、台地の両側を除いて、粗密はあるものの、全域に分布している。当遺跡群では小田氏による須恵器編年^{11b}期に出現し、IV期迄継続する。その後消滅するが、奈良時代に再び出現する。Fig. 26でカマド付住居址の変遷を示したが、当初から造り付カマドが住居内におさまるものと本体がある程度住居外に出る2種類の形態がある。これは住居構造にある程度差があるのか、カマド構造に差があるのか、今後の検討課題である。

(註1) 福岡市教育委員会「生松台」福岡市埋蔵文化財調査報告書第226集 1990

(註2) 福岡市教育委員会「有田・小田部第13集」福岡市埋蔵文化財調査報告書、第265集 1991

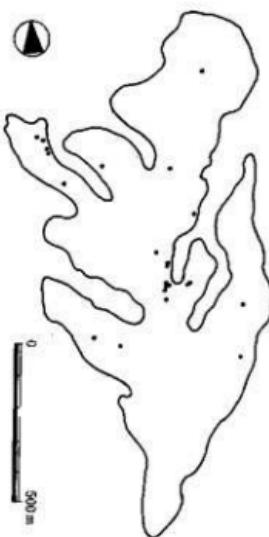


Fig. 25 カマド付住居分布図

第 114 次調査

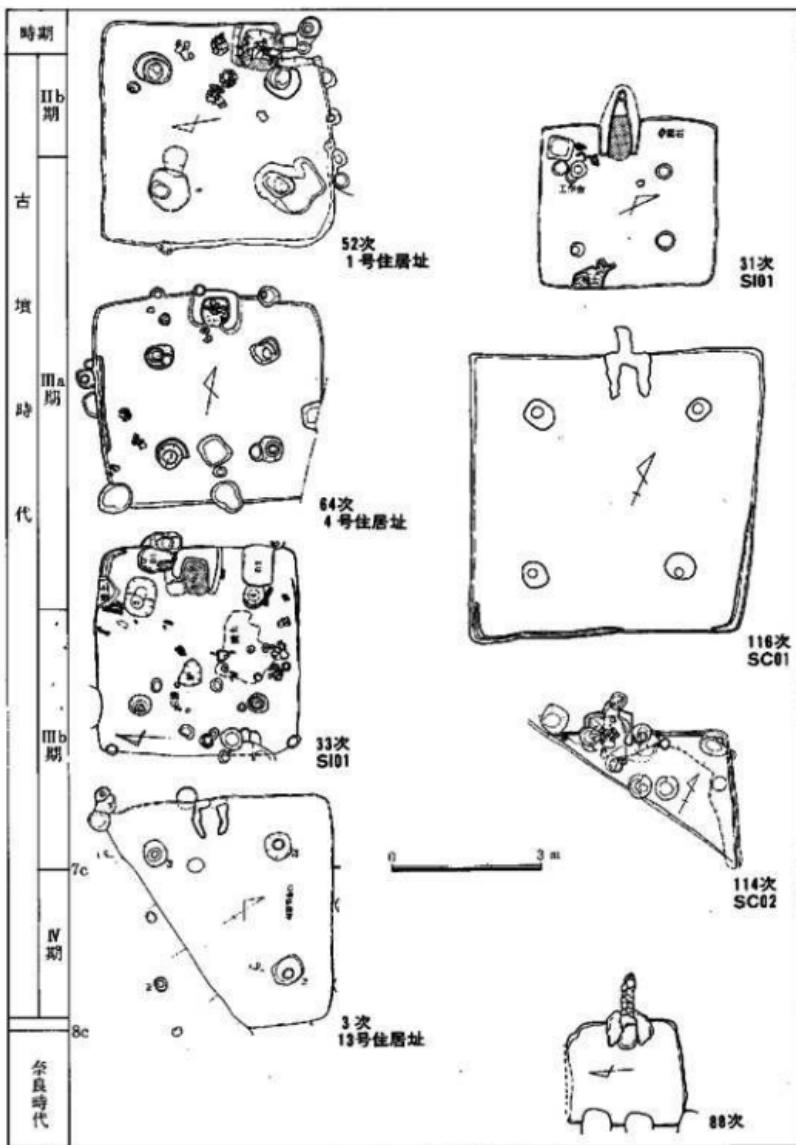


Fig. 28 カマド付住居変遷図 (1/120)

2. 第116次調査区（調査番号8656）

1) 調査区の地形と概要

調査地は早良区小田部3丁目189-1に所在する。有田台地の中央部西端近くに位置し、西向きの緩傾斜面上にあり、台地の落ち際近くに位置する。標高は約12.3mを測る。周辺の調査例は少なく、西側約50mでは第5次調査が行われ、台地端部から縄文時代中期～後期の貯蔵穴状土坑群が検出されている。また東側90mでは第31次調査が行われ、古墳時代住居址などが検出されている。

東半部は昭和60年11月28日～12月5日まで、西半部は昭和62年2月9日～3月25日まで調査を行った。調査区及びそれに隣接する畑は試掘の結果、数多くの遺構が検出されていた。今回の調査地の内、東半はこの試掘時に充分な試掘を行っていなかったが、前述の状況から遺構が残っていると考えたので、申請地の全面積の表土を剥いだが、遺構はピット数基しか検出されなかっただため、当初は試掘として処理した。翌年行った両半の調査では多くの遺構が検出されたことから、東半部を116次-A、西半部を同Bと呼ぶことにした。調査番号は両調査まとめて8656とした。調査面積はA・B合わせて728m²である。

調査区は厚さ15cmの表土の下に40～70cmの擾乱層があり、その下に地山である橙色ロームがある。擾乱層は西福岡中学校改築時に建てた仮校舎建築に伴うものである。仮校舎の跡はほぼ全面にわたって検出されている。地山面はわずかに西に傾くが、ほぼ平坦である。本米は台地の西斜面に位置することから西の傾斜面であったと思われるが、削平のため本来の傾斜はわからない。遺構は地山面で検出し、縄文時代の貯蔵穴状土坑31基+α、その他の土坑2基+α、計35基、古墳時代の竪穴住居址2基などを検出した。

2) 遺構と遺物

竪穴住居址 (SC)

SC01 (Fig.30・31, PL.13)

調査区南壁近くで検出した。平面形はやや歪んだ方形で、5.88m×5.98mを測る。壁面の高



Fig. 27 第116次調査区位置図
(1/25,000)

第116次調査区

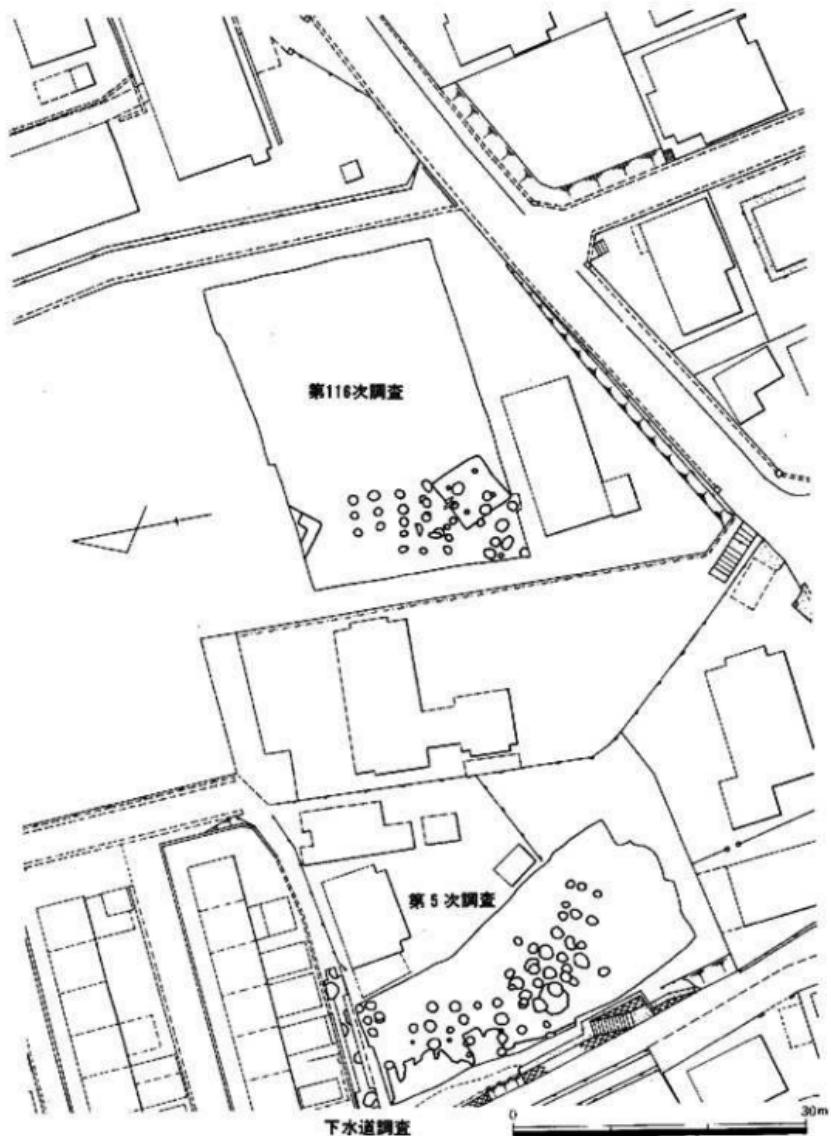


Fig. 28 第5次・第116次・下水道調査区査定配置図 (1/600)

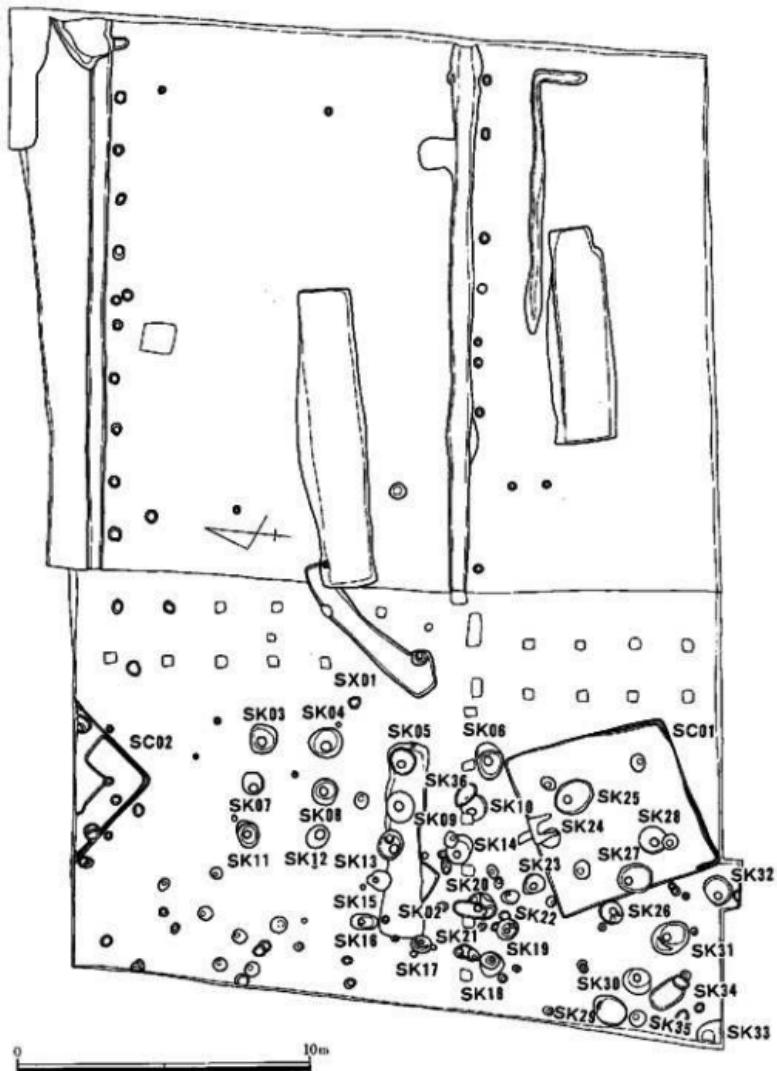


Fig. 29 第116次調査遺構配置図 (1/200)

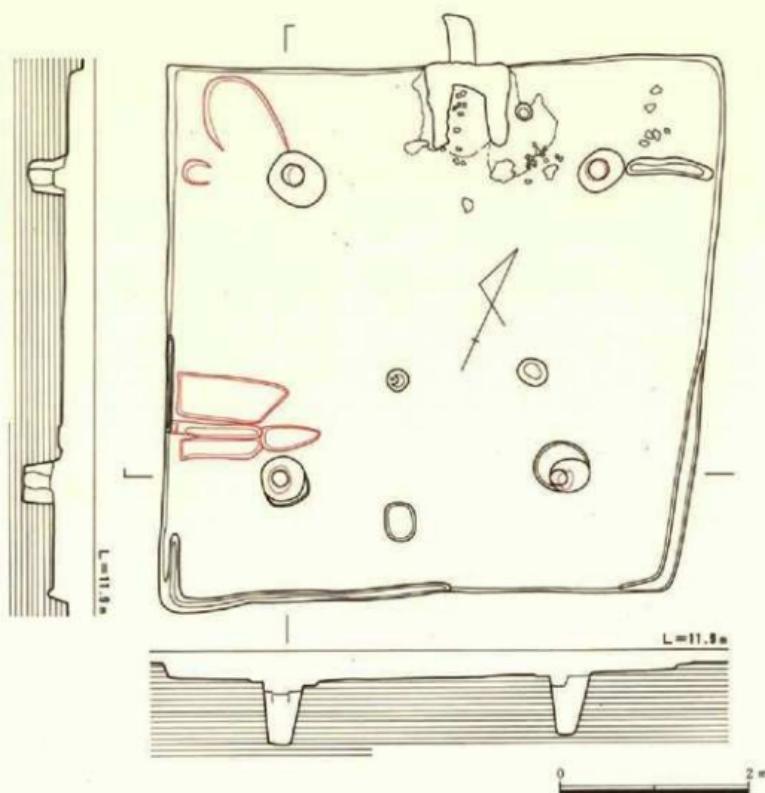


Fig. 30 SC01 (1/60)

さは10cmである。主柱穴は4本で直径42~60cm、深さ48~64cm、柱痕跡の直径15~20cmを測る。南壁西半には幅約13cm、深さ4cmの壁溝がある。また東壁南半は壁が2段になっている。北壁中央にカマドを造っている。煙道は壁の外に掘り出しており、その長さ50cm、幅26cmを測る。カマドの本体は白色粘土で造られ、下部約15cmが残っていた。焚き口には床からの高さ8cmの支脚が1本遺存していた。住居内西側は床面の下に数箇所の掘り込みが認められたが、部分的に浅いことから、竪穴掘削の際に掘りすぎたものと考えられる。

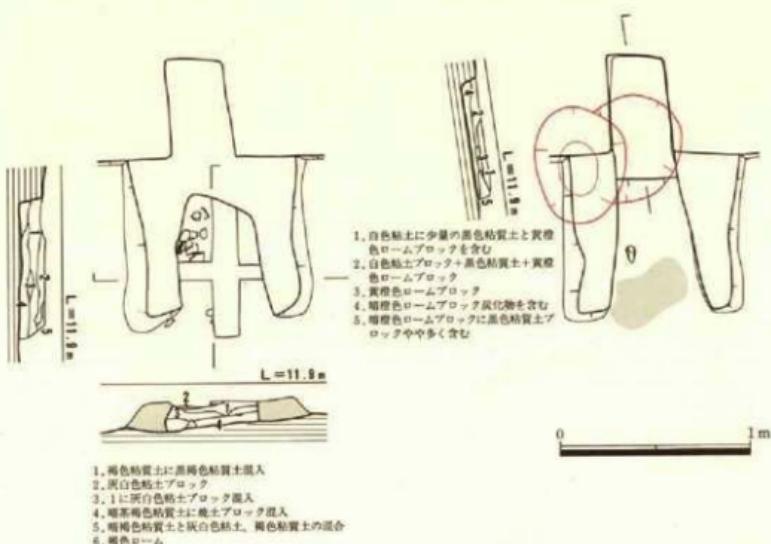


Fig. 31 SC01カマド (1/30)

出土遺物 (Fig.32, PL.24) 住居址覆土、床面から繩文土器、石器、土師器、須恵器、鉄器などコンテナ1箱分が出土したが、床面から須恵器の环、土師器の甕など略完形品が出土した。1は土師器の甕で、胴部径24.3cmを測る。外面は丁寧なナデ調整、内面は粗い縦方向のケズリ調整を施している。色調は橙色を呈し、内面下部に黒変部がある。胎土は5mm以下の石英などを多く含んでいる。2は土師器の甕の完形品で、器高12.7cm、口径10.5cm、胴部最大径12.5cmを測る。全体に歪んだ土器である。調整は、外面は磨滅のため不明、内面体部はケズリ、口縁部はヨコナデである。色調は赤橙色を呈し、胎土は5mm以下の石英などを多く含んでいる。3～6は須恵器である。3・4は坏蓋で、3は口径14.7cm、器高4.0cmを測る。口縁端部は丸みを帯び、内面に1条の沈線を施している。4は口径13.7cm、器高4.0cmを測る。口縁端部は直線的に斜めに切れ込み、直角ぎみに体部内面に移行する。天井部は凹んでいる。5・6は坏身で、5は器高4.8cm、口径13.1cmを測る。口縁端は尖りぎみである。また底は平底で全体が丸味を帯びている。6は器高4.8cm、口径12.7cmを測る。頸部内面は横方向のケズリのために、外面に切れ込んでいる。底部は平底に近い。

7は石鎌で、長さ2.15cm、幅0.85cm、重さ1g未満を測る。全体的に剥離は粗い。安山岩系

第116次調査区

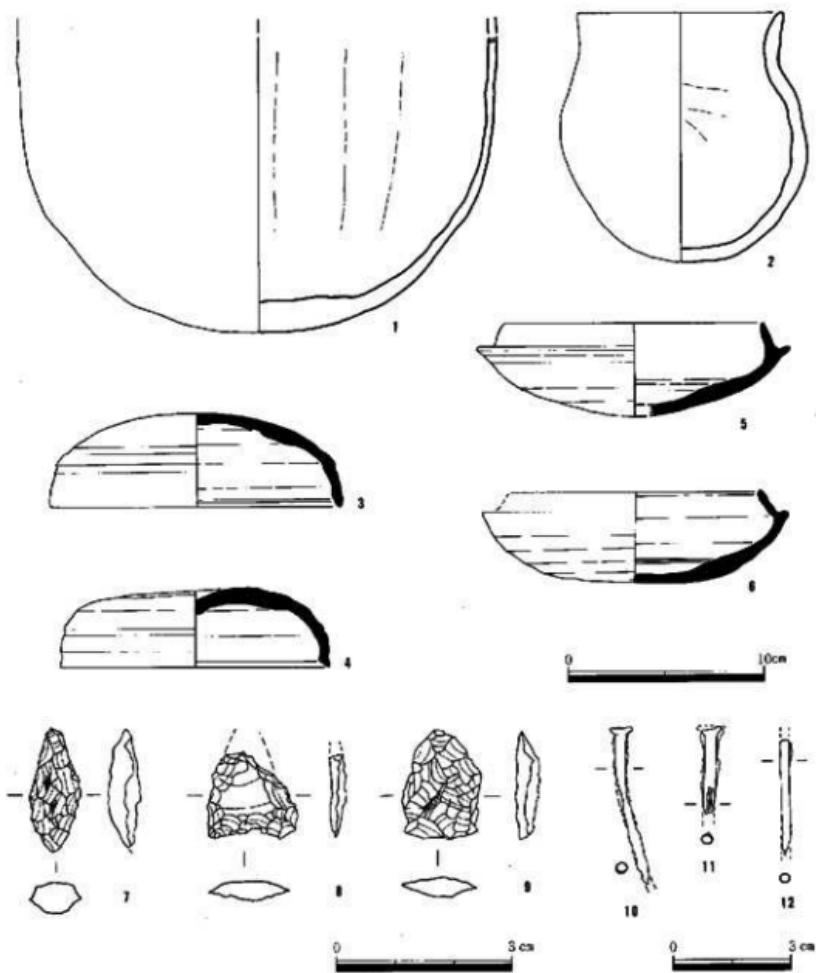


Fig. 32 SC01出土遺物 (1/3・2/3・1/1)

の石材を使用している。8も石鎌で、上端を欠失している。現存の長さ1.5cm、幅1.5cm、重さ1g未満。剥片を利用し、片面の調整は中央まで及んでいない。黒曜石製。9は石鎌の形態に似た石器で、早期によくある規指状石器に近い。両面とも周囲からの調整を行っているもの。

石錐に施される細かな調整を行っていない。石錐の未製品か。黒曜石製。10~12は釘状の鉄器で、混ざり込みの可能性もある。10・11は頭部を存するもので、頭部の直径0.6cm、身部の直径0.3cm、現存長5.5cmを測る。11は頭部の推定直径0.7cm、身部の直径0.3cm、現存長2.3cmを測る。12は身部の破片で、身部の直径0.25cm、現存長3.9cmを測る。

SC02 (Fig.33, PL.14)

調査区北壁沿いで、全体の1/4ほどを検出し、調査区外へ続いている。平面形は方形を呈すると考えられ、確認長は4.02m×3.83mを測る。壁の残存高は約15cmである。ベッド状遺構を有しており、南壁際の東端で検出した土坑を入口部とすると、時期的に見て入口部を除いて全周するものと考えられる。また入口部の上坑が一辺の中心にあるとすると一辺の長さ約6.5mほどになる。主柱穴らしきものが検出されていないことから、この数字はほぼ妥当と考えられる。入口部と考えられる土坑は推定の長さ約75cm、幅52cm、深さ31cmを測る。二段掘りで住居の壁側が10cm低くなっている。ベッド状遺構を中心に木炭が広がっており、焼失家屋の可能性が高いと考えられる。なおこの住居部分は調査後も破壊されないため、木炭等はそのまま現地保存し、将来の調査に託した。

出土遺物 (Fig.34, PL.24) 出土遺物は少なく、縄文土器、石器、土師器、鉄器などがビニール袋1袋程度である。

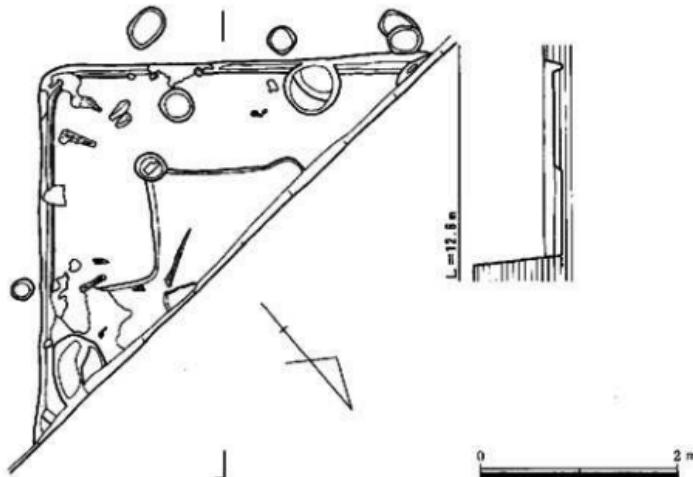


Fig. 33 SC02 (1/60)

第116次調査区

13・14は土師器の甕の頸部附近の破片である。13は頸部直下が肥厚し、外面にハケメ、内面にケズリを施す。色調は明赤褐色を呈し、胎土は3mm以下の石英粒などを多く含んでいる。14は外側はナデ調整で、横方向の沈線を1本施している。内面はケズリである。浅黄橙色を呈し、胎土は14に近い。15は手づくね上器で、器高4.7cm、口径7.2cmを測る。両面とも指押さえによって円凸が激しい。にぶい黄褐色を呈する。

16は石鎌で、長さ2.2cm、幅1.3cm、重さは1g未満である。いわゆる鋸歯状の石鎌であるが、鋸歯部分の凹凸は激しくない。黒曜石製。17は砥石で、現存長15.7cm、幅4.4cm、厚さ3.9cmを

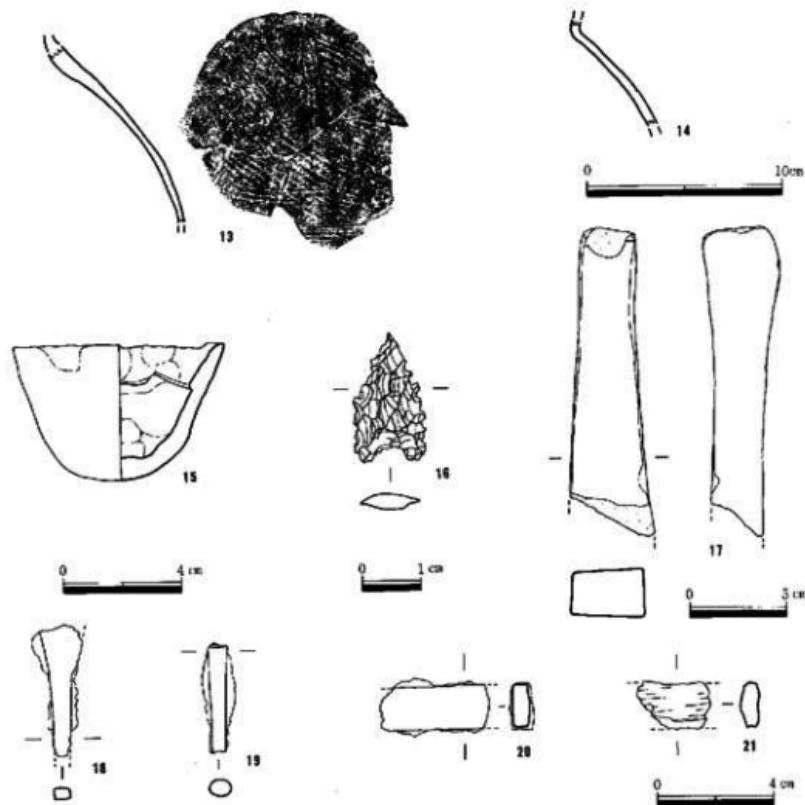


Fig. 34 SC02出土遺物 (1/3 · 1/2 · 1/1)

測る。砂岩系の石材を使う。4面とも使用している。18~21は鉄器である。18・19は鉄鎌で、18は茎の断面形が長方形を呈す。現存長3.4cm、茎の幅0.4cm、厚さ0.3cmを測る。19は現存長2.7cm、茎の幅0.5cm、厚さ0.4cmを測り、茎の断面形は楕円形を呈する。20~21は断面形が長方形を呈する鉄器で、刀子の茎かと思われる。20は現存長2.8cm、幅1.1cm、厚さ0.4cmを測る。21は現存長1.9cm、幅1.1cm、厚さ0.4cmを測る。木質が遺存している。

土坑 (SK)

調査中に土坑として番号を附したものは2基だけである。遺構検出時に大型掘立柱建物と考えた遺構が、掘り下げを開始した直後に縄文時代の土坑群であることが判明したが、調査中は遺構検出時の番号であるピット番号のままにしていた。整理時にこの土坑群にSKの番号を附し、土坑は都合36基になったが、調査中にSKの番号を附したSK01はSC02の屋内土坑のため、SK01は欠番とした。縄文時代の土坑群はほとんどが、木柱状の痕跡をもつもので、確認できただけで3~5基から成る列が8列並び、5次調査に向けて湾曲して続いている。便宜上北から1列とし、各列内は東から1番とする。なお調査後半は雨と調査期間の制約の為、土層の分離が充分に行われなかった点が遺憾である。また土坑内の土は軟質層を中心に水洗を行ったが、土器や石器、焼けた骨片、木炭片などが少量出土しただけである。

SK02 (Fig.35)

B調査区中央の大きな擾乱に切られる長方形の土坑である。壁面は2段になっており、床面も一部小さな段が付く。深さ6cmと浅い。

出土遺物 いずれも細片で、縄文土器1点、時期不明の土師器7点、石片2点が出土した。

SK03 (Fig.35, PL.14)

縄文時代土坑群を北側から1列とすると1列めの1番東端の土坑である。平面形は円形に近く、長径103cm、短径94cmを測る。断面形は逆台形を成し、深さ68cmを測る。床面は南から北に傾斜している。中央部やや西寄りに約26~32cmの柱状痕跡がある。柱状痕跡は途中で曲りながら縦に貫いて、全体に炭化物を含み、大きく2層に分れた下層は軟質な土層である。覆土は粘質の堅い土で、全体的に自然な堆積である。

出土遺物 (Fig.36, PL.25) 縄文土器の細片約45点とチップ、フレイク19点が出土し、縄文土器のうち条痕文土器が2点ある他は無文である。22~24は底部の破片で、22はやや上げ底、23・24は現状ではベタの平底である。色調はいずれもはぼ橙色を呈し、胎土には3mm以下の石英や長石を含み、23・24には金雲母も含む。26は上製品で、長さ3.3cm、幅3.0cm、厚さ1.65cmを測る。土を単に小さな塊にして焼いた様な製品で、この種の土製品が調査全体で数点出土した。

SK04 (Fig.35, PL.14)

第2列1番目の土坑で、平面形は卵形を成し、長径117cm、短径102cmを測る。ごく部分的に北東壁がオーバーハングしている。断面形はU字形を成し、深さ92cmを測る。中央より北西寄り

第 116 次調査区

に直径26~32cmの柱状痕跡がある。この北側、図中の2層上部には大きさ5cm前後の小石数個がまとまっていた。覆土下部には炭化物を多く含んでいる。柱状痕跡はやや蛇行しながら立ち上がり、下半は軟質層で炭化物を含んでいる。

出土遺物 (Fig.36, PL.25・27) 繩文土器の細片約30点と前述の小型土製品1点、石錐1点、石匙1点、黒曜石チップ1点が出土した。土器のうち条痕文土器が3点ある。25は底部片で、両面ともナデ調整。黒褐色を呈して、胎土には石英、長石などを多く含み、粗い。27は外側に粗い条痕文を施し、内面はナデ調整である。胎土には2mm以下の石英等を含む。30は石錐で、長さ3cm、重さ2gを測る。安山岩系の石材を用いる。調整は粗い。29は小型の石匙と思われ、上端を欠失する。長さ3.6cmを測る。安山岩製の石材を使用している。28は叩石で、平坦面をかなり叩いている。長さ9.6cm、幅3.7cm、厚さ6cmを測る。

SK05 (Fig.35, PL.15)

第3列1番目の土坑。平面形は楕円形で、長径93cm、短径82cmを測る。北壁と東壁がオーバーハングする。断面形は箱形に近く、深さ79cmを測る。柱状痕跡は中央やや北西寄りにあり、径30cmを測り、ほぼ直立する。柱部分は床面がわずかに凹む。これ以外にも10cmほど凹むビットが2つある。覆土は3層がやや軟質で炭化物を含む他は、しまっている。柱部分は軟質で、炭化物を多く含んでいる。

出土遺物 (Fig.36, PL.25) 繩文土器13点、自然面を残した黒曜石フレイク1点が出土した。土器は図示した1点以外はすべて無文で、そのうち2点には滑石が含まれている。31は両面に条痕文を施した胴部片で、よい黄褐色を呈し、胎土は3mm以下の石英粒、赤色鉱物粒などを多く含んでいる。

SK06 (Fig.37, PL.15)

第4列1番目の土坑。平面形は楕円形に近く、長径124cm、短径95cmを測る。深さ145cmと深く、断面形は袋状を呈する。東半は2段になり、その段より下はいわゆる八女粘土層を掘り込んでおり、SK28とともに数少ない湧水を伴う上坑である。柱状痕跡は中央附近にあり、径27cmを測る。柱の断面はほぼ直立するが、下半は径39cmと上端より太い。段より上の覆土は自然堆積で、しまった層である。下半は深すぎて層の充分な分離が出来なかったが、軟質で粘り気が強く、炭化物を含んだ層である。柱もすべて軟質で多くの炭化物を含んでいる。

出土遺物 (Fig.38, PL.25) 繩文土器約120片、黒曜石チップ3点が出土した。土器はほとんど細片で、条痕文数点、口唇部に文様のあるもの1点以外は無文である。32は底部片で、両面ともナデ調整を施し、橙色を呈する。胎土は5mm以下の石英粒や金雲母粒を多く含んでいる。33~35は条痕文土器で、33は両面とも条痕を施し、34は両面に条痕を施したのち、内面をナデ消している。35は外側が条痕で、内面はナデ調整である。また34は赤色顔料を施しているようであるが、残りが悪く、判然としない。胎土は33・34が3mm以下の石英粒などを多く含み、35

Tab. 4 上坑一覽表

単位: cm

上坑名	長さ	幅	高さ	平面形	断面形	柱径	軸質層	時代	備考
SK02	106	68	8	隅丸長方形	楕状	—	なし	古墳時代	
SK03	103	94	68	円形	逆台形	32	あり	縄文時代	
SK04	117	102	92	卵形	U字形	32	あり	縄文時代	
SK05	93	82	79	楕円形	楕形	30	あり	縄文時代	
SK06	124	95	145	楕円形	2段	39	あり	縄文時代	
SK07	80	80	73	円形	楕形	25	なし	縄文時代	柱は?
SK08	94	94	85	円形	楕形	24	あり	縄文時代	
SK09	100	100	57	円形	楕形	31	あり	縄文時代	軸質層は柱の下層のみ
SK10	94	94	98	円形	楕形	26	あり	縄文時代	
SK11	94	88	91	卵形	U字形	28	あり	縄文時代	標示あり
SK12	86	70	103	長方形	楕形	34	あり	縄文時代	
SK13	102	88	92	楕円形	逆台形	26	あり	縄文時代	柱は? 標示あり?
SK14	97	97	93	円形	不定形	23	あり	縄文時代	柱は?
SK15	68	60	78	円形	楕形	—	あり	縄文時代	柱あり?
SK16	88	53	62	長方形	逆台形	24	なし	縄文時代	
SK17	67	58	64	楕円形	2段	20	あり	縄文時代	軸質層は柱の下層のみ
SK18	78	69	56	円形	楕状	18	なし	縄文時代	
SK19	77	66	72	楕円形	楕形	—	あり	縄文時代	柱あり?
SK20	100	90	19	円形	2段	—	なし	縄文時代	
SK21	117	56	28	楕円形	楕形	19	なし	?	
SK22	61	52	93	円形	楕形	15	あり	縄文時代	柱は?
SK23	76	68	136	円形	袋状	22	あり	縄文時代	
SK24	65	85	120	円形	楕形	32	あり	縄文時代	柱は2本あり。標示?
SK25	128	101	57	楕円形	袋状	—	なし	縄文時代	
SK26	82	74	96	円形	楕形	24	あり	縄文時代	
SK27	113	100	78	卵形	楕形	23	あり	縄文時代	
SK28	95	95	123	円形	楕形	48	あり	縄文時代	
SK29	124	96	101	楕円形	楕形	—	あり	縄文時代	柱あり?
SK30	98	90	136	円形	袋状	33	あり	縄文時代	
SK31	130	112	113	楕円形	不定形	27	あり	縄文時代	
SK32	97	86	101	円形	袋状	33	あり	縄文時代	
SK33	—	—	114	—	—	—	あり	縄文時代	全形不明
SK34	125	82	23	長楕円形	逆台形	—	なし	古墳時代	
SK35	54	54	72	円形	楕形	20	なし	縄文時代	ピットに近い
SK36	98	60	27	楕円形	不定形	22	なし	古墳時代?	

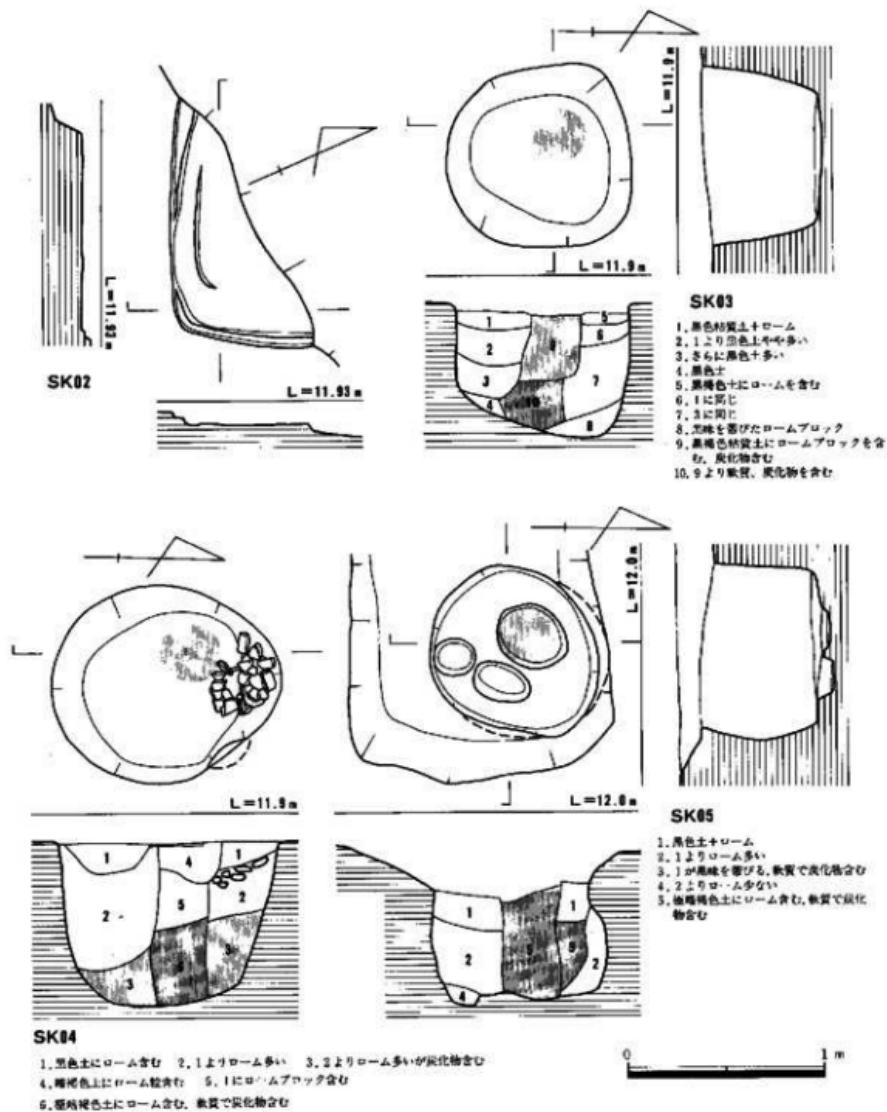


Fig. 35 SK02~05 (L/30)

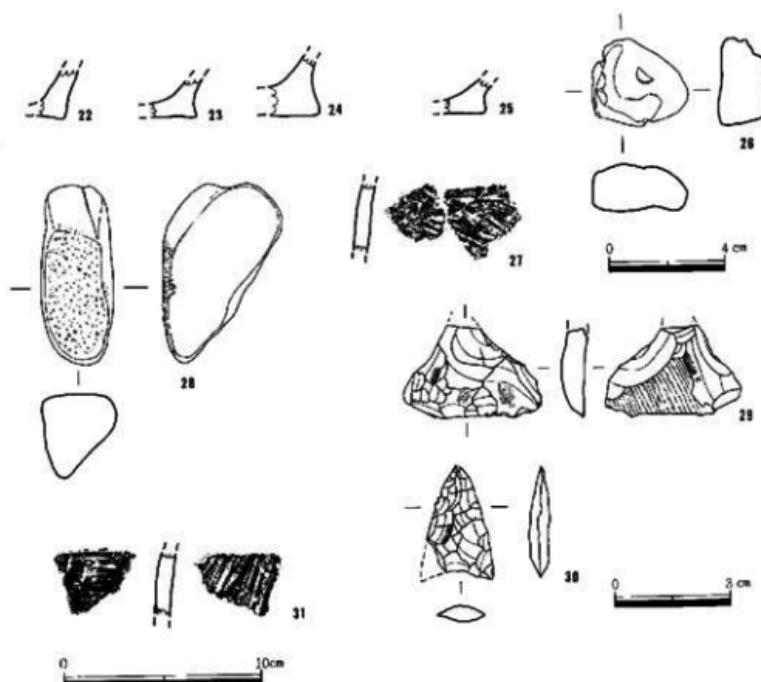


Fig. 36 SK02~05出土遺物 (1/3・1/2・2/3)

が1mm以下の粒子を含んでいる。また33には黒雲母粒も含む。

SK07 (Fig.37)

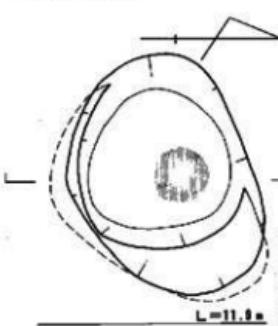
第1列2番目の土坑である。平面形はほぼ円形で、径約80cmを測る。断面形は全体的に箱形に近い形状であるが北側上端部が広がっている。深さ73cmを測る。覆土はいずれもしまった層で、軟質層や炭化物を含んだ層はない。柱状痕跡は東壁近くにあり、径25cmを測る。他の土坑と異なり、床面まで達してなく、層もしまった層である。別のピットの可能性もある。

出土遺物 (Fig.38, PL.25) 繩文土器18点、黒曜石フレイク1点が出土した。上器のうち1点は条痕文土器で、他は無文である。また滑石を混入したものが2点ある。36は両面とも条痕を施す。色調は浅黄橙色を呈し、胎土は1mm以下の細かい粒子を含んでいる。

SK08 (Fig.37, PL.25)

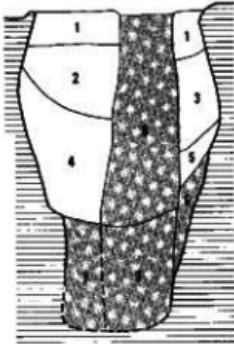
第2列2番目の土坑である。平面形はほぼ円形を呈し、径94cmを測る。断面形は箱形に近く、

第116次調査区

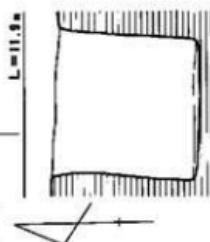
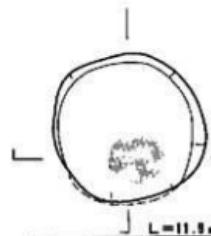


SK06

1. ローム+黒色粘土
 2. 1よりローム多い
 3. 1と2の中間
 4. 1より薄い
 5. 4と同じ
 6. フームに黒色土含む
 7. フーム+黒色土
 8. 黒褐色土+ローム含む
 9. あまり薄い
- 軟質で葉物含む

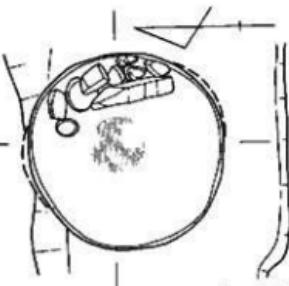
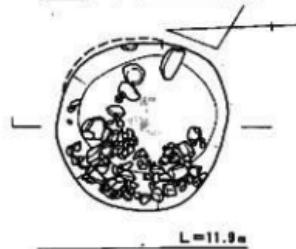


SK06



SK07

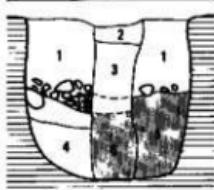
1. 黒色土にローム含む
2. 1よりややローム多い
3. 1, 2よりローム多い
4. 黒色土にローム少含む



L = 11.8 m

SK08

1. 黒色土+ローム
2. 1よりローム多い
3. 黒褐色土にローム含む
4. 3より軟質、炭化物含む



SK08

1. 出色土にローム多く含む
2. 黑褐色土にローム多く含む
3. 2よりローム多い
4. ロームに出色土を多く含む
5. 6に近いがローム多い
6. 植被布滿色粘土中にロームと炭化物含む



Fig. 37 SK06~09 (1/30)

深さ85cmを測る。覆土は5層が軟質層で、炭化物を含んでいる。覆土中ほどの1層下部には5~15cm大の石、北側を中心にレンズ状にあった。柱状痕跡はほぼ中央にあり、径24cmを測る。若干の凹凸があるが、ほぼ直立する。三層に分れ、さらにもう1層分離できそうであったが、明確に線がひけなかった。最下部の6層は軟質土層で、炭化物を含んでいる。

出土遺物 (Fig.38, PL.25) 繩文土器19点、黒曜石チップ1点が出土した。上器は図示した1点以外はすべて無文である。37は両面とも条痕を施している。赤色~黒褐色を呈し、胎土は3mm以下の石英粒や金雲母粒を含んでいる。

SK09 (Fig.37, PL.16)

第3列2番目の土坑である。平面形はほぼ円形を呈し、径約1mを測る。断面形は箱形に近く、深さ57cmを測る。床面上の東端に石皿、磨石を含む、15cm以上の石9個があったが、特に意識的な配列ではなさそうである。覆土はしまった土である。柱状痕跡は3・4層がそれだとすると径31cmを測るが、3層は軟質で炭化物を含んだ4層との差が明確で、4層は柱ではなく、3層は別のピットの可能性もある。

出土遺物 (Fig.38・39, PL.25・27) 繩文土器6点、石皿1点が出土した。土器はいずれも無文である。38は口縁部片で、全体は直立ぎみだが、端部はわずかに外反する。両面ともナデ

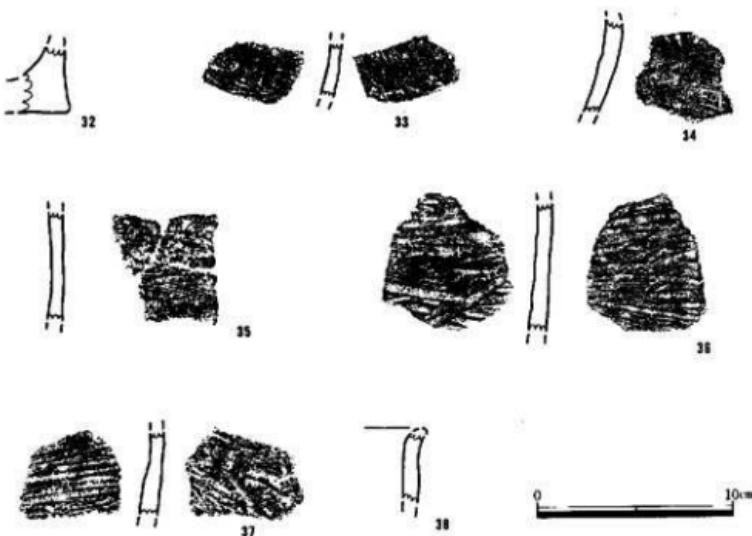


Fig. 38 SK06~09出土遺物 (1/3)

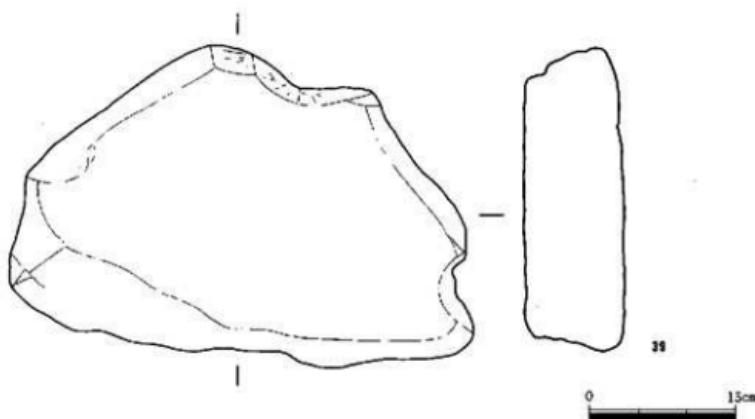


Fig. 39 SK09出土石皿 (1/6)

調整で、胎土は2mm以下の石英、金雲母などを含んでいる。39は石皿で、長さ47.7cm、幅31.5cm、厚さ10.2cmを測る。表面のみ磨かれている。花崗岩系の石材を使用している。

SK10 (Fig.40, PL.16)

第4列2番目の土坑。SK36に切られている。平面形はほぼ円形で、径94cmを測る。北壁と南壁がわずかにオーバーハングしている。断面形はほぼ箱形で、深さ98cmを測る。覆土は大きく3層に分れ、最下層は軟質層で炭化物を含んでいる。柱状痕跡は中央やや西側にあり、径26cmを測る。柱は上に行くにつれ北向きに傾いている。柱内は2層に分れ、下層は軟質層で炭化物を多く含んでいる。

出土遺物 繩文土器の細片20点が出土した。条痕文土器片が数点ある以外はすべて無文土器片である。

SK11 (Fig.40, PL.17)

第1列3番目の土坑である。平面形は卵形を成し、長径94cm、短径88cm、断面形はU字形に近く、深さ91cmを測るが、土層断面を見ると、縦方向に4つのまとまりがあり。掘り返しのあつたことが考えられる。また出土遺物中に5点の土師器らしき土器の細片があり、この掘り返しは古墳時代以降の柱穴と考えることができる。SK11の層は5~9層で、5・6層が柱状痕跡と考えられ、径28cmを測る。3・4層が掘り返しの穴の覆土で、1・2層がその柱痕跡と考えられる。しかし2層がやや軟質の土で、この軟質層が他の土坑と同じならばこの層も繩文時代となる。また4層、6層、9層と床面のレベルがそろっているため、繩文時代に掘り返した後、さらに古墳時代以降に1・2層と3層の一部を掘ったことも考えられる。いずれにしろ、1~4

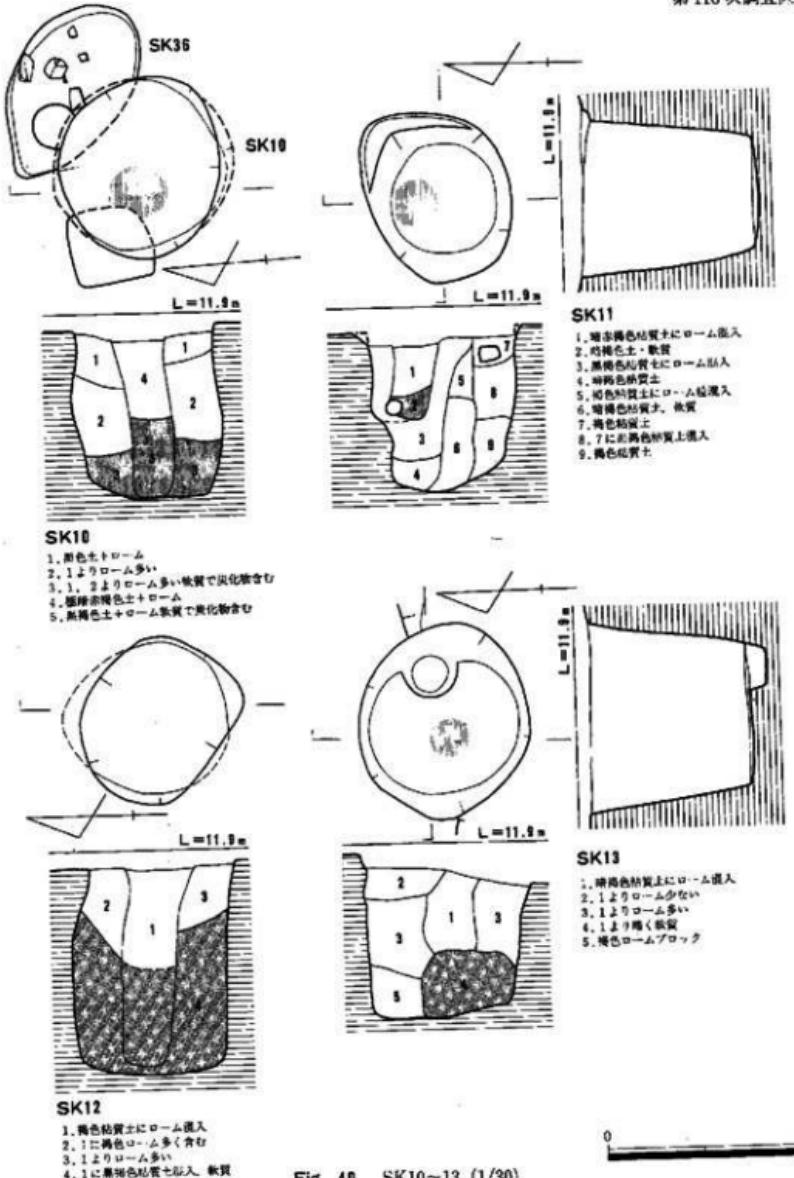
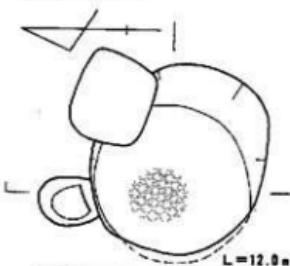
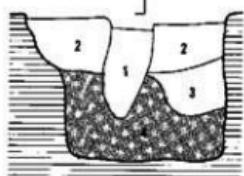


Fig. 40 SK10~13 (1/30)

第116次調査区

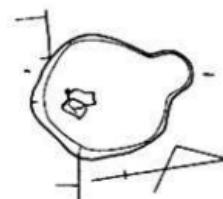


L=12.0 m

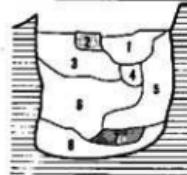


SK14

1. 暗褐色粘質土
2. 暗色粘土+ローム
3. 暗色粘土
4. 黄褐色角質土、板質

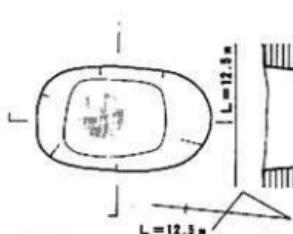


L=12.5 m

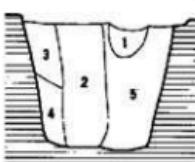


SK15

1. 暗褐色粘土
2. 1に於て含む
3. 暗色粘土にローム含む
4. 暗褐色粘土
5. ロームに暗色粘土含む
6. ローム+暗色粘土
7. 暗褐色土、板質
8. 黄褐色砂質ローム

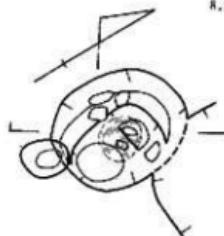


L=12.5 m

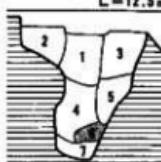


SK16

1. □△△泥色土
2. 淡褐色土にローム含む
3. 黄褐色土+ローム
4. 3より明るい
5. 上よりロームかなり多い



L=12.5 m



SK17

1. 暗褐色粘質土
2. 黄褐色土
3. 暗褐色粘質土にローム含む
4. 1に暗色粘土層入
5. ロームに暗色粘土層入
6. 黄褐色土、板質
7. 黄褐色砂質ローム



Fig. 41 SK14~17 (1/30)

層は当初以降の穴であることと土師器がそのどれかに伴うことはまちがいあるまい。

出土遺物 (Fig.42, PL.25) 繩文土器33点が出土した。ほとんどが細片で、無文である。40は両面ともナデ調整を施しており、外面にひっかきずのような短いななめの沈線を2本施している。にぶい黄橙色を呈し、胎土には4mm以下の石英粒や金雲母粒などを含んでいる。

SK12 (Fig.40, PL.17)

第2列3番目の土坑。平面形は隅丸長方形に近く、長さ86cm、幅70cmを測る。北壁と南西壁がわずかにオーバーハングする。断面形は矩形に近く、深さ103cmを測る。覆土は現場での縦分化が不足していると考えられ、大きく2層しか分離できていないが、覆土の大半を占める下層が軟質土層である。柱状痕跡は径27~34cmで、中央やや南東寄りにある。柱の土層はほぼ同質、同色であるが、下半分が軟質である。柱はわずかながら床面に達していない。

出土遺物 出土遺物はなく、調査後紛失したものと思われる。

SK13 (Fig.40, PL.18)

第3列3番目の土坑である。平面形は楕円形で、長径102cm、短径88cmを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ92cmを測る。覆土は軟質の4層を除きしまった土層である。床面北側には径30cm、深さ8cmのピットがある。柱状痕跡は中央西側にあり、径26cmを測る。柱の土層である1層はしまった土層で床面まで達していないが、4層の一部が柱の土層である可能性もある。1層が別のピットの可能性もあり、床面のピットに柱がくるかもしれない。

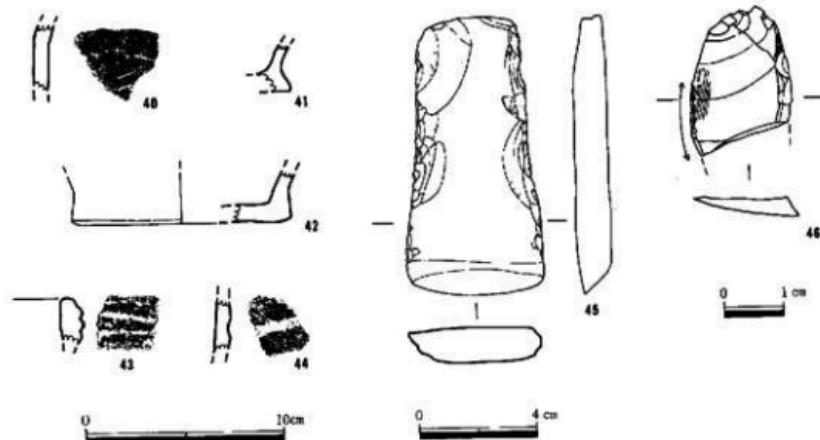


Fig. 42 SK11・13・16・17出土遺物 (1/3・1/2・1/1)

第116次調査区

出土遺物 (Fig.42, PL.25) 繩文土器13点。安山岩系フレイク1点の他、不明確だが、土師器の可能性のある土器片2点が出土している。混ざり込みか。41は繩文土器の底部片で、両面ともナデ調整を施し、橙色を呈する。胎土は5mm以下の石英粒や黒雲母粒などを含んでいる。

SK14 (Fig.41)

第4列3番目の土坑である。北東側をピットに切られる。北西側にもピット状の穴があり、上面観察では切りあいがわからず、土層観察ではピットと土坑の土層が同一で、判然としなかった。土坑の平面形はほぼ円形で、径97cmを測る。西壁はわずかであるが、床面にむかって奥へ入り、東壁は逆に中央にむかって直線的である。床面は西端が東端に較べ38cmも高く、深さ93cmを測る。覆土は下半にある4層が軟質の土層である。径23cmの柱痕跡は西壁近くで検出されたが、土層観察では軟質層である4層を切り込んでいるとともに、床面まで達していない、この七坑に本來的に伴うか疑問である。

出土遺物 無文の繩文土器2点とサヌカイト系のチップ2点が出土したのみである。

SK15 (Fig.41)

第3列4番目の土器である。北側にピット状の凸部があるが、平面観察では切りあいが分らず、土層観察でも切りあいは不明で、床面レベルが同じことからも同一の穴と考えた方が自然である。全体の平面形はほぼ円形に近く、長径68cm、短径60cmを測る。断面形は底部がやや丸みを帯びた箱形に近く、深さ78cmを測る。土層は、しまった層が多く、床面から10cmほど上にある7層が軟質土層である。柱状痕跡は平面観察では中央北寄りで検出したが、その土層(1層)は深さ15cmほどしかなかった。ただ3～7層の状況を見ると、1層、4層、5層と6層の一部、7層が柱状痕跡を構成していると考えたほうがよさそうである。現場での土層の分離が不十分であったのであろう。

出土遺物 黒曜石チップが1点出土しただけである。土器は紛失したものか。

SK16 (Fig.41, PL.18)

第3列5番目の土坑である。平面形は隅丸長方形を呈し、長さ88cm、幅53cmを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ62cmを測る。覆土はすべてしまった土層である。柱状痕跡は中央南側にあり、径約24cmを測る。わずかに上に行くにつれ南側に傾いている。軟質土ではなく、炭化物も認められなかつた。

出土遺物 (Fig.42, PL.25) 繩文土器片26点、チップ2点が出土した。土器はほとんど無文である。42は底部片で、底径11.2cmを測る。わずかに底部中央近くが上げ底になる。全面ナデ調整で、外側は黒色を呈する。胎土には石英粒や金雲母粒を多く含んでいる。

SK17 (Fig.41, PL.18)

第4列5番目の位置にある(4番目の位置には土坑がないため、実際は4番目である。ただし4番目の位置に時期不明のピットがある)。平面形は梢円形を呈し、長径67cm、短径58cmを測

る。南側をピットが切っている。東半は2段掘りで、段から下は径30cmほどしかなく、狭い。また一部は3段掘りになっている。深さは64cmを測る。柱状痕跡はほぼ中央にあり、径20cmを測る。床面までには達していない。ただし7層はローム層であることから、掘りすぎの可能性もある。柱の最下部に厚さ10cmほどの軟質土層がある。

出土遺物 (Fig.42, PL.25-27) 繩文土器片8点と磨製石斧1点、使用痕ある剝片1点、チップ5点が出土した。土器は図示しているもの以外は無文である。43は口縁部片で、口縁直下に横方向の太い沈線2条を施している。口縁部は肥厚している。両面ナデ調整と思われる。赤色を呈し、胎土には3mm以下の石英粒などを多く含んでいる。44も横方向の太い沈線を1条施している。両面ナデ調整で、橙色を呈する。胎土には滑石を含み、砂粒大の粒子を含んでいる。46は使用痕ある剝片である。幅1.7cmの黒曜石の剥片の左側辺に細かな使用痕が認められる。45は磨製石斧で、長さ9.6cm、最大幅4.7cm、厚さ1.2cm、重さ86.5gを測る。両側辺附近に剥離が残存するものの、全体的に丁寧な研磨を施している。堆積岩系の石材を用いる。

SK18 (Fig.43, PL.19)

第5列5番目の土坑である。平面形は不整な円形に近く、長径78cm、短径69cmを測る。ほぼ全周オーバーハングして袋状を呈し、さらに西半には途中で段がついている。深さは56cmを測る。覆土は、しまった土である。柱状痕跡は東側に偏在し、径18cmを測る。柱はほぼ直立する。軟質土層はなく、炭化物も含まない。

出土遺物 (Fig.44, PL.25) 繩文土器片6点、チップ1点が出土した。47は底部片で、調整は不明。浅黄褐色を呈し、胎土は2mm以下の石英粒、黒曜石粒、金雲母粒などを含んでいる。

SK19 (Fig.43, PL.19)

第5列4番目の土坑である。平面形は梢円形に近く、長径77cm、短径66cmを測る。南北方向の断面形は梢形に近く、深さ72cmを測る。床面東壁近くに径20cm、深さ10cmを測る。覆土は下半が軟質土層である。また1層は後述のごとく、別のピットの可能性が高い。柱状痕跡は確認できなかった。ただし、床面で確認したピットが柱に伴う可能性もあるが、端によりすぎている上に、柱部分が10cmも床に入り込んでいる例が稀なことから、断定はできない。

出土遺物 (Fig.44, PL.25) 繩文土器片8点、上師器片1点、須恵器環蓋片1点、鉄滓1点が出土した。土師器と須恵器と鉄滓は混ざり込みと考えられ、1層が土坑とは別のピットで、これに伴うものと考えられる。48は繩文土器の底部片で、両面ともナデ調整を施している。淡橙色を呈し、胎土は2mm以下の石英粒、黒曜石粒、金雲母粒などを含んでいる。

SK20 (Fig.43, PL.19)

4列4番目と5列4番目の間に位置する。SK21に切られている。平面形は円形に近く、長径100cm、短径90cmを測る。床面は凹凸が激しく、東端は2段掘りで、他に2つの大きな浅い掘り込みがある。深さは19cmと浅い。柱状痕跡は確認できなかった。SK21との切りあい確認のため

第116次調査区

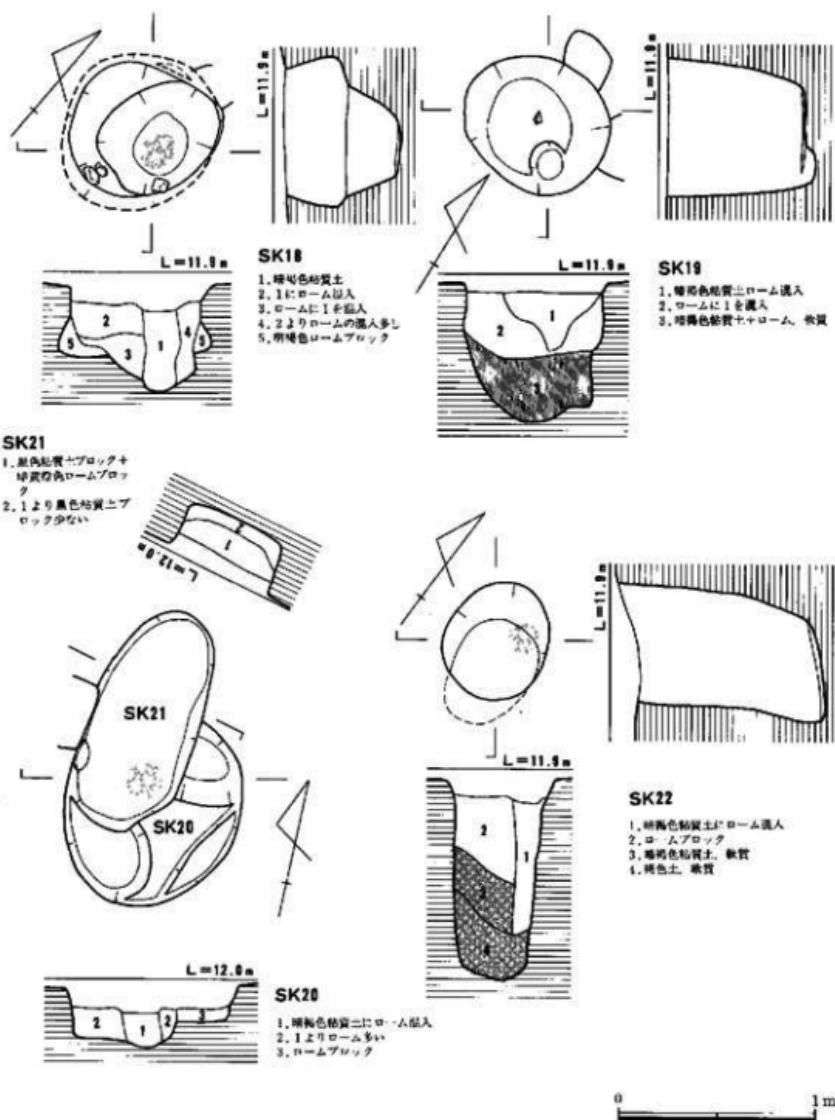


Fig. 43 SK18~22 (1/30)

10cmほど掘り下げたため、確認した土層は1つの層だけで、軟質土層はなかった。

出土遺物 (Fig.44, PL.25-27) 繩文土器片10点、黒曜石チップ1点、加工痕ある剝片1点が出土した。土器はすべて無文である。49は底径15.4cmを測る底部片で、かなりの上げ底である。調整は両面ともナデ。橙色を呈し、胎土は4mm以下の石英粒、赤色鉱物粒などを含んでいる。51は黒曜石の剝片で、図の右側辺に加工痕が認められる。やや大きめの剥離を施した後、細かな剥離で調整している。図の左側辺にも細かな剥離が認められるが、使用痕か。

SK21 (Fig.43, PL.19)

SK20を切る土坑である。平面形は長楕円形を呈し、長さ117cm、幅56cmを測る。断面形は箱形に近く、深さ28cmを測る。覆土はしまった土層で、軟質土層はない。柱状痕跡は南東側に偏在し、径19cmを測る。柱は床面に少しえぐり込んでいる。

出土遺物 繩文土器片3点が出土しただけである。いずれも細片で、無文である。

SK22 (Fig.43, PL.19)

第5列3番目と4番目の間や北側に位置する。平面形は円形に近く、長径61cm、短径52cmを測る。断面形は歪んだ箱形を呈す。深さ93cmを測り、平面の規模に較べてかなり深い。南壁は大きくオーバーハングしている。覆土の半分以上は軟質土層である。柱状痕跡は東側に偏在し、径13cmを測る。ただし、この柱は軟質土層を切込んでおり、他の土坑の柱状痕跡とは状況が異なっており、別の造構ないしは動物や植物による擾乱の可能性が高い。

出土遺物 (Fig.44, PL.25) 繩文土器3点が出土し、うち1点が条痕文土器である。50は底部片で、底径8.9cmを測る。立ち上がりは丸みを帯びている。両面ともナデ調整で、胎土は3mm以下の石英粒、赤色鉱物粒、黒雲母粒を含んでいる。

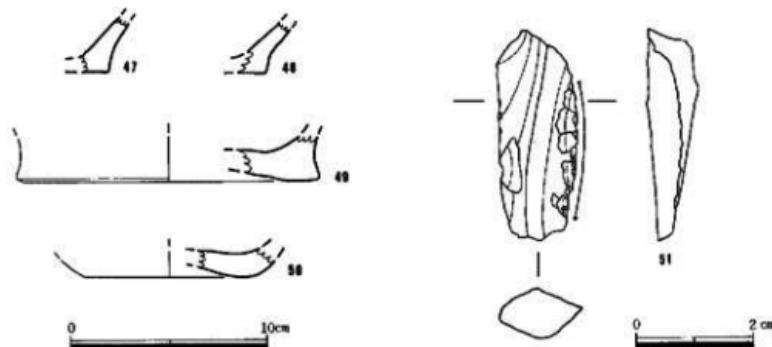


Fig. 44 SK18~20・22出土遺物 (1/3・1/1)

第116次調査区

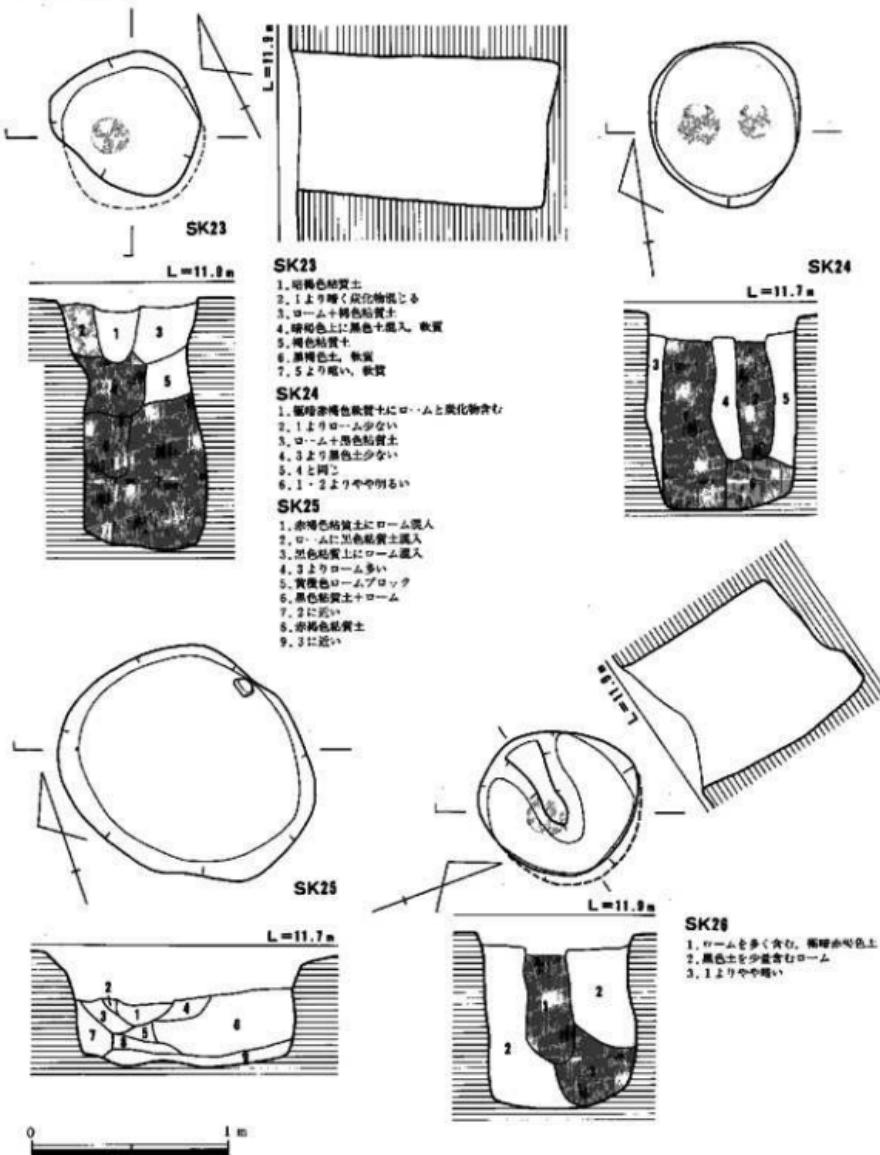


Fig. 45 SK23~26 (1/30)

SK23 (Fig.45)

第5列3番目の土坑。平面形は歪んだ円形を呈し、長径76cm、短径68cmを測る。壁は出入りしながら立ち上がり、南側はオーバーハングしている。深さは136cmと深い。覆土はブロック状に分かれ、4、6、7層が軟質土層である。また2層にはわずかに炭化物を含んでいる。柱状痕跡は中央や西側にあり、径22cmを測るが、土坑の上部でとまっている。軟質土層である4、6層がこれに続くものかもしれない。

出土遺物 (Fig.46, PL.25) 繩文土器14点。黒曜石チップ1点が出上した。このうち6点が条痕文土器で、1点が前述の白色の小土製品片である。52と53は条痕文土器で、ともに外面のみ条痕を施し、内面はナデ調整を施している。52はにぶい橙色を呈し、胎土は2mm以下の石英粒、赤色鉱物粒、金雲母粒を含む。53は底部近くの破片で、にぶい橙色を呈し、胎土は2mm以下の石英粒、黒雲母粒などを含んでいる。

SK24 (Fig.45, PL.20)

第5列2番目の土坑である。SC01のカマド撤去後に検出した。平面形は略円形を呈し、径85cmを測る。壁はほぼ垂直で、断面形は箱形を呈する。住居址床面からの深さは110cmを測る。覆土は概方向に分離でき、別のピットがあるのか、柱が2本なのかは平面や土層の観察ではわか

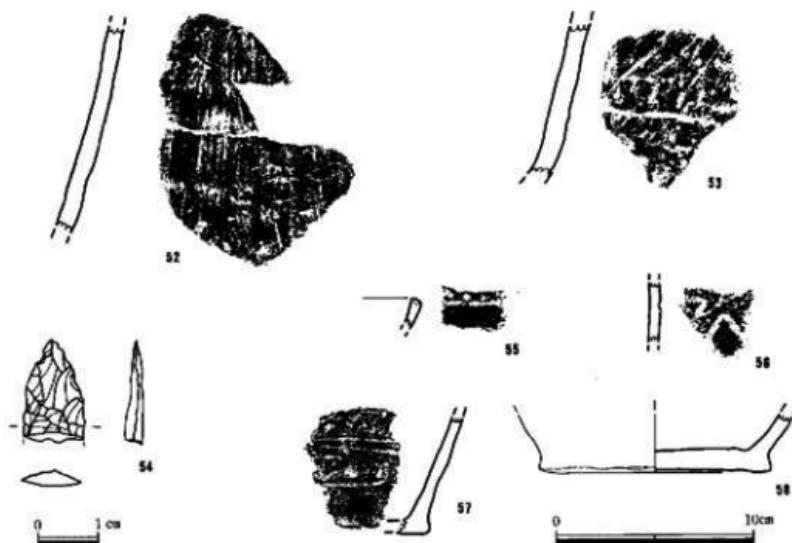


Fig. 46 SK23~25出土遺物 (1/3・1/1)

第116次調査区

らなかった。1層にめり込む4層の状況では別のピットと思われる。6層は軟質の土層である。大きい柱は径32cm、小さい柱は径18cmを測る。共に軟質土層で炭化物を含んでいる。

出土遺物 (Fig.46, PL.27) 繩文土器の細片14点、石鎌1点、黒曜石1点が出土した。54は安山岩系の石材を使った石鎌で、基部を欠失する。現存長1.8cm、幅1cm、厚さ0.3cm、重さは18未満である。調整剝離は粗い。

SK25 (Fig.45, PL.20)

第5列1番目の土坑である。SC01掘り下げ後、床面上で検出した。平面形は梢円形を呈し、長径128cm、短径101cmを測る。壁は途中で折れ曲がり、住居址床面からの深さ47cmを測る。床面はやや凹凸がある。覆土はいずれもしまった層で、軟質土層や炭化物を含んだ層はない。柱状痕跡は検出できなかった。

出土遺物 (Fig.46, PL.25・26) 繩文土器19点。黒曜石チップ1点が出土した。55は口縁部片で、口唇部に竹管状の刺突が3ヶ所施されている。外面には横方向の条痕が、内面にはナデ調整が施されている。にぶい橙色を呈している。胎土は1mm以下の石英粒、白色粒、金雲母を含んでいる。同一個体の可能性が高い土器片がSK28で出土している。56は胴部片で外面にV字形の沈線を施している。両面ともナデ調整で、橙色を呈する。57は底部片で、内面には横方向の条痕を施している。外面は不明。橙色を呈し、胎土は3mm以下の石英粒などを含んでいる。58はほぼ全周残存している底部片で、底径11.8cmを測る。調整はほぼ全面粗いナデで、凹凸が激しい。全面橙色を呈し、胎土には5mm以下の石英粒、黑色粒などを含んでいる。

SK26 (Fig.45, PL.20)

第6列3番目の土坑である。平面形は円形に近く、長径82cm、短径74cmを測る。断面形は梢形に近いが、東壁がオーバーハングしている。深さ96cmを測る。床面には西壁から中央に向かって幅15cm、高さ10cmの丘状の高まりがある。覆土は細かに把握しきれていないが、東半下部にやや軟質な土層がある。柱状痕跡は中央南よりにあり、径24cmを測る。やや軟質な土層で、覆土の軟質層に近い。

出土遺物 土器片6点が出土した。1点は土師器の可能性もあるが、細片のため不明である。

SK27 (Fig.47)

第6列2番目の土坑で、平面形は卵形に近く、長径113cm、短径100cmを測る。断面形は梢形に近く、深さ78cmを測る。床面西側には深さ5~10cmの径の大きなピットがあった。覆土はしまった土と軟質土層が約半々であるが、縦方向に分離するのは異質である。柱状痕跡は北側に偏在し、径23cmを測る。斜めに立ち上がり、床面のピットに入り込むことも考えられる。柱はすべて軟質土層である。

出土遺物 (Fig.49, PL.27) 繩文土器の細片10点と磨製石斧1点が出土した。土器は1点が条痕文土器で他は無文である。70は磨製石斧で、現存長11.5cm、幅6.2cm、厚さ3.2cmを測る。

石材は堆積岩系の石で、堆積の年輪状の線と平行に石斧を製作しているため、石斧の両面にその筋が表れている。刃部を除いてほぼ全面に敲打痕が残っている。現存の重さ369gを測る。

SK28 (Fig.47, PL.21)

第6列1番目の土坑である。SC01床面で検出した。南側の上部がSC01の柱に切られている。平面形はほぼ凸形を呈し、径95cmを測る。断面形は箱形に近く、深さ123cmと深い。覆土は下層が軟質土層で、レンズ状に中央に落込む。柱状痕跡は中央南よりにあり、径38~48cmと大きい、大きく2層に分れるが、すべて軟質土層である。湧水を伴う。

出土遺物 (Fig.48~49, PL.26~27) 繩文上器40点。石鎌1点、黒曜石のチップ2点が出土した。土器の内、条痕文土器が数点、滑石を混入した無文土器が1点、凹線文を施した細片が2点、残存長2cm程度の前述の粘土塊(土製品)の破片が1点ある。

59は外面に条痕を施した口縁部片で、口縁端が丸く肥厚している。その肥厚部の直下に焼成前に穿たれた径5mmの孔がある。また口唇部には径約3mmの竹管文が3ヶ所施されているが、文様の間の距離は等しくない。内面口縁端部近くには赤色顔料らしきものも付着しているが、確認できていない。色調は橙色を呈し、胎土には細かい石英粒などを多く含んでいる。60は浅鉢で、口径28.8cmを測る。ごく小さい山形の突起が口縁部に付くが、何ヶ所かはわからない。突起中央やや下には径6mmの焼成前の穿孔が施され、内面にその孔をかこむように山形突起から伸びる凸部が孔の左右に造られている。調整は両面とも条痕を施した後ナデで、外面は磨滅しているものの内面は磨研に近いナデである。外面は浅黄橙色、内面は黒褐色を呈する。胎土には石英や長石などをやや多く含む。71は安山岩系の石鎌で、長さ2.5cm、最大幅1.8cm、重さ1g未満を測る。中央部分は磨滅のためか剥離が明瞭でない。

SK29 (Fig.47, PL.21)

第7列4番目の土坑である。この列は6列までと位置が異なり、6列までは5基並んでいた距離の中に大型の土坑4基が並んでいる。SK29はその4番目に位置する。平面形は橢円形を呈し、北壁の一部が2段になる。長径124cm、短径96cmを測る。深さは101cmを測る。断面形は箱形に近いが、南壁の上部と北西壁の床付近が外に飛びだしている。覆土の上層はブロック状を呈している。柱状痕跡は確認できなかったが、土層断面中央の2層と4層が軟質土層で、炭化物を含んでいることから柱の残存層の可能性もある。床面には石皿の大破片や石が多数出土したが、規則的な配置は認められなかった。

出土遺物 (Fig.48~50, PL.26~27) 繩文土器約45点、石鎌1点、不明石器1点、石皿類5点、安山岩系剥片16点、黒曜石剥片13点が出土した。土器は数点の条痕文以外は、すべて無文。

61は両面ナデ調整を施した口縁部片で、小片のため傾きは不明である。外面はかなり粗いヨコナデである。灰黄褐色を呈する。62は両面条痕を施した口縁部片で、口唇部はきれいに面取りし、口縁部は直線的に外傾している。63は底径11.4cmを測る底部片で、両面ともナデ調整を

第116次調査区

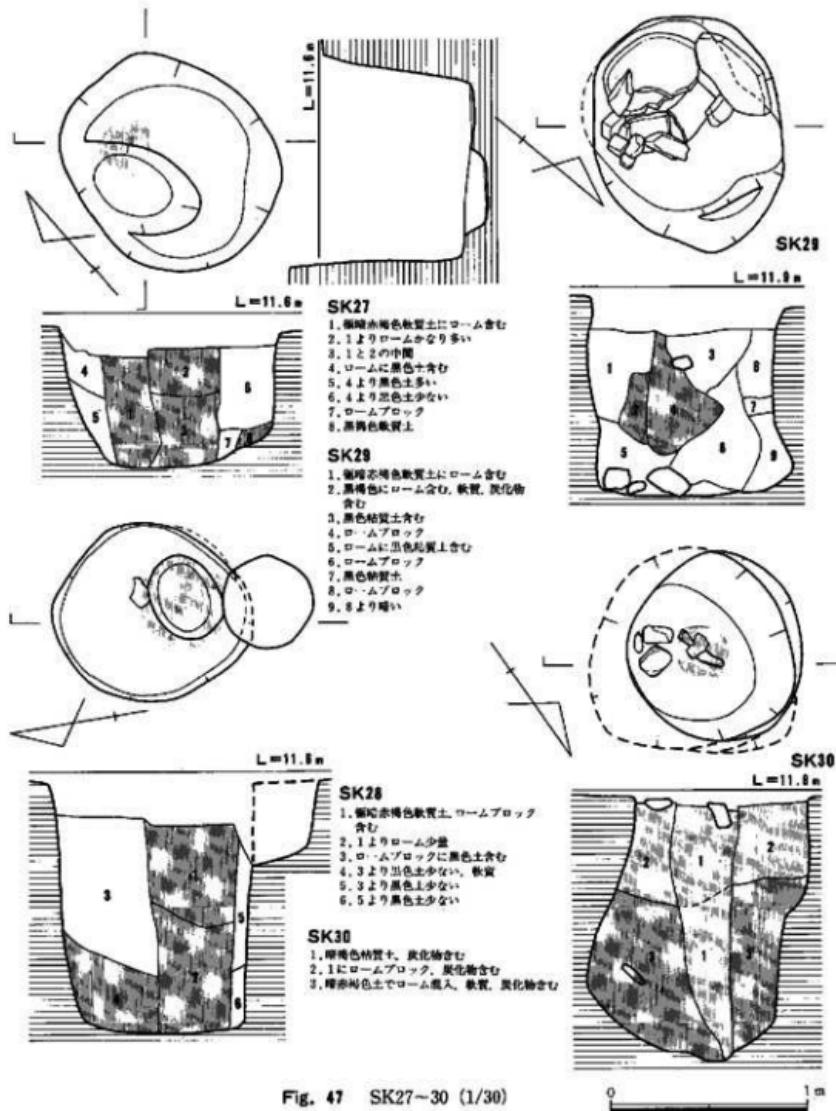


Fig. 47 SK27~30 (1/30)

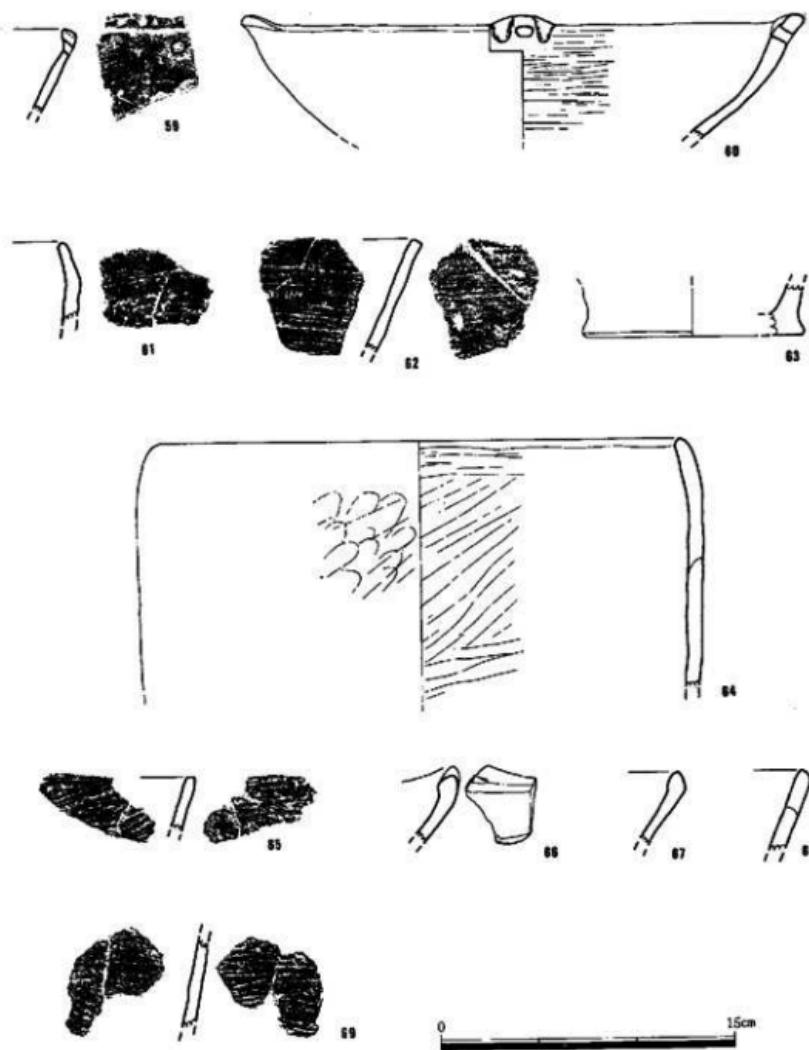


Fig. 48 SK28~30出土土器 (1/3)

施している。いずれも3mm以下の石英粒などを多く含み、62は白色粒も含んでいる。

73は安山岩系の石材を用いた有茎の石錐で、長さ4.2cm、幅1.8cm、厚さ1.1cm、重さ6gを測る。表面には自然面が残る。調整剥離もあまり細かくない。74は十字形を呈する石器で、扁平な堆積岩を正方形に整形し、各辺に抉りを入れたものである。図の左下の抉りには紐づれ状の痕跡が認められる。石錐であろうか。75~79は礫を用いた石器である。75は片面をかなり研磨している石器で、図の中央に縱に走る丘状の盛り上がりの両側には叩かれた痕跡も残っている。石皿か。花崗岩系の石材を使用。現存長19.3cmを測る。76は細長い角礫で、小口を除く4面を研磨しており、特に図の表面の研磨が著しい。小型の石皿か。現存長29.6cm、幅11cmを測る。77~79は大型の石皿片で、いずれも花崗岩を使用している。77と78はかなり研磨されているが、79は磨滅が進んで、表面が落剥しつつある。77のみ両面とも使用している。現存長は77が26.5cm、78が50cm、79が36cmを測る。

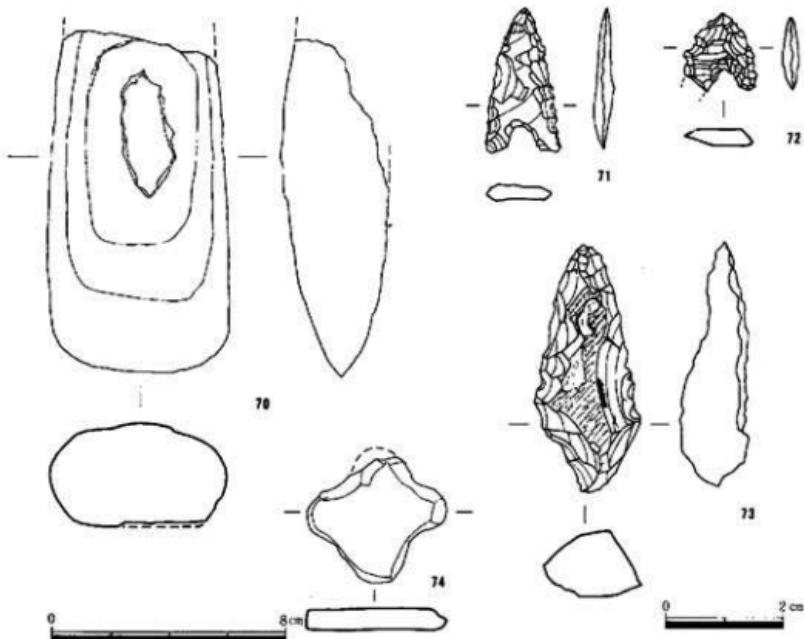


Fig. 49 SK27~30出土石器 (1/2・1/1)

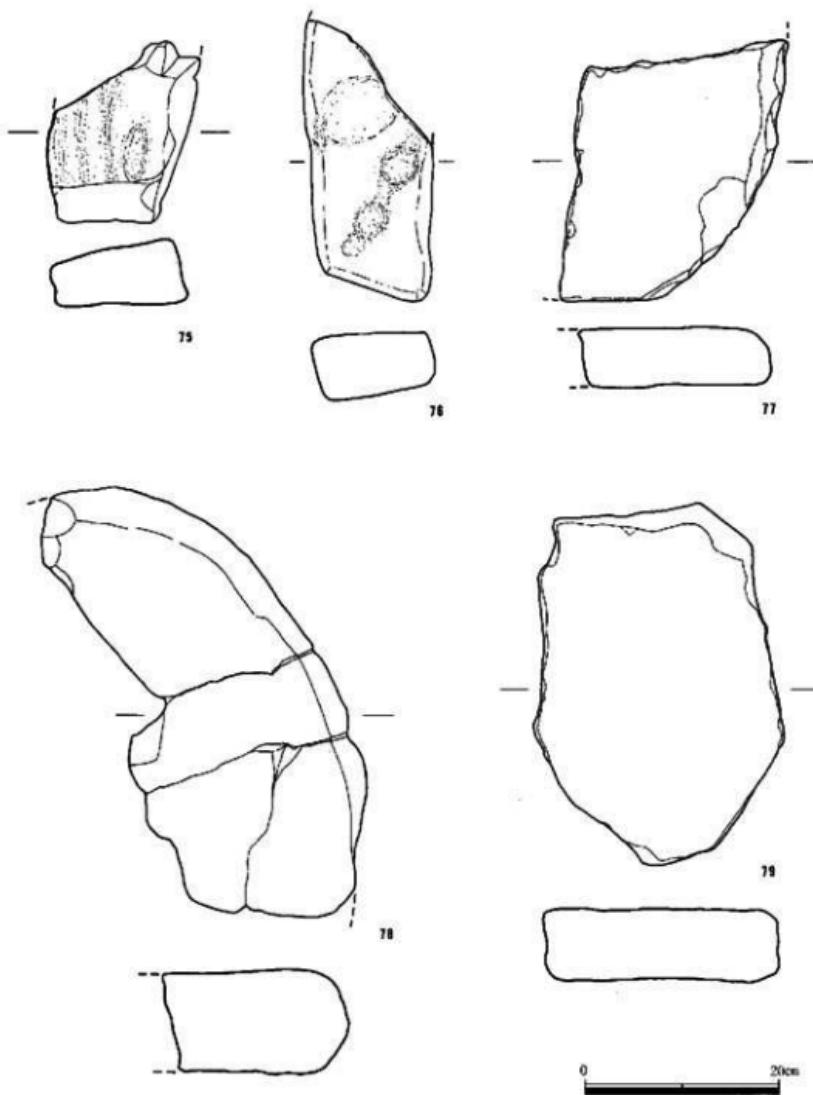


Fig. 50 SK29出土石器 (1/6)

SK30 (Fig.47, PL.22)

第7列3番目の土坑。平面形は円形に近く、長径98cm、短径90cmを測る。西壁を除く他の壁が最大30cmオーバーハンプしている。また北壁の一部は2段になっており、床面も平坦ではなく、他の土坑とはかなり異なっている。深さ136cmを測る。覆土は全面炭化物を含み、下半が軟質土層である。柱状痕跡はほぼ中央にある。下に行くにつれて細くなり、上端で径33cmを測り、下端では5cmほどしかない。土質は軟質で炭化物を含むが、さほど軟質ではない。覆土中に長さ10~30cmほどの石が10個近くあった。

出土遺物 (Fig.48~49, PL.26~27) 繩文土器約60点、石鐵1点、磨石片1点、黒曜石剝片7点、安山岩系剝片12点が出土した。繩文土器の内訳は条痕文約10点、四線文1点、滑石混入無文土器3点、赤彩土器と思われるもの1点、その他は無文である。

64は口徑26.7cmを測る。口縁端はやや内済し、口唇部は丸く造る。外面は指押さえのあとが残り、内面には指によるナデと思われる擦痕が認められる。色調は暗褐色を呈し、胎土には石英や長石などを多数と金雲母を含んでいる。65と69は条痕文土器である。ともに両面にやや粗い条痕を施している。同一個体と考えられる。胎土には細かな石英粒などや赤色の鉱物を含んでいる。66と67も同一個体で、山形口縁を成している。口縁端はかまぼこ状に肥厚する。胎土には砂粒状の細かな鉱物をかなり多く含んでいる。また金雲母も含んでいる。胎土が砂質なため器面の磨滅がひどく調整は不明であるが、両面ともナデと思われる。68は無文の口縁部片で、両面ともナデ調整を施している。胎土には石英粒、金雲母などを含んでいる。72は黒曜石製の石鐵で、脚の片方を欠く。長さ1.4cm、幅1.2cmを測る。重さは1g未満である。

SK31 (Fig.51, PL.22)

第7列2番目の土坑。平面形は椭円形に近く、長径130cm、短径112cmを測る。北西側の壁は斜めに落込み、途中凹凸がある。従って床面は長径81cmと上端部に較べて狭い。深さは113cmを測る。覆土は上層には炭化物を含み、下層は軟質層である。柱状痕跡は中央近くにあり、径約27cmを測る。ほぼまっすぐに立ち上がるが、途中の凹凸が激しい。覆土は大きく2層に分れ、上層は炭化物を含み、下層は軟質土層である。

出土遺物 (Fig.53, PL.26) 繩文土器約60点、須恵器の环の体部片4点、黒曜石剝片3点、安山岩系剝片2点、凝灰岩系剝片1点が出土した。繩文土器はほとんど細片で、条痕文が数点、赤彩土器らしきものが1点ある他はすべて無文である。須恵器は混じり込みであろう。

80は口縁部片で、厚手の無文の土器片である。口唇部は全体的に丸味を帯びるが、頂部は面取りしている。両面ともナデ調整を施し、よい赤褐色を呈している。81は外反する口縁部片で、横方向の目の細かい条痕を施している。小片のため明確ではないが、山形口縁の可能性がある。また内面には赤彩らしきものが認められるが、剥離がひどく明確ではない。82は胴部片で、外面の調整は不明だが、内面はかなり粗いケズリを施している。指によるナデ状のケズリ

と思われる。橙色を呈し、胎土に大粒の石英や赤色鉱物などを含んでいる。

SK32 (Fig.51, PL.23)

第7列1番目の土坑である。平面形は円形に近く、長径97cm、短径86cmを測る。北壁と南壁の一部がオーバーハングしている。深さ101cmを測る。覆土は下層が軟質土層で、炭化物を含んでいる。4層は壁の崩落層か。柱状痕跡は東よりにあり、径33cmを測る。下に行く程先細りしており、全体がゆるやかにカーブしている。大きく2層に分れるが、どちらも軟質土層で、炭化物を多く含んでいる。

出土遺物 繩文土器約20点、安山岩剝片1点、石皿ないしは磨石の破片2点が出土した。土器のうち条痕文土器は数点で、条痕の目の粗いものと細かいものがある。

SK33 (Fig.51)

調査区南西角で、全体の1/4を検出した。検出部の長さ82cm、深さ114cmを測る。東壁はわずかにオーバーハングし、凹凸がある。覆土は下半部がすべて軟質で炭化物を含み、特に最下層は軟質度が強く、炭化物も多く含んでいる。柱状痕跡は不明だが、1、2、4層がその可能性もある。

出土遺物 (Fig.53, PL.26) 繩文土器35点、磨石片1点、黒曜石剝片2点、安山岩剝片4点が出土した。条痕文土器は数点、滑石混入無文土器が1点ある。83は外面に条痕を施し、口縁頂部の両面を凸帯状にし、そこに刻み目をついている。夜白式で、晩期の土器はこれ1点だけである。混ざり込みか。黒色から暗赤褐色を呈し、胎土には細かい石英粒などを多く含んでいる。84は厚手の底部片で、底面はほぼ水平で、胸部への立ち上がりは垂直である。両面ともナデ調整を施している。橙色を呈し、胎土には大小の石英等の鉱物を含み、かなり粗い。

SK34 (Fig.51, PL.23)

第7列3番目の土坑のすぐ南側に位置しており、南西角をピットに切られている。平面形は長楕円形を呈し、推定全長125cm、幅82cm、深さ23cmを測る。断面形は逆台形を呈し、覆土は褐色粘質土にロームブロックを含んでいる。古墳時代の遺構である。

出土遺物 古墳時代と思われる土師器の細片4点と黒曜石の剝片1点、刀子片1点が出土した。85は刀子片と思われ、現存長2.3cmを測る。

SK35 (Fig.52, PL.23)

第7列4番目の土坑のすぐ南側に位置している。平面形は円形を呈し、径54cmを測る。断面形は楕円形に近く、東壁がオーバーハングしている。深さ72cmを測る。覆土はしまっている。他の土坑と同じく、柱状痕跡があり、径20cmを測る。柱はわずかに斜めに立ち上がり、床面ではピット状にめり込んでいる。柱の土層もしまっている。規模や土層から見て、ピットとするべきであろうが、規模の割に多くの遺物が出土したので、土坑番号を附した。

出土遺物 (Fig.53, PL.26・27) 繩文土器35点、前述の土製品1点、石錐1点が出土し、ほ

第116大調查区

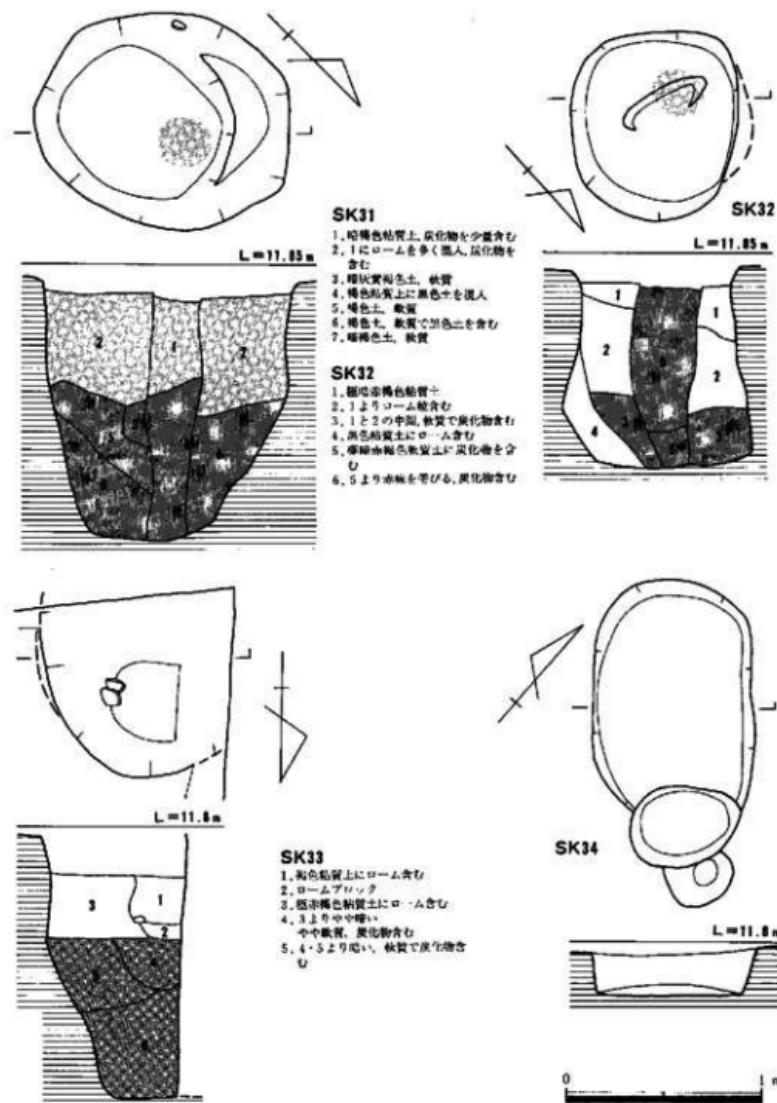


Fig. 51 SK31~34 (1/30)

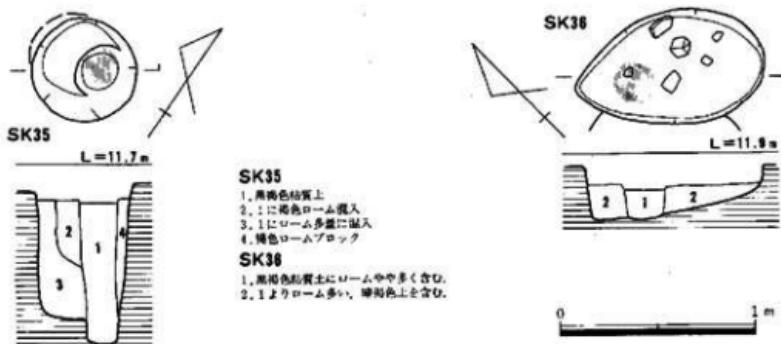


Fig. 52 SK35・36 (1/30)

とんど無文である。87は口縁部片で、口径35.2cmを測る。口縁端部の内面は飛びだし、外面は丸く収めている。外面には日の細かい条痕を横方向に施し、内面はナデ調整を施す。橙色を呈し、胎土には細かい鉱物を多く含んでいる。88は底部片で、立ち上がりはかなり開いている。両面ともナデ調整を施している。橙色を呈し、3mm以上の大きな石英粒などを含んでいる。89は前述の土製品で、長さ3.8cm、幅3.3cm、厚さ2.7cmを測る。粘土塊をそのまま焼いたような土製品である。全体橙色を呈し、一部黒斑がある。86は安山岩系の石鐵で、先端部を欠失している。長さ3.7cm、幅1.6cm、厚さ0.7cm、重さ4.0gを測る。

SK36 (Fig.52)

SK10を切る土坑である。平面形は橢円形に近く、長径98cm、短径60cmを測る。深さは27cmと浅いためか、覆土は1層で、しまった層である。床面は水平ではなく、北に向かって下降している。土坑内に長さ10~20cmほどの石が5個あった。柱状痕跡は西端近くにあり、径22cmを測る。柱の土もしまっており、炭化物も認められない。

出土遺物 (Fig.53, PL.27) 上器の細片7点と砥石片1点が出土した。土器はすべて無文である。細片のため明瞭ではないが、いずれも網文土器と考えられる。90は砥石の破片で、現存長5.9cmを測る。両面ともかなり使い込んでいる。

その他の遺構 (SX)

SX01 (Fig.54, PL.23)

A調査区からB調査区にかけて溝状の遺構を検出した。東端の一部を擾乱に切られている。全長5.90m、中央部の幅80cmを測る。西端の南壁は外に彫れ、その部分に径58cm、深さ40cmのピットがあった。また東端にも径22cm、深さ14cmのピットがあるが、この遺構に伴うかわからなかった。断面形は皿状を呈し、深さ15cmを測る。

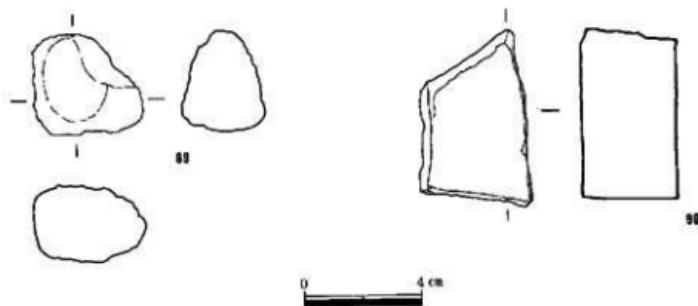
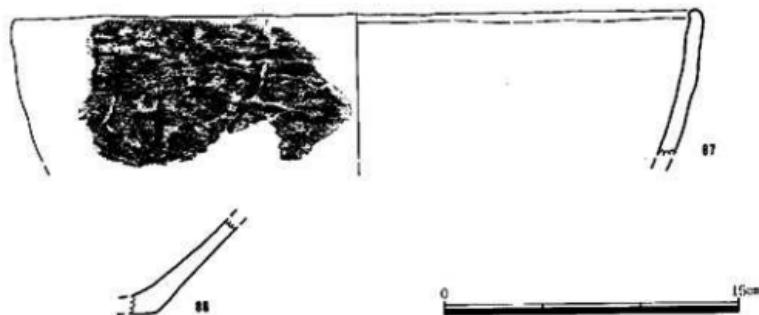
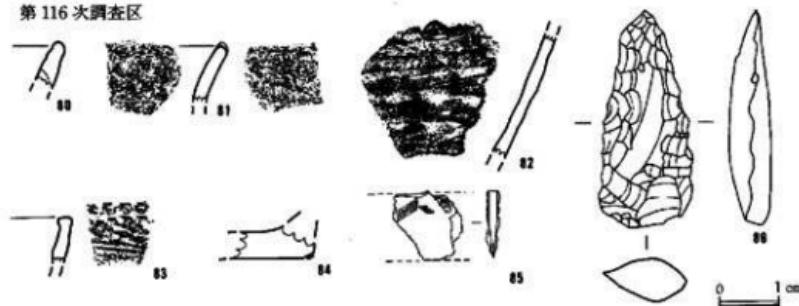


Fig. 53 SK31・35・36出土遺物 (1/3・1/1・1/2)

出土遺物 (Fig. 53, PL. 24) 弥生土器と土師器あわせて25点、須恵器が3点出土した。91は弥生土器の甕の脚部で、推定底径約7cmを測る。磨滅のため調整は不明だが、ほぼ全面ナデのようである。橙色を呈し、胎土には大小の石英粒などを多く含んでいる。92は須恵器の環で、復元口徑11.8cmを測る。口唇部はかすかに面取りを行っている。受け部にはケズリによる沈線

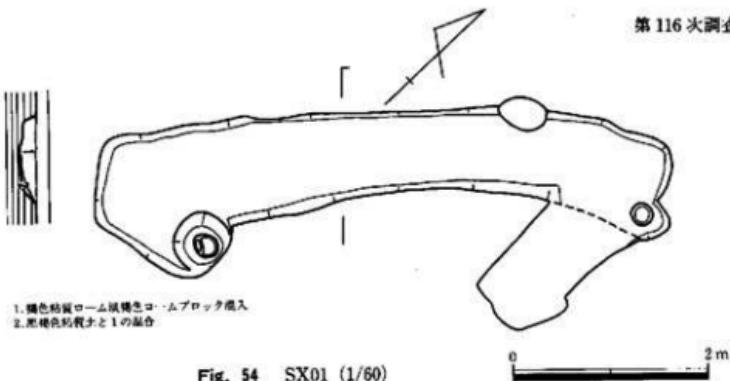


Fig. 54 SX01 (1/60)

が施されている。93も須恵器で、小壺の口縁部片と思われる。両面に自然釉が付着している。頸部外面には断面三角形の突帯が巡り、その下には柳状施文具による波状文が施されているが、上端部は調整の際に消されている。

ピット出土遺物 (Fig. 55, PL. 24・27)

94は須恵器の環で復元口径12.7cm、推定器高4.9cmを測る。胎土には大小の石英粒などを多く含み、やや焼成不良である。95は黒曜石製の石鏃で、剣片を素材にしている。長さ2.1cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm、重さ1g未満を測る。

擾乱出土遺物 (Fig. 55, PL. 24)

96は青磁の小碗で、底径3.1cmを測る。見込み中央がやや盛り上がっている。釉調は灰緑色の透明釉で、疊付のみ露胎である。14世紀代と思われる。

SX01

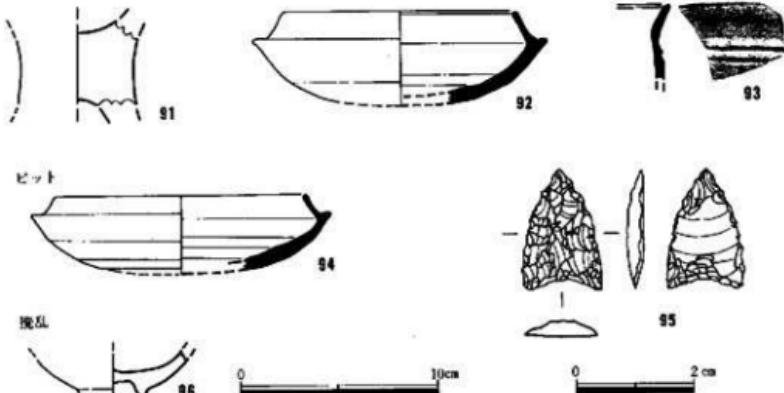


Fig. 55 SX01 - ピット・擾乱出土遺物 (1/3・1/1)

3) 小結

今回検出した遺構の中心は繩文時代の土坑群である。土坑群については第5次調査の報告^(注1)でも詳しく述べられ、結論は貯蔵穴とした。しかし径30cm前後の柱状痕跡を有する点や、環状に配置され、しかも整然と並ぶなど從来の貯蔵穴とはかなり異なる点があるので、改めてその性格や全体の配置について考えてみたい。土坑は35基検出したが、SK02、34の2基は古墳時代に属する。またSK16・21・36は出土遺物が少なく明確な時期は不明だが、長楕円形のプランで浅いことから、他の土坑とは一線を画している。とりあえずSK02と34の2基のみをはずした33基と第5次調査で繩文時代の土坑とされている56基の計89基を対象とする。

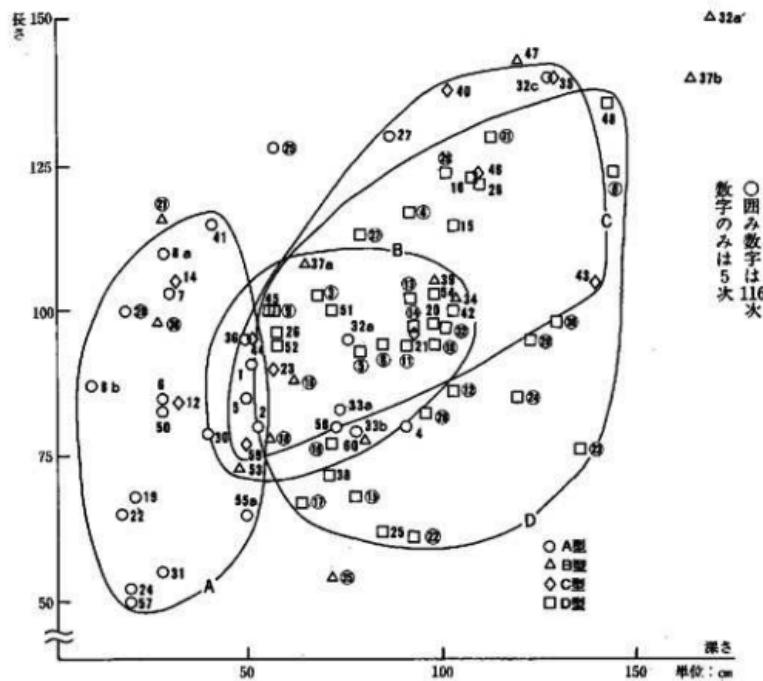
まず土坑の大きさや深さ、柱状痕跡の有無、軟質層や炭化物を含んだ層の有無、覆土の状態などの属性を検討する。各土坑の深さを横軸に、長さを縦軸にとり、柱状痕跡と軟質層の有無をドットのマークで示し (Tab.5)、両者ともにないものをA型、柱のみあるものをB型、軟質層のみあるものをC型、ともにあるものをD型とする。ただし5次では軟質層の記述が明瞭ではなく、116次では軟質層のほとんどが炭化物を含むため、5次の軟質層の項目に関しては、炭化物含有層を軟質層と読みかえた。グラフの全体的な分布を見ると、長さ、深さとも75cm～1m附近に比較的多く、大まかには長くなれば深くなるものが多いという傾向があるものの、かなり散漫に分布している。つまり長さや深さによる一定の法則はないことになる。

A～Dの4分類については、各中心分布域を緑で囲んだ。A型はほとんどが深さ50cm前後以下で、それより深い5基の土坑は切りあいや掘り直しがある。B型は全体的に散在しているが、グラフの左位置にあるSK21・36については前述のとおり他の土坑群とは異質なもので、また5次の14号は報告書に「堆土中に径40cmの柱穴状の落込みがある」とあるが、土層断面にはそれらしい層はない。グラフの下位置にあるSK35も本文中のとおりピットに近いものである。一方右上にある37b号、32a'号は下部に粘質層がなく、記述はないが軟質層の可能性がある。また47号は切りあいがある。いずれにしろグラフの左と下の4基を除くことから、B型はグラフ中央近くに分布している。C型もやや散在している。ただ注意が必要なのはこのタイプはすべて5次の土坑で、前述のとおり軟質層の記述はなく、116次では明確な柱をもつ繩文時代土坑のすべてが軟質層を伴うことから、C型の多くはD型に属するものと推察している。D型は右下の一部以外は、ほぼ右上がりに集中している。以上より、浅いものは柱や軟質層がなく、より大きく深いほど残存している場合が多いといえよう。

土坑の覆土については、最大の特徴は軟質土層と柱状痕跡の存在である。軟質土層は他のしまった上層とは明瞭に分離でき、手で掘れるほど軟らかいものも多い。3000年以上経過しているにもかかわらず軟らかい理由は何か。土壤分析を行っていないが、有機質の腐食土壌の可能性が高いのではないか。覆土のうち局部的に軟質層があることが他に説明できるだろうか。有

機質土壌だとすると、貯蔵穴の可能性は極めて高いといえよう。貯蔵穴での貯蔵の仕方にはいくつかのパターンがあるが、低湿地での保存状況を見ると、下部に堅果類を入れた上に葉や木、さらに灰や炭、粘土などをかぶせている。軟質層は堅果類や葉などの有機質が腐食したものと考えられ、かなり長い時間速度な湿度があったと推察できる。

土坑群が貯蔵穴ならば、A型の軟質層や柱がない理由は何か。5次調査では掘り返したためだとしている。その理由として、柱のある土坑の覆土は人為的に埋めた様相を示し、柱のない土坑は自然堆積で穴のまま遺棄された、としている。確かに柱のある土坑の覆土は部分的に普通の自然堆積とは考えられないところもあるが、全体的な傾向をみれば、U字型の自然な堆積状態を示している。比較的残りの良い岡山県南方遺跡の貯蔵穴の場合、(図5)下から半分強がドングリや葉でその上に木を置いており、貯蔵当初ではドングリや葉、木は穴の上方まであったはずで、その他の貯蔵穴を見ても穴の上半分はU字形の堆積が多く、土で埋めたとは到底考えられない。また貯蔵穴内から堅果類を取りだしても、穴をそのまま遺棄するだろうか。構築当初は150



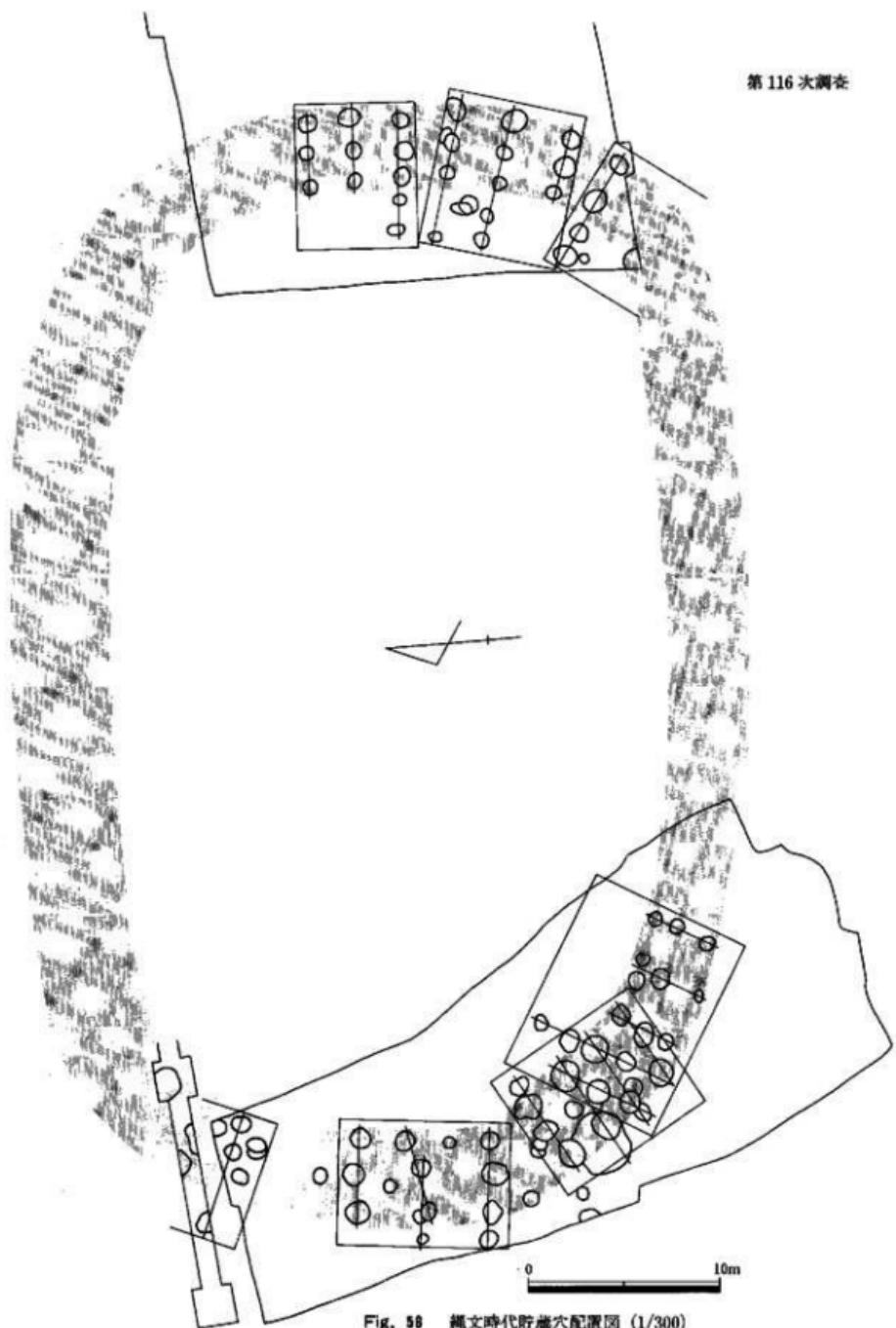
Tab. 5 貯蔵穴の各属性相関グラフ

cmを越えるものが多く、このような深い穴を放置するとは考えられない。ならば軟質層がない理由は、A型は浅いものが多いことを素直に認めれば、一部には掘り返されたものがあるとしても、“浅い”ことに起因すると思われる。つまり、ある時期に穴の上部をカットされ、それまで適度な湿度を保っていたのが、深い穴に関しては湿度が抜けてしまい、軟質層が固くなったりと考えられる。柱については、浅くて分りづらい上に柱部分も乾いて土層自体が大型土坑ほど明確でなくなり、検出できなかつたのではないか。ただ116次の軟質層には炭化物を含んでおり、この説明ならば炭化物が残るはずであるが、A型には炭化物を含んだ層はほとんどなく、この理由だけでは説明がつかないのも事実である。

貯蔵穴に関しては多くの論考があるが、特に今村啓爾氏は今までの研究史を中心に詳細に論じている。⁽³³⁾氏は台地上にある貯蔵穴を乾式貯蔵穴、低湿地にあるものを湿式貯蔵穴と呼び、後者を備荒用としている。今回の場合、貯蔵穴は台地上に作られており、氏の言う乾式貯蔵穴に相当する。しかし軟質土層が堅果類だとすると、軟質土層のある土坑は、他の多くの湿式貯蔵穴と同様に堅果類は取りだされなかつたことになり、日常用の貯蔵とは考えにくい。当遺跡で水が湧いたのは2例だけだが、台地上にあるといって一概に備荒用ではないと言いかねないのでないだろうか。土坑群が台地の先端部に作られているのはそれなりの理由があると考えられ、当時の水位が今と同じだとしても、周辺に環境は近年著しい改変を遂げている。いずれにしろ全体の構造配置が確認できてからのことであろう。

柱状痕跡は径18~70cmと幅が大きく、最下端が床につくものと床から浮くもの、まっすぐ立ち上がるものの、先細りするもの、途中凹凸があるものなど様々な形態がある。また柱の土層のすべてが軟質層であったり、しまった土層であったり一定していないなど、通常の建物の柱とは異なっている。5次調査では結論として貯蔵穴の標識としているが、そうだとするとわざわざ直径30cm近い木を選ぶ理由がわからない。大きな木を入れればその分だけ貯蔵量は減るわけである。5次報告で例として上げられた野多目枯波遺跡10号貯蔵穴⁽³⁴⁾の柱は径6cmにすぎず、坂の下遺跡1次調査⁽³⁵⁾の6号貯蔵穴で検出された柱状の木は径10cmを越えない。またともに床にめりこんで、完掘後も自立していると考えられるのに対し、当遺跡の場合明らかに自立しない。枯波遺跡では10号貯蔵穴の他にも4号貯蔵穴でも床面径10cm以内のピットが2つ検出されており、坂の下例とあわせていずれも径10cm以内である。この事から見れば、これら3例の柱と当遺跡の柱とは様相を異にするものである。筆者も標識としての可能性が高いと考えているが、現時点では柱の目的については不明と言わざるを得ない。

土坑群は環状に配置されており、あたかも環状列木の様な景観を呈している。復元すると外径で長径約60m、短径38mを測る。5次の一部と116次の大部分は3~5基で1列を成しており、そのうちFig.56のアミ部分の幅4~5m内にある土坑は大型で深いものが多く、ほぼ連続して環状に回るのに対し、アミの外は小型なものが多く、連続しない。特に116次ではアミの内で



は1列～6列まで各3基の土坑が規則的に配置され、5次では不規則な部分もあるが、それでも1列3基で並んでいる列が半分を越している。全体的に見るとかなり規則性の高い土坑群といえる。これらの土坑は環状に連続して回るが、場所によって密度に差がある。116次では各列間の距離はさほど離れていないものの、調査区北側には土坑のないスペースがある。5次では調査区中央部分に切り合いがあり、密度の濃い部分があり、そこは切り合いも激しい。その両側は116次に近い間隔を保っている。また調査区南東端にはやはり土坑のないスペースがある。さらに各列の土坑を縦で結ぶと、2～3列と1単位として近い方向性をもっていることがわかる。例えば116次の北から2列、3列と4列目、5次の南から1～3列、北側の3列などである。そしてこれらの方向は当然であるが、環の中央に向いている。つまり土坑群全体は環状に配置され、その中でも幅3～4mに大型の土坑が連続して規則的に配置されている。そしてこれら大型の土坑は前述のとおり柱や軟質層の残存率も高い。また土坑群はその列の方向性から見れば、2～3列を1単位としている可能性がある。2～3列ということは大型の土坑が6～9基、それに小型の土坑が数基含まれることになる。潮見氏は山口県岩田遺跡が1時期6基前後、坂の下遺跡を10基前後としており、^(註6)先程の数字と近い値を示している。

環状に住居が配置される遺跡は以前から知られていたが、近年住居だけでなく各種遺構が環状に配置された遺跡が増加している。例えば、岩手県西田遺跡^(註7)では中央部に墓、その周りに掘立柱建物、さらにその外に住居や貯蔵穴が配されている。その他神奈川県大熊仲町遺跡^(註8)、横浜市二の丸遺跡^(註9)、同神隱丸山遺跡^(註10)などがある。このうち西田遺跡では集落の北側の住居に接して貯蔵穴が配されているものの、他の遺跡では住居の貯蔵穴が混在して環状に展開している。当遺跡の場合貯蔵穴だけが環状に配されており、このような例は聞かない。もし前述の貯蔵穴がない部分に住居があって、すでに削平されているとしたらどうだろうか。有田遺跡では古墳時代に大規模な整地が行われ、台地部の土を谷部に埋めており、それ以前の遺構は深いものを除いて検出例が極端に少ない場合がある。例えば、弥生初頭の環構に伴う住居は未だに検出されていないし、弥生中期の住居も柱穴だけの検出である。従って当地区においても土坑群に伴う住居が本来あった可能性は充分考えられる。調査面積も少なく、今後の調査に期待したい。

以上冗長なまとめになってしまったが、当遺跡の土坑群は現時点では貯蔵穴の可能性がもっとも高いものの、完全に説明することができなかった。他の遺跡の貯蔵穴との細かな対比や当遺跡の出土遺物を通しての時期の検討に至ってはまったく触れられなかった。再稿を期したい。

(註1) 福岡市教育委員会「有田遺跡」6 1985

(註2) 南方前池調査団「岡山県山陽町南方前池遺跡」「わたしたちの考古学」7 1956

(註3) 今村啓爾「土坑性格論」「論争・学説 日本の考古学」2 1988 雄山閣出版

(註4) 福岡市教育委員会「野多日括謹遺跡」1983

(註5) 佐賀県教育委員会「西有田町綱文遺跡」1969

(註6) 潮見浩「縄文時代の食用植物」「考古論集」1977

(註7～10) 鈴木保彦「集落の構成」「季刊考古学」7 1984 雄山閣出版による。原文献省略。

3. 有田第138次調査（調査番号8811）

1) 調査区の地形と概要

調査区は早良区小田部1丁目204に所在する。北へ八手状に分岐して広がる有田・小田部台地の、中央部台地の尾根上に立地する。現況は畑地であった。

昭和62年度に事前審査願いが提出された。これを受け、発掘調査を63年度に実施した。調査は昭和63年5月23日から6月28日迄行った。調査面積は申請面積826.32m²中、801m²である。

調査区周辺は小田部地区としては、比較的調査が行なわれている。北側の第126次地点では、弥生時代前期から中期にかけての甕棺墓・木棺墓などが検出されている。また北西側の第33次地点では、古墳時代後期の住居址が検出されている。当地域では、遺構は概して台地の北から西側にかけて残りが良く、東側は削平によるものか、今のところ遺跡の調査は、行なわれていない。

今回の調査では、遺構は20~50cmの表土(褐色の耕作土)下の橙色ローム土上面で確認した。地形は北東から南西側に緩やかに傾斜しており、標高は遺構面で8.1~7.7mを測る。南西側の低所部では表土下に薄い暗褐色の包含層が堆積している。主な検出遺構は、弥生時代の円形住居址1棟、弥生から古墳時代の住居址2棟、獨立柱建物6棟、土坑4基、土塙墓1基である。出土遺物は弥生時代から近世にかけての様々な遺物があるが、量は総量でコンテナ4箱である。

2) 遺構と遺物

竪穴住居址(SC)

全部で3棟検出した。全体に残りは不良である。

SC01(Fig.57, PL28・29)

調査区北側で検出した円形住居址である。直径は5.1~5.4mでやや梢円気味。遺存状況はやや不良で、残存壁高は最大で15cm余りである。壁下の周溝はなかった。主柱は5本柱であり、柱間隔は1.46~1.90mを測る。住居址は建て替えがあったらしく、柱穴がP2を基点に2重に巡っていた。また住居址中央には平面形が長方形で、規模が長さ65cm、幅45cm、深さ53cmの土坑があった。その両端には円形で直径30~35cm、深さ35~40cm位の、相対応する1対のピットがあった。また中央土坑の底面には略三角形状の深さ10cm位の小ピットがあった。周壁下には直径10cm前後の小ピットが5個検出された。西壁壁沿いには直径60cm、深さ80cmの円形土坑があり、内側には作業台石と思われる1が落ち込んでいた。埋土は黒褐色粘質土である。

出土遺物(Fig.59, PL33) 弥生土器片や黒曜石の剥片、石斧未製品などが出土しているが、量は少ない。床面出土の原位置を保つものはない。

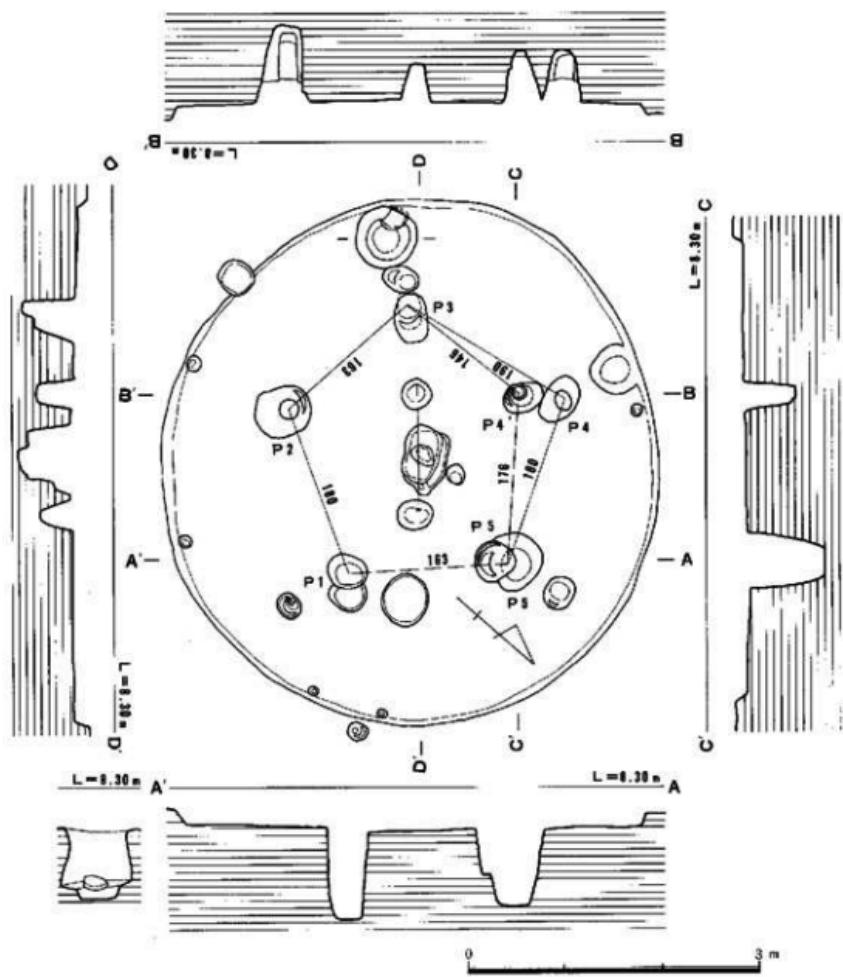
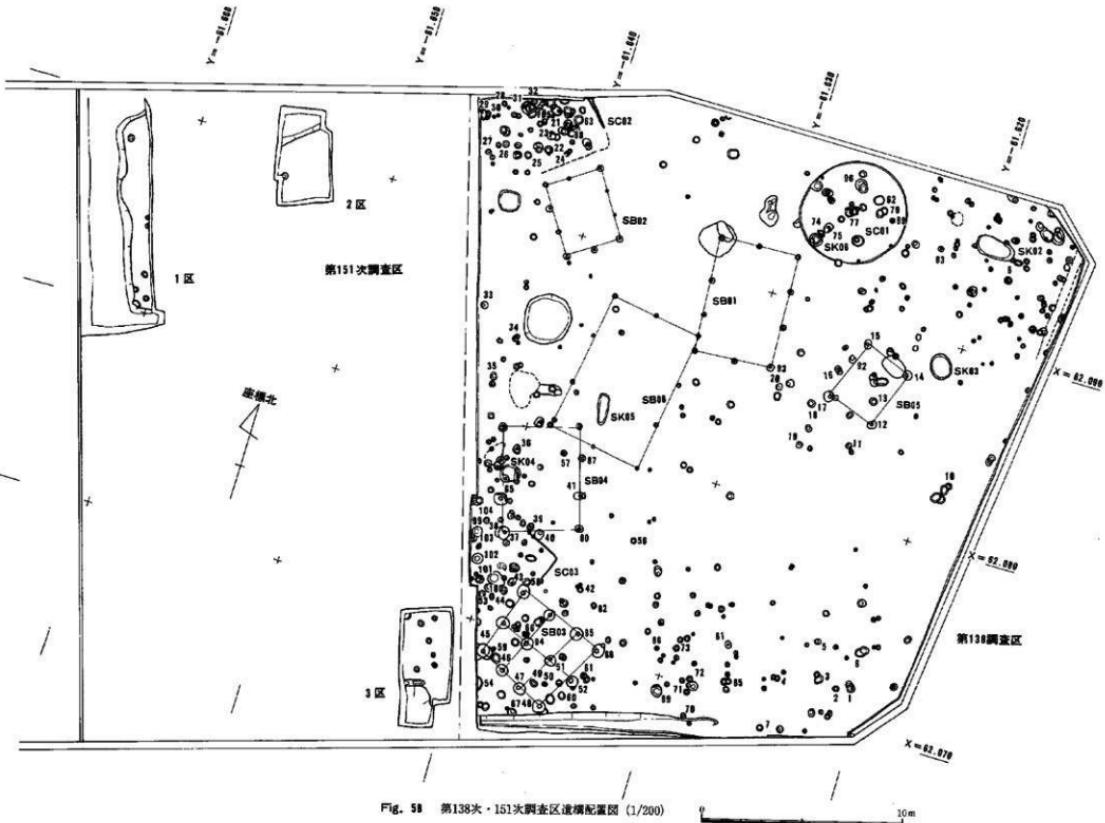


Fig. 57 SC01 (1/60)



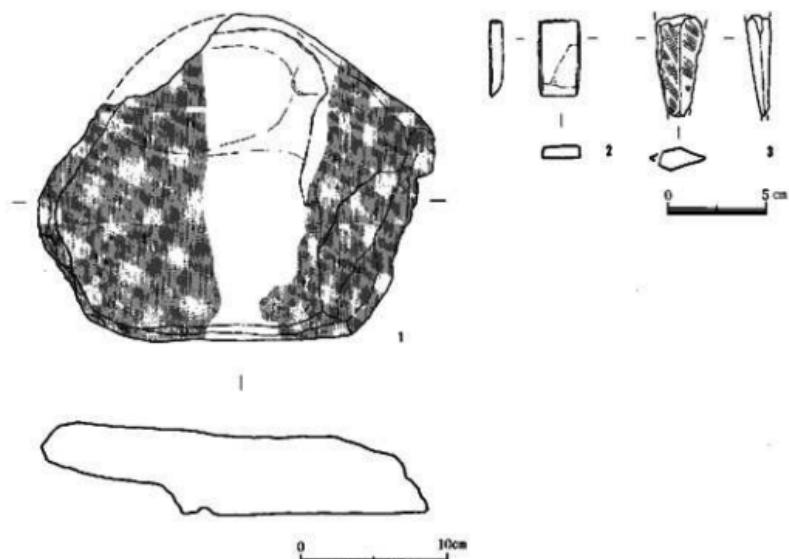


Fig. 59 SC01出土遺物 (1/3・1/4)

1～3は石器。1は台石である。屋内土坑内から出土。現存長26.9cm、最大幅22.3cm、厚さ6.5cmを測る。上面は少し窪み、赤く焼けている。石質は玄武岩。2は磨製石剣の切っ先である。残存長4.9cmを測る。断面は平行四辺形で、鏃がすれている。刃部は刃こぼれしている。石質は細粒砂岩。3は磨製の片刃石斧である。全長3.6cm、最大幅1.9cm、最大厚0.65cmを測る。使用によりかなり磨り減っている。石質は頁岩。

SC02 (Fig. 60, PL29)

北西側境界地で検出した住居址。残りは非常に悪く、周溝とピットのみを検出した。貼床粘土がわずかに残る。方形又は長方形の住居址と考えるが、規模ははっきりしない。溝は最大幅20cm、深さ7cmを測る。床面には多くのピットがあるが、主柱は抽出しがたい。

出土遺物 (Fig. 61, PL33) 住居址推定範囲内で確認されたピット出土のものを取扱う。10個のピットから遺物の出土がある。弥生前期から古墳時代の須恵器・土師器・砥石・石包丁・石斧・黒曜石の剥片などがある。

4～6は弥生土器、4は壺の口縁部1/8片。復元口径42.4cmを測る。口縁端部は上方につまみ出す。頸部に1条ないし2条の浅い沈線が巡る。前期末から中期初頭頃であろうか。5は甕

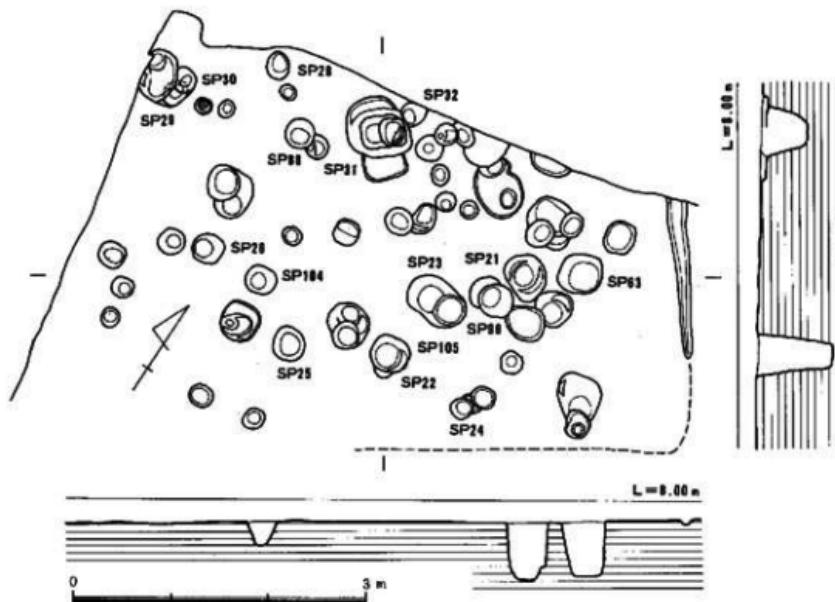


Fig. 60 SC02 (1/60)

の底部片で、上げ底である。外面はタテハケ調整。6は逆L字形を呈す甕の口縁部細片である。7は石包丁の欠損品である。器表は刀部以外は剥落している。石質は砂岩である。8は磨製の片刃石斧である。全長5.1cm、最大幅1.5cmを測る。表面の磨滅は著しい。頁岩製である。9・10は大形の砥石片である。9は現存長14.7cm、10は現存長13.4cmを測る。各面は砥面として使用され、良く磨り減っている。色調はいずれも浅黄褐色を呈す。石質は砂岩で、荒砥として使用されたのだろう。

SC03(Fig.62, PL29)

西側境界地で検出した住居址。残りは悪く、壁は北東コーナー部分のみ残る。平面形は方形又は長方形を呈すと考えられる。床面には多くのビットがあるが、主柱穴は確認出来ない。周溝は認められない。床面の貼付粘土は認められないが、床面のレベルは南西側に向かってわずかに傾斜する。床面には2ヶ所焼土が集中する部分が認められる。

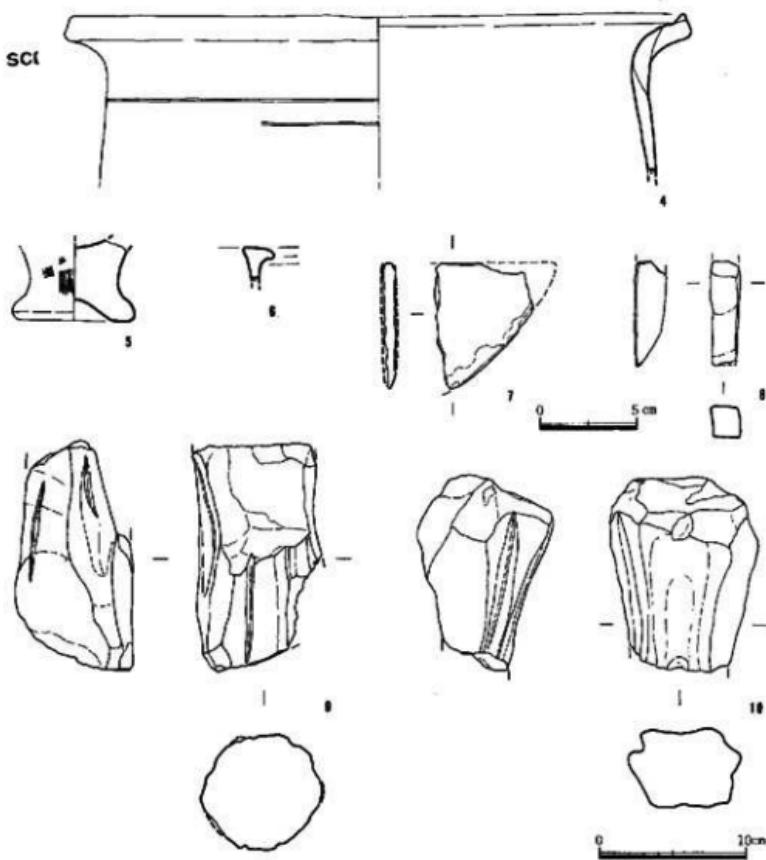


Fig. 61 SC02出土遺物 (1/3・1/4)

出土遺物 (Fig.63, PL33) 古墳時代の須恵器・土師器が埋土・床面から出土しているが、量はわずかである。

11は須恵器。高台付杯の小片。復元高台径9.8cmを測る。奈良時代のものであろう。12は土師器の口縁部細片。口縁部はく字状に外反する。13は鐵器で刀子片。残存長4.8cm、刃部幅1.4cmを測る。腐蝕はかなりひどい。

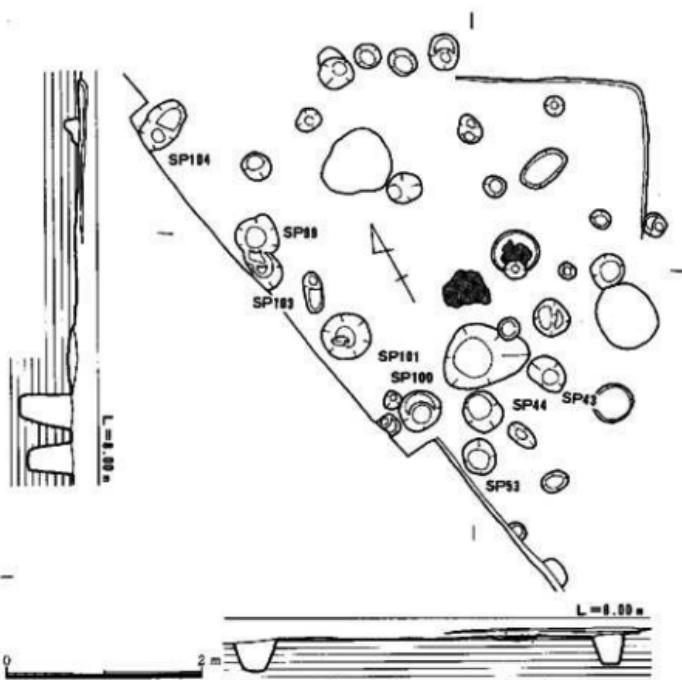


Fig. 82 SC03 (1/60)

掘立柱建物

全部で6棟検出した。他にも柱穴が並ぶものがあるが、建物としてまとめ得なかった。

SB01(Fig.64, PL30)

中央部で検出した主軸方位をN-2°-Eに取る 2×3 間の個柱建物である。梁間全長3.9m、桁行全長4.85mを測る。柱穴掘方は円形で、直径は22~32cm、深さは8~24cmを測る。全体に残りは悪いが、四隅は深く、しっかりとしている。柱穴は痕跡から12cm前後であろう。埋土は暗褐色粘質土を主体とする。

出土遺物 1つの柱穴から土師器の細片が2点出土し



Fig. 83 SC03出土遺物 (1/2・1/4)

ている。

SB02(Fig.64, PL30)

北西隅で検出した主軸方位をN-29°30'-Wに取る2×3間の側柱建物である。梁間全長2.85~2.95m, 衍行全長3.65~3.85mを測る。柱穴掘方は円形で、直徑12~36cm, 深さ6~25cmを測る。全体に残りは悪い。柱径は痕跡から10cm前後である。全体に少しいびつな建物である。埋土は暗褐色粘質土を主体とする。

出土遺物 柱穴から遺物の出土はなかった。

SB03(Fig.64, PL30)

調査区南西隅で検出した主軸方位をN-61°30'-Wに取る2×4間の総柱建物である。全体に形はかなりいびつである。梁間全長3.55~4.05m, 衍行全長3.95~4.70mを測る。柱穴掘方は円形又は楕円形で、直徑は55~70cm, 深さは35~95cmを測る。全体に残りは良く、特に両衍側柱は深く、しっかりしている。柱径は痕跡から15~20cm位である。柱間隔は衍側が狭く、不揃いである。埋土は黒褐色粘質土を主体とする。

出土遺物 各柱穴から弥生土器、古墳時代の土師器、黒曜石の細片などが少量ずつ出土している。

SB04(Fig.64, PL30)

調査区西側境界地で検出した主軸方位をN-13°-Wに取る2×3間の側柱建物である。梁間全長3.70~3.80m, 衍行全長5.15~5.35mを測る。柱穴掘方は円形又は略方形で、直徑は30~70cm, 深さは33~60cmを測る。P8はSK04埋土下から検出した。SB01・02に比べ残りは良い。柱径は痕跡から12~18cm位である。埋土は黒褐色粘質土を主体とする。

出土遺物(Fig.66, PL33) 各柱穴から古墳時代の土師器・須恵器の小片が少量ずつ出土している。

18は管状土錐で、土師質である。全長5.5cm, 最大径1.0~1.2cm, 孔径3mm, 重さ6.5gを測る。指おさえ仕上げであるが、全体に磨滅がひどい。胎土は良い。

Tab. 6 掘立柱建物一覧表

建物番号(SB)	規模(間数)	主軸方向	梁間全長(cm)	衍行全長(cm)	床面積(cm ²)	主軸方位	備考
01	2×3	北	390	485	18.9	N-2°-E	
02	2×3	北北西	285~295	365~385	10.9	N-29°30'-W	
03	2×4	北西	355~405	395~470	16.5	N-61°30'-W	鉛付
04	2×3	北北西	370~380	515~535	19.7		
05	2×3?	北北東	250~255	300~320	7.8	N-23°-E	
06	2×3	*	465~490	730	34.8	N-14°-E	SB01・04 トモ

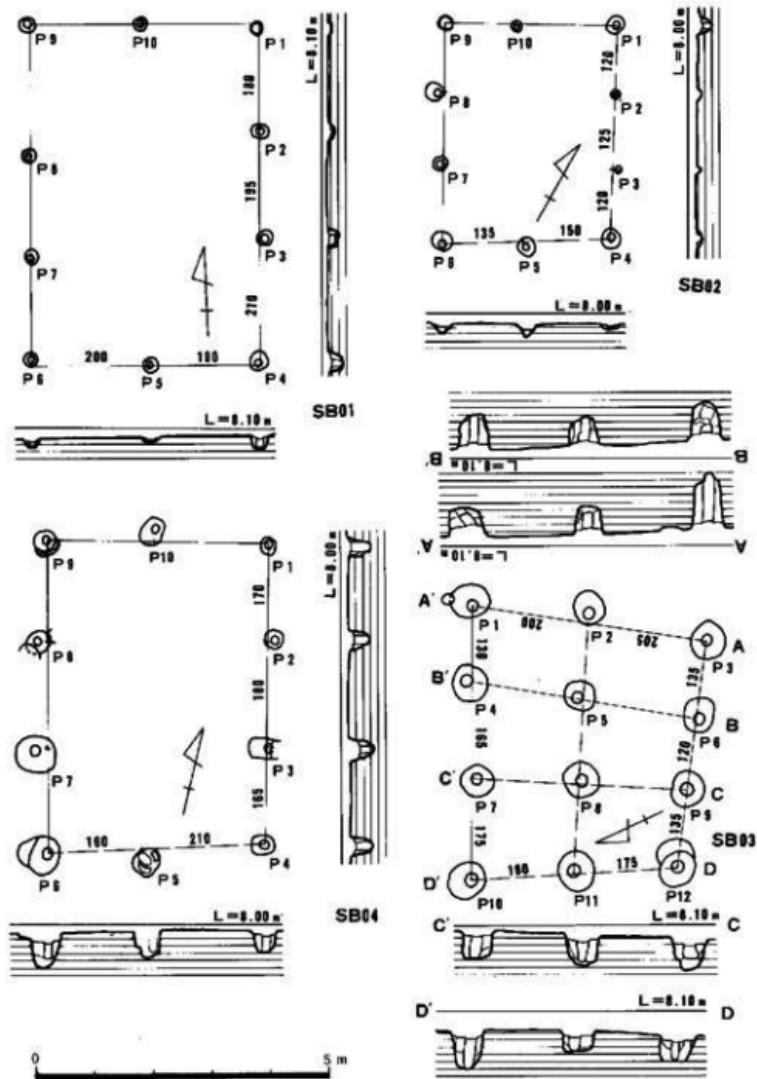


Fig. 64 SB01~04 (1/100)

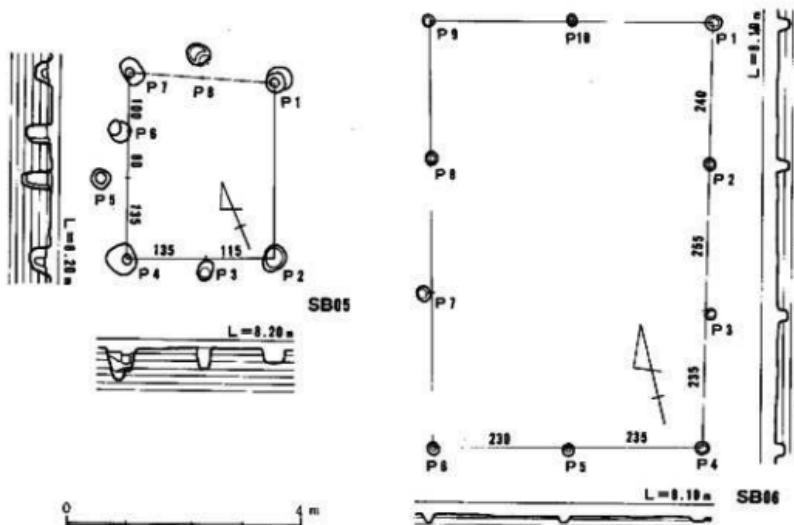


Fig. 65 SB05・06 (1/100)

SB05 (Fig.65, PL31)

調査区中央で検出した主軸方位をN-23°-Eに取る建物である。梁間全長2.50~2.55m、桁行全長3.0~3.2mを測る。全体に形がいびつで、両梁間間に各1個、西桁側に2個の柱穴が伴うと考える。柱穴掘方は円形又は楕円形で、直径は33~53cm、深さは24~55cmを測る。柱径は痕跡から15~20cm前後である。埋土は黒褐色粘質土を主体とする。

出土遺物 (Fig.66, PL33) 各柱穴から弥生土器片や黒曜石の剝片が少量出土した。

14~17は弥生土器。14は甌の口縁部1/4片。復元口径26.4cmを測る。器壁の磨減

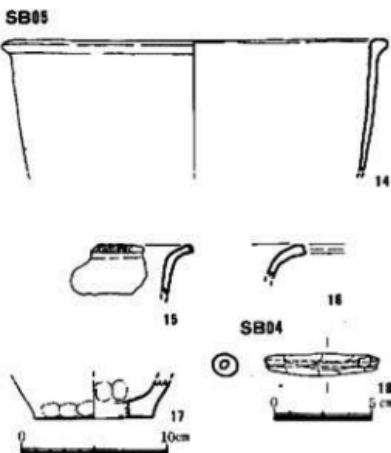


Fig. 66 掘立柱建物出土遺物 (1/3・1/4)

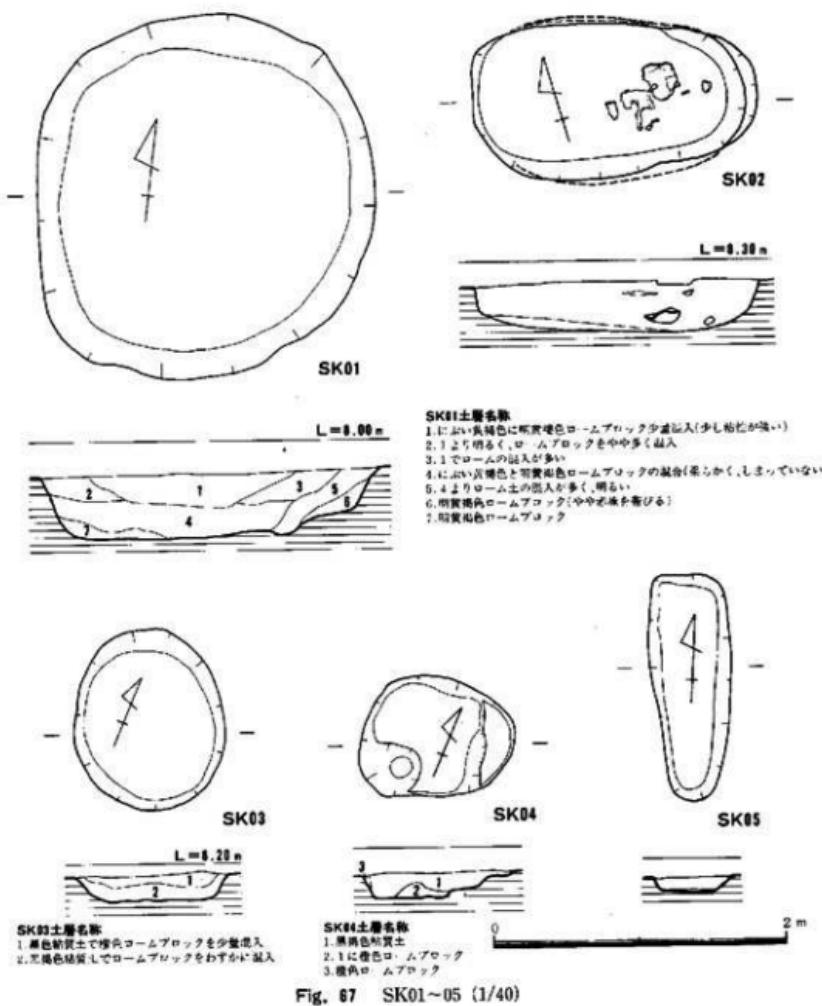


Fig. 67 SK01~05 (1/40)

は著しい。前期後半代のもの。15も甕の口縁部で、口縁部は如意形を呈す。口唇部に刻目が入る。16は口縁部片で、口端部には軽い沈線が巡る。17は甕の底部片である。復元底径8.2cmを測る。内外面は指圧痕が残る。

SB06(Fig.65, PL31)

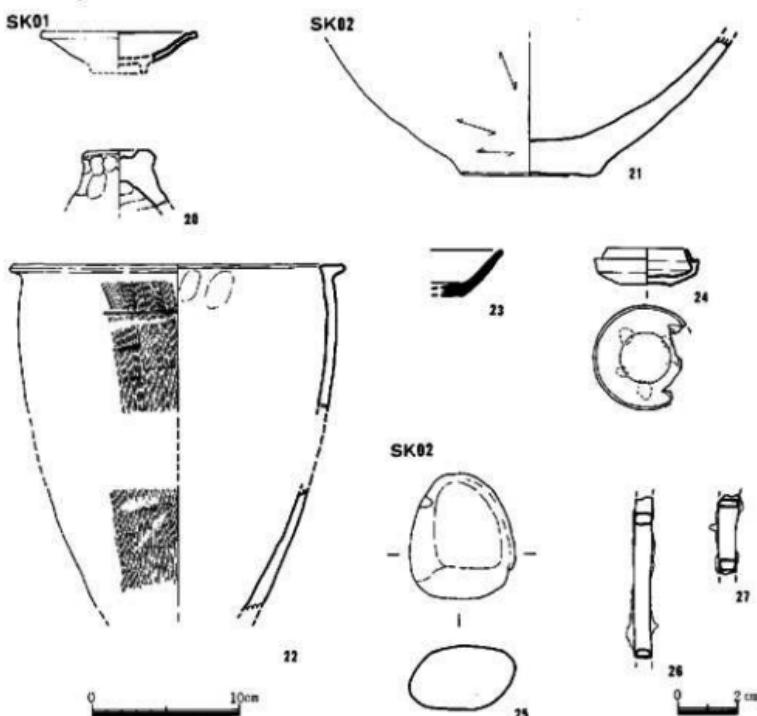


Fig. 88 土坑出土遺物 (1/2 · 1/4)

調査区西側で検出した主軸方位をN-14°-Eに取る 2×3 間の倒柱建物である。SB01・04と重複する。梁間全長4.65~4.90m、桁行全長7.30mを測る。柱穴掘方は円形で、直径は20~30cm、深さは5~20cmを測る。全体に小さく浅く、柱痕跡は残っていない。埋土は暗褐色土を主体とする。

出土遺物 遺物の出土はなかった。

土坑

SK01(Fig.67, PL31)

調査区西側で検出した略円形の土坑。直径2.30m、深さ45cmを測る。底面は西側が少し低くなる。埋土はにぶい黄褐色ローム土と黄褐色地山ローム土を主体とする。全体に新しい時期の

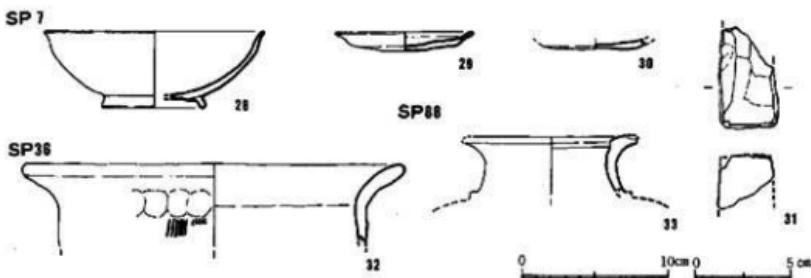


Fig. 68 ピット出土遺物 (1/3・1/4)

堆積土である。

出土遺物 (Fig.68) 古墳時代の須恵器片や近世の褐釉陶器・唐津焼・鉄滓が各1点ずつ出土している。

19は陶器の滑綠皿片である。復元口径10.6cmを測る。唐津系である。

SK02(Fig.67, PL32)

調査区北東側で検出した東西方向に主軸を取る、平面形が長楕円形を呈する土坑。壁面は南北両壁が少しオーバーハングする。長さ1.95m、幅1.08m、深さ35cmを測る。底面は西から東にかけてだらだらと深くなる。埋土は上層が黒褐色土、下層が黑色土を主体とし、各層地山ロームブロックを少量混じえている。弥生土器や焼土ブロックが東側中央底より5~20cm浮いた位置でやまとまって検出された。

出土遺物 (Fig.68, PL34) 土器は量は少ない。弥生土器が大半で、夜白式土器片2点、須恵器片1点、染付磁器片1点を含む。石器としては、黒曜石の剣片、石斧片などがわずかに出土している。

20~22は弥生土器。20は蓋の頂部片。指おさえのやや雑な作りである。21は壺の底部片。外表面はヘラ磨き。22は甕である。破片から全体の器形を推定した。復元口径22.6cmを測り、胴部最大径は上半にある。胴部の一部に1条の沈線が巡る。調整はタテ又はナナメ刷毛。外表面はナデ。25は磨石。全長が8.5cm、最大幅7.2cmを測る。全面使用により磨滅する。石質は玄武岩である。

SK03(Fig.67, PL32)

調査区北東隅で検出した楕円形状の土坑。直径1.25m、幅1.03m、深さ20cmを測る。底面はほ

は平坦である。埋土は上層が黒色粘質土、下層が黒褐色粘質土である。

出土遺物はなかった。

SK04 (Fig.67, PL32)

調査区西側で検出した不整橢円形の土坑。SB04を切る。長径1.05m、幅0.83m、最大深18cmを測る。底面は東側に幅が狭いテラスを持つ。南西隅のピットはSB04P 8である。埋土は黒褐色粘質土を主体とする。

出土遺物(Fig.68, PL34) 弥生土器片から土師器・須恵器片が少量出土している。

27は須恵器の杯小片である。8世紀代のものか。

土壙墓

SK05 (Fig.67, PL33)

調査区西側で検出し、主軸方位をN-3°30'-Wに取る。平面形は長方形を呈す。形態・出土遺物から土壙墓と考える。規模は長さ1.57m、幅0.3-0.5m、深さ10cmを測る。幅は北側が広い。埋土は暗褐色土である。

出土遺物(Fig.68, PL34) 弥生土器片。須恵器片・越州窯系の青磁合子・鉄鏹片が出土している。量は少ない。

24は越州窯系の青磁合子。口径5.5cm、受部径7.1cm、器高2.5cmを測る。外底部に5ヶ所の目痕が残る全体に明黄褐色の釉がかかる。受部は釉が発泡している。遺構上面で検出した。26・27は鉄鏹の破片。断面は長方形状を呈す。26は残存長5.4cm、直径0.5cm、27は残存長2.6cm、最大幅0.5-0.7cmを測る。いずれも上層より出土した。

ピット・その他の遺物(Fig.69, PL34)

28-31はSP 7出土。28-30は土師器。28は高台碗1/3片で、復元口径14.8cm、高台径7.0cm、器高5.3cmを測る。色調は黄橙色を帯びるが、内面上半は黒化する。29は小皿の1/2片、復元口径9.4cm、器高1.3cmを測る。器壁の磨滅は著しい。底部はヘラ起こし。30も小皿の底部片。器壁は風化が著しい。31は砥石の小片である。残存長4.9cm、最大幅2.8cmを測る。上面と両側面を使用している。32はSP36出土。土師器の焼口縁部片。復元口径26.0cmを測る。口縁部が軽く外反して開く器形で、口端部は丸い。頸部に指圧痕が残り、体部はクテ刷毛調整で、煤が付着する。内面の調整は不明。奈良時代頃のものか。33はSP88出土。弥生土器の蓋口縁部片である。口縁部は肥厚し、内面に段を有す。頸部はしまり、三角の突帯が巡るようである。中期初頭頃のものか。

34、35は遺構面出土。34は須恵器。高台付杯の1/5片で、復元口径9.2cmを測る。35は土師器の甕口縁部小片。く字状に外折する口縁部を持つ。

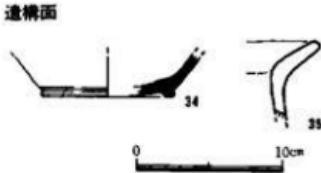


Fig. 70 遺構面出土遺物 (1/4)

3) 小結

以上調査の成果について述べたが、ここでは、再度それらを整理してまとめたい。

当調査区では弥生時代から江戸時代頃の遺構・遺物を検出した。I期を弥生時代、II期を占墳時代末から奈良時代頃の時期、III期は平安時代から中世、IV期は江戸時代である。

I期はSC01・SK02・SB05などがある。SC01は時期を決めうる土器などがないが、住居址の形態が中間氏による松葉里型住居の発展型に入り、時期的には中期前半迄と位置づけられている事、また図示していないが中期前半代の城ノ越式土器の形態を持つ壇の肩部片が出土している。更に東側のSK02出土の土器が中期前半代のものであるから、SC01の時期はSK02との関係を勘案して、概ね中期前半代のものと考える。SB05は弥生時代のものとするが、それは中間柱を入れてある。P5出土の土器が前期末～中期初頭に位置づけられる。

II期はSC03が相当するが、何分削平がひどく、今一步正確さにかける。SB03は主軸方向が同一であり、また掘方埋土の色や、遺物に須恵器片を含むところから、同時期のものかもしれない。

III期はSK05で、越州窯系青磁の合子が出土している。越磁は9世紀代に位置づけられる。

IV期はSK01の時期で唐津系の溝縁皿口縁部片から、17世紀前半代以降であり、埋土も新しい様相を示す。

掘立柱建物の時期であるが、SB01・02・06は時期を決めうる遺物がなく、時期は決めがたいが、柱穴の形状、規模、埋土上の形態から、中世の時期の可能性がある。

4. 第151次調査（調査番号8919）

1) 調査区の地形と概要

申請地は小川部1丁目203・207に所在し、小田部台地の中央西側に位置する（Fig.71）。標高は約9.5mである。周辺は過去26・73・138次調査が実施され、それぞれ掘立柱建物・平安時代土壙・古墳～律令期掘立柱建物、弥生中期竪穴住居・土壙・古墳時代竪穴住居・掘立柱建物を検出している。

昭和63年6月6日、専用住宅建築のための事前審査申請がなされたのを契機に63年6月20日に試掘調査を実施、柱穴を検出し、本調査を実施する事となった。

本調査は昭和64年6月2日から同年6月7日まで実施され、客土を施して3戸分の分譲住宅とするため、削平を受ける車庫部分のみ調査となり、それぞれ1区41.49m²・2区16.5m²・3区18.0m²を調査対象とした。東隣の138次調査区より70cm程度低いため大幅の削平が予想され、実際表土下30~60cmで黄褐色～黄白色の八女粘土層に達する。遺構の残りは極めて悪い。

2) 遺構と遺物

検出された遺構は1区で柱穴7、2区で柱穴1、3区で柱穴8・中・近世の溝1条・近世～近代の整地面を1ヶ所検出している。余りに狭い調査範囲であるため遺構相互の関連は全くつかめない。次回の調査結果を待って判断されるものである。

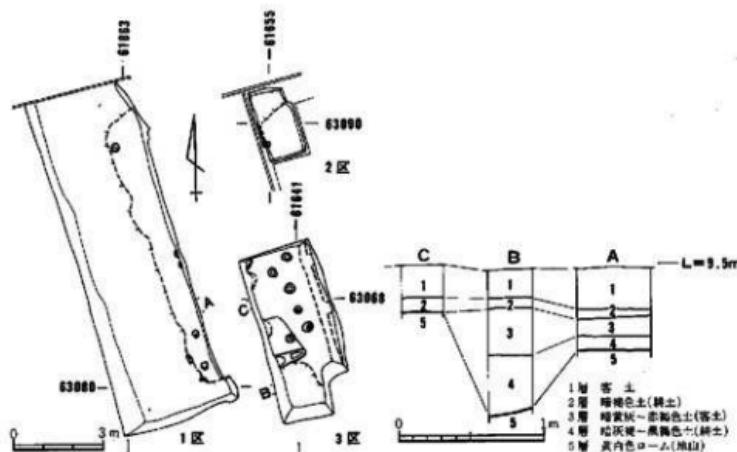


Fig. 71 第151次調査区遺構配置図・土層断面図 (1/200・1/40)

第151次調査

遺物はほとんど3区で検出され、黒耀石片、弥生土器片、土師器片、奈良時代須恵器片、12~13世紀代白磁片、近世~近代肥前系染付片でいずれも小片で図化にたえない。総計で20片強である。

上層を観察すると、1層の客土下、畑の耕土が広がり、1区と3区南の段落ち部分では耕土下に客土と水田耕作土が広がっており、近代以降水田に客土をなし畠地へと転換したことがうかがわれる。

5. 有田第164次調査（調査番号9041）

1) 調査区の地形と概要

調査区は早良区小田部2丁目106に所在する。有田・小田部台地のほぼ中央、東に谷を臨む傾斜上に立地する。現況は畠地であった。

昭和63年度に事前審査願いが提出され、これを受け発掘調査を実施した。調査は平成2年10月11日から11月30日に実施した。調査面積は申請面積814m²中416m²である。

調査区周辺には有田遺構群で最も多く調査が行なわれている地域で、弥生時代から中世末迄の遺構が濃密に確認されている地域である。弥生時代の遺構は、東側の第3次、51次地点周辺で確認され、青銅利器の溶范片も3点出土している。古墳時代の遺構は、各地点で発見されており、当地点周辺に大集落が展開していた。古代には、南側の台地最高部を中心に、官衙規模の大型建物群が検出されている。

今回の調査は、建物が一部残っていた為、I区・II区と調査区を分割して調査を実施した。遺構は表土20~80cm下の橙色ローム粘土上面で検出した。標高は地表面で11m前後を測る。以前苗木が植えられていた為、それによる攪乱坑が多く見られた。主な検出遺構は、奈良時代の大溝1条、掘立柱建物3棟、土坑1基である。また第47次・75次・108次・124次地点で検出されている。南北方向の小溝は当調査区では確認出来なかった。遺物はコンテナ7箱出土している。大半が古墳時代後期から平安時代にかけての土師器・須恵器である。

2) 遺構と遺物

掘立柱建物

SB03 (Fig.73, PL36)

調査区西側で検出した主軸方位N-80°-Eに取る2×2間の東西方向の建物である。梁間全長3.30m、桁行全長4.4~4.50mを測る。柱穴掘方は円形または隅丸方形で、直径は20~40cm、深さは15~70cmを測る。P1のみ極端に深い。柱径は痕跡から10~20cm位である。埋土は黒褐色粘質土を主体とする。

出土遺物 各柱穴から固化不能の土師器・須恵器の細片が少量ずつ出土している。

SB04 (Fig.73)

SB03の南側で検出した主軸方位N-84°-Eに取る1×3間の建物。梁間全長1.50m、桁行全長6.55mを測る。南側がSD01に切られている可能性がある。柱穴掘方は円形または梢円形を呈し、直径は30~50cm、深さは30~80cmを測り、全体に深く、しっかりしている。柱径は痕跡から、12~15cm前後と推定出来る。埋土は黒褐色粘質土を主体とする。

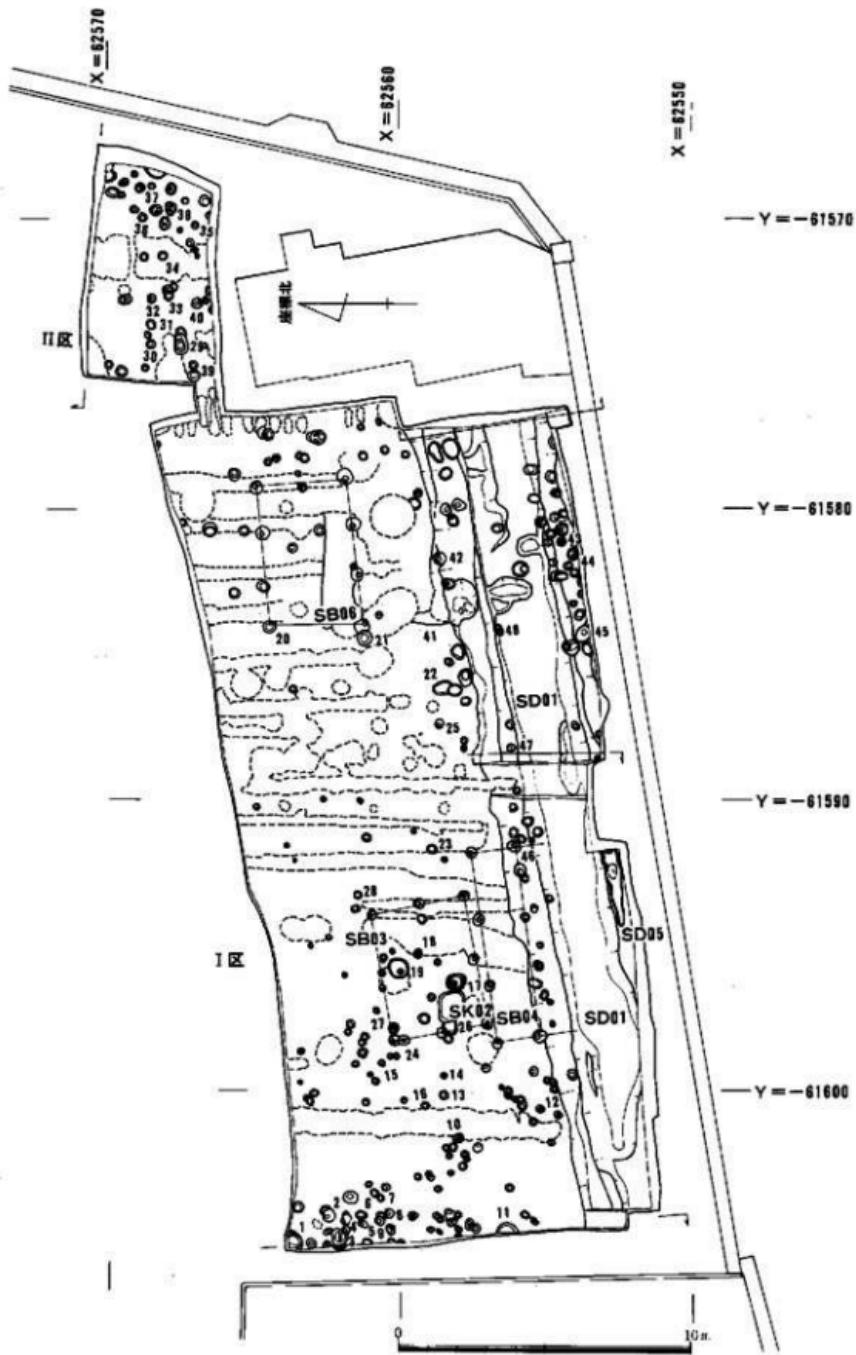


Fig. 72 第164次調查区遺構配置図 (1/200)

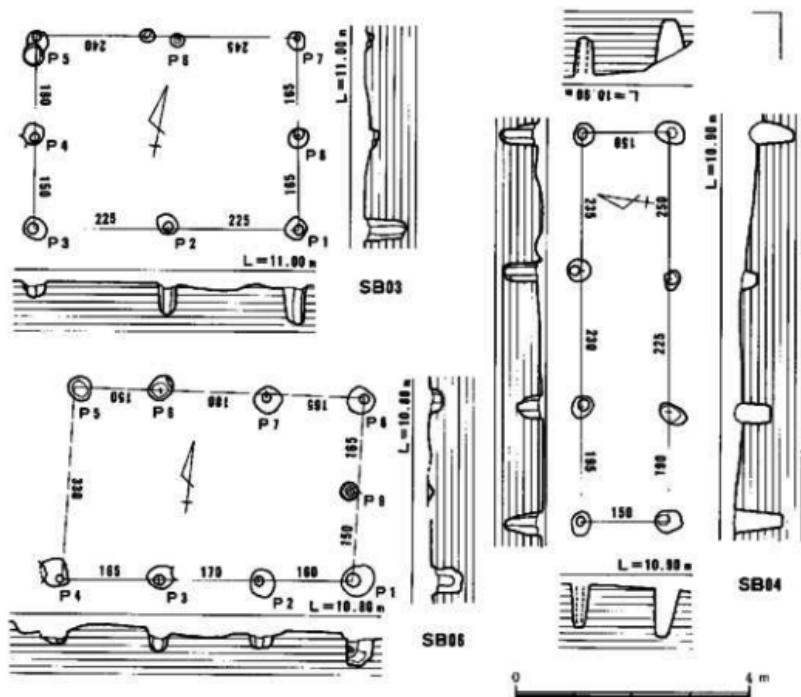


Fig. 73 SB03・04・06 (1/100)

出土遺物 各柱穴から弥生土器・土師器・須恵器の固化不能の細片が少量ずつ出土している。またP2掘方から鉄滓が1点出土している。

SB06 (Fig.73, PL36)

調査区東側で検出した主軸方位N-82°-Eに取る2×3間の側柱建物である。梁間全長3.15~3.30m、桁行全長4.95mを測る。柱筋はややいびつである。柱穴掘方は円形または隅丸方形を呈し、直径は30~60cm、深さは10~55cmを測る。P1のみ極端に深く、P9が浅い。西側梁間の間柱は確認出来ていない。柱径は痕跡から10~15cm位である。埋土は黒褐色粘質土を主体とする。

出土遺物 4個の柱穴から、固化不能の土師器・須恵器の細片が少量ずつ出土している。

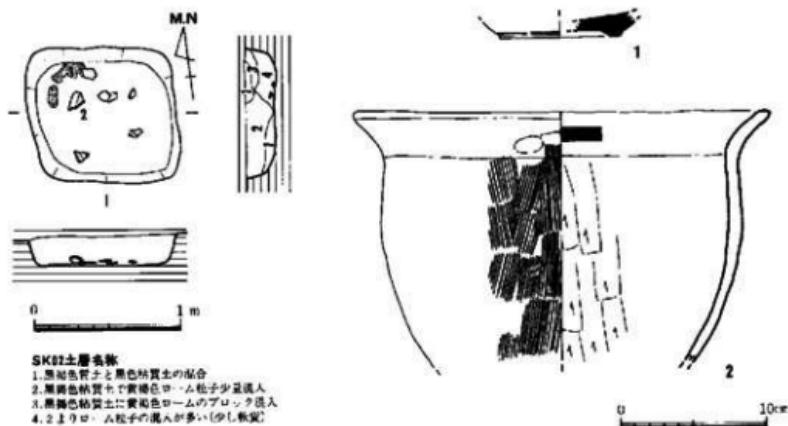


Fig. 74 SK02と出土遺物 (1/40 · 1/4)

土坑

SK02 (Fig.74, PL36)

SB03内、西側で検出した略方形の土坑。東西長1.04m、南北長0.93m、深さ22cmを測る。底面にはほぼ平坦で、断面形は逆台形を呈す。北西側に底面より少し浮いて、炭化物・焼土ブロック・炭化物が集中する。埋土は黒褐色から黒色粘質土を主体とする。

出土遺物 (Fig.74, PL38) 奈良時代頃の土師器・須恵器片が出上している。量はそれ程多くない。

1は須恵器の高台付杯1/4片。復元高台径6.4cmを測る。2は土師器の甕1/3片である。復元口径28.4cmを測る。しまりのない頸部から口縁部がく字状に外反する器形。体外面はタテ刷毛。内面はヘラ削りである。外面は煤が付着する。底面からの出土である。

溝状遺構

SD01 (Fig.75, PL37)

調査区南側で検出した東西方向N-79°30'-Eに取って走る大溝である。両側は調査区外で、

Tab. 7 据立柱建物一覧表

※主軸方位は南標準北からの偏差である

建物 番号 (SB)	規模 (間数)	主軸 方向	梁間実長(cm)	柱間実長(cm)	床面積 (m ²)	主軸方位	備考
03	2×2	東西	330	445~450	14.8	N-80°-E	
04	1×3	z	150	655	9.8	N-84°-E	
06	2×3	z	315~330	495	16.0	N-82°-E	

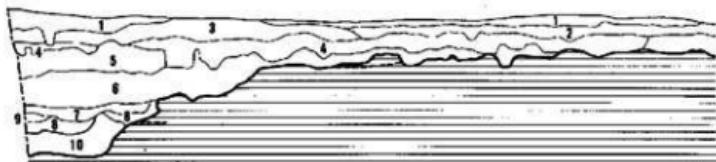
全容は把握出来ていない。確認長は28m、確認幅は4.5m以上、深さは0.9~0.95mを測る。溝幅の割にはそれ程深くない。溝断面形は逆台形を呈し、溝底のレベルは西から東へ緩やかに深くなる。溝底はほぼ平坦であるが、わずかに北側が少し深くなっている。溝の堆積土は大きく4層に分かれる事が出来る。上層は黒褐色粘質土（上面は若干擾乱を受けている。）、中層は黒色粘質土、下層は黄褐色ロームブロック、最下層は黒色粘質土である。下層の黄褐色ロームブロックは溝全域に認められ、上面はほぼ水平に堆積し、固くしまっている。厚さは15~30cm前後で、西側程厚くなる。溝東側ではこの堆積土の上面でピットを検出している。

出土遺物 (Fig.76~81, PL38・39) 上述の大まかな上層区分を、更に次のように細分して、遺物の取上げを行なった。上層上半・下半、中層上半・下半、下層、最下層で取上げている。一部の遺物は遺物番号を付して取りあげた。出土遺物は多く、弥生土器・土師器・須恵器が大半であるが、瓦・砾石片・磨石・黒曜石の剝片・陶器片なども少数出土している。上層出土遺物から記述する。

3は青磁碗1/3片。口径14.2cm、器高4.6cm、底径5.0cmを測る。底部は上げ底氣味の蛇の目高台で、目痕が6ヶ所残る。内外面オーリーブ色の釉がかかるが、焼きは余り良くない。越州窯系と思われる。4は白磁碗口縁部小片。復元口径13.6cmを測る。口端部は外方へわずかに屈折する器形。5~11は須恵器。5~7は高台付杯の底部片。復元高台径はそれぞれ8.6cm、8.6cm、7.2cmを測る。8は皿の1/12片である。復元口径16.6cm、器高1.4cmを測る。9は壺の口縁部1/3片。頸部と体部の境に明瞭な稜が付く。10~11は甕の口縁部小片。10は復元口径21.0cmを測る。しまり気味の頸部から短い外反する口縁部が付く器形。体外面は平行叩き、内面には同心円状の叩きが入る。11は大形の甕。復元口径約30cmを測る。口端部は内側につまみ出す。内外面はヨコナデ。12~24は土師器。12~15は高台付椀又は杯の底部片である。12~14は外にやや開く高台を持つ。復元高台径は12が8.6cm、13が7.9cm、14が8.5cmを測る。12の内面にはヨコ刷毛が残る。15は椀の底部1/5片である。16~17は杯である。16は1/6片。復元口径は15.4cm、器高3.8cmを測る。底部は平底で、器壁は磨滅が著しい。17は16とはほぼ同形態であるが、一回り小さい。18は皿1/3片。復元口径16.6cm、器高2.5cmを測る。底部はやや凸レンズ状で、凹凸が激しい。器壁は磨滅が著しい。19~22は甕の口縁部片である。いずれも口縁部が直立気味の体部からく字状に外折する器形である。19は1/6片。復元口径は28.0cmを測る。胴部はやや下膨れする形態である。全体に磨滅は著しいが、内面はヘラ削り。20は1/12片。復元口径にやや疑問がある。器表は磨滅し、調整は不明。21は1/8片。復元口径34.0cmを測る。外面は粗いタテ刷毛。口縁内面はヨコ刷毛、体内面はヘラ削りである。22は1/10片で、口縁直下に軽い段を有する。口縁内面はヨコ刷毛、体内面はヘラ削りである。23は鉢と思われる口縁部1/8片である。口縁直下に小さい三角状の突帯がくねって付く。胎土の感じは上師器より弥生の感じである。24は小振りの把手である。

有田第164次調査

L = 11.50 m

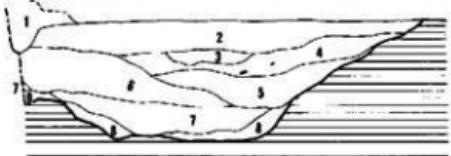


I区西壁

I区西壁土層名跡

1. 表土(3.褐色土)
2. 表土で黄砂土の混入が多い
3. 黒褐色粘質土(褐色塊が多い)
4. 褐褐色土(ややしまらず、黑色粘質土ブロックを混入)
5. (くらべ) 黑褐色粘質土(よく縮り、粒子は密)
6. 黑褐色土上(粒子は密)
7. 黑褐色ロームブロックに黑色粘質土混入
8. 6に黑色ローム粘土、小ブロックをやや多く混入
9. 6に黑色粘土山ロームブロック少量混入
10. 黑色粘質土(粒子は非常に細かい)

L = 11.00 m

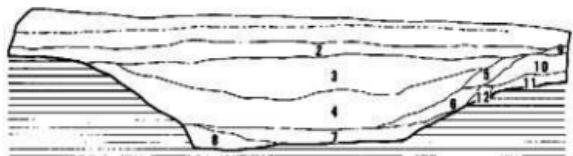


SD01 中央ベルト

SD01中央ベルト土層名跡

1. 姪褐色土
2. 黑褐色粘質土(青褐色色、ム粒子を少量含み、粘性高い)
3. 2と表層ロームブロックの混合
4. 2よりやや細い黑色粘質土と青褐色アーロック少量混入
5. 2よりローム粘土の混入多く(植物を比較的多く含む)
6. 2より多く、軟化が弱い
7. 黑褐色から明褐色ロームアーロック
8. 黑色粘質土(粒子が細かく、粘性が強く、軟質、7を若干混入)
9. 黄褐色ロームブロックに6を混入

L = 11.00 m



SD01 東壁

SD01東壁土層名跡

1. 表土(褐色土、上層が砂沙土)
2. 黑褐色粘質土(厚く縮り、軟質)
3. 3より細く、やや軟質
4. 黑褐色粘質土(粒子が細かく、秋葉)
5. 黑褐色粘質土で黒褐色粘質土の混合
6. 4と同色ローム粘土の混入
7. 黑色粘質土(軟質で、粒子が細かくしまらない、黒褐色ロームを下部に少量混入)
8. 5よりやや硬るい
9. 6に黒褐色粘質土上で暗褐色粘質土の混合
10. 6に黒褐色粘質土上で暗褐色粘質土ブロックを少量混入
11. 黄褐色、褐色ロームと黒褐色粘質土の混合
12. 6に黒褐色粘土山ローム山混入

L = 11.00 m

II区北壁 II区北壁土層名跡

1. 深土(ローム土を中心とする)
2. 黑褐色土(軟質)
3. 2と褐色ロームブロック少量混入
4. 褐色ロームと2の混合
5. 褐色の強い黒褐色粘質土でローム粒子を少量混入
6. 5よりやや硬く、軟性は弱い



Fig. 75 SD01土層及びI区西壁・II区北壁土層 (1/60)

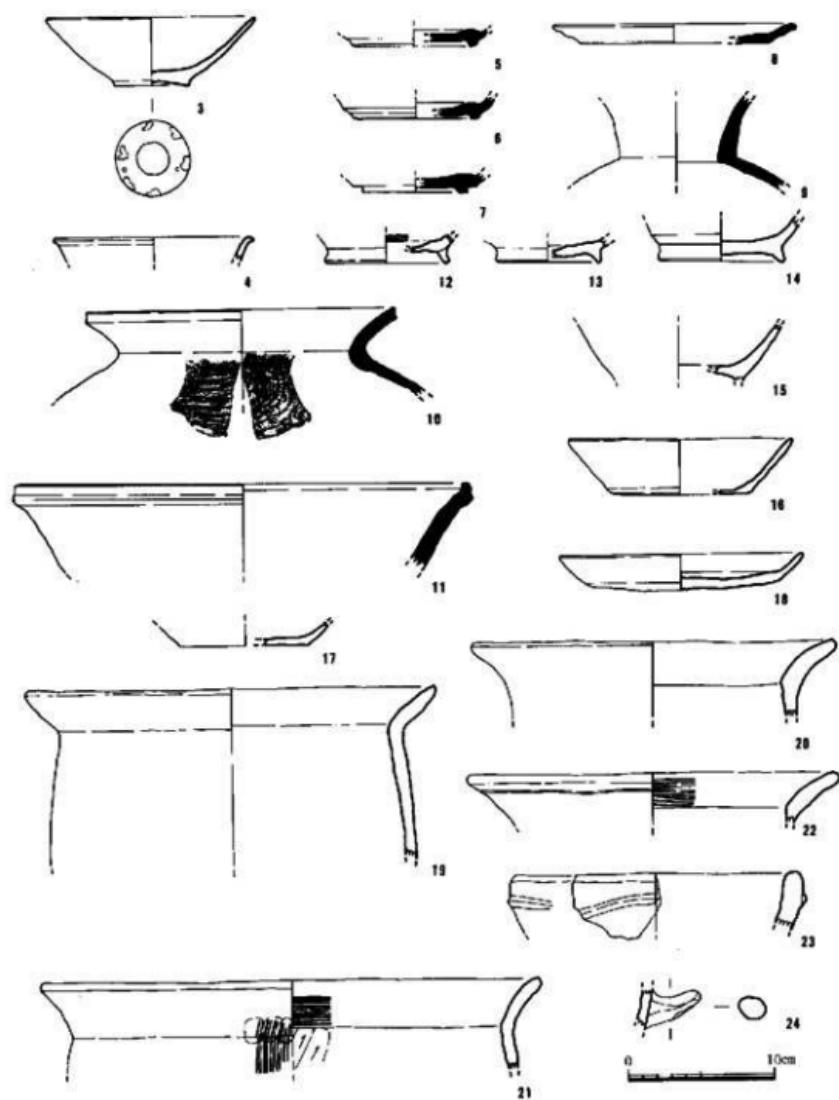


Fig. 76 SD01土層上半出土遺物 (1/4)

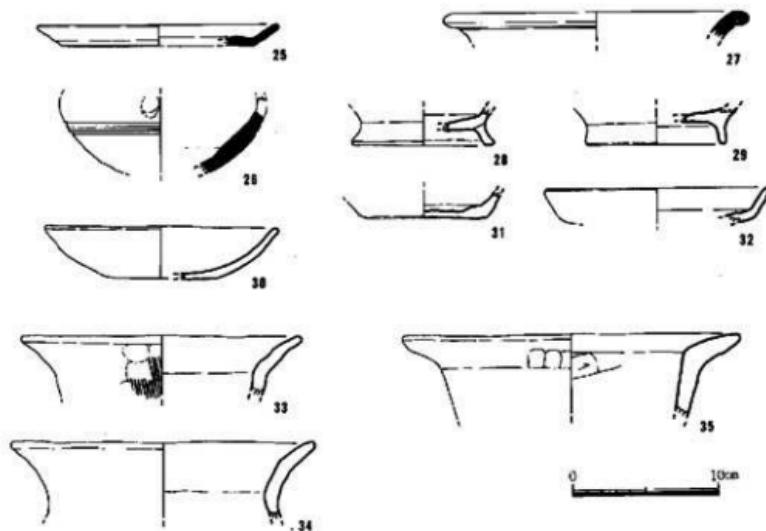


Fig. 77 SD01上層下半出土遺物 (1/4)

25~35は上層下半からの出土。25~27は須恵器。25は皿1/6片。復元口径16.4cm、器高1.5cmを測る。中層出土の破片と接合している。26は匂の体底部1/4片。体部中央に直径約1.2cmの透しが1個、その下に3条の沈線が巡る。内外面ヨコナデ。27は甕の口縁部小片。復元口径20.8cmを測る。口縁端部は外折し、丸っこく、玉環状を呈す。28~35は土師器。28・29は高台椀の底部片。高台はいずれも高く、28は外へ大きく開く。30はわずかに外へ開く程度。復元高台径は、28が9.8cm、29が9.6cmを測る。30は丸底の杯又は椀の1/2片。復元口径16.0cmを測る。器壁の磨滅は著しく、調整は不明。31は杯又は皿の底部片。復元底径8.5cmを測る。内外面ヨコナデ。32は皿の口縁部1/8片。復元口径15.4cmを測る。外面は粗いタテ刷毛。33~35は甕の口縁部片。33は1/8片で。復元口径19.2cmを測る。外面は粗いタテ刷毛で、指圧痕が残る。内面はヘラ削り。胎土は石英・金雲母微粒を多く含む。34は1/10片。復元口径20.6cmを測る。器壁の磨滅は著しく、調整不明。35は33・34より口縁部の外折具合が強い。小片で復元口径23.0cmを測る。体外面は磨滅するが、内面はヘラケズリ。33~35共全体に厚手のつくりである。

36~50は中層半出土。36~47は須恵器。36~39は高台付杯。36は口縁部1/6片。復元口径15.0cmを測る。口縁部が大きく開く器形。焼成はあまく、胎土は石英微粒を多く含む。37~39は高台部片。復元高台径は37が9.2cm、38が8.2cm、39が8.6cmを測る。37は外に開く端部が丸い短い

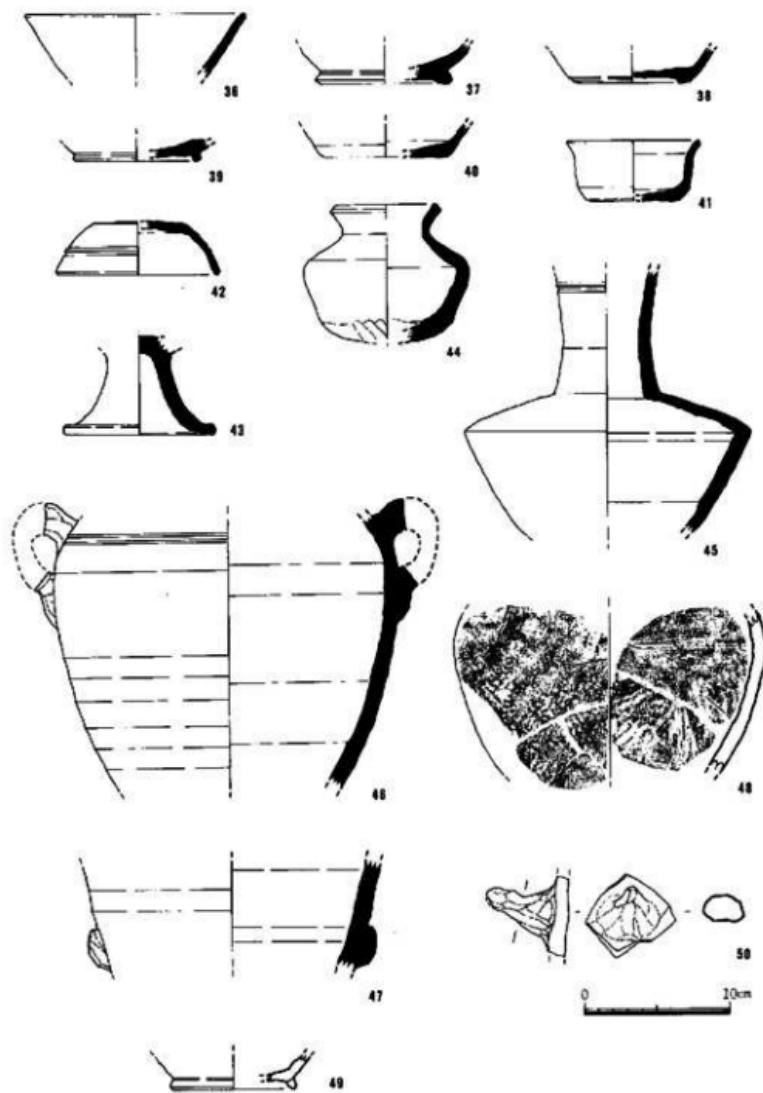


Fig. 78 SD01中層出土遺物 (1/4)

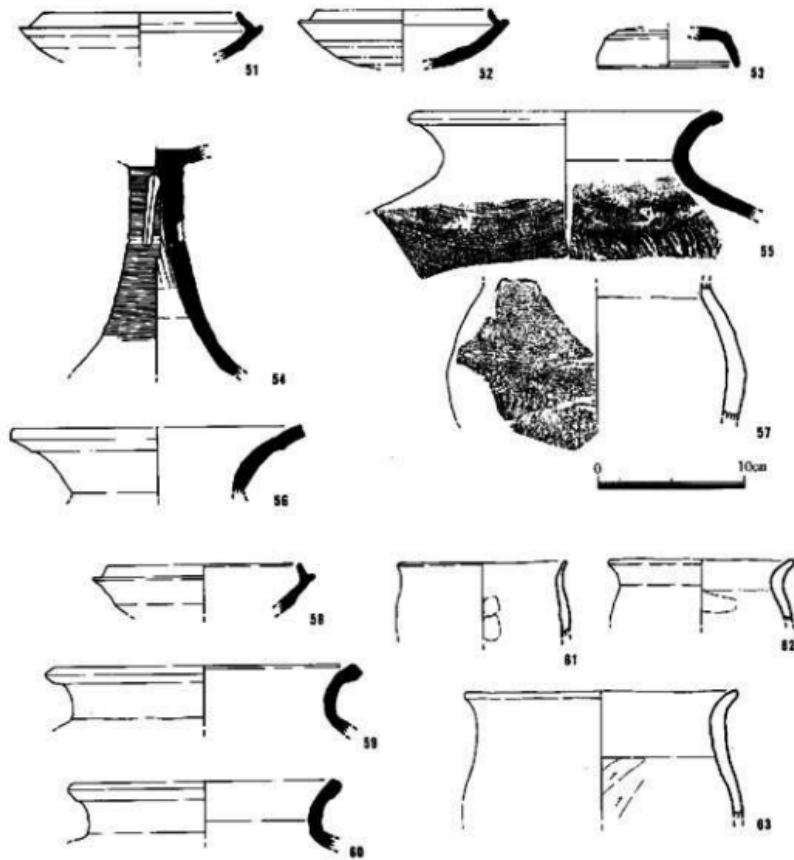


Fig. 79 SD01下層・最下層出土遺物 (1/4)

高台部である。38・39の高台部は、端部が短く、コ字状を呈す。40は杯底部1/3片で、復元底径8.2cmを測る。底部は平坦で、内外面の調整はヨコナデ。色調は灰白色で、焼成はややあまい。41は底の深い小杯1/2片。復元口径9.8cm、器高4.1cmを測る。口縁部は軽く外反する。42は蓋の1/6片である。天井部はヘラ削りで平坦、その他はナデ。体部には2条の沈線が巡る。上層下半から中層半の破片と接合している。43は高杯脚部1/2片。脚端径10.4cmを測る。全体に厚手の造りで透しはない。磨滅がひどく調整は不明。色調は灰白色で、焼成はあまり。44は小形壺の1/3片である。復元口径7.4cm、器高9.5cmを測る。外底部は手持ちヘラ削り、その他はヨコナ

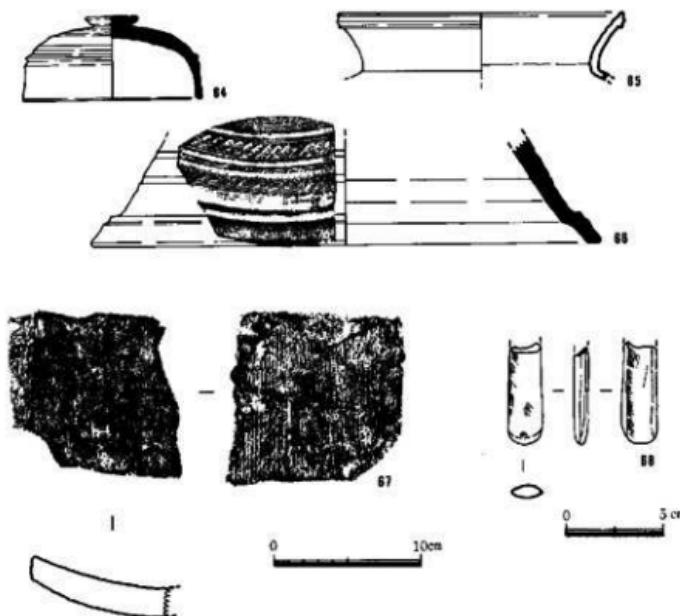


Fig. 80 SD01その他の遺物 I (1/3・1/4)

テ。45は長頸壺の口頸体部片。算盤形の体部から細く長い口頸部が付く器形である。復元体部径は19.6cmを測る。胎土は石英粒を多く含む。46は把手付壺の体部1/3片で、復元体部最大径23.4cmを測る。肩部に耳状の把手が付き、2条の沈線が巡る。体外面はヘラ削り、内面はヨコナデ。47は体の1/3片。下半に把手が付く。外面は回転ヘラ削りのちナデ調整。内面はヨコナデ。48は蓋の体部1/4片。体外面には格子目叩きを加える。色調は浅黄橙色を呈し、生焼けである。49・50は土師器。49は高台付杯底部1/4片で、復元高台径8.5cmを測る。50は牛角状を呈す把手。一部欠損面があるが、全体に指おさえ仕上である。

51~57は中層下半出土。52~57は須恵器。51・52は杯身。51は1/3片で、復元口径13.3cm、受部径16.5cmを測る。52は1/8片で、復元口径12.0cm、受部径14.4cmを測る。いずれも立ち上がりが、強く内傾するタイプである。52の内底部にはヘラ記号がある。53は蓋1/4片。復元口径9.6cmを測る。口縁内面には明瞭な段が付く。天井部は回転ヘラ削りで、平坦を呈す。54は高杯脚

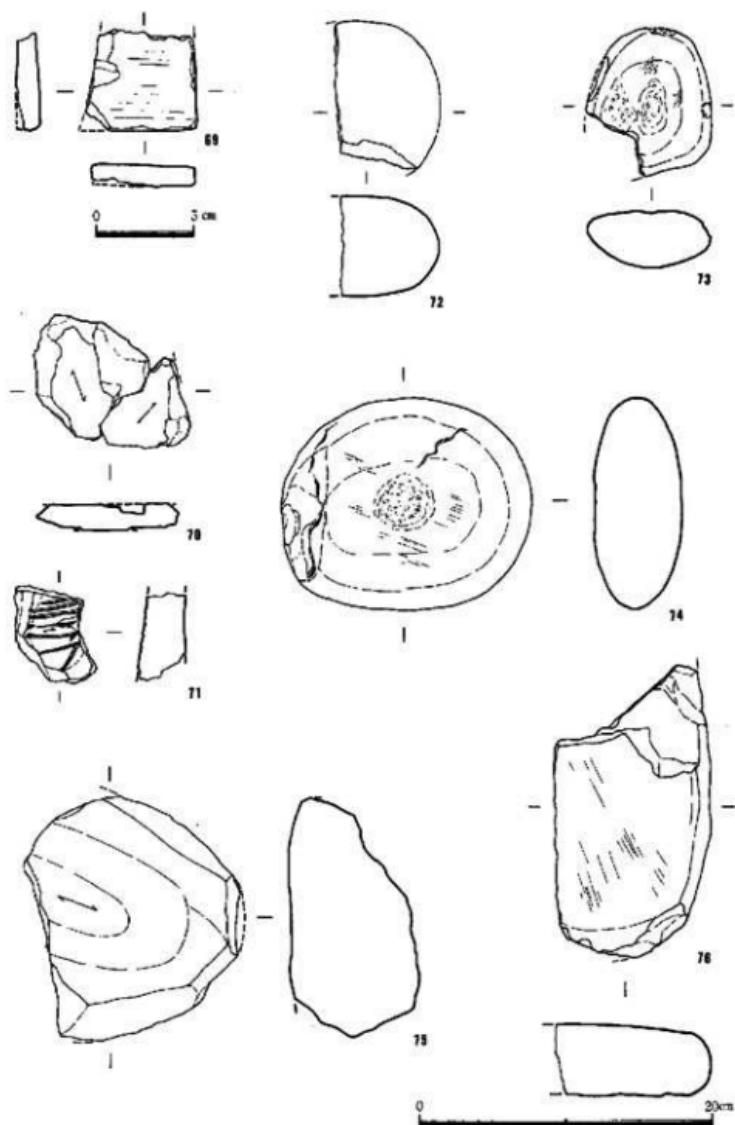


Fig. 81 SD01その他の遺物II (1/3・1/4)

部1/3片。長脚で長方形の透しが2段に入る。体面外はカキ目を施す。透しの切り込みは雑である。55・56は甕の口縁部片。55は1/3片で、復元口径21.4cmを測る。口縁端部は丸く、下縁状を呈す。体部上半の外面は木目直交印きのちヨコ刷毛。内面は同心円状の印きを加える。56は1/6片、復元口径20.0cmを測る。口端部はコ字状に肥厚し、直下に軽い段が付く。自然釉が付着する。57は土師質の甕体部1/4片。体部は上半がヨコ刷毛で下半が格子目印き、内面は指おさえのち印きのちナデである。色調は浅黄橙色を呈し、胎土に石英粒を多く含む。

58~63は最下層出土。58~60は須恵器。58は杯身1/6片。復元口径13.1cm、受部径15.0cmを測る。立ち上りはやや内傾する。60・61は甕口縁部片で、ほぼ同様の器形である。60は1/4片、復元口径21.6cm、61は1/6片。復元口径18.6cmを測る。60が61より一回り大きい。61の胎土は石英粒を多く含む。61~63は土師器。61・62は小形の甕。61は1/4片で、復元口径11.4cmを測る。頸部のしまりは弱い。器壁の磨滅は著しいが、内面には指圧痕がわずかに残る。61は1/6片で、60に比べ頸部はややしまる。復元口径12.6cmを測る。器壁は磨滅するが、外面にはタテ方向の粗いハケがわずかに残る。内面はヘラ削り。63は1/6片。復元口径18.6cmを測る。器壁は磨滅するが、内面はヘラ削りである。

64~76はその他の遺物である。64は須恵器の杯蓋で、有蓋高杯の蓋であろう。復元口径12.2cmを測る。古式の須恵器である。65は半島系と思われる土器の甕口縁部1/6片。復元口径20.0cm弱を測る。色調は明黄褐色を呈す。須恵器に似るが全体に軽い感じがする。66は大形器台1/10片で、復元脚端径35.0cmを測る。沈線による区画と横筋波状文が交互に入る。胎土に石英微粒を多く含む。67は平瓦片で、色調は浅黄橙色を呈し、焼きはややあまい。谷面は繩目、背面は細かい布目痕が残る。68はヘラ状を呈す不明石製品。表面は全体に丁寧な研磨仕上。断面は凸レンズ状を呈す。現存長3.4cm、最大厚0.5cm、重量2gを測る。碧玉製と思われる。64は下層、65は最下層、66は中層下半・67・68は上層出土。

69~76は各層出土石器・石製品。69は滑石製の不明石製品。現在長5.6cm、幅5.1cm、厚さ1.2cm、各面工具によりきれいに削られている。色調は銀灰色を呈す。70・71・75は砥石片。いずれも砂岩製である。71の上面には使用痕が溝状に残る。色調はいずれも赤っぽく焼けているようだ。72~74は磨石。72は安山岩系の石材を用いており、全面使用によりツルツルである。73は花崗岩製で一部欠失する。叩石としても用いられており、使用による敲打痕が上面中央と上小口に残る。74は、玄武岩のやや大形の偏平な転石を用いている。最大長17.1cm、幅14.9cm、厚さ6.0cmを計る。上面中央には敲打痕が残るが、他は擦りで磨滅が著しい。色調は灰白色を呈す。76は玄武岩質の作業台石の破片である。上面は平坦で、使用による擦痕が明瞭に残る。現存長19.0cm、最大幅10.5cmを測る。

SD05

SD01上面で検出した小溝である。浅く埋土は暗褐色粘質土を主体とする。

出土遺物 土師器や須恵器の細片が少量出土している。

3) 小結

当調査区では、古代という限られた時期の遺構を検出した。主な遺構は、溝SD011条と掘立柱建物SB03・04・06の3棟、土坑SK02の1基である。SD01とSB03・06は主軸方向がほぼ同一で、ほぼ同一時期が考えられる。SB04はSD01に切られ、先行する。SK02はSB03内にあり、SB03に伴う土坑と考える。SK02からは奈良時代の遺物が出上している。

SD01は調査区南側を真北から東西方向N-79°30'-Eに取って延びる大溝である。これは早良平野の条里の方向N-10°-Wにはば直交する溝である。調査区南側の第124次地点に、ほぼ並走して走る溝がある。両溝間の関係を図示したのがFig.82である。両溝間距離は約18mを計り、溝断面はいずれも逆台形で、溝幅は一週り第124次溝が大きい。溝底レベルは第124次溝が一段低い。しかし、溝埋土は、いずれも下層に地山ロームブロックを多量に含む点で類似する。第124次溝の続きは、東側の第3次・第82次地点で検出されている。更に金屑川東側の原遺跡の第10次調査・15次調査でも、これに間違すると思われる大溝が確認されている。調査者はこの溝を(註1)日野尚志氏が早良平野で復元した条里の里境から1町北側の東西ラインを通るとしている。

さてSD01の時期であるが、第3次調査では、溝から出土の遺物は、弥生時代から平安時代迄のものがあるが、量としては圧倒的に奈良時代・平安時代のものが多い。遺物の状況から平安時代には埋没したとしている。また原11次調査では8~9世紀の遺物が出土し、12世紀代の溝(註2)に切られる事から、それ以前の所産としている。当調査区では、地山ブロックの下層では、古墳時代後期以前の遺物を含むが、中層から上層にかけては奈良時代から平安時代の遺物が主体となる。上層の9世紀代の越磁の3や土師器の高台付碗などの形態から、平安時代の初め頃、9世紀前半代には埋没したと考える。概ね、第3次調査の溝の遺物と同時期のものを含んでいい。

これらの並走する溝の間を、当初道路と考えたが、幅が約18mと広すぎ、道路とは考えにくい。今後周辺の調査の増加を行って、再度検討したい。

(註1) 福岡市教育委員会「原遺跡3」市報第233集 1990

(註2) 福岡市教育委員会「有田・小田部 第8集」市報第155集 1987



Fig. 82 第164次SD01・第124次SD02間断面図 (1/240)

—有田地区の調査—

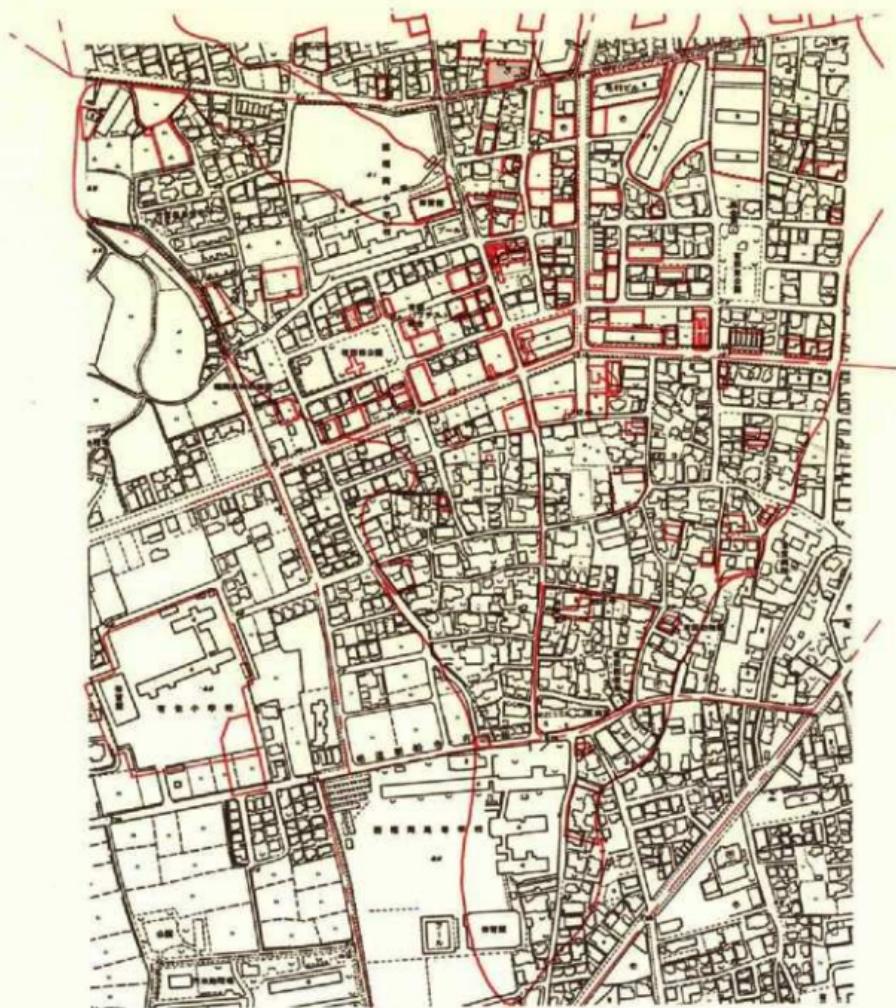


Fig. 83 有田地区調査地点位置図

6. 有田第110次調査（調査番号8623）

1) 調査区の地形と概要

調査区は早良区有田3丁目8-2に所在する。北へ八手状に広がる有田・小田部台地の南端部に位置する。現況は宅地であった。

昭和61年度に事前査定願いが提出された。これを受けて遺構が検出された南側を中心に発掘調査を実施した。調査は昭和61年5月28日から6月3日迄行ない、調査面積は申請面積482.64m²中117m²である。

調査区周辺では、昭和24年に東側の西福岡高校校地内で、校舎建設に伴って金海式甕棺墓群が発見され、中から細形銅戈が1振り出土している。また南側の第115次調査地点では弥生時代後期後半から中世にかけての遺構が検出されている。北側は文化財分布地図では、東西100m、南北130mの範囲が小田部城の推定地とされている。当調査区の標高は約10mで、道路を挟んで北側より約2.3mの比高で段落ちしている。道路掘開時にかなりの掘削が行なわれたと考えられる。

今回の調査では、遺構は表土5~10cmを剥ぐるとすぐ検出出来た。遺構面は北側では桃色か

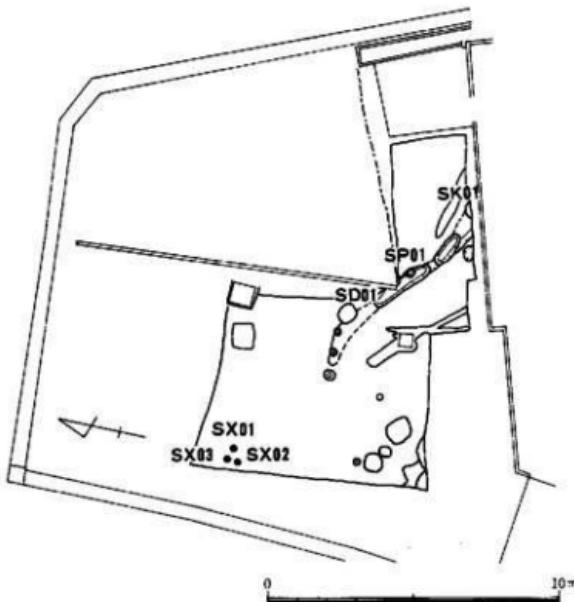


Fig. 84 第110次地点遺構配置図 (1/200)

ら黄色のローム、南側では橙色から明褐色のローム土で、南東側にかけて緩やかに傾斜している。遺構は比較的削平をまねがれた、南側を中心確認した。主な検出遺構は溝状遺構1条及び近代のへその緒埋納遺構3基である。出土遺物は、近世から近代にかけての陶磁器類が大半である。

2) 遺構と遺物

溝状遺構

SD01

調査区南側で検出した南東から北西へだらだらと走る小溝である。確認長7.5m、幅50cm、深さ5cm前後で、残りは非常に悪い。底面は凹凸が激しいが、全体的には南東側が低くなっている。埋土は黒褐色と粘質土を主体とする。

出土遺物 極めて少ない。弥生土器を含む土器片20点、陶器片1点、磁器片2点、黒曜石片1点である。いずれも細片で復元出来ない。

その他の遺構

埋壺

SX01~03 (Fig. 85, PL40) 近世近代の埋壺遺構である。北西側に固っている。SX01・02は直径35~45cmの円形土坑中に、陶器の急須を用いている。いずれも煤が付着しており、日常生活で使用したもの転用している。SX02には完形の染付磁器の蓋を蓋として用いている。SX03は直径30cmの円形土坑。高取焼の竹節瓶を用いている。内側には白磁の小皿が落ち込んでいた。

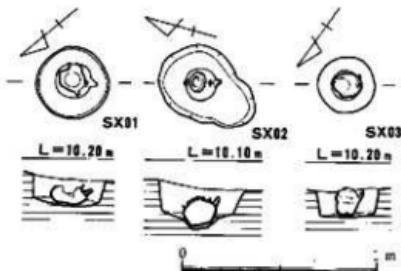


Fig. 85 SX01~03 (1/30)

3) 小結

検出遺構は、溝1条と近世のへその緒埋納遺構3基と少なかった。しかし、民俗学的には貴重な資料が得られたので、詳しい考察は加えられないものの、事実だけを報告する。地主の坂口氏によれば、調査区には江戸時代頃には建てられたと思われる、規模4×4間程の木造瓦葺きの建物があった。その建物は商家風の造りで、北半分は土間で、店舗として使われ、南側が居住部分であった。へその緒埋納壺は座敷部分の床下に埋められていた。座敷の南側には縁側が付く。当初後産処理用の胞衣壺かと考えたが、埋納場所が、胞衣を埋める場所でなく、へその緒を座敷の床下に埋める習慣があるという事で、へその緒埋納遺構とした。^(註1)

(註1) 福岡市博物館の福岡裕爾氏のご教示による。氏によればへその緒を壺の壺や小壺などにきちんと入れるのは古くても明治後半以降のことであり、本例はそういう点からしたら、それ以前の可能性が高い。

7. 第112次調査（調査番号8644）

1) 調査区の地形と概要

調査地は早良区有田2丁目9-2に所在し、調査面積は264m²である。標高約7.3mを測る。有田台地の最高所から南西へ下った台地のへり近く、東向きの緩斜面上に立地する。近接地の調査は行われていないが、北側80mの地点では弥生時代前期のV字溝や奈良・平安時代の建物や橋が検出されている。また南側80m附近では、弥生時代～中世の各種遺構が検出されている。

発掘調査は専用住宅立て替えのため、昭和61年10月21日から11月21日まで行った。20cm程の表土の下に橙色ローム層があり、遺構はこのローム層の上面で検出し、深い遺構はその下の八女粘土層をも掘り込んでいる。遺構の残り具合から、全体的に數十cmの削平を受けていると考えられる。検出した遺構は大小の掘立柱建物3棟、土坑18基などである。

2) 遺構と遺物

掘立柱建物（SB）

SB01 (Fig.87, PL.42)

調査区中央で検出した。SB02を切る。2×3間の個柱建物で、主軸をN-15°30'-Eにとる。梁間全長3.9m、桁行全長5.4mを測る。柱穴径は26~48cm、柱径は10~18cmを測る。柱穴の深さはバラツキがある。炭化物まじりの焼土が出土しており、火災にあった可能性もある。

出土遺物 (Fig.88, PL.47) 出土遺物は少なく、土師器2点、須恵器1点、鉄津1点、青磁1点が出土した。1は青磁の皿で、口径9.6cmを測る。口縁直下がやや肥厚する。素地に水引き痕が残り、灰オリーブ釉を全面に薄くかける。

SB02 (Fig.87, PL.42)

SB01東側で検出した。梁間方向は2間で、長さ4.8mを測る。全体の一部の検出のため、桁行方向は不明である。梁間距離は2.25m、2.55m、桁間距離は2.85m、2.4mを測る。方位はN-34°-Eを測り、柱穴は一辺1mを越える大型の柱穴である。棟持ち柱の柱穴がやや深い他はほぼ同レベルに掘られている。柱径は16~24cmと柱穴の割には小さい。棟持ち柱のみ礎石を敷いている。礎石は柱穴を少し埋めた後に敷き、柱の乗る部分だけが水平になっている。

出土遺物 (Fig.88, PL.47) 弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器などの破片約120点が出土した。

2~4は瓦器碗で、2は口径13.2cmを測る。体部はゆるやかな丸みを帯びる。口唇部は丸く仕上げる。灰白色を呈し、全面ヨコナデで仕上げる。3は口径16.2cmを測る。口唇部は丸く仕上げる。また口縁直下はやや器壁を薄くしている。体部は途中で段をつけ、段から上は回転ヨコナデ、下はヘラケズリを施す。灰白色を呈す。4は口径13.6cmを測る。口唇部は尖りぎみ

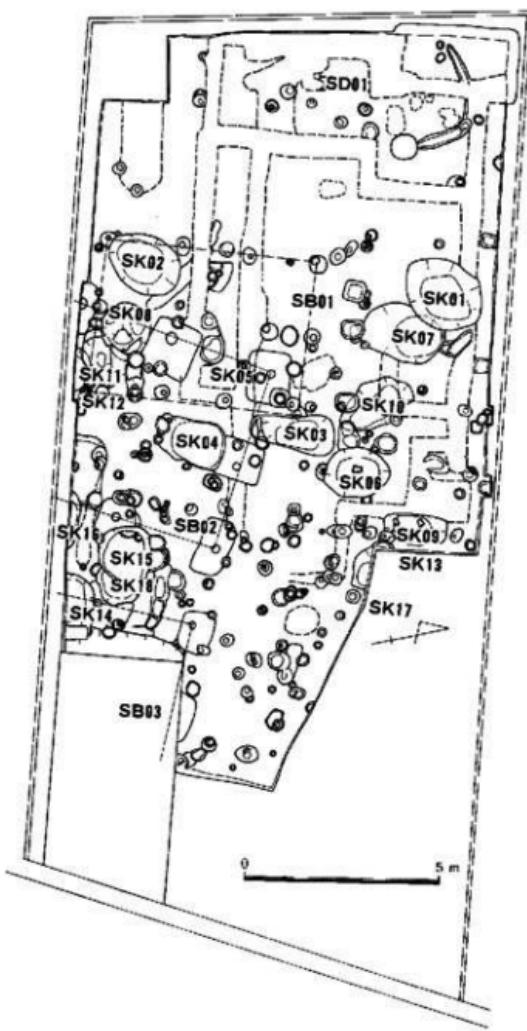


Fig. 86 第112次地点遺構配図 (1/150)

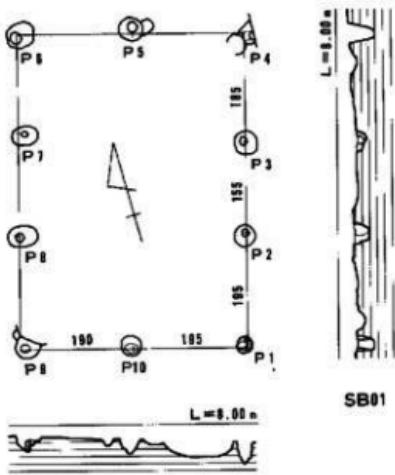
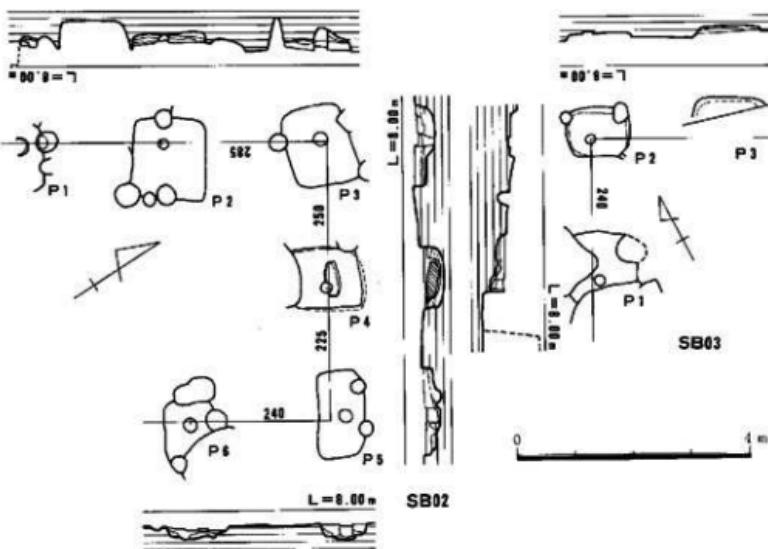


Fig. 87 SB01~03 (1/100)

で、体部は途中で、折れ曲がっている。浅黄色を呈し、全面ヨコナデ調整を施す。5は瓦質土器で、盤である。口径27.8cm、推定器高4cm強を測る。体部は丸みを帯び、器壁は底部にいくほど厚くなる。外面体部下半はヘラケズリ、上半はヨコナデ、内面は指ナデ調整を施す。灰褐色を呈する。6は棟持ち柱の下の礎石である。長さ63.8cm、幅26.2cm、厚さ15.5cmを測る。中央部がやや凹んでいる。花崗岩の転石を使用している。

SB03 (Fig.87, PL.42)

SB02東側に並列するが、現状で見る限り方位はN-29°-EとSB02とわずかに異なる上、梁方向の筋も通っていない。またSB02東側の柱筋との距離は約

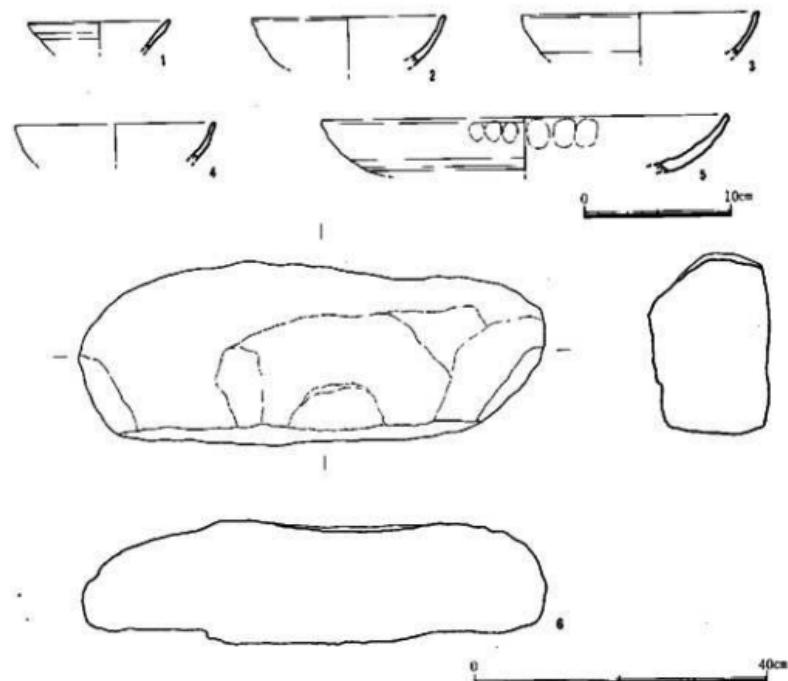


Fig. 88 獨立柱建物出土遺物 (1/4・1/6)

4mと、通常の建物同士では軒が当たると思われるほど近い。柱穴3基分のみ検出した。柱穴はSB02と同じく方形か長方形を呈し、一辺1mを越える。柱痕跡は径約18cmと小さい。揃持ち柱での礫石は確認できなかった。

出土遺物 土師器約40点、須恵器1点が出土したが、いずれも細片のため固化し得なかった。

土坑 (SK)

SK01 (Fig.89, PL.43)

調査区北壁近くで検出した。SK07を切っている。平面形は卵形に近く、長径2.23m、短径1.72m、深さ1.12mを測る。埋土は自然堆積で、西から東に向けて堆積している。

出土遺物 土師器、須恵器、陶磁器の細片が6点出土したのみである。

SK02 (Fig.89, PL.43)

調査区南側に位置し、SB01を切っている。平面形は卵形に近く、長径2m、短径1.45m、深

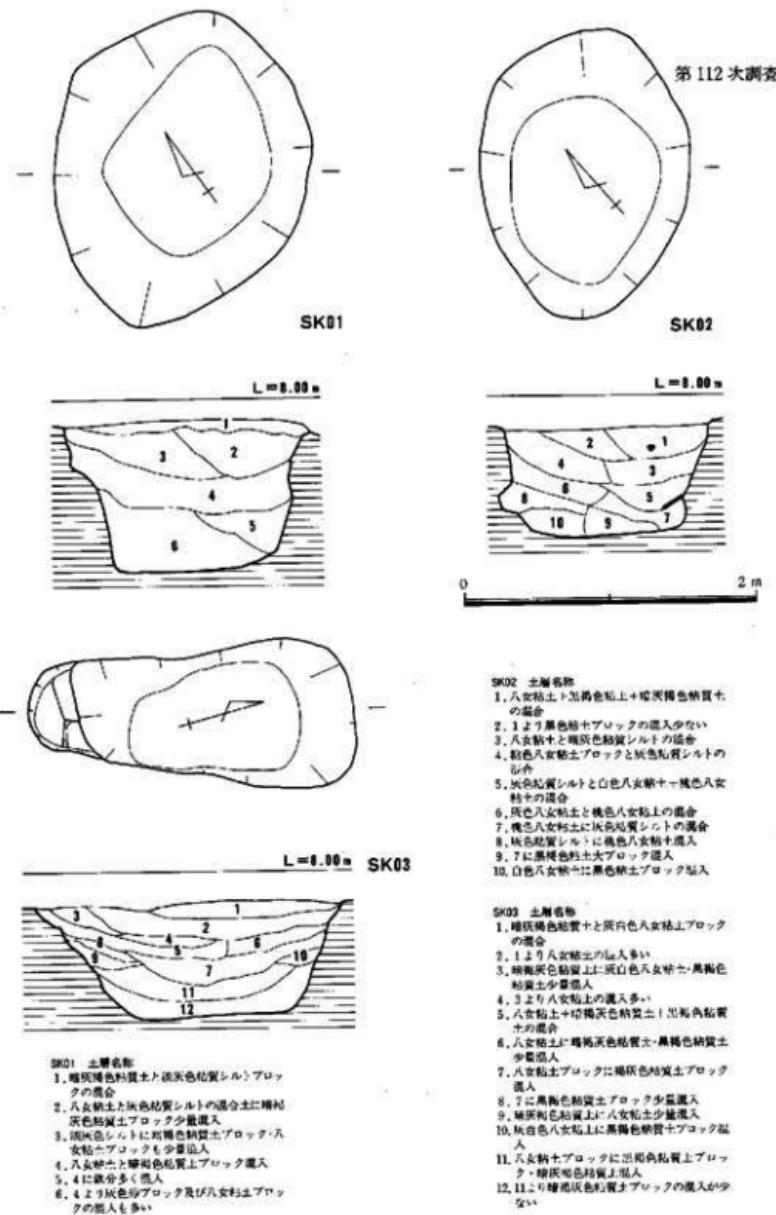


Fig. 89 SK01~03 (1/40)

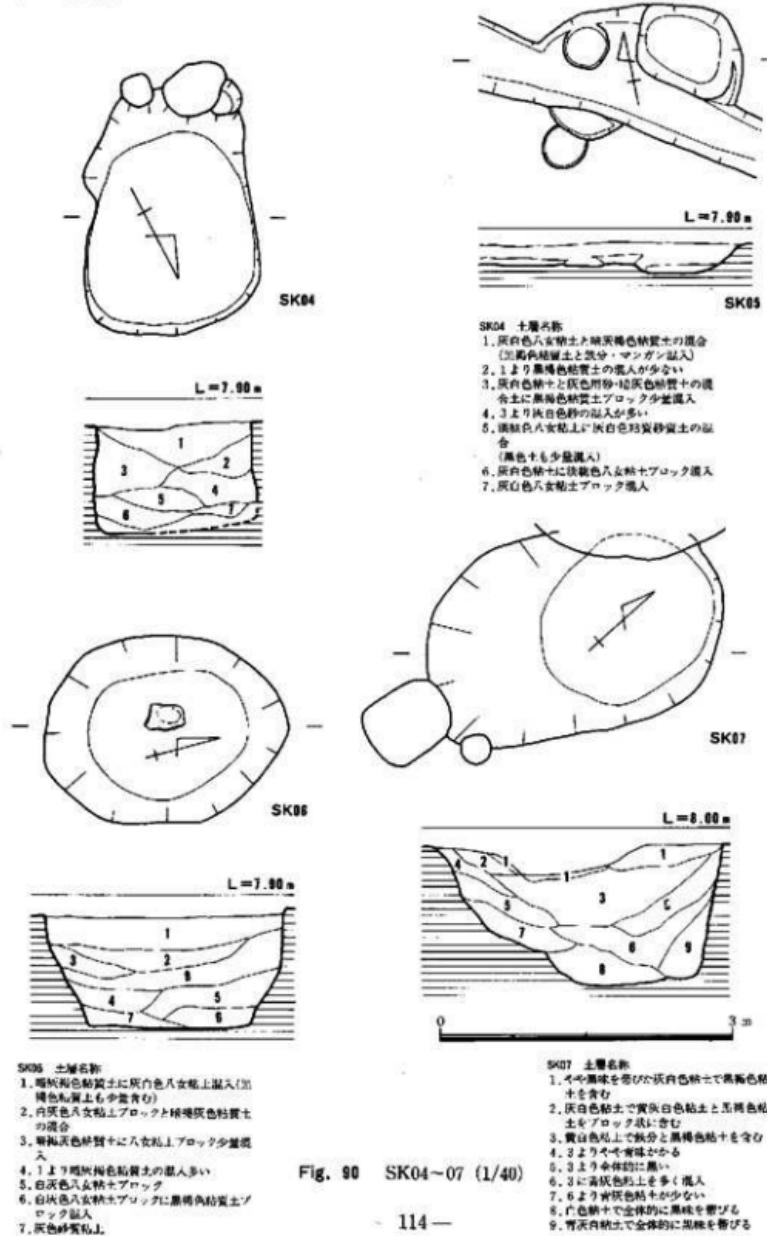
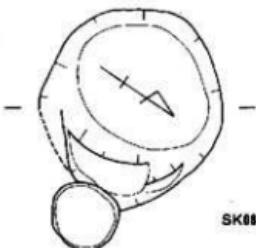
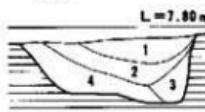


Fig. 90 SK04-07 (1/40)

第112 大調査

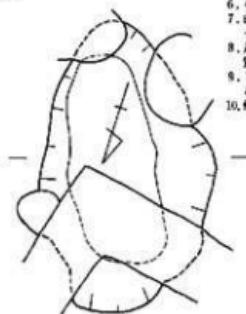


SK08



土層名稱

1. 黒灰色粘質土・灰白色八女粘土ブロックの混合土に黒褐色粘質土ブロック少量混入
2. 1より灰白色八女粘土の混入少ない
3. 灰褐色粘質土に灰白色八女粘土ブロック混入
4. 黑褐色粘質土に少量含む
5. 灰白色八女粘土と灰白色八女粘土ブロックの混合



SK10

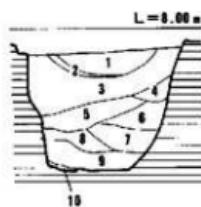
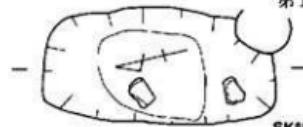
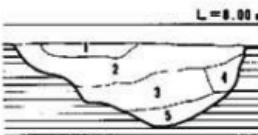


Fig. 81 SK08-11 (1/40)



SKII



土層名稱

1. 黑灰色粘質土ブロックで白色粘土・培養白色粘土ブロックを多く含む
2. 白色粘土ブロック
3. 白色・黒褐色・灰白色粘土ブロックに少量の黑色粘土ブロックを含む
4. 黑褐色粘質土の少量の黄白色・白色粘土を含む
5. 黄白色粘土ブロックで少量の黑褐色粘質土で白色粘質土ブロックを含む
6. 4とはほぼ同じだが2
7. 白色粘土ブロックで少量の黑褐色粘質土ブロックを含む
8. 黄白色の粘土ブロックで少量の黑褐色粘質土を含む
9. 7に近いが少量の白色粘土ブロックを少量混入する
10. 無分が黒褐色に変化

土層名稱

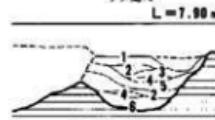
1. 黑灰色粘質土に灰白色八女粘土・黒褐色粘質土も少量混入
2. 灰白色八女粘土に黒褐色粘質土と灰白色粘土ブロック混入
3. 2より幾灰色の質土の混入少ない
4. 2に黒褐色粘質土大ブロック混入
5. 黄白色八女粘土ブロックに黒褐色粘質土少量混入



SKII

土層名稱

1. 黑褐色粘質土に灰白色八女粘土ブロック混入
2. 1に黒褐色粘質土ブロック少量混入
3. 灰褐色粘質土と灰白色八女粘土ブロックの混合
4. 灰褐色粘質土に灰褐色八女粘土ブロック混入
5. 灰白色八女粘土ブロック
6. 灰褐色粘質土シートに灰褐色粘土ブロック混入



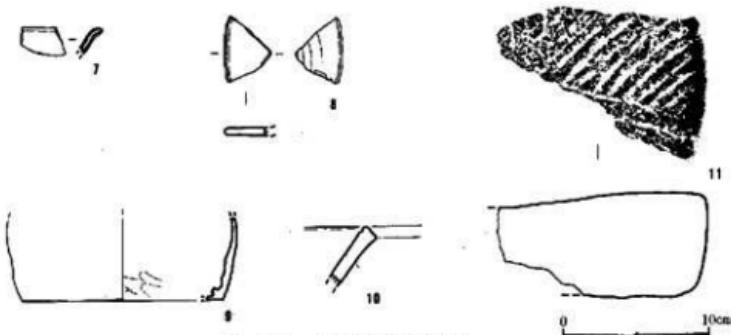


Fig. 92 上坑出土遺物 (1/4)

さ78cmを測る。北西壁の下部が部分的に外に突出している。埋土は中央附近で左右に大きく分削されているが、基本的には西側からの流入土と思われる。

出土遺物 土師器、鉄製品、鉄滓の細片が約40点出土した。

SK03 (Fig.89, PL.44)

調査区中央附近で検出した。平面形は洋梨形を成し、長さ2.24m、北側の幅1.04m、南側の幅88cm、深さ80cmを測る。幅の狭い南端部分は3段の階段状に造っている。埋土は自然堆積。

出土遺物 (Fig.92, PL.47) 図示した2点以外では、鉄滓、木炭、焼土が出土したのみ。

7は青磁碗の外反する口縁部片で、両面に明緑色釉を厚くかけている。素地は白色を呈する。
8は褐釉陶器で蓋であろうか。両面に暗褐色釉を薄くかけている。素地は灰褐色を呈する。

SK04 (Fig.90, PL.43)

SK03南側で検出した。SB02の柱穴を切っている。平面形は長方形に近く、長さ1.70m、幅1.12m、深さ70cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

出土遺物 弥生土器2点の他、土師器、須恵器、鉄製品などの細片が約40点出土した。

SK05 (Fig.90, PL.44)

SB01内で検出した。平面形は長方形に近く、長さ1.54m、幅1.16m、深さ20cmを測る。この土坑の外側に建物の基礎溝を挟んでつながると思われる深さ10cmの大きな落込みがあるが、SK05との関係は不明である。

出土遺物 土師器に細片が1点出土しただけである。

SK06 (Fig.90, PL.44)

SK03北東側に隣接する。平面形は梢円形を呈し、長径1.67m、短径1.28m、深さ84cmを測る。中央床面近くに長さ30cm大の角砾1点があった。埋土はわずかにレンズ状に堆積する。

出土遺物 弥生土器1点の他は、土師器、須恵器、鉄製品の細片などが約30点出土した。

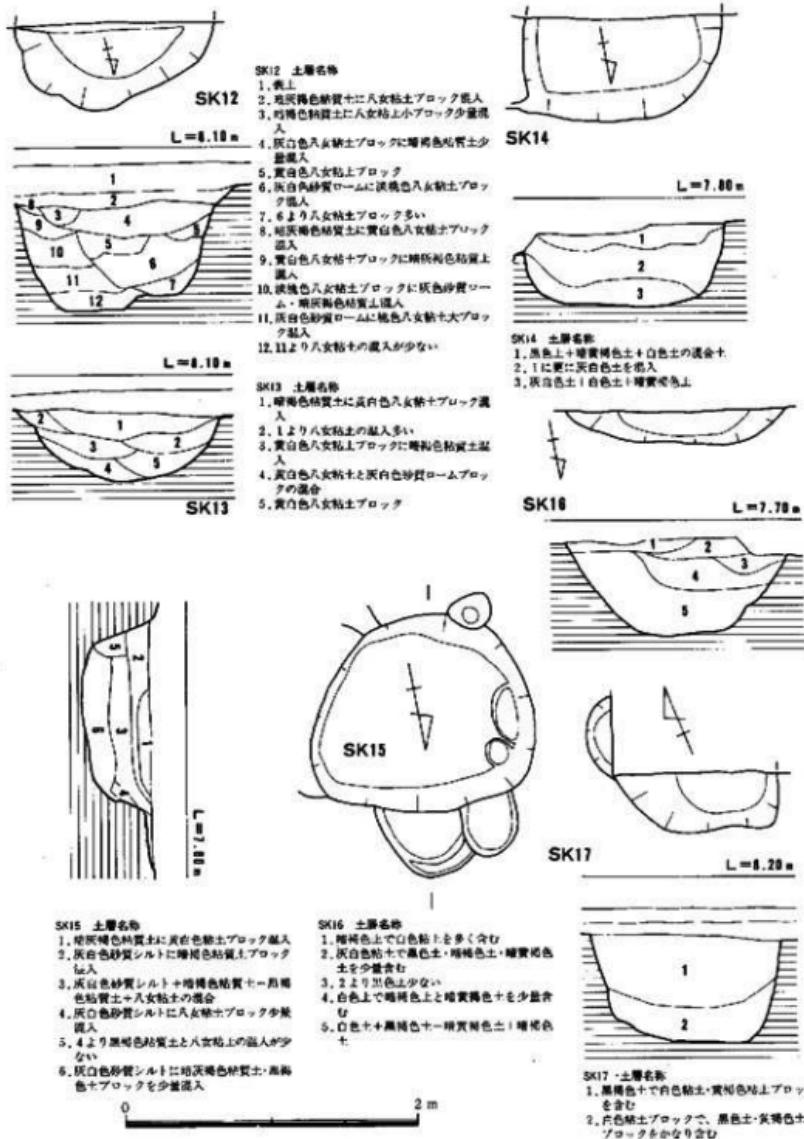


Fig. 83 SK12~17 (1/40)

第112次調査

SK07 (Fig.90, PL.43)

調査区北側にあり、SK01に切られる。平面形は長椭円形を呈し、長径2.11m、短径1.42m、深さ1.01mを測る。南壁はゆるやかに落ち、北壁は垂直に近い。

出土遺物 須恵器1点と陶器1点が出土している。

SK08 (Fig.91, PL.44)

調査区南側で検出した。平面形は円形に近く、最大径1.38m、深さ44cmを測る。東側は2段になっている。埋土は自然堆積である。

出土遺物 出土遺物はない。

SK09 (Fig.91, PL.44)

調査区北東隅で検出した。平面形は長方形に近く、長さ1.60m、幅80cm、深さ63cmを測る。床面は平坦ではない。床面近くに長さ20cm大の角礫が2個あった。

出土遺物 上師器2点、陶器1点が出土した。

SK10 (Fig.91, PL.45)

SK06西側で検出した。平面形は卵形に近く、長径2m、短径1.23m、深さ86cmを測る。埋土は大きく上下2層に分れ、下層は鉄分を粒状に多く含んでいる。また最下層には鉄分が沈殿して塊状になった層が認められた。

出土遺物 土師器7点、須恵器1点、鉄滓3点が出上した。

SK11 (Fig.91, PL.45)

調査区南側で検出した。SK08に切られる。平面形は少し曲った長椭円形を呈し、長径1.56m、短径72cm、深さ54cmを測る。両端は2段掘りである。床面の平坦部分は中央にわずかしかない。埋土は自然堆積である。

出土遺物 出土遺物はない。

SK12 (Fig.93, PL.45)

調査区南壁で検出し、SK11に切られている。全体の約半分を検出し、現状の長さ1.35m、深さ78cmを測る。埋土は左右に大きく2つに分れ、掘り直されていると考えられる。

出土遺物 出土遺物はない。

SK13 (Fig.93)

調査区北東隅で検出した。大半は調査区外にあり、調査区内はSK09やピットに切られて、平面的な形状はほとんど不明である。現状の長さ1.37m、深さ50cmを測る。埋土は自然堆積。

出土遺物 出土遺物はない。

SK14 (Fig.93, PL.45)

調査区南東隅で約半分を検出した。現状平面形は長方形に近く、長さ1.35m、深さ54cmを測る。埋土は3層に分れる。

出土遺物 土師器、須恵器等6点が出土した。

SK15 (Fig.93, PL.46)

調査区南東側で検出し、SB02を切る。平面形は楕円形に近く、長径1.56m、短径1.35m、深さ53cmを測る。床面西壁沿いに深さ3cm前後のピット2つがあった。

出土遺物 (Fig.92, PL.47) 土師器、須恵器、陶磁器など12点出土した。

9は陶器で瓶の底部である。外面に灰白色の釉を薄くかける。底近くの内面は指ナデにより凹凸が激しい。また内面上部に当て具痕が残っている。10は瓦質土器で、摺鉢またはこね鉢である。浅黄橙色を呈している。11は石臼の破片で、現存の長さ15.5cm、推定径24.4cmを測る。安山岩系の石材を使用している。

SK16 (Fig.93)

調査区南壁で全体の一部を検出した。現状の長さ1.51m、深さ58cmを測る。埋土は東から流入した自然堆積である。

出土遺物 須恵器の細片が1点出土しただけである。

SK17 (Fig.93, PL.46)

調査区北東壁で一部のみ検出した。現状の長さ1.12m、深さ67cmを測る。西壁はゆるやかに落ち、東壁は垂直に近い。

出土遺物 鉄滓1点と焼土が出土しただけである。

SK18 (PL. 46)

調査区南東隅で検出した。SK15に切られ、SB03を切っている。現状の長さ1.21m、深さ56cmを測る。

出土遺物 出土遺物はない。

溝状遺構 (SD)

SD01

調査区北西隅で検出した。北側を擾乱で破壊されているため全長不明だが1m前後かと思われる。幅40cm前後で、深さ5cmを測る。

出土遺物 土師器の細片1点が出土した。

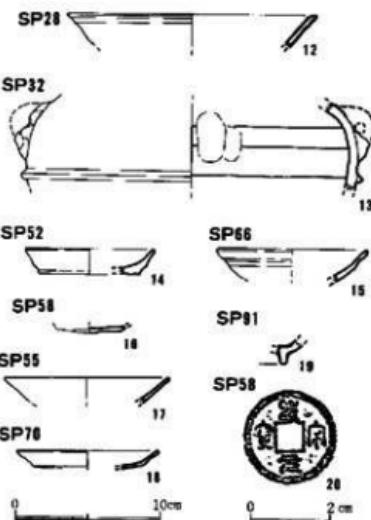


Fig. 94 ピット出土遺物 (1/4・2/3)

SD02

調査区南東隅で検出した。西端をピットに切られているが、長さ約1.78m、最大幅44cm、深さ32cmを測る。東側から階段状に3段に掘られている。

出土遺物 上師器4点、須恵器1点が出土した。いずれも細片である。

ピット出土遺物 (Fig.94, PL.46・47) 12は白磁の皿で、口径17.2cmを測る。口縁端は外反し、体部は直線的である。白色の透明釉をかけ、外面には気泡が認められる。13は瓦質上器で、湯釜である。凸沿部分の径23.6cmを測る。外面体部はヨコナデ、耳は指押さえで、内面は工具によるナデで、その調整の際につけた沈線が3本認められる。14は上師器の皿で、内面全面や外面の一部にススや油が付着していることから灯明皿と考えられる。口径9.0cm、器高1.8cmを測る。15は青磁の皿で、口径10.4cmを測る。画面にオリーブ色の釉を薄くかけている。16～18は土師器の皿で、16は底部片で、底径4.5cmを測る。調整不明。17は口径11.4cmを測る。全面ヨコナデ調整を施している。18は口径9.8cm、器高1.2cmを測る。調整は不明。19は青磁の碗の高台片である。全面緑灰色釉を施す。20は銅錢で、「聖宋元宝」である。直径2.4cm、重さ1.5gを測る。

3) 小結

検出した遺構は大型掘立柱建物の時期と大型土坑群の2時期に大きく分けられる。

大型建物から出土した遺物は細片が多く、全体の器形がわかるものはない。時期の目安になるのは2～5の瓦器である。2～4の碗は上半部のみの遺存で、詳細な時期はわからないが、丸味を帯びた体部をもち、調整はロクロによる横ナデのままか、粗い磨きを施したもので、概ね12世紀後半（平安末～鎌倉初）の様相を呈している。該期の遺構は近年の調査で点々と検出されているが、まとまった展開を見せていない。当地区の大型建物がどういう役割をもつものなのか現時点では不明であるが、その規模やこれまでの調査結果から考えれば、該期遺構の中心的建物の1つである可能性は高い。

大型土坑群についても出土遺物はほとんどなく、正確な時期の手立ては少ない。細片はあるが、出土した陶磁器は明代始め頃のもので、14世紀末～15世紀前半が上限である。ピット出土の土師器の皿や湯釜が同時期ならばさらに時期が下るであろうが、その証拠はない。さらに上坑の用途については、形態や規模に共通性がほとんどなく、配置にも規則性が見られず、全体の特徴としては、自然堆積の埋土に鉄分を含むこと、規模が大きく、八女粘土を掘り込んでいることなどである。粘土の採掘跡と考えられないだろうか。採掘後は遺物がほとんどないことと自然堆積であることから、穴はそのまま放置され、周辺での居住の可能性は極めて低いと考えられる。とすれば、16世紀代に当地の西側で構築された城状遺構に使うための粘土の採掘跡と考えられないか。証拠はないが。

8. 第158次調査（調査番号9020）

1) 調査区の地形と概要

申請地は有田1丁目34-3に所在し、有田台地の北西から開析する小谷と南西側を室見川の開析とにはさまれた、北西に延びる西小支丘の基部中央付近に位置する。標高は13mである。

周辺では1^(H1)・2次^(H2)、12次^(H3)、31次^(H4)、116次^(H5)、141次、146次^(H6)調査が行なわれ、12次調査地点で奈良時代炉址、146次調査地点で古墳時代後期から古代にかけての櫛列が検出された他、各調査地点で古墳時代の堅穴住居址と、同期から律令期にかけての掘立柱建物を検出している。

平成2年2月20日、専用住宅建設のための事前審査願いが申請され、これを受け同年2月22日に試掘を実施した。結果、20~25cmの表土下で柱穴を多数検出、周辺部の調査結果から6

~9世紀間の掘立柱建物と判断された。現地表面から遺構面までが浅く、盛土等の工法変更を含め協議を行なったが道路面との段差が大きい等工法変更が困難であるため本調査を実施することになった。

本調査は平成2年7月9日から同年7月27日まで実施され、申請面積232m²中214m²の調査となつた。調査中の排土処理を調査区内で行なつたため調査は南北の2回に分け実施した。

旧状は道路面より70cm程高い畠地で表土下20~25cm程で赤褐色の鳥栖ロームの基礎層に達する。

検出された遺構は櫛列2条、掘立柱建物7棟、土壙1基、溝1条でいずれも古墳時代後期の遺物を検出している。

遺物は須恵器・土師器と少量の黒曜石片のみで、総量でコンテナ1箱に満たない。

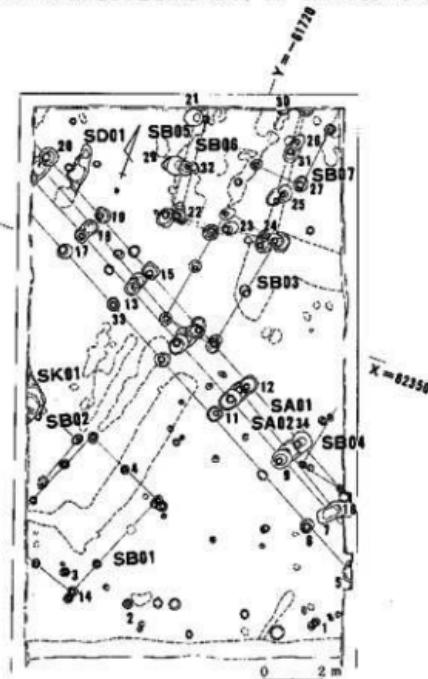


Fig. 95 第158次調査区遺構配置図 (1/200)

2) 遺構と遺物

獨立柱體物

SB-01 (Fig. 96, PL. 49)

調査区南西部に位置する梁間2間(2.15m)・桁行3間(4.4m)の側柱建物である。主軸をN-23°-Eにとる。柱痕跡は17~20cm、掘方径は28~34cmを測る。梁間と、桁行の中間の間隔が1.55~1.6mと広く、桁行の両端の柱間が1.3~1.35mと狭いのが目立つ。遺物はSP-4で土師器の小片を検出したのみである。

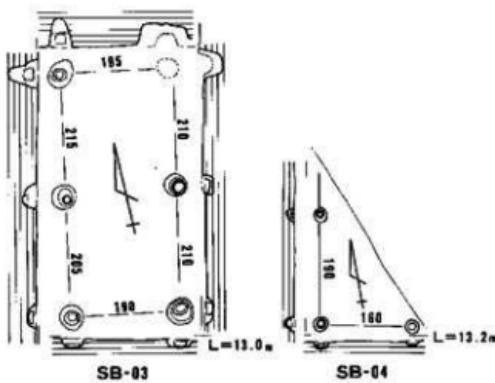
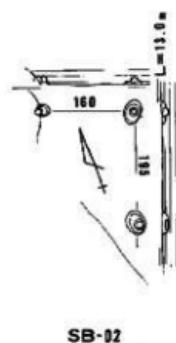
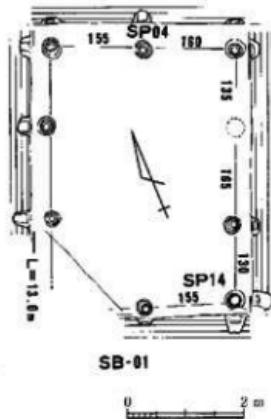


Fig. 96 SB01~04 (1/100)

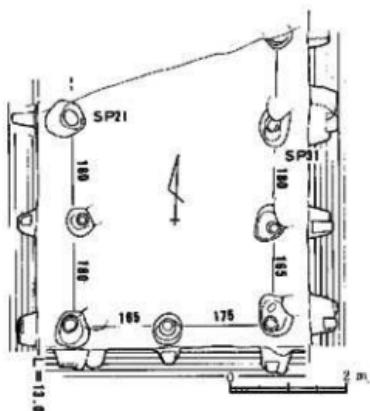


Fig. 97 SB05 (1/40)

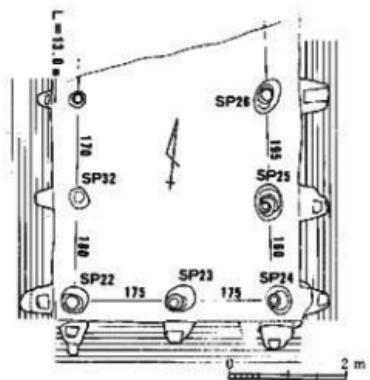


Fig. 98 SB06 (1/40)

SB-05の立て替えと考えられ、SB-05の大部分の柱穴を切っている。SB-05と同様の規模で梁間2間(3.5m)、桁行3間(5.0m)以上と思われる。柱痕跡、掘方はSB-05より若干小振りになっており、柱痕跡で径18~20cm、深さ15~30cmを測り、掘方径は30~60cmとばらつきがある。主軸はN-7°-Wにとる。

出土遺物 (Fig.102, PL.51)

SP-22, 24, 25, 26から土師器、須恵器の小片を検出している。10はSP-24からの出土で組

方径は36~50cmを翻る。SB-06を切っている。

SB-04 (Fig. 96, Pl. 49)

調査区中央東端部に位置するため建物の南西端部のみの検出であるが、31次調査区のSB-04と同一の建物で2間(3.7m)×2間(4.3m)の規模となる。梁間の柱間で1.6m、桁行が長く1.9mを測る。柱痕跡は細く10~14cm、掘方径は22~26cmを測る。主軸はN-11°-Eによる。

SB-05 (Fig. 97, Pl. 49)

調査区北端部中央に位置し、SB-06・03に切られる。建物の北端部が調査区外であるため全容が明らかでないが、梁間2間(3.4m)、桁行3間(5.0m)以上のしっかりした建物で柱痕跡、掘方ともに深くかつ大きい。主軸をN-6°-Wにとる。柱痕跡は径20~24cmで深さ25~50cmを残している。掘方方も大きく径50~70cmを測る。

出土遺物 (Fig.102 PL.51)

SP-21、29、31から土師器、須恵器を検出している。08は須恵器坏塗の小片でSP-21の出土。色調暗灰色で焼成良好。内外面ともヨコナテを施され、口唇内面に段をなす。III A～III Bの古期と思われる。09は須恵器坏身の受け部の小片である。色調は外面淡灰色、内面淡紫灰色で焼成良好。内外面ともにヨコナテ調整である。SP-21の出土。III B期と思われる。他に土師器の甌、竈の小片を検出している。

SB-06 (Fig.98, PL.49)

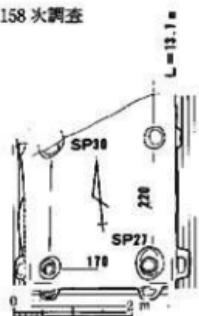


Fig. 99 SB07 (1/100)

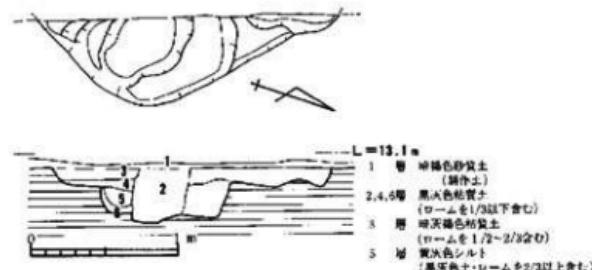


Fig. 100 SK01 (1/40)

恵器壺の口縁部小片である。口縁部がゆるい段をなし、外面に2条の凹線を施す。調整は内・外面ともヨコナタで、外面に自然軸がかかる。

SB-07 (Fig.99, PL.49)

調査区北東端部に位置するため建物の南半部のみの検出であるが、SB-03と直列しており、同様に1間×2間の小型の建物と考えられる。梁間はSB-03よりやや狭く1.7m、柱行の柱間は2.2mを測る。柱痕跡は20~26cm、掘方溝は36~56cmを測る。主軸はN-7'-Wにとる。

土壤SK-01 (Fig.100, PL.49)

調査区西端中央部で検出されたが、遺構の東部のみで他は調査区外である。一边が1.5m以上の隅丸方形の浅い部分と径90cm・深さ30cm程の円形部分の2段の掘り込みになっている。土層断面の観察を行うと、円形の掘り込みの中央部に径35cmの柱痕跡が確認できた。この土塙が単独であるのか、西側に群をなして大型の掘立柱建物となるのか現時点では判断しかねるが、後者の可能性が高いと思われる。遺物の検出はない。

柵列

SA-01 (Fig.101, PL.49, 50)

今回の調査の主体を成す遺構で、調査区中央を北西から南東方向に斜断している柱穴3本単位の柵列で、6間分15.7m程を検出した。3本単位の柵列として、遺跡群内で8例目である。⁽⁴⁷⁾ 1本単位の柵列SA-02に重複し、これを切っており、SA-02の立て替えと判断される。第31次調査のSK-01はこの柵列の中央と東側・SA-02の柱穴の切り合いである。

各柱筋の間隔は2.4~2.7m、横3本の間隔は60~85cmでかなりばらつきがあり、柱筋はまっすぐ通らない。よって方位はN-60°~62°-Wのぶれがある。柱痕跡は径20~24cm、中央列が深さ30~55cm、左右列が15~30cmと浅く、中央を中心に左右が補助的な構成をなしている。この特徴は6次調査のものと共通している。覆土は黒褐色土である。掘方は30~70cmの円形から梢円形で中央が大きくなる傾向がある。覆土は黒褐色と一部暗褐色土に地山ロームのブロックを多く含むものである。

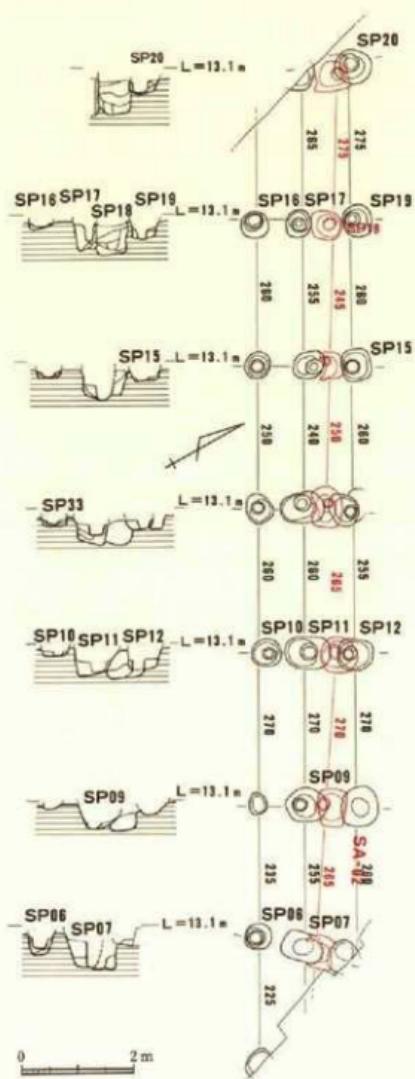


Fig. 101 SA01・02 (1/100)

柱穴3本の配列は西から5列目までは間隔を2.6~2.7mとほぼ並列しているが、6列目は南側が柱筋の間隔を15~35cmつめて傾斜している。この間隔の変化は102次・107次ともにコーナー手前の3列目から内側の柱筋の間隔を40~50cmつめ放射状をなすよう配置されており、このSA-01が同じ配置をとるならば、SP-6・7の列から31次調査のSK-01をとりこんで5.3m程東から南に90°振ることになる。

遺物 (Fig.102, PL.51)

柱穴内からの出土のため検出した遺物は少なくほとんどが圓化不能な小片である。01は須恵器環蓋でSP-13掘方出土。口唇内側に浅い段をなす。02は須恵器環身でSP-17の掘方出土。口縁部を欠くが立ち上がりは高く、受部下に回転ヘラケズリが見られる。03とともにIII A期であろう。03はSP-6出土。須恵器高环の環部小片である。III B期であろう。04は須恵器広口壺でSP-9出土。内・外側ともヨコナデであるが外面に叩痕が残る。05は土師器の甕で、SP-19からの出土。胴部内面に木目直交平行弧線の當て具痕があり、これを粗くヨコにナデている。外面に叩痕は残らず、ヨコ板ナデ後ケンマ様の粗いヨコヘラナデが施される。浅い沈線が一条見られる。色調は黒褐色。

SA-02 (Fig.101, PL.49・50)

SA-01の中央と北側の柱穴にはさまれた位置で検出された1本柱の構列で、柱

筋の間隔はこれらとまったく同様である。覆土がSA-01の黒褐色と異なって暗褐色土に地山ロームを1/2~2/3以上含んでおり、遺構検出当初はSA-01の2列分の柱穴の布据部分と認定していたが、これらの上層断面観察によって別個の柱穴であることが判明。さらに掘削後、柱痕跡を検出すことに至ってこれらを3本組の櫛列SA-01以前に構築された櫛列SA-02とした。

柱筋の間隔は2.45~2.7mで、柱痕跡の位置もかなりばらつきがあり東西両端の柱穴の芯芯では柱筋はまっすぐ通らない。西側4番目までとそれ以東の三つの柱穴にわけると柱筋はまっすぐに通り、東側の列が西側の列に30cmも北側にずれ平行する形となる。このずれた部分に門等の施設も考えてみたが102・105・107次等、皆柱筋は大きく乱れており、これらと同じであれば一連のものとしても大過ない様である。

柱痕跡はSA-01より小さめで15~20cm程であるが深さはSA-01の中央柱と同程度である。掘り方は径45~60cmの円形から稍円形である。

覆土は暗褐色土に地山ロームを1/2~2/3以上含むもので、柱を抜き取ってただちに埋められたものと思われる。

遺物 (Fig.102, PL.51)

遺物はSA-01以上に少なく図示できるものは2点のみである。06は土師器壺でSP-18の掘り方出土。口縁全周の1/5程の残存で、復元は径13.4cm、器高3.7cm、内外面ともヨコナデ後、粗いケンマを施す。07は土師器要で同じくSP-18出土。外面はヨコナデ内面はヨコナデ後粗いヘラナデがなされる。外面黒褐色、内面暗褐色を呈する。

SA01

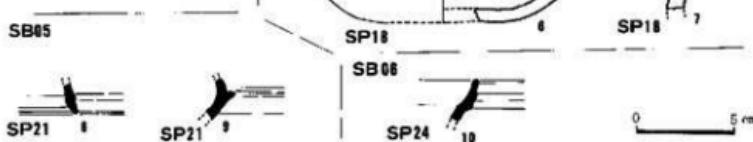


Fig. 102 出土遺物 (1/3)

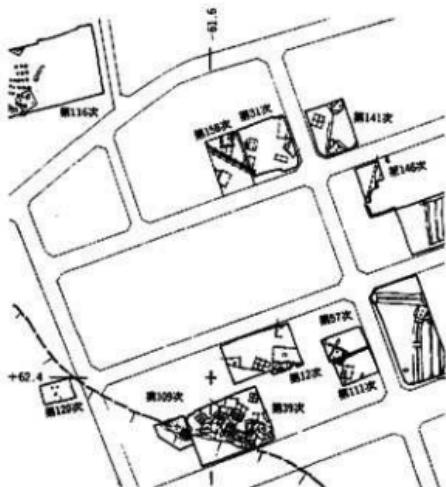


Fig. 103 周辺調査区遺構配置図 (1/2,000)
を方形に 1×2 間の小屋が囲んでいる可能性がある。

溝はSB-05・06に平行する。

土壤は102・105・107次調査を参照すると柵列に囲まれた2~3×3間の大型柱建物の一部の可能性が高い。

柵列は1本柱列と3本柱列の切り合いで1本柱列のSA-02を後に3本柱列のSA-01に立て替えており、SA-01からは6世紀後半の遺物を検出した。また東端部より5m強の位置で南に屈折する可能性が高い。方向は支丘の稜線にそっており、地形的制約を受けている。(Fig.101)。これら時期・構造とともに102・107次の方形区画の柵列に近い關係にある。

3) 小結

検出した遺構は掘立柱建物7棟、土墻1基、溝1条、柵列2条で、いずれも古墳時代後期の遺物を検出した。これ以外の時期を示すものはSP-3出土の9世紀代の土師製高台壇1点のみである。

掘立柱建物は桁行の方位により概ね3つのグループに分けられる。即ちN-23°-EのSB-01, N-9°~13°-EのSB-02・03・04・07, N-6°~7°-WのSB-05・06である。それぞれを時期差と理解しているが、SB-03・07のグループはSB-05・06グループを切っており、また第31次のSB-03と直交関係に有り、屋敷地内

(註1) 福岡市教育委員會「有田古代遺跡発掘調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1集 1967

(註2) 福岡市教育委員會「有田造訪—福岡市有田古代美術遺跡第一大調查報告」、福岡市埋蔵文化財調査報告書第2號1968

(註3) 誌1に同じ

(註4) 福岡市教育委員會「有田・小田郡第2集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第81集1982

(註 5) 福岡市教育委員會「有田・小田部第 8 集」、福岡市埋蔵文化財調査報告書第 155 号 1987.

(註 6) 福岡市教育委員会「有田・小田原第11集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第234集 1990

(註7) 第6次調査 福岡市教育委員会「有田通跡」遺跡説明会パンフレット

第35次調查

第66讲

福岡市教委「有用・小田部第2集」福岡市博古文化財選定報告書第139頁1994

第102次調查表
福爾摩沙教育委員會「有田・小田部等9株」福爾摩沙文化財源本編第172號 1988

根据市地税局《关于加强土地增值税管理工作的通知》(穗地税函〔2005〕122号)规定:

第105火薬庫 桶内中吸音実験 有田・小田印第3米 | 桶内市立第三小学校西側百メートル1988年

第10次調査 紹介

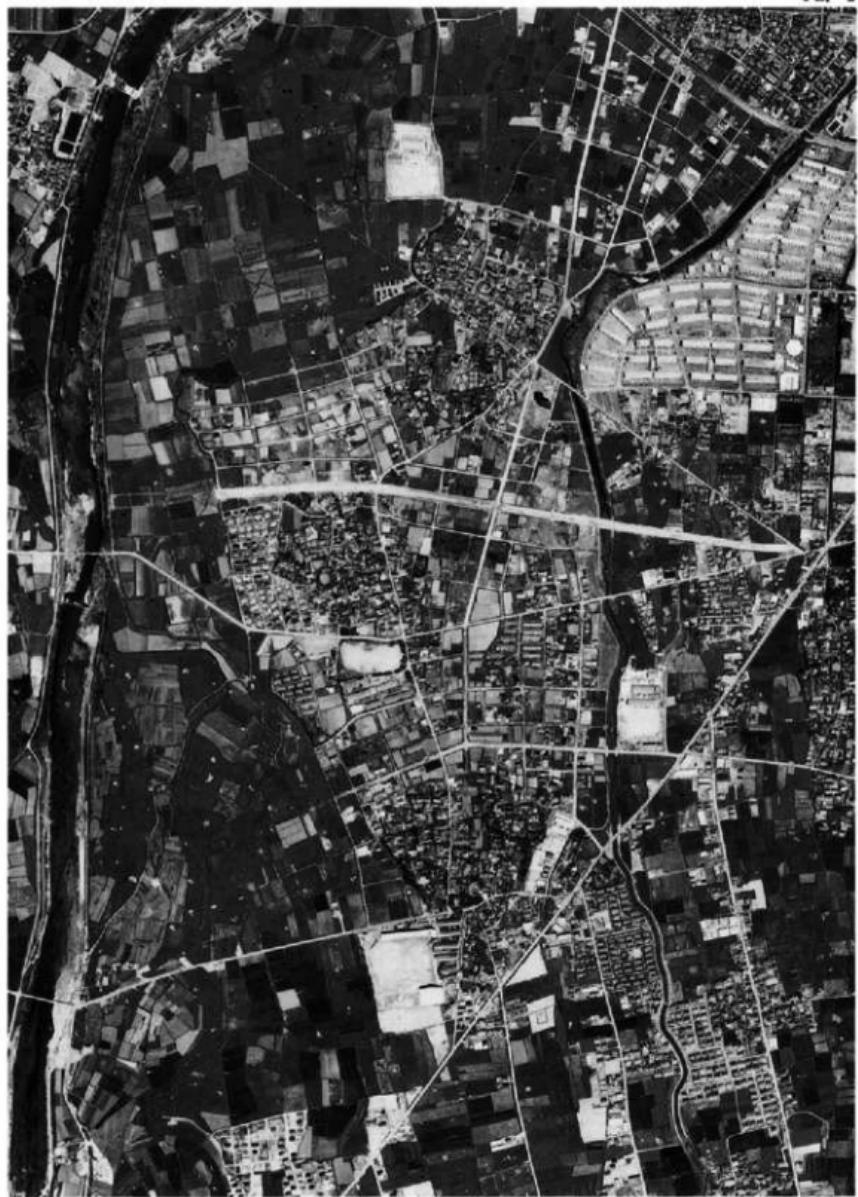
図 版



第114次調査作業風景



有田道路群周辺航空写真（1964年撮影）



有田遺跡群周辺航空写真（1969年撮影）

— 第114次調査 —

PL. 3



(1)調査区全景（北から）



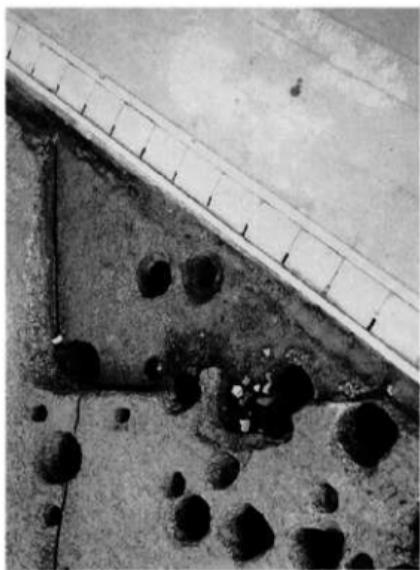
(2)調査区全景（南東から）



(1) S C 01 (面裏から)



(2) 同遺物出土状況



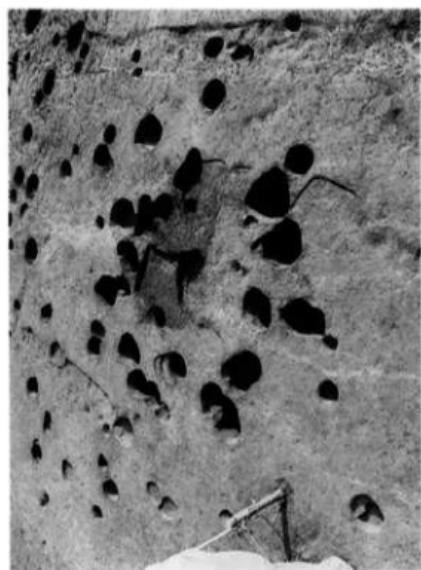
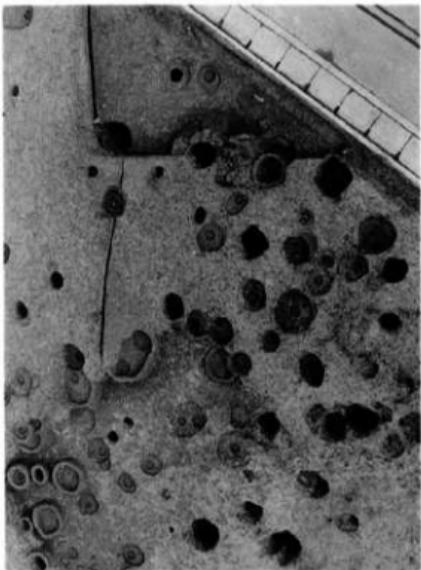
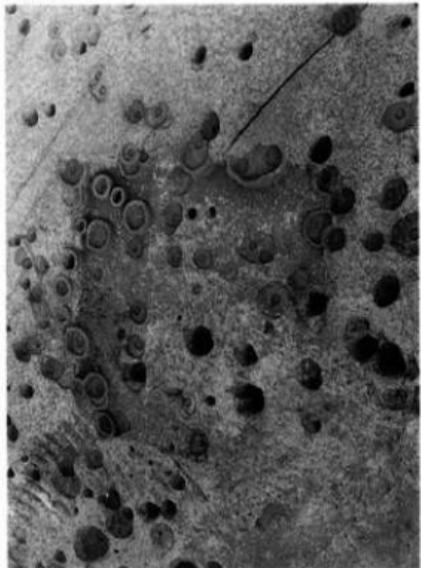
(3) S C 02 (面名前)

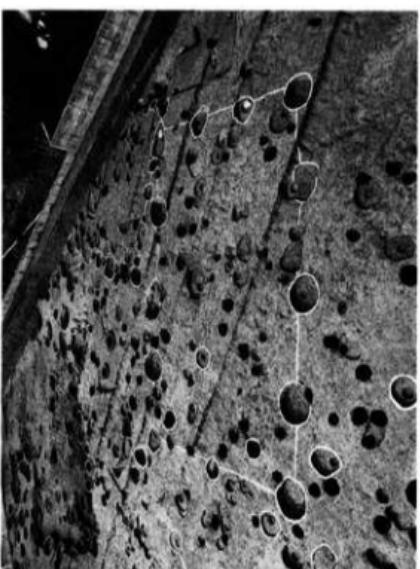
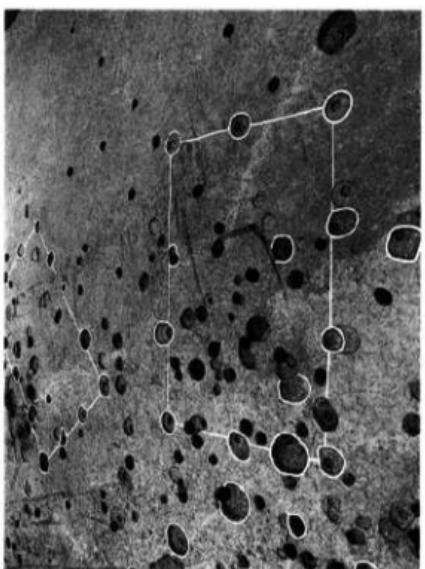
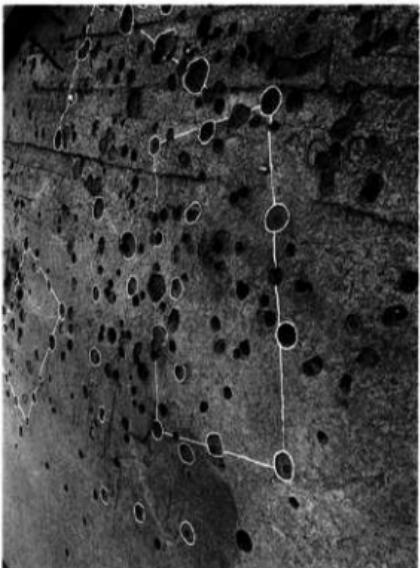
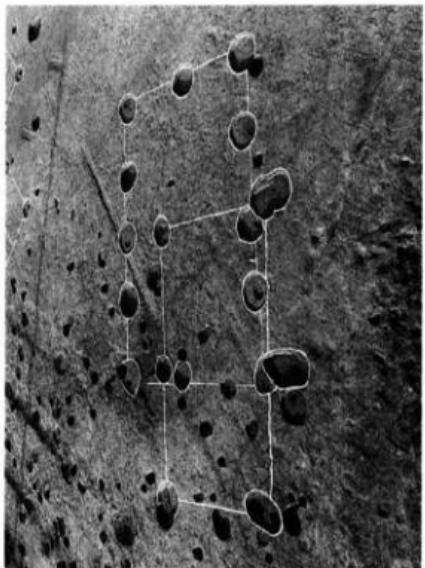


(4) 同カタノ鉛出状況 (面から)

—第114次調査—

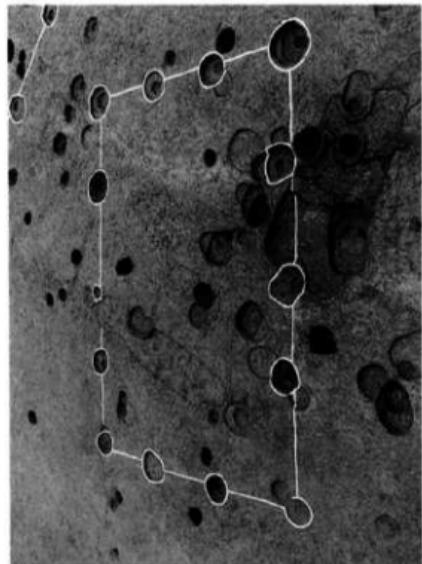
PL. 5





— 第114次調査 —

PL. 7



(1) S.B. 06 (岩窓かく)



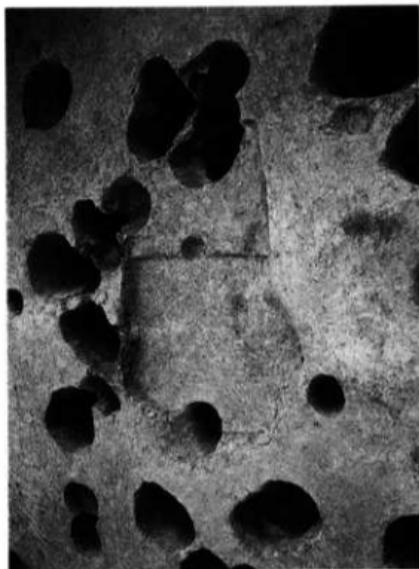
(2) S.B. 08 (岩窓かく)



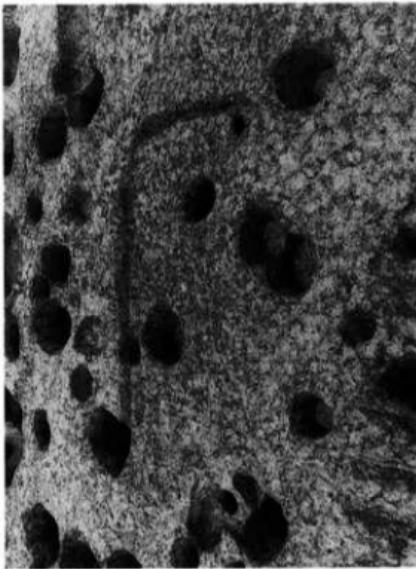
(3) S.P. 106 遺物出土状況



(4) S.P. 236 遺物出土状況



(1) SK 01 (北西から)



(2) SK 03 (西から)



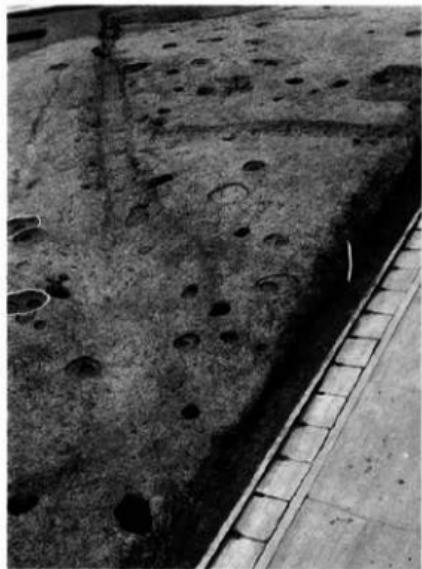
(3) SK 05 (南東から)



(4) SK 06 (南東から)

—第114次調査—

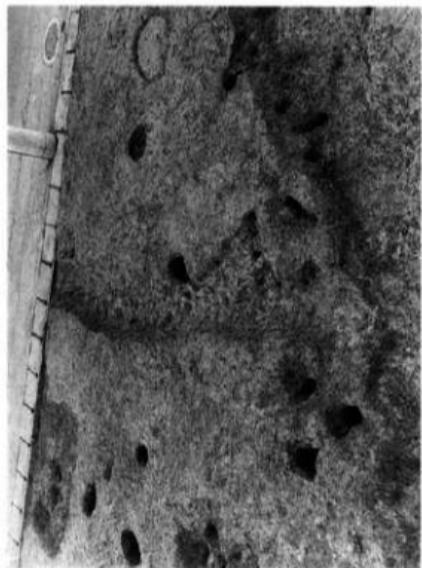
Pl. 9



(1) S D 01 (前面右・S)



(2) S D 11 (裏面心)



(3) S D 02 (裏面左・S)



(3) S D 14 (裏面心)

SC01



1



19



3



6

SC02



4



20



21



22

SC03



7



11



12



18



14



64

SC03-2



—



23



52

SK01



27

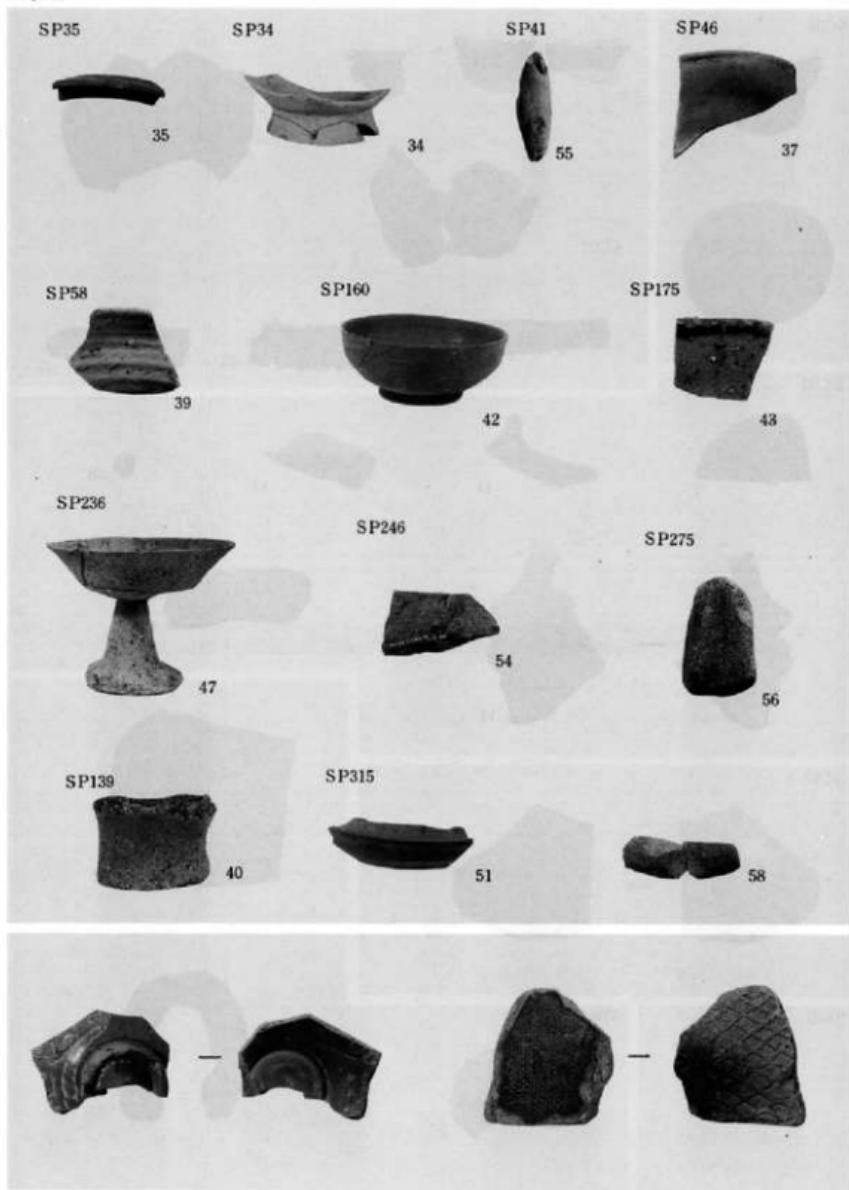
SD01



53

—第114次調査—

PL. 11





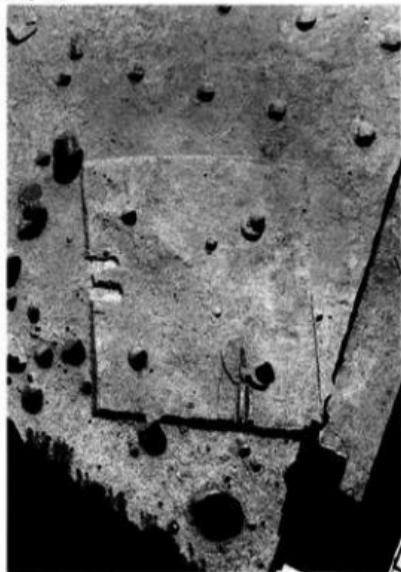
(1) 第116次調査区全景（南東から）



(2) 調査区北側縄文時代土坑群（南東から）



(3) 調査区南側縄文時代土坑群（東から）



(1) S C 01 (南から)



(2) 同遺物出土状況



(3) 同カマド掘り下げ中



(4) 同完掘後



(1) S C 02 (南東から)



(2) 同焼失木村出土状況



(3) S K 03 土厚断面

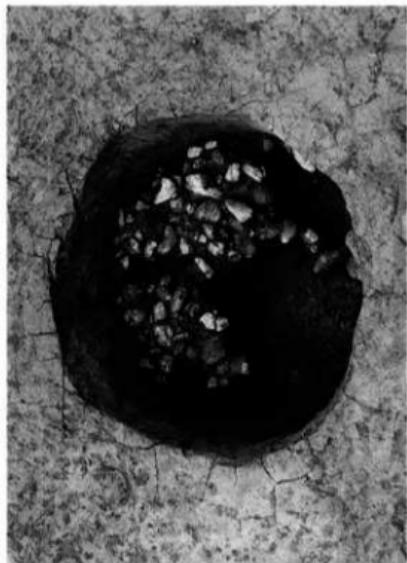


(4) S K 04 (南から)

PL. 15



(1) SK 05 (裏面)



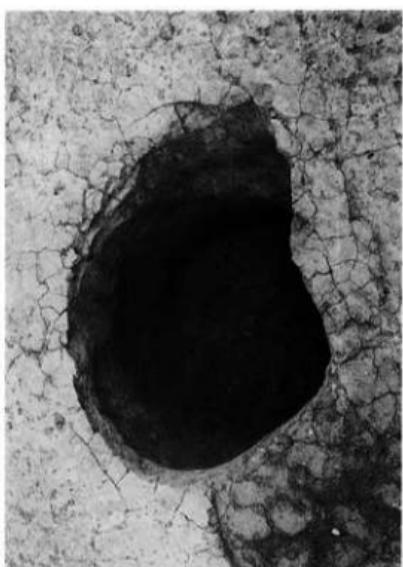
(2) SK 05 (裏面)



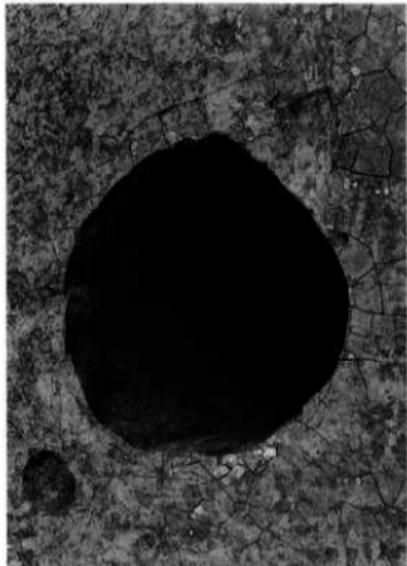
(3) SK 05 (裏面)



(4) 同上(横断面)



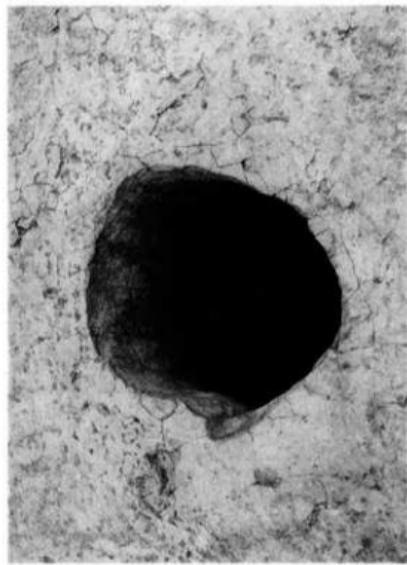
PL. 17



(1) SK 11 (面かみ)



(2) 同上層断面



(3) SK 12 (面かみ)



(4) 同上層断面



(1) SK 13 (西から)



(2) SK 16 土層断面



(3) SK 17 (西から)



(4) 同土層断面

— 第116次調査 —

PL. 19



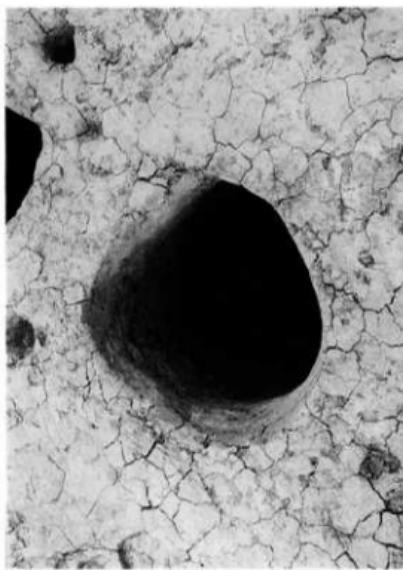
(1) SK 18 土層断面



(2) SK 19 (西から)



(3) SK 20・21 (西から)



(4) SK 22 (西から)



(1) S K 24 (東から)



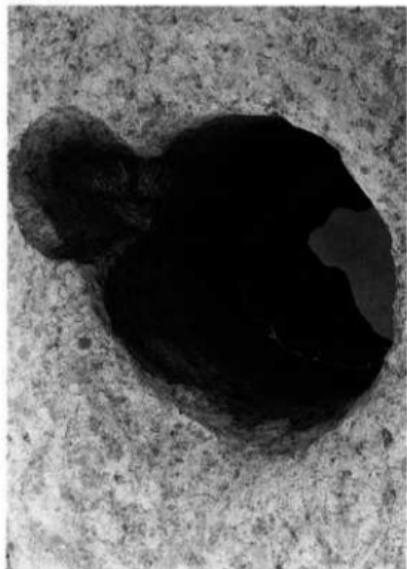
(2) 同土層断面



(3) S K 25 土層断面



(4) S K 26 (北西から)



(1) SK 28 (左から)



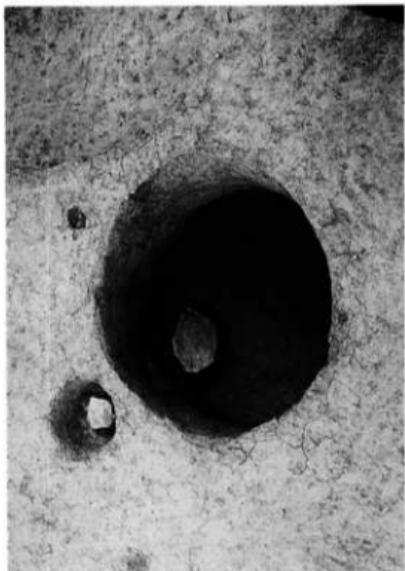
(2) 同土層断面



(3) SK 28 (右から)



(4) 同土層断面



(1) SK 30 (東面から)



(2) 土壌断面の遺物出土状況



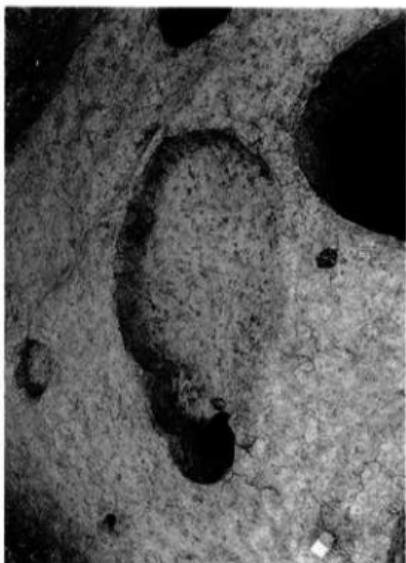
(3) SK 31 (南面から)



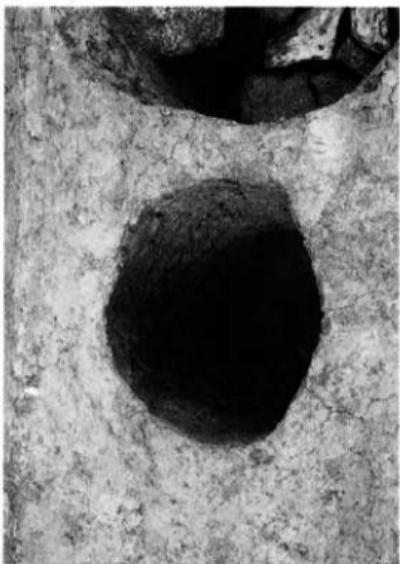
(4) 土壌断面



(1) SK 22 土壌面



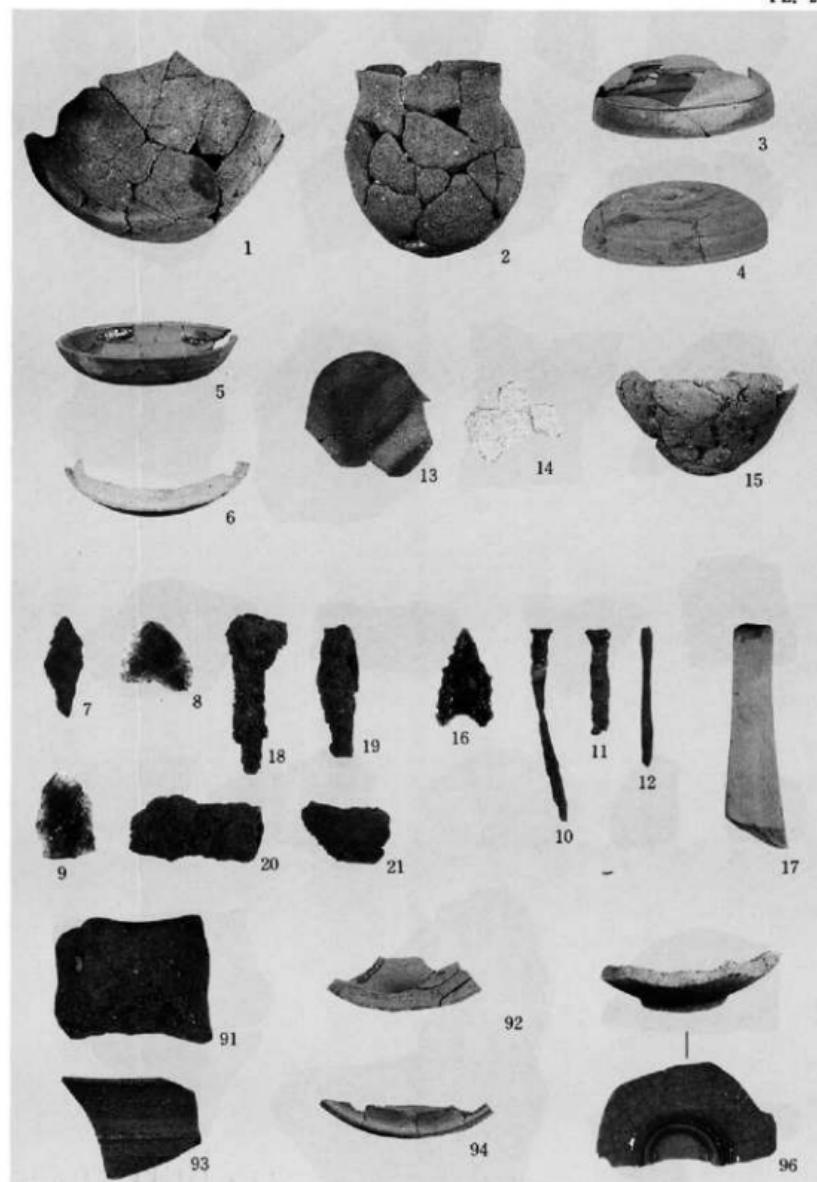
(2) SK 34 (土壌面)



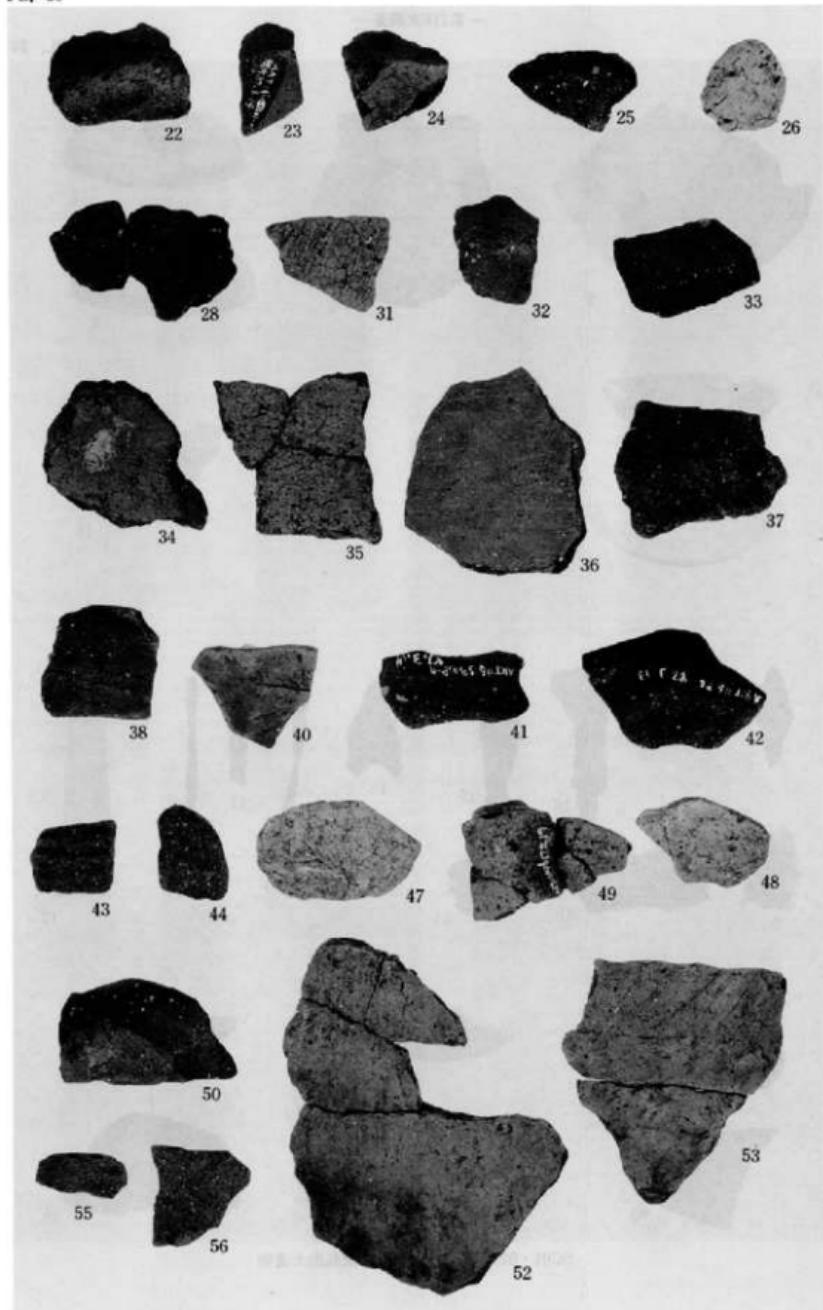
(3) SK 35 (土壌面)



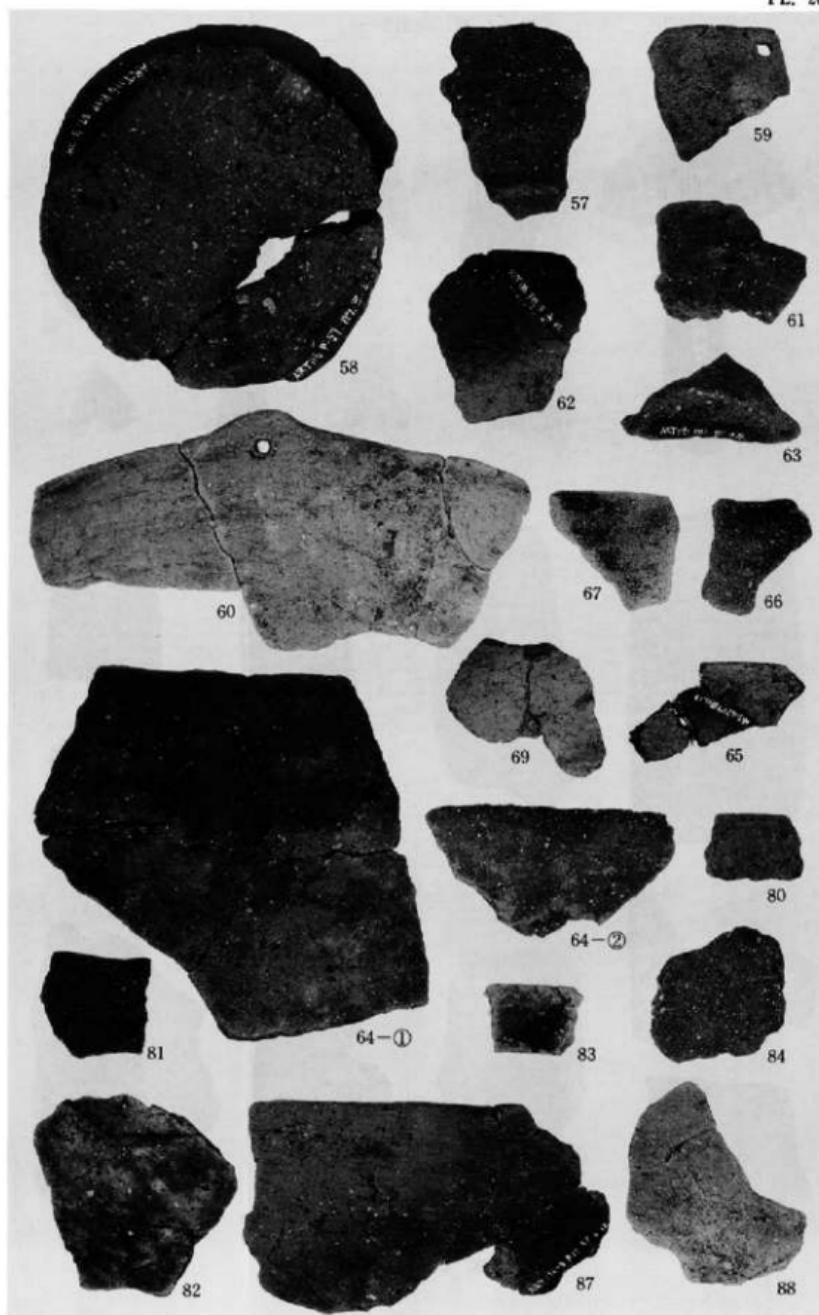
(4) SK 36 (土壌面)



SC01・02, SX01, ピット, 搾乱出土遺物



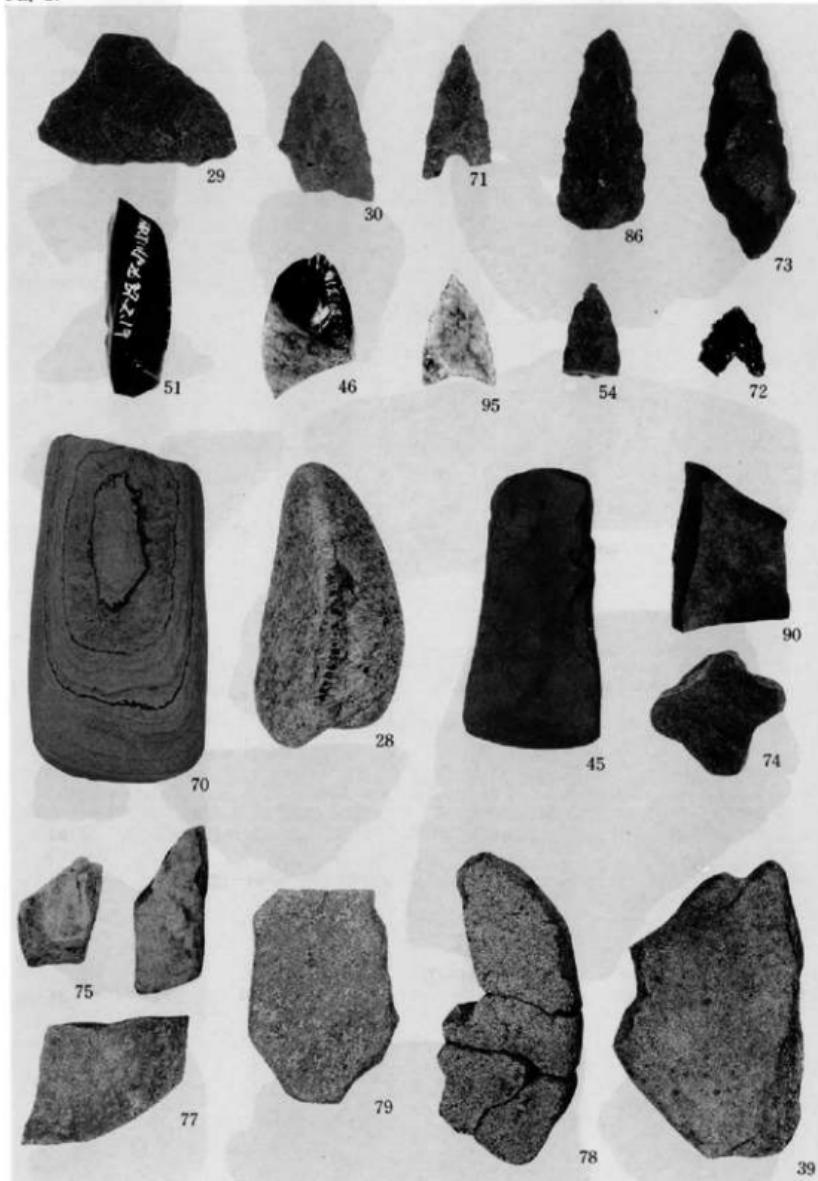
土坑出土遺物



土坑出土遺物

—第116次調査—

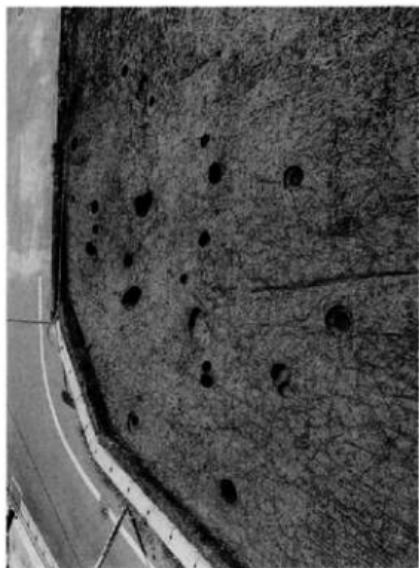
PL. 27



土坑、ピット出土遺物



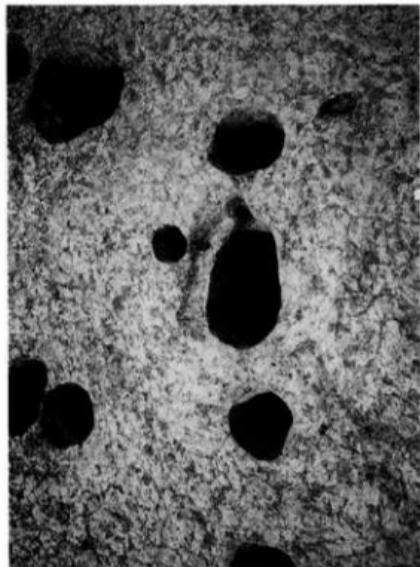
(1)第138次調査区全景（西から）



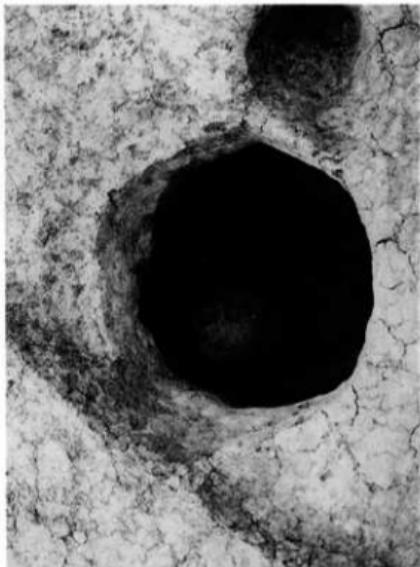
(2)調査区西端部（西から）



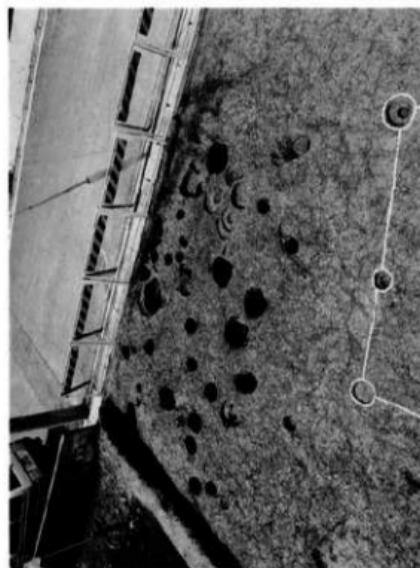
(3)のじ口（南東から）



① SUC 01 中央土壤試料 (土)



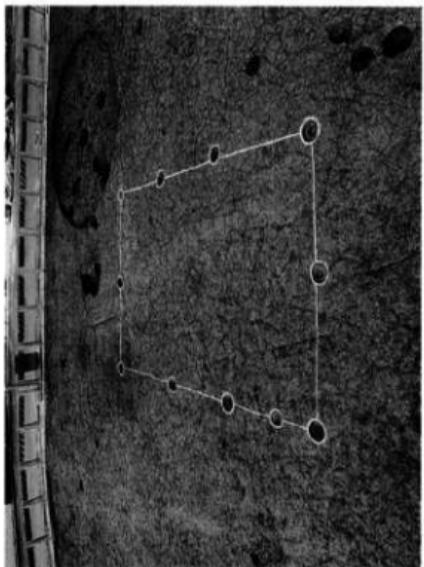
② 同上内土壤 (土ふるみ)



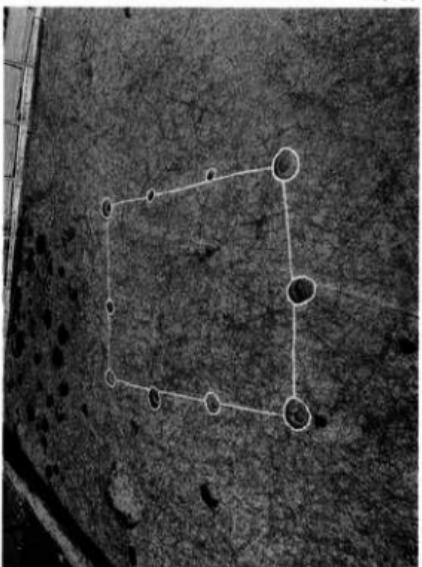
③ 地表 (土ふるみ)



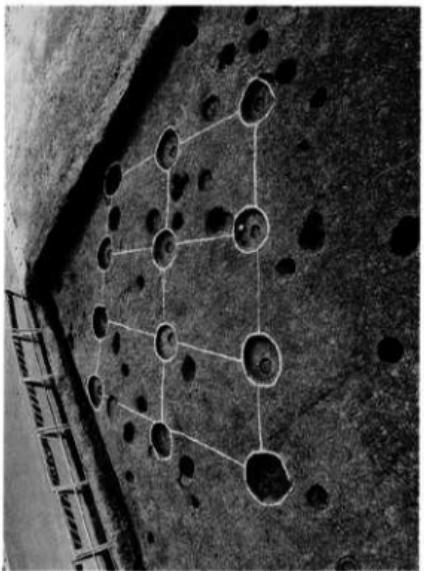
④ 地表 (土ふるみ)



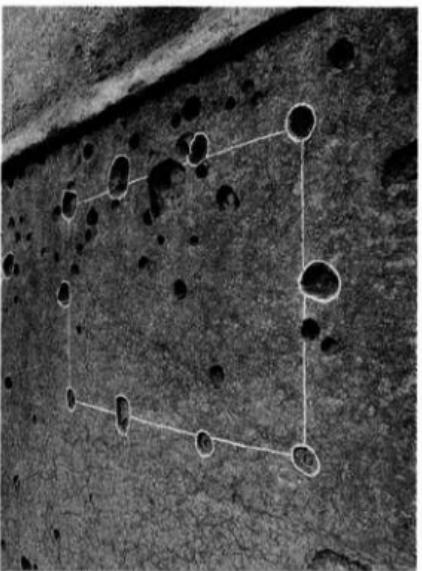
(1) S.B. 01 (細胞・S)



(2) S.B. 02 (細胞・S)

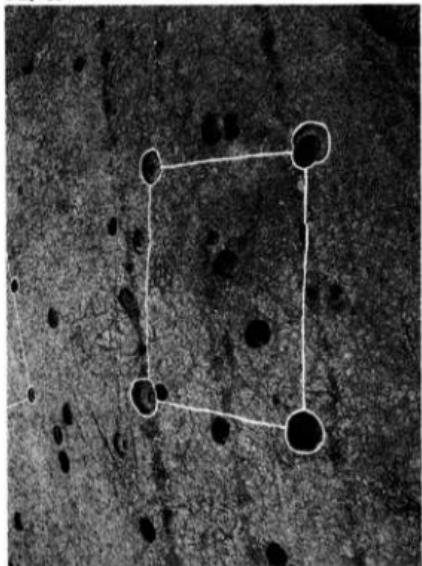


(3) S.B. 03 (細胞・S)



(4) S.B. 04 (細胞・S)

PL. 31



(1) S B 05 (東から)



(2) S B 05 - 5 遺物出土状況



(3) S B 06 (南東から)



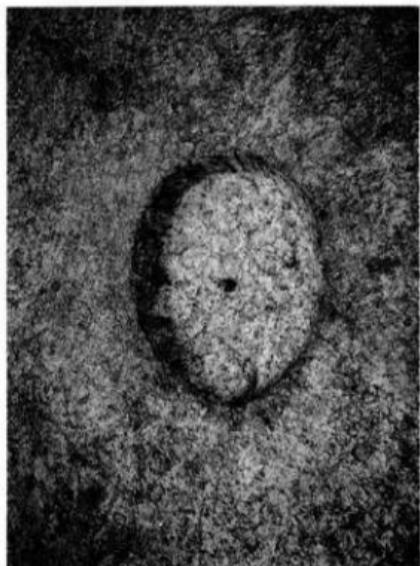
(4) S K 01 (北から)



(1) SK 02 (南から)



(2) 同遺物出土状況

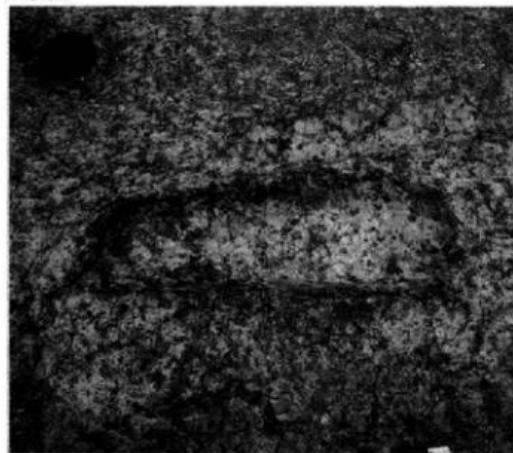


(3) SK 03 (西から)

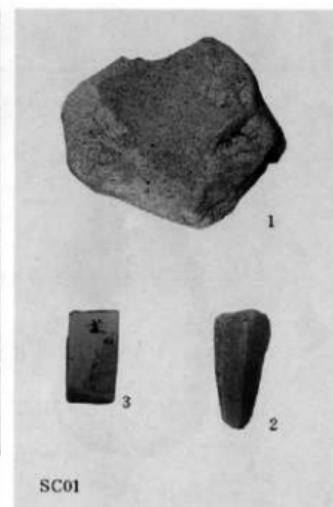


(4) SK 04 (北から)

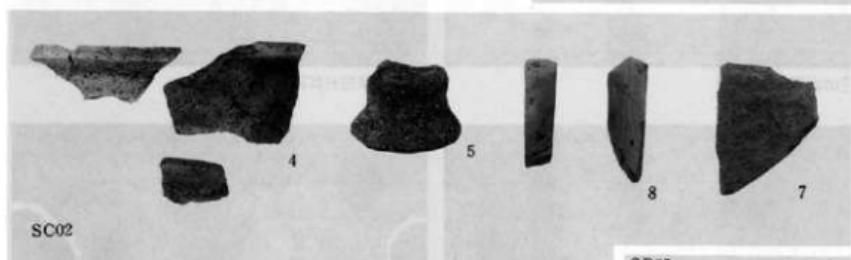
PL. 33



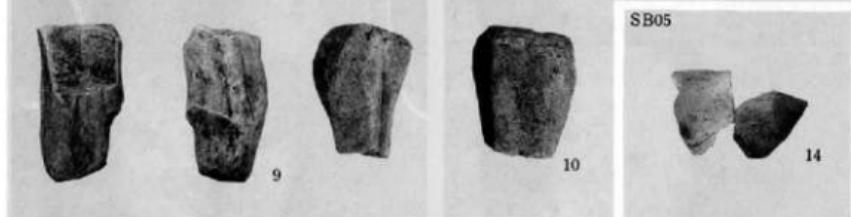
(1)SK05 (東から)



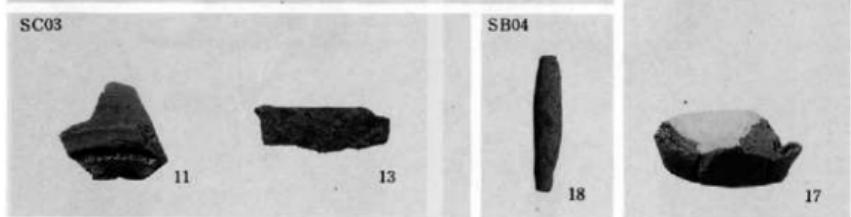
SC01



SC02



SB05

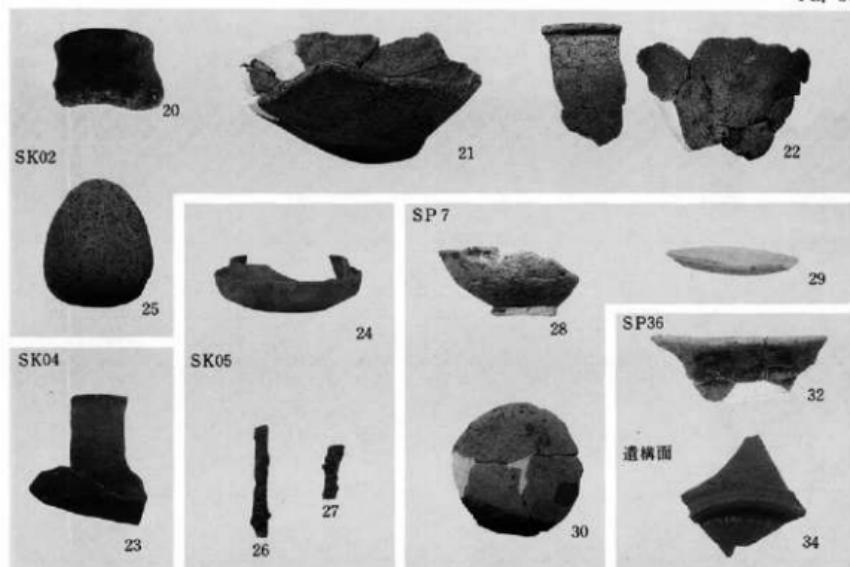


SC03

SB04



(2)出土遺物 I



(1)出土遺物II



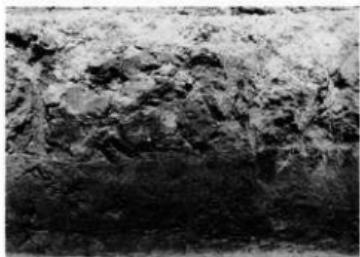
(2)第151次調査1区全景(北から)



(3)同2区全景(北から)



(4)同3区全景(南から)



(5)1区土層断面(南から)

—第164次調査—

PL. 35



(1)第164次調査区I区全景（北から）



(2)同I区東側全景（北から）



① 口田令郎 (西条村)



② S B 03 (西条村)



③ の山呂 (西条村)



④ の山呂 (西条村)

—第164次調査—

PL. 37



(1) S D 日本新 (東から)



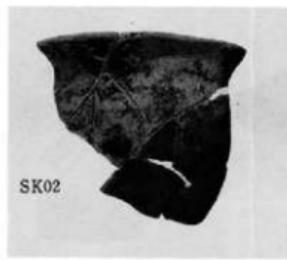
(2) S D 61 (西から)



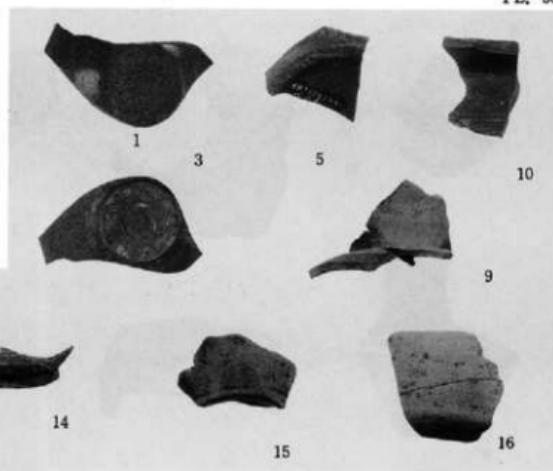
(3) S D 60 中央 (東から)



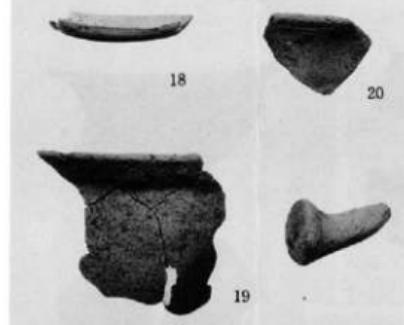
(4) S D 60 東側 (西から)



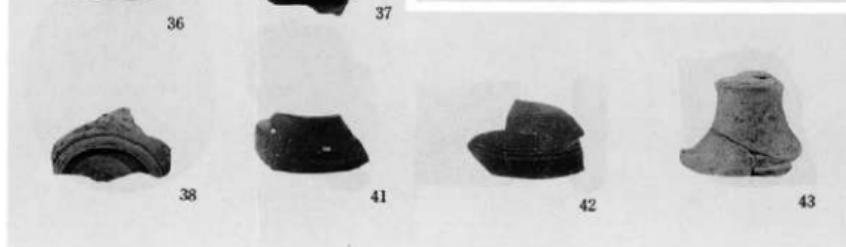
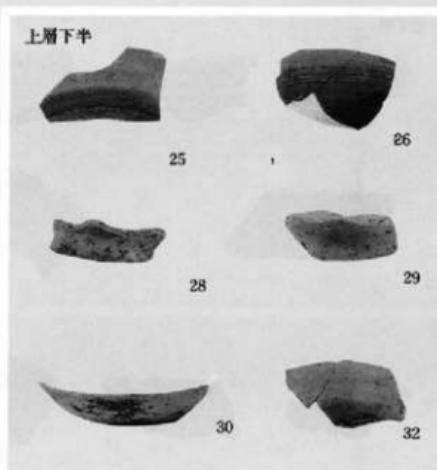
SK02



上層上半



中層



SK02・SD01出土遺物 I

— 第164次調査 —

PL. 39

中層



44



46



48



52



45



47

下層



53



54



56

最下層



56



60



62



59



63



55



57



64



65



66



67



68



69



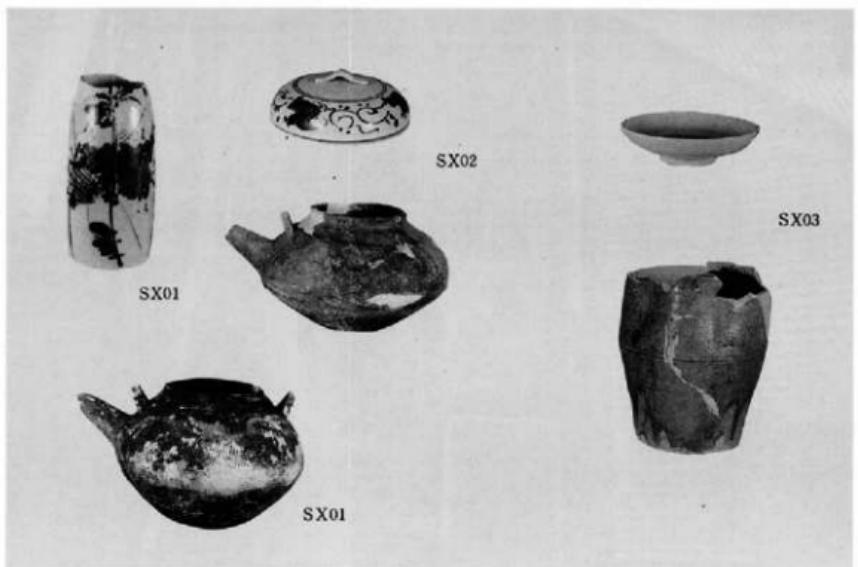
70



74



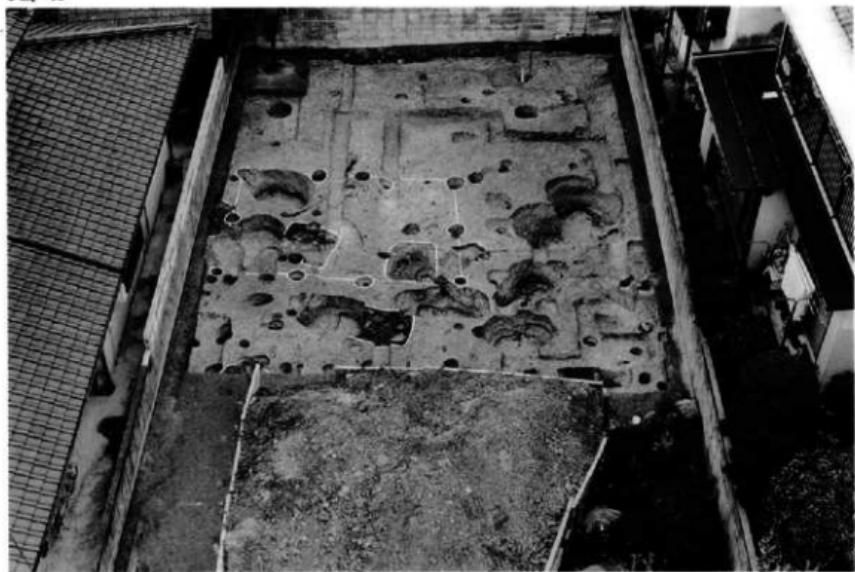
(1)第110次調査区全景（北西から）



(2)出土遺物

— 第112次調査 —

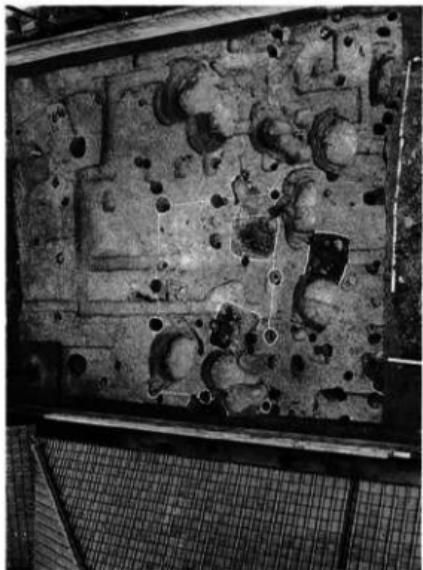
Pl. 41



(1)第112次調査区全景（東から）



(2)同調査区東側全景（東から）



図SB 01 (裏から)



図SB 02 (裏から)



図SB 02-4型 (裏から)



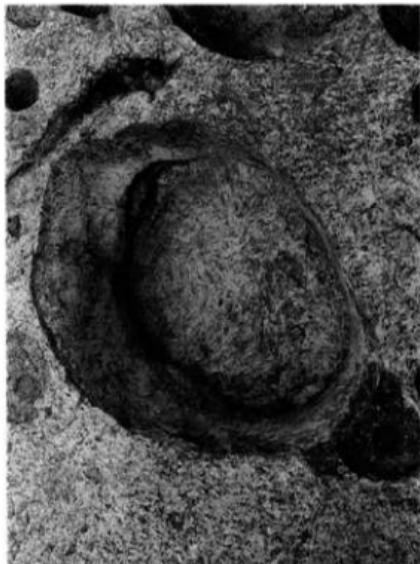
図SB 03 (裏から)

— 第112次調査 —

Pl. 43



[1] SK01・07 (南西から)



[2] SK02 (南から)



[3] SK03 (東から)



[4] SK04 (西から)



(1) SK 05 (南から)



(2) SK 06 (北から)



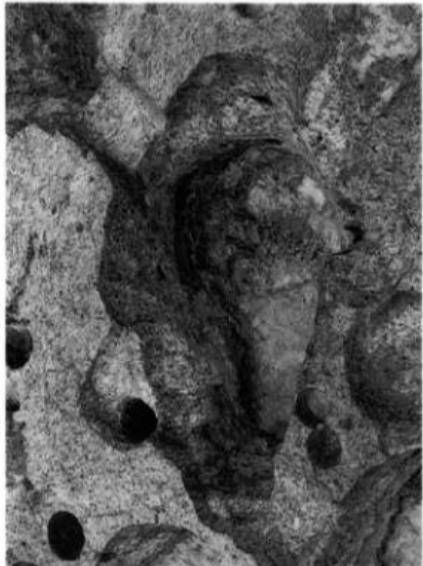
(3) SK 08 (北東から)



(4) SK 09 (東から)

— 第112次調査 —

PL. 45



① SK 9 (西から)



② SK 11 (東から)



③ SK 12 (北から)



④ SK 14 (北から)



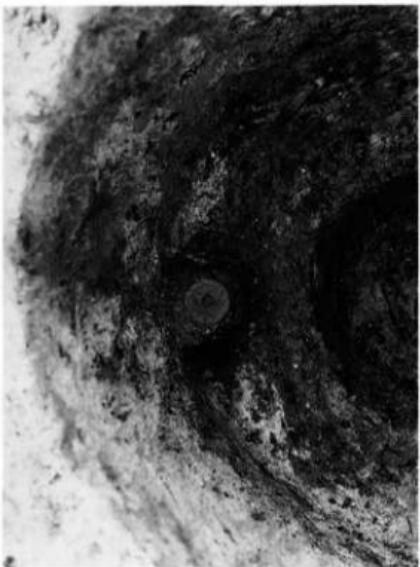
① SK 15 (南から)



② SK 17 (南から)



③ SK 15・18 (北から)



④ SP 58 出土中国鏡

—第112次調査—

Pl. 47

SB02



2



3



4



5



6

SK03



7



8



9



11

SP23



12



SP52



13

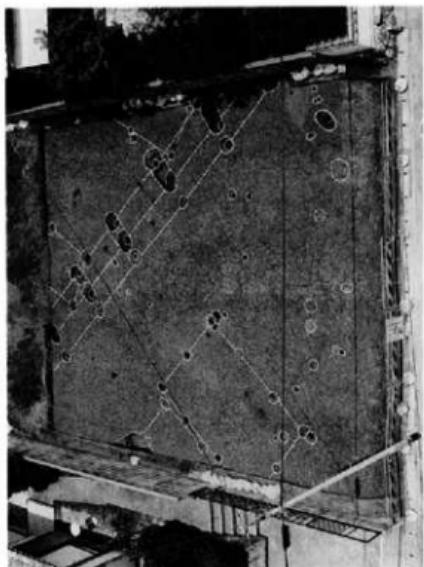


20

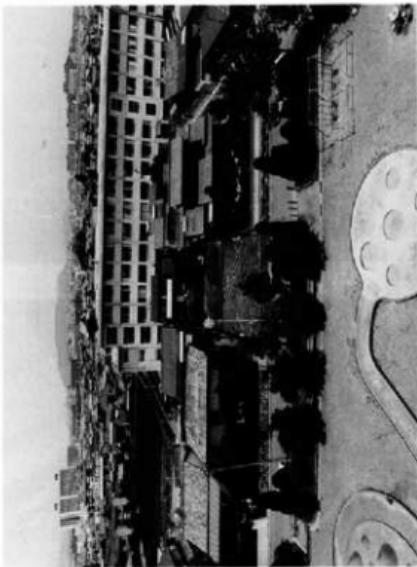
各遺構出土遺物



(1)第158次調査区北半部全景（南から）



(2)調査区北半部北端（北から）



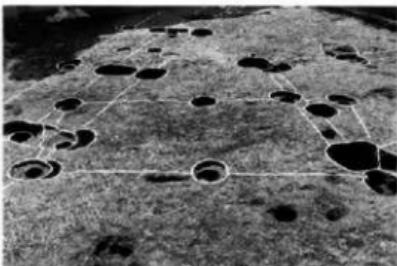
(3)調査区北端（北から）

—第158次調査—

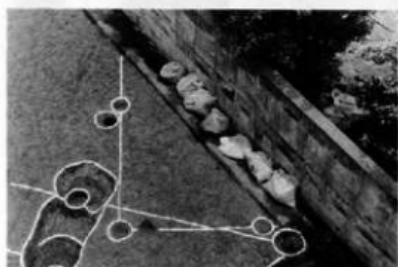
PL. 49



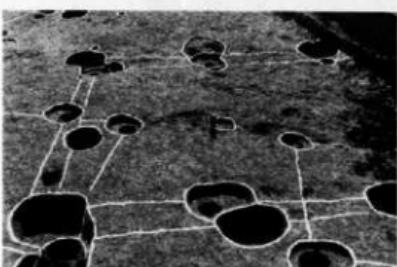
(1)SB01・02 (南東から)



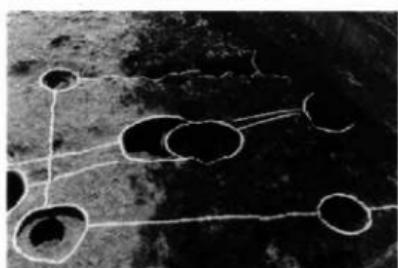
(2)SB03 (東から)



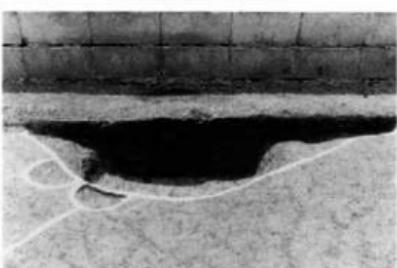
(3)SB04 (南から)



(4)SB05・06 (東から)



(5)SB07 (東から)



(6)SK01 (北東から)



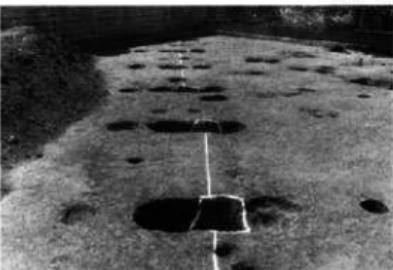
(7)SA01 (南東から)



(8)SA02 (南西から)



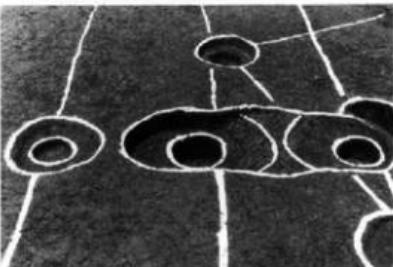
(1)SA01 (南東から)



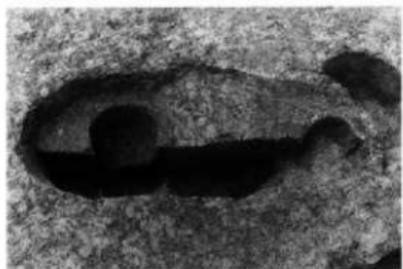
(2)SA02 (南東から)



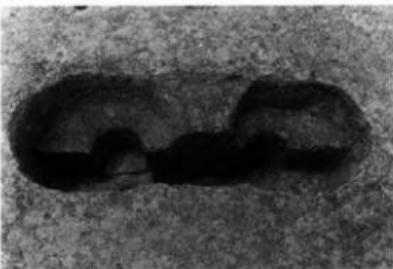
(3)SA01・SP10・11・12 (南東から)



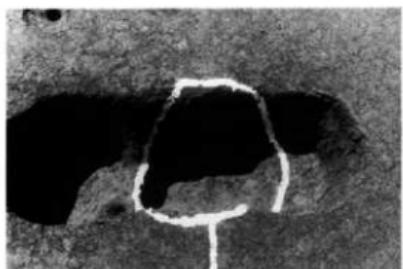
(4)SA01・SP13 (南東から)



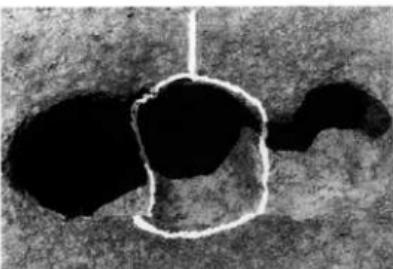
(5)SP11・12土層断面 (南東から)



(6)SP13土層断面 (南東から)



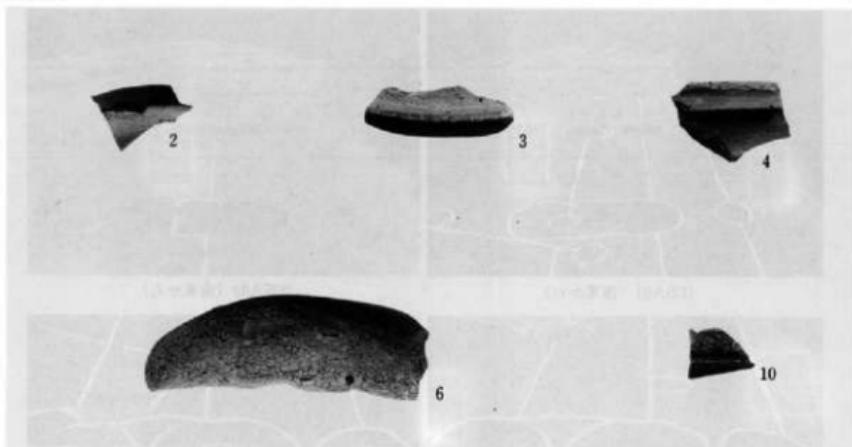
(7)SP11・12完掘状況 (南東から)



(8)SP13完掘状況 (南東から)

—第158次調査—

PL. 51



出土遺物

有田・小田部 第16集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第308集

1992年（平成4年）3月13日

発 行 福岡市教育委員会
〒810 福岡市中央区天神1丁目8の1

印 刷 赤坂印刷株式会社

